

下郡遺跡群 VIII

－大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7－

2010
大分市教育委員会

下郡遺跡群　Ⅷ

－大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7－

総 論

2010
大分市教育委員会

序 文

本書は、昭和 62 年度から下郡地区の区画整理事業に伴って 143 次におよび実施してきました下郡遺跡群発掘調査の正式報告書であります。

大分市では、「ともに築く 希望あふれる 元気都市」を都市像として掲げ、豊かな自然を生かした快適な居住環境都市の実現を目指しています。併せて「歴史遺産の保存と活用」を重点施策のひとつに掲げ、積極的に都市づくりへの活用を推進しています。

下郡地区の土地区画整理事業もこうした都市整備施策の一環として実施されました。事業に伴う発掘調査では、弥生時代、奈良時代などを中心に貴重な発見が相次ぎました。

下郡遺跡群発掘調査報告書の第 8 巻となる本書は、これまで十数年にわたる調査の総論編として遺跡内容を通史としてまとめ、下郡遺跡群の全体像を俯瞰できるようにいたしました。

下郡遺跡群の調査で発見された縄文時代から現代へと続く遺構、遺物は、21 世紀を迎え、区画整理事業の竣工により新たな姿へと生まれ変わった下郡地区の長い歴史と伝統を具体的に示しています。

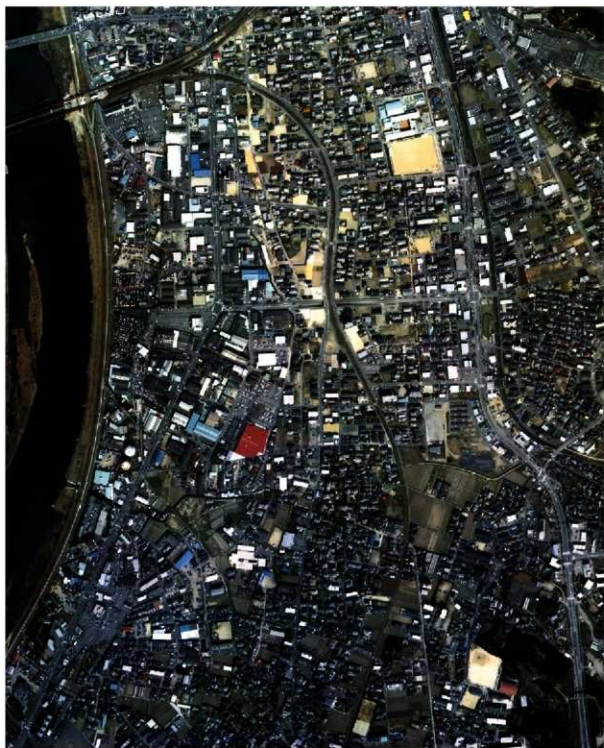
本書に収録されたこれらの資料が学術研究者のみならず広く市民の皆様にご利用され、文化財に対するご理解を深めていただくための一助となり、歴史研究に幅広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の発刊にあたり、ご配慮、ご協力頂きました下郡地区の方々や大分市都市計画部まちなみ整備課、同滝尾中部地区住環境整備事務所に対し衷心より謝意を表すとともに、長年にわたり発掘調査並びに資料整理にご協力下さいました関係各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成 22 年 3 月 31 日

大分市教育委員会

教育長 足立 一馬



下部道跡群 (区画整理後 H18)



環濠完掘状況（第 50 次調査）



獣骨出土状況（第 25 次調査）

例 言

1. 本書は昭和 62 年度から平成 15 年度までに大分市教育委員会が調査を実施した下部遺跡群内での発掘調査の全調査区の内容を既刊の本報告（第Ⅰ～Ⅶ）・概報（1～4）・年報をもとに総まとめとしたものである。
2. 本書に掲載した調査内容（調査期間、面積）は、第Ⅰ表に記している。
3. 調査の図面作成には国土地標第Ⅱ座標系を利用している。したがって本書に示される方位は特に注記のない限り座標北（G.N.）を示している。
4. 遺跡・調査地点名称は、従来の慣例に従い小字名をもって呼称するには、その対象面積が 96ha と広大であり、また遺跡単位も複数の字地域に及ぶなどの状況が認められるため、遺跡名については、「下部遺跡群」とし、主要路線等による大区画区分（第 6 図）と国土地標系による小地点表示（第 6 図）の 2 本柱で表示することとする。
 - (1) 小地点表示は国土地標第Ⅱ座標系（ $x = 25.550$ $y = 59.850$ ）を基点として一辺 50 m の方形地区割を行った。（第 6 図）
 - (2) 遺跡名称表示は次のようになる。
 下部遺跡群 H 区 a - 2 地点
 （大区画表示） （小区画表示）
5. 遺構の切り合い図の表記については、遺構の新旧関係を実線で示し、下層遺構は点線で記した。
6. 各遺構番号は下記のように示した。
 例 039 SH 002
 （調査次） （種別） （番号）
7. 遺構種別は下記の略号表記による。

S A	柵列状遺構		
S B	建物跡（掘立柱建物跡等）	S K	貯蔵穴
S C	廊状遺構	S T	竪遺構
S D	溝状遺構	S X	性格不明遺構（土坑、小ピットなどを含む）
S E	井戸跡	S Z	表土等出土層位が不明なもの
S F	道路状遺構		
S H	竪穴住居跡		
S J	土器棺墓		
8. 既に刊行されている概要報告との関連性については本報告を正式報告とし、内容・記載等に異なる所がある分については本正式報告を正とする。
9. 本書の執筆は、坪根伸也・稗田智美・佐藤良子・小島愛が行い、獣骨については西中川駿先生（鹿児島大学名誉教授）、小澤智生先生（サイバー大学教授）にお願いした。なお、執筆分担は下記の通りである。

第Ⅰ・Ⅱ章	坪根伸也
第Ⅲ章	坪根伸也・稗田智美・佐藤良子・小島愛
第Ⅳ章	西中川駿・蓮池 浩・藤原達生・松元光春・小澤智生・稗田智美
第Ⅴ章	坪根伸也
10. 遺構の実測は各現場担当者がおこなったほか、一部を（例）九州文化財リサーチに委託した。
11. 出土遺物の実測は、坪根伸也、黒田きくみ、堤美智代、稗田智美、佐藤良子、小島愛、松嶋泉がおこない、一部を（例）九州文化財リサーチ、（例）雅企画、（例）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。石器・石製品については高島豊・羽田野裕之による。

12. 実測図製図は、高富豊（大分市教育委員会）を中心に奥村義貴、佐藤孝則、顕徳町文化財資料室、駅南文化財資料室、佐藤良子、小島愛が行い、一部を南九州文化財サーチに委託した。
13. 遺物整理は調査終了時より井口あけみが行った。本書の編集に関わる部分については坪根伸也、神田智美、松嶋泉が行った。
14. 遺物番号は遺構番号の末尾に遺構別の通し番号において表示する。

039SH001 - 001

(遺構番号) - (通し番号)

15. 遺物番号は本文・挿図・図版で一致する。
16. 遺物観察表は以下の記述基準により標記される。

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)				遺存率	備考
		種類	形状		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径		
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮

- ①項目 15 に準ずる。
 ②挿図番号に一致する。
 ③利用する器種について記述する。
 ④胎土に含まれる混和材について記述する。
 ⑤色調について記述する。
 ⑥器面調整について記述する。複数段で記述されるものは基本的に上位のものが上部調整を示す。
 ⑦計測可能な各部位のサイズを記入する。復元数値は()にて表示する。
 ⑧残存率について記述する。
 ⑨特記事項について記述する。

17. 本書に掲載される遺物の説明に際しては、次の文献を参考にした。

土師器・須恵器・陶磁器など

- 太宰府市教育委員会 1983『付属土器の分類』『太宰府条坊跡Ⅱ』
- 太宰府市教育委員会 1992『遺物各説』『宮の本道跡Ⅱ』太宰府市の文化財 第10集
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 10周年記念集
- 山本 信夫 1990『統計上の土器—歴史時代の土師器の編年研究によせて』『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集
- 中島恒次郎 1992『大宰府における輪形器の変遷』『中近世土器の基礎研究Ⅱ』中近世土器研究会
- 中島恒次郎 1992『都へ行った土器』『古文化談叢』第28集 九州古文化研究会
- 石井 清司 1995『篠宮須恵器』概説 中世の土器・陶磁器 真陽社
- 後藤 一重 2003『土師器概説』『八坂の遺跡Ⅲ』大分県教育委員会
- 後藤 一重 2003『土師器』『八坂の遺跡Ⅲ』大分県教育委員会
- 森島 康雄 2005『瓦器—編年と技術伝播—』『全国シンポジウム 中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—』全国シンポジウム「中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—」実行委員会
- 森田 稔 1995『中世須恵器』概説 中世の土器・陶磁器 真陽社
- 小野 正敏 1982『15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代』『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
- 森 毅 1995『16～17世紀における陶磁器の様相とその流通—大坂の資料を中心に』『ヒストリア』第149号 大阪歴史学会
- 森田 勉 1982『14～16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
- 上田 秀夫 1982『14～16世紀の青磁碗の分類について』『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
- 栗岡 実 2000『中世備前焼(壺)の編年案』『第2回中世備前焼研究会資料』中世備前焼研究会
- 栗岡 実 2000『中世備前焼(鉢)の編年について』『第3回中世備前焼研究会資料』中世備前焼研究会
- 小柳 和宏 1991『中世土器生産小考—文書・地名から土器生産を探る』『大分県地方史』第143号 大分県地方史研究会
- 小林昭彦・玉永光洋 1988『出土遺物—土器』『安岐城 下原古墳』大分県教育委員会
- 菊田 徹 1986『東九州における中世土師質土器の様相—環・皿形土器を中心として』『専修考古学』第7号 専修考古学会
- 渋谷 忠章 1984『考察出土遺物について土師質土器』『伐株山城跡』玖珠町教育委員会
- 佐藤 浩司 1988『第Ⅴ章考察平安時代の土師器編年試案と地域相の解明にむけて』『寺田遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書 第70集 (財)北九州市教育文化事業団
- 坪根伸也・堀田潤一 2001『豊後国の土器編年』『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会
- 坪根伸也 1995『付草羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題』『羽田遺跡Ⅱ』大分市教育委員会
- 高橋 徹 1979『廃棄された鏡片—豊後における弥生時代の終焉—』『古文化談叢』第6集 九州古文化研究会

(大分市教育委員会 1995 年度調査結果より)

目 次

第Ⅰ章 総 説	1
1. 調査に至る経過	(坪根) 1
2. 調査組織	(〃) 2
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	6
1. 下部遺跡群の立地と遺跡概要	(坪根) 6
2. 調査の方法	(〃) 9
第Ⅲ章 下部遺跡群総論	15
第1節 縄文時代の様相	15
(1) はじめに	(小島) 15
(2) 縄文式土器出土調査区及び出土資料	(〃) 16
第2節 弥生時代前期から中期の様相	22
(1) はじめに	(佐藤) 22
(2) 遺 構	(佐藤) 22
(3) 弥生時代前期から中期の遺物	(坪根・佐藤) 42
第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の様相	52
(1) はじめに	(裨田) 52
(2) 遺 構	(〃) 52
(3) 弥生時代後期から古墳時代前期の特殊遺物	(坪根) 76
(4) 弥生時代後期から古墳時代前期の土器による時期区分	(〃) 79
第4節 古墳時代中期から後期の様相	88
(1) はじめに	(佐藤) 88
(2) 遺 構	(〃) 88
(3) 古墳時代中期から後期の遺物	(〃) 93
第5節 古代の様相	94
(1) はじめに	(裨田) 94
(2) 遺 構	(〃) 94
(3) 古代の遺物	(坪根) 116
(4) 古代の土師器について	(〃) 120
(5) 豊後における古代前期の煮炊具について	(裨田) 132
第6節 古代末から中世前期の様相	141
(1) はじめに	(裨田) 141
(2) 遺 構	(〃) 141
(3) 古代末から中世前期出土の遺物	(〃) 146
第7節 中世後期の様相	148
(1) はじめに	(佐藤) 148
(2) 遺 構	(〃) 148
(3) 中世末期の出土遺物について	(坪根) 159
第8節 近世の様相	163
(1) はじめに	(裨田) 163
(2) 遺 構	(〃) 163
(3) 近世遺物について—下部遺跡群第79次調査出土の遺物を中心に—	(〃) 175
第9節 近代から現代の様相	179
(1) はじめに	(裨田) 179
(2) 出土資料について	(〃) 180

第IV章 付 論	182
第1節 大分市下郡遺跡群第25次調査出土の動物遺体	182
1 はじめに	(西中川・蓮沼・藤原・松元) 182
2 グリッド別および動物別出土量	(") 182
3 動物別出土遺体の概要	(") 182
4 考 察	(") 187
5 まとめ	(") 188
第2節 下郡桑苗遺跡産イノシシの古代DNA解析	(小澤) 197
第3節 弥生時代竪穴住居跡の集成	198
(1) はじめに	(韓田) 198
(2) 各地域別竪穴住居跡の様相	(") 198
第V章 補 遺	216
第1節 下郡遺跡群第39次調査	(坪根) 216
(1) はじめに	(") 216
(2) 遺構と遺物	(") 219
第2節 下郡遺跡群第87次調査	241
(1) はじめに	(坪根) 241
(2) 遺構と遺物	(") 241

挿図目次

第1図 調査遺跡位置図 (1/50,000)	6	第35図 010SK73-001光面陶 (1/4)	43	第70図 古代製立柱建物跡時期別分布図 (1/6,000)	95
第2図 下部遺跡群第120次調査発土土層	7	第36図 大型土器片	43	第71図 古代遺跡群時期別位置図 (街区中心)	96
第3図 調査区六城の古墳群	8	第37図 第50次調査SD001土層遺物出土状況	52	第72図 古代遺跡群時期別位置図 (街区中心)	97
第4図 大分川岸から下部を望む	8	第38図 弥生時代の集落・堀溝分布図 (1/6,000)	53	第73図 古代製立柱建物跡土軸方向のグラフ	97
第5図 平直角角標	9	第39図 弥生時代後期溝状遺構断面図集成 (1/80)	54	第74図 古代製立柱建物跡光面陶集成① (1/160)	97
第6図 下部遺跡群エリアグリッド・調査地点位置図 (1/4,000)	13, 14	第40図 052SX003平面光面陶・堀溝内土層断面模式図	56	第75図 第115次調査1602	98
第7図 大分市土壁時代遺跡及び遺物出土分布図	15	第41図 052SX001平面光面陶・堀溝内土層断面模式図および115SX433平面光面陶	56	第76図 第120次調査1242	98
第8図 下部遺跡群周辺の近郊遺状況	16	第42図 上野遺跡群 隅丸長方形埴輪式陶 (上)	56	第77図 古代製立柱建物跡光面陶集成② (1/160)	99
第9図 下部遺跡群縄文時代後期・晩期遺物出土調査区 (1/7,000)	17	第43図 横尾遺跡群 第62次調査5SX350 (下)	56	第78図 古代製立柱建物跡光面陶集成③ (1/160)	100
第10図 下部遺跡群縄文時代後期・晩期遺物型式様相	19	第44図 方形溝遺構横断面とその周辺	56	第79図 第32次調査SE001	102
第11図 下部遺跡群縄文時代後期・晩期出土遺物光面陶① (1/6)	20	第127次調査170完部状況	57	第80図 第76次調査SE309	102
第12図 下部遺跡群縄文時代後期・晩期出土遺物光面陶② (1/6)	21	第45図 佐賀県三日月町土生遺跡S016光面陶	57	第81図 第5次調査SE093	102
第13図 守河遺跡弥生時代中期～前期居住跡分布図	22	第46図 弥生時代後期～古墳時代前期期戸口遺構横断面 (1/6,000)	58	第82図 第19次調査SE002	102
第14図 弥生時代前期～中期期六住跡・堀溝・溝状遺構時期別分布図 (1/6,000)	23	第47図 弥生時代後期～古墳時代前期期戸口遺構横断面図集成 (1/100)	59	第83図 古代戸口遺構・溝状遺構分布図 (1/6,000)	103
第15図 弥生時代中期～前期六住跡集成図① (1/160)	24	第48図 弥生時代後期～古墳時代前期にかけての居住面横断面分布図	60	第84図 古代戸口遺構横断面図集成① (1/60・1/80)	105
第16図 弥生時代中期溝状遺構土層断面光面陶 (1/100)	26	第49図 弥生時代後期～古墳時代前期居住跡分布図 (1/6,000)	61	第85図 道路内連続土坑完部状況	108
第17図 弥生時代前期～中期溝状遺構及び防堀六住跡調査地点 (1/6,000)	27	第50図 弥生時代後期～古墳時代前期居住跡土層断面集成① (1/80・1/160)	62	第87図 道路内溝溝状況	108
第18図 103SD126遺構光面陶 (1/100)	28	第51図 弥生時代後期～古墳時代前期居住跡土層断面集成② (1/160)	63	第88図 道路内溝溝断面図	108
第19図 051SK005平面・断面光面陶 (1/80)	30	第52図 弥生時代後期～古墳時代前期居住跡土層断面集成③ (1/160)	64	第89図 下部遺跡群内古代道路横断面ライン	109
第20図 071SK221平面・断面光面陶 (1/80)	30	第53図 御田遺跡上空から下部地区を望む	65	第90図 115SX450土器出土状況	112
第21図 東山田遺跡貯蔵六式陶 (2SK030) (1/80)	30	第54図 弥生時代後期～古墳時代前期土坑分布図 (1/6,000)	71	第91図 古代土坑光面陶集成 (1/80・1/100)	112
第22図 下部遺跡群第79次調査サークル分布貯蔵六式陶 (1/200)	32	第55図 弥生時代後期～古墳時代前期土坑断面図集成① (1/40・1/80)	72	第92図 120SX1420土器出土状況	113
第23図 弥生時代前期～中期土坑集成図① (1/80)	32	第56図 弥生時代後期～古墳時代前期土器植木光面陶集成 (1/20)	73	第93図 弥生時代久保遺跡S0069	113
第24図 弥生時代前期～中期土坑集成図② (1/80)	32	第57図 弥生時代後期～古墳時代前期土坑断面図集成 (1/80・1/100)	73	第94図 古代製磁器・土器地蔵坑光面陶 (1/60・1/80)	113
第25図 弥生時代前期～中期土坑集成図③ (1/80)	33	第58図 弥生時代後期～古墳時代前期土坑断面図集成 (1/80・1/100)	73	第95図 古代土坑断面図集成 (1/20・1/80)	114
第26図 弥生時代前期～中期土坑集成図④ (1/80)	33	第59図 弥生時代後期～古墳時代前期土坑断面図集成 (1/80・1/100)	73	第96図 古代官衙関連遺物 (1/6)	118
第27図 弥生時代前期～中期土坑集成図⑤ (1/80)	34	第60図 板状瓦片 (溝の部分破損)	78	第97図 縄文系土器・近江産埴輪陶器光面陶 (1/4・1/6)	119
第28図 弥生時代前期～中期土坑集成図⑥ (1/80)	34	第61図 板状瓦片 (溝の部分破損)	78	第98図 不明古銅製品	119
第29図 弥生時代前期～中期土坑集成図⑦ (1/80)	35	第62図 板状瓦片 (下部遺跡群調査出土)	78	第99図 石鏝	119
第30図 弥生時代前期～中期土坑集成図⑧ (1/80)	36	第63図 鉄剣	78	第100図 銅製金具	119
第31図 弥生時代前期～中期土坑集成図⑨ (1/80)	36	第64図 古墳時代中期～後期遺構分布図 (1/6,000)	89	第101図 鏝	119
第32図 120SX1340平面・断面光面陶 (1/80)	41	第65図 古墳時代中期～後期期六住跡集成図① (1/160)	91	第102図 木製刀子	119
第33図 004SX001-001光面陶 (1/4)	42	第66図 古墳時代中期～後期期六住跡集成図② (1/160)	92	第103図 土製壺	119
第34図 青銅製ヤリガンナ復元図 (2/3)	42	第67図 018SX001出土物光面陶 (1/4)	93	第104図 古代土器器形分類① (杯・皿)	123
		第68図 下部遺跡群航空写真 (東から撮影。大分川を望む)	94	第105図 古代土器器形分類② (高杯・鉢)	124
		第69図 第115次調査区 (南) 全図	94	第106図 古代土器器形分類③ (壺) (1/10)	125
				第107図 古代土器器形分類④ (壺) (1/10)	125
				第108図 古代土器器形分類⑤ (壺・甕)	126
				第109図 古代土器器形分類⑥ (杯・皿・甕)	127
				第110図 古代土器器形分類⑦ (壺・高杯)	129
				第111図 古代土器器形分類⑧ (甕)	130
				第112図 古代土器器形分類⑨ (甕)	131

第1138号	費後大分県土師器遺跡A類分組①	135	第1474号	近代・現代の下駄の様子	179	第1858号	SX025遺構光面陶 (1/40)	233
第1140号	費後大分県土師器遺跡A類 (緑彩タイプ) 分組①	136	第1488号	近代の主な出土器物	180	第1860号	SX025遺構光面陶 (1/40)	233
第1150号	費後大分県豊・企鵝型土器量比較分布図	137	第1498号	次郎の物語 (明治版) の広告	180	第1870号	SX025遺構光面陶 (1/40)	233
第1160号	費後大分県土師器遺跡分組①	138	第1500号	明治・昭和初期のビーム・ジュース等 製造販売会社の電通	181	第1880号	SX025遺構光面陶 (1/40)	233
第1170号	大分県内各地大分県土師器出土主要 跡分布図 (1/2,000)	139	第1510号	弥生時代地域別跡分布図	198	第1890号	SX103遺構光面陶 (1/40)	234
第1180号	第115号出土の土器と形制別量比	139	第1528号	第1・2地域発生時代時期別居住跡表	199	第1900号	SX107遺構光面陶 (1/40)	234
第1190号	企鵝型土師器タイプ別分組①	140	第1540号	第1・2地域発生時代時期別居住跡表	200	第1910号	SX133遺構光面陶 (1/40)	234
第1200号	企鵝型土師器分組 (小型タイプ) (1/10)	140	第1550号	第5 (a・b) 地域発生時代時期別居住 跡表①②③④	201	第1920号	SX163遺構光面陶 (1/40)	234
第1210号	古代末期～中世前期期立建物遺構・溝 状遺構・井戸状遺構分布図 (1/6,000)	142	第1560号	第5 (a・b) 地域発生時代時期別居住 跡表⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳	203	第1930号	SX161遺構光面陶 (1/40)	234
第1220号	古代末期～中世前期期井戸状遺構光面 陶集成 (1/80)	143	第1570号	第5 (c・d) 地域発生時代時期別居住 跡表①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳	205	第1940号	SX014・025・026・034出土器物 光面陶 (1/6)	235
第1230号	古代末期～中世前期性格不明遺構光面 陶集成 (1/40)	145	第1580号	調査地点位置図	216	第1950号	SX035・061・103・104・107・ 116・131・表土 (SZ000) 出土器物 光面陶 (1/6)	236
第1240号	秋バツ遺跡出土の京部系土師器	146	第1590号	第39次土師器集成① (1/300)	217	第1960号	調査地点位置図	241
第1250号	秋バツ遺跡出土の京部系土師器光面陶 (1/4)	146	第1600号	第39次全土師器集成 (1/300)	218	第1970号	第87次土師器集成① (1/250)	242
第1260号	第108次S201出土土師器光面陶 (1/4)	146	第1610号	SA200遺構光面陶 (1/100)	219	第1980号	S8001遺構光面陶 (1/60)	243
第1270号	第90次土師土師器光面陶 (1/4)	146	第1620号	S8100遺構光面陶 (1/100)	219	第1990号	SJ100土層断面光面陶 (1/20)	243
第1280号	下部調査層出土の白粉土土師器	147	第1630号	S0021土層断面光面陶 (1/40)	220	第2000号	SJ177土層断面光面陶 (1/20)	243
第1290号	中世前期遺構分布図 (1/6,000)	149	第1640号	S0022土層断面光面陶 (1/40)	220	第2010号	SJ024土層断面光面陶 (1/20)	243
第1300号	中世前期期別遺構分組① (1/6,000)	151	第1650号	S0023 (北館) 土層断面光面陶 (1/40)	220	第2020号	SJ020・244出土器物光面陶 (1/6)	243
第1310号	中世前期期別遺構分組② (1/80)	156	第1660号	S0023 (南館) 土層断面光面陶 (1/40)	220	第2030号	S677遺構光面陶 (1/40)	244
第1320号	中世前期期別遺構分組③ (1/80)	157	第1670号	SX122・142・S0021・023出土物 光面陶 (1/6)	220	第2040号	S6300遺構光面陶 (1/40)	245
第1330号	中世前期土師器集成① (1/40)	158	第1680号	S8001遺構光面陶 (1/100)	222	第2050号	S6300同様状況	245
第1340号	第125次S0016出土土師器光面陶 (1/6)	160	第1690号	S8002遺構光面陶 (1/100)	222	第2060号	S6300同様状況	245
第1350号	第132次S0025出土土師器光面陶 (1/6)	160	第1700号	SX003遺構光面陶 (1/100)	222	第2070号	S670遺構光面陶 (1/40)	246
第1360号	第132次S214出土土師器光面陶 (1/6)	161	第1710号	S8004遺構光面陶 (1/100)	224	第2080号	S670土層断面	246
第1370号	近世土師器・井戸状遺構分布図 (1/6,000)	164	第1720号	S8005遺構光面陶 (1/100)	224	第2090号	S670土層断面	246
第1380号	近世土師器遺構断面図集成① (1/40・ 1/80・1/100)	165	第1730号	S8006遺構光面陶 (1/100)	225	第2100号	S670土層断面	246
第1390号	近世土師器遺構断面図集成② (1/80)	166	第1740号	S8007遺構光面陶 (1/100)	225	第2110号	SX128遺構光面陶 (1/100)	248
第1400号	第68次土師器出土の遺構分布不明連続 遺構 (1/80)	166	第1750号	S8008遺構光面陶 (1/100)	226	第2120号	S8175遺構光面陶 (1/100)	248
第1410号	近世土師器遺構断面図集成 (1/80)	169	第1760号	S8009遺構光面陶 (1/100)	226	第2130号	SX178・559出土土師器光面陶 (1/6)	249
第1420号	近世土師器集成① (1/200)	171	第1770号	S8010遺構光面陶 (1/100)	227	第2140号	SX025遺構光面陶 (1/40)	249
第1430号	近世土師器集成② (1/6,000)	172	第1780号	S8016遺構光面陶 (1/100)	227	第2150号	SX025遺構光面陶 (1/40)	250
第1440号	近世土師器集成③ (1/20・1/40)	173	第1790号	S8001・002・003出土土師器光面陶 (1/6)	228	第2160号	SX106遺構光面陶 (1/40)	250
第1450号	第79次西宮出土の近世土師器光面陶 (1/6)	176	第1800号	S8005・006・007・009・013・ 015・016出土土師器光面陶 (1/6)	229	第2170号	SX200遺構光面陶 (1/40)	250
第1460号	費後及び大分県における祭祀施設の遺通 (各報告書より記載)	177	第1810号	SJ101遺構光面陶 (1/20)	231	第2180号	SX215遺構光面陶 (1/40)	250
			第1820号	SJ102遺構光面陶 (1/20)	231	第2190号	SX028出土土師器光面陶 (1/6)	251
			第1830号	SJ101・102出土土師器光面陶 (1/6)	231	第2200号	SX225遺構光面陶 (1/40)	252
			第1840号	SX014遺構光面陶 (1/40)	233	第2210号	SX229遺構光面陶 (1/40)	252
						第2220号	SX215・254出土土師器光面陶 (1/6)	253
						第2230号	SX128出土土師器光面陶 (1/6)	254
						第2240号	SX566・608・741出土土師器光面陶 (1/6)	254

表目次

第1表	下部遺跡群調査地点一覧表	12	第24表	弥生時代後期～古墳時代前期土器変遷表①	84	第51表	近世清灰遺構一覧表②	168
第2表	大分市内土器時代後期・晩期遺跡一覧表	16	第25表	弥生時代後期～古墳時代前期土器変遷表②	85	第52表	近世月戸瓦遺構一覧表	170
第3表	弥生時代中期第六住居跡一覧表	25	第26表	弥生時代後期～古墳時代前期土器変遷表③	86	第53表	近世墓遺構一覧表	174
第4表	弥生時代前期～中期清灰遺構一覧表	28	第27表	弥生時代後期～古墳時代前期土器変遷表④	87	第54表	第79次出土遺物観察表	178
第5表	弥生時代前期～中期土坑遺構一覧表①	37	第28表	古墳時代中期～後期第六住居跡一覧表	92	第55表	第79次出土遺物陶磁器観察表	178
第6表	弥生時代前期～中期土坑遺構一覧表②	38	第29表	古墳時代中期～後期土坑遺構一覧表	93	第56表	地域別住居跡一覧表①	208
第7表	弥生時代前期～中期土坑遺構一覧表③	39	第30表	古代竪立柱建物跡一覧表	101	第57表	地域別住居跡一覧表②	209
第8表	弥生時代前期～中期土坑遺構一覧表④	40	第31表	古代清灰遺構一覧表	106	第58表	地域別住居跡一覧表③	210
第9表	弥生時代前期～中期土坑遺構一覧表⑤	41	第32表	古代月戸瓦遺構一覧表	106	第59表	地域別住居跡一覧表④	211
第10表	弥生時代前期～中期草部遺構一覧表	41	第33表	古代土坑一覧表①	115	第60表	地域別住居跡一覧表⑤	212
第11表	弥生時代前期～中期土器変遷表①	48	第34表	古代土坑一覧表②	116	第61表	地域別住居跡一覧表⑥	213
第12表	弥生時代前期～中期土器変遷表②	49	第35表	古代末期～中世前期竪立柱建物跡一覧表	141	第62表	地域別住居跡一覧表⑦	214
第13表	弥生時代前期～中期土器変遷表③	50	第36表	古代末期～中世前期清灰遺構一覧表	141	第63表	地域別住居跡一覧表⑧	215
第14表	弥生時代前期～中期土器変遷表④	51	第37表	古代末期～中世前期月戸瓦遺構一覧表	144	第64表	遺構一覧表	216
第15表	弥生時代後期～古墳時代前期清灰遺構一覧表	55	第38表	古代末期～中世前期性格不明遺構一覧表	145	第65表	遺物観察表①	236
第16表	弥生時代後期～古墳時代前期周溝遺構一覧表	56	第39表	第六分遺跡出土遺物観察表	147	第66表	遺物観察表②	237
第17表	弥生時代後期～古墳時代前期月戸瓦遺構一覧表	59	第40表	中世後期清灰遺構一覧表①	153	第67表	遺物観察表③	238
第18表	弥生時代後期～古墳時代前期住居跡一覧表①	66	第41表	中世後期清灰遺構一覧表②	154	第68表	遺物観察表④	239
第19表	弥生時代後期～古墳時代前期住居跡一覧表②	67	第42表	中世後期清灰遺構一覧表③	155	第69表	遺物観察表⑤	240
第20表	弥生時代後期～古墳時代前期住居跡一覧表③	68	第43表	中世後期月戸跡一覧表	157	第70表	陶磁器観察表	240
第21表	弥生時代後期～古墳時代前期住居跡一覧表④	69	第44表	中世後期土器墓遺構一覧表	159	第71表	石器観察表	240
第22表	弥生時代後期～古墳時代前期土坑遺構一覧表	75	第45表	第125次遺物観察表	161	第72表	遺構一覧表	241
第23表	弥生時代後期～古墳時代前期土器変遷表	75	第46表	第125次陶磁器観察表	162	第73表	遺物観察表①	255
			第47表	第132次遺物観察表	162	第74表	遺物観察表②	256
			第48表	第132次陶磁器観察表	162	第75表	遺物観察表③	257
			第49表	第132次その他観察表	162	第76表	遺物観察表④	258
			第50表	近世清灰遺構一覧表①	167	第77表	遺物観察表⑤	259
						第78表	陶磁器観察表	259
						第79表	石器観察表	260

第 I 章 総 説

1. 調査に至る経過

下郡遺跡群は大分市の西部、大分川河口付近の右岸に位置し、標高4～7mの自然堤防上に展開している。当地は昭和30年代に刊行された『大分市史』等により「下郡第2段丘遺跡」として周知されていたが、当時の認識は、遺跡の範囲がかなり狭小なエリアに限定されるとする認識であった。

こうした状況の中、昭和59年から下郡地区土地地区画整理事業が開始され、昭和62年3月には、土地地区画整理事業対象地内において、工事に際し大量の遺物が確認された。これにより遺跡の範囲が当初の認識よりもはるかに広大であることが明らかとなった。このような事態を踏まえ、大分県教育委員会及び大分市都市整備部下郡土地地区画整理事務所と遺跡の取り扱いについて協議をおこなった。その結果、工事施工部分については事前に発掘調査を実施することを決定し、昭和62年度から大分市教育委員会が調査を実施することになり、昭和62年の第1次調査を皮切りに平成16年の第143次調査まで調査が継続実施されることになった。この間、当該地域内において大分県教育委員会による下郡桑苗遺跡の調査がおこなわれ、全国に先駆けて弥生時代の家畜動物遺体を確認されるなど、多くの新知見が示された。

平成12年度からは、資料整理作業と並行して『下郡遺跡群』シリーズと題し、『下郡遺跡群Ⅰ』の刊行から平成21年3月までに『下郡遺跡群Ⅶ』におよぶ7冊の正式報告書を刊行した。なお、これまでの調査地点を第1表に示している。なお、正式報告書以外で各調査地点の調査概要を記しているものに下記の資料がある。参照されたい。

大分市教育委員会	1990『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地地区画整理事業に伴う発掘調査概報（1）
大分市教育委員会	1991『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地地区画整理事業に伴う発掘調査概報（2）
大分市教育委員会	1992『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地地区画整理事業に伴う発掘調査概報（3）
大分市教育委員会	1993『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地地区画整理事業に伴う発掘調査概報（4）
大分市教育委員会	1990『大分市埋蔵文化財調査年報』1 — 平成元年度 —
大分市教育委員会	1991『大分市埋蔵文化財調査年報』2 — 平成2年度 —
大分市教育委員会	1992『大分市埋蔵文化財調査年報』3 — 平成3年度 —
大分市教育委員会	1993『大分市埋蔵文化財調査年報』4 — 平成4年度 —
大分市教育委員会	1994『大分市埋蔵文化財調査年報』5 — 平成5年度 —
大分市教育委員会	1995『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 6 1994年度
大分市教育委員会	1996『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 7 1995年度
大分市教育委員会	1997『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 8 1996年度
大分市教育委員会	1998『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 9 1997年度
大分市教育委員会	1999『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 10 1998年度
大分市教育委員会	2000『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 11 1999年度
大分市教育委員会	2001『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 12 2000年度
大分市教育委員会	2002『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 13 2001年度
大分市教育委員会	2003『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 14 2002年度
大分市教育委員会	2004『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 15 2003年度
大分市教育委員会	2005『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 16 2004年度
大分市教育委員会	2006『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 17 2005年度
大分市教育委員会	2007『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 18 2006年度
大分市教育委員会	2008『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 19 2007年度

2. 調査組織

調査を実施した各年度の調査組織については、年度別に『下郡遺跡群Ⅰ』に所収しており、これを参照していただきたい。以下には『下郡遺跡群Ⅰ』刊行以降に該当する調査組織と『下郡遺跡群Ⅶ』以降の資料整理体制について記述する。

〔平成19年度〕

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬

事務局 大分市教育委員会

玉永 光洋（大分市教育委員会教育総務部文化財課課長）

渋谷 建治（ 同上 参事）

塔鼻 光司（ 同上 文化財係長） 安東 時男（ 同上 管理係長）

幸 俊明（ 同上 管理係主査） 桑原 治（ 同上 管理係主査）

植木 和美（ 同上 管理係指導主事） 姫野 公德（ 同上 管理係指導主事）

栗田 博之（ 同上 管理係主任） 加藤 キヌ（ 同上 管理係主任）

加悦 真理（ 同上 管理係主任）

調査担当

坪根 伸也（ 同上 文化財係専門員） 池邊千太郎（ 同上 文化財係専門員）

塩地 調一（ 同上 文化財係主任技師） 高畠 豊（ 同上 文化財係主任技師）

河野 史郎（ 同上 文化財係主任技師） 中西 武尚（ 同上 文化財係主任技師）

永松 正大（ 同上 文化財係主任） 佐藤 道文（ 同上 文化財係主事）

五十川雄也（ 同上 文化財係主事） 古川 匠（ 同上 文化財係主事）

長 直信（ 同上 文化財係主事） 五十川慎也（ 同上 文化財課嘱託）

井口あけみ（ 同上 文化財課嘱託） 上原 翔平（ 同上 文化財課嘱託）

奥村 義貴（ 同上 文化財課嘱託） 佐藤 孝則（ 同上 文化財課嘱託）

羽田野達郎（ 同上 文化財課嘱託） 羽田野裕之（ 同上 文化財課嘱託）

樺田 智美（ 同上 文化財課嘱託） 山下 朋紀（ 同上 文化財課嘱託）

山本 哲也（ 同上 文化財課嘱託） 若林 善満（ 同上 文化財課嘱託）

大平 直子（ 同上 文化財課嘱託） 三嶋 桂司（ 同上 文化財課嘱託）（5月より）

大分市都市計画部まちなみ整備課

安達 明（大分市都市計画部まちなみ整備課課長）

釘宮 誠司（ 同上 係長） 越智 理也（ 同上 主事）

磯崎由香里（ 同上 主任） 熊瀬 俊成（ 同上 主任）

野田浩一郎（ 同上 事務員）

調査協力 滝尾中部地区住環境整備事務所

野仲 文治（滝尾中部地区住環境整備事務所参事兼所長）

江口 雅道（ 同上 主幹） 田北 啓治（ 同上 主幹）

浜田 憲彦（ 同上 主任）

〔平成20年度〕

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬

事務局 大分市教育委員会

玉永 光洋（大分市教育委員会教育総務部次長兼文化財課課長）

岩田 祐治（同上 参事）

塔鼻 光司（同上 課長補佐兼文化財係長）

福田 誠一（同上 課長補佐兼管理係長） 筒井 和信（同上 管理係主査）（12月より）

幸 俊明（同上 管理係主査） 桑原 治（同上 管理係主査）

植木 和美（同上 管理係指導主事） 姫野 公徳（同上 管理係指導主事）

栗田 博之（同上 管理係主任） 加藤 キヌ（同上 管理係主任）

竹中 智美（同上 管理係主任） 宮崎 勲（同上 管理係主任 再）

調査担当

坪根 伸也（同上 文化財係専門員） 池邊千太郎（同上 文化財係専門員）

塩地 潤一（同上 文化財係主任技師） 高島 豊（同上 文化財係主任技師）

河野 史郎（同上 文化財係主任技師） 中西 武尚（同上 文化財係主任技師）

永松 正大（同上 文化財係主任） 佐藤 道文（同上 文化財係主事）

五十川雄也（同上 文化財係主事） 古川 匠（同上 文化財係主事）

長 直信（同上 文化財係主事） 五十川慎也（同上 文化財課嘱託）

井口あけみ（同上 文化財課嘱託） 上原 翔平（同上 文化財課嘱託）

奥村 義貴（同上 文化財課嘱託） 佐藤 孝則（同上 文化財課嘱託）

仲町 憲治（同上 文化財課嘱託） 羽田野達郎（同上 文化財課嘱託）

羽田野裕之（同上 文化財課嘱託） 稗田 智美（同上 文化財課嘱託）

廣瀬 育子（同上 文化財課嘱託） 三嶋 桂司（同上 文化財課嘱託）

山下 朋紀（同上 文化財課嘱託） 山本 哲也（同上 文化財課嘱託）

若秋 善満（同上 文化財課嘱託） 大平 直子（同上 文化財課嘱託）

大分市都市計画部まちなみ整備課

安達 明（大分市都市計画部次長兼まちなみ整備課課長）

釘宮 誠司（同上 主査） 吉野まゆみ（同上 主査）

首藤 京子（同上 主任） 渡邊 真（同上 主事）

越智 理也（同上 主事）

調査協力 滝尾中部地区住環境整備事務所

賀来 保夫（滝尾中部地区住環境整備事務所参事兼所長）

田北 啓治（同上 主幹） 豊田 敏治（同上 主幹）

中山祐治郎（同上 専門員） 奥川 淳一（同上 主任）

浜田 憲彦（同上 主任）

[平成21年度]

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬

事務局 大分市教育委員会

玉永 光洋(大分市教育委員会教育部次長兼文化財課課長)

岩田 祐治(同上 参事)

塔鼻 光司(同上 課長補佐)

福田 誠一(同上 課長補佐兼管理係長)

坪根 伸也(同上 文化財係長)

幸 俊明(同上 管理係主査)(6月まで)

桑原 治(同上 管理係主査) 渡辺 政雄(同上 管理係主査)(7月より)

筒井 和信(同上 管理係主査) 植木 和美(同上 管理係指導主事)

加藤 キヌ(同上 管理係主任)(6月まで)

栗田 博之(同上 管理係主査) 竹中 智美(同上 管理係主任)

神崎小由美(同上 管理係主査)(7月より)

宮崎 勲(同上 管理係主任 再) 麻生 重徳(同上 管理係主任 再)

山上洋二郎(同上 管理係主任 再)

調査担当

池邊千太郎(同上 文化財係専門員) 高畠 豊(同上 文化財係専門員)

河野 史郎(同上 文化財係専門員) 塩地 潤一(同上 文化財係専門員)

永松 正大(同上 文化財係主任) 佐藤 道文(同上 文化財係主任)

五十川雄也(同上 文化財係主事) 長 直信(同上 文化財係主事)

石川ゆかり(同上 文化財係主事) 井口あけみ(同上 文化財課嘱託)

上原 翔平(同上 文化財課嘱託) 奥村 義貴(同上 文化財課嘱託)

小野千恵美(同上 文化財課嘱託) 木村 藍子(同上 文化財課嘱託)

倉増美智代(同上 文化財課嘱託) 小島 愛(同上 文化財課嘱託)

佐藤 孝剛(同上 文化財課嘱託) 佐藤 良子(同上 文化財課嘱託)

仲町 憲治(同上 文化財課嘱託) 鍋島千恵子(同上 文化財課嘱託)

羽田野裕之(同上 文化財課嘱託) 柳田 智美(同上 文化財課嘱託)

姫野 久恵(同上 文化財課嘱託) 廣瀬 育子(同上 文化財課嘱託)

松本 晴美(同上 文化財課嘱託) 三嶋 桂司(同上 文化財課嘱託)

山下 朋紀(同上 文化財課嘱託) 大平 直子(同上 文化財課嘱託)

大分市都市計画部まちなみ整備課

工藤 哲雄(大分市都市計画部まちなみ整備課課長)

釘宮 誠司(同上 主幹) 吉野まゆみ(同上 主査)

黒川 昇平(同上 主事) 渡邊 真(同上 主事)

後藤 祐也(同上 主事)

調査協力 滝尾中部地区住環境整備事務所

賀来 保夫(滝尾中部地区住環境整備事務所参事兼所長)

油布 文雄(同上 主幹) 豊田 敏治(同上 主幹)

中山祐治郎(同上 専門員) 高橋 浩樹(同上 専門員)

浜田 憲彦(同上 主任)

調査作業員

秋吉幸彦、秋吉利恵子、麻生咲子、安部さな江、安部文生、安部道子、安藤カズ子、安東尚礼、井上弘美、井上真樹、岩尾正則、内山ツネ子、梅木好子、江藤和子、衛藤勝寛、江藤裕見子、大石妙子、大塚たまり、大山末喜、加藤香代子、加藤きよ子、辛島智栄、河野佳奈、河野久明、吉良二、工藤八重子、倉山香苗、栗原万実、久渡真、五所恵美子、古長静代、後藤昌子、坂元ヨシエ、佐藤剛、佐藤道文、重藤たまり、重松邦子、柴田カツ子、首藤小百合、首藤孝子、白石麻子、進司初恵、関愛子、関恵美子、関順子、関ナラエ、関ハツ子、関光子、高尾千代子、高野英子、高野スエ、高橋美佐子、高橋美代子、武石修吾、竹中エミ子、竹中朋子、竹野内猛、田島正美、田代重豪、田代秀子、立石カズ子、伊達久美子、伊達円香、丹後文子、鶴田弘美、霍間幸子、時枝宏宏、土佐林恵子、友田ヌイコ、長見幸信、中村淑、西田恭子、野崎金一郎、野崎邦浩、野崎豊子、野田喜六、野田武志、野田友枝、野田守、野村節子、橋口真吾、羽田民子、秦野恒夫、林枝祐一、日野恭男、平田美代子、平林政子、広瀬敬子、藤本正和、古川一郎、松井千代子、松本昭治、松本道子、三浦ミヨ子、三重野京子、水嶋千枝子、溝口正人、宮迫喜久雄、宮下孝文、宮瀬知夫、柳井信二、山路康弘、山田美恵子、山本千加子、山元明、吉永匡史、渡部英子、綿丸るみ子

《既刊報告書掲載調査回数一覧》

下部遺跡群Ⅰ 第90次・第91次・92次

下部遺跡群Ⅱ 第115次・第126次

下部遺跡群Ⅲ 第25次・第98次・第99次・第140次・第141次・第142次・第143次

下部遺跡群Ⅳ 第15次・第36次・第51次・第52次・第53次・第61次・第63次・第65次
第66次・第67次・第69次・第75次・第120次①

下部遺跡群Ⅴ 第8次・第31次・第32次・第33次・第37次・第40次・第44次・第45次
第46次・第47次・第49次・第55次・第57次・第74次・第80次・第81次
第106次・第108次・第111次・第116次・第117次・第137次・第139次

下部遺跡群Ⅵ 第18次・第50次・第68次・第71次・第76次・第82次・第83次・第93次
第94次・第100次・第102次・第103次・第107次・第110次・第120次②
第122次

下部遺跡群Ⅶ 第3次・第4次・第5次・第7次・第13次・第19次・第29次・第30次・第34次
第38次・第95次

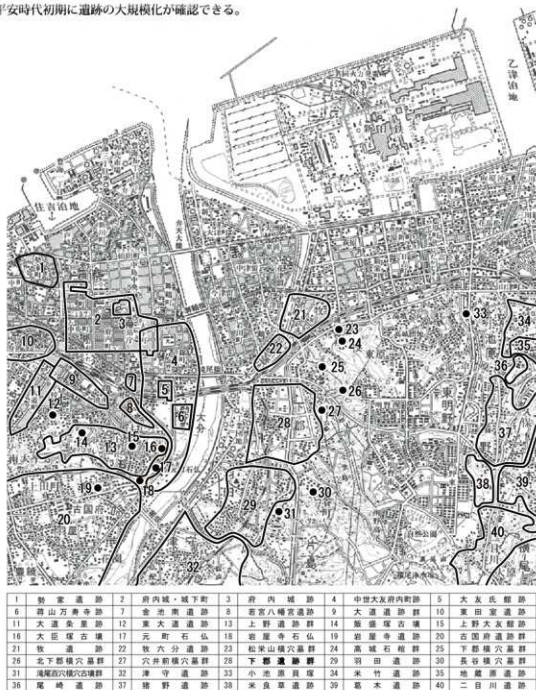
下部遺跡群Ⅷ 第39次・第87次

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

1. 下部遺跡群の立地と遺跡概要

下部遺跡群は大分川の河口付近の右岸に展開する自然堤防上に立地する。遺跡標高は5～7mである。調査の対象は96haであり、この中央には旧河道が南北方向に縦貫する。

下部遺跡群の発掘調査は同地区の土地区画整理事業に伴う事前調査として昭和62年度から実施され、平成15年度に終了した。調査地点は小規模な確認調査を除き143地点におよぶ。これらの調査の結果から、下部遺跡群は縄文時代後期～現代まで続く複合遺跡であることが明らかとなり、特に弥生時代中・後期と奈良時代中頃から平安時代初期に遺跡の大規模化が確認できる。



第1図 調査遺跡位置図 (1/50,000)

縄文時代

縄文時代の明確な検出遺構は、下部桑苗遺跡で後期の貯蔵穴^{③1}が検出されているのみであり、確認事例は極めて少ない。下部桑苗遺跡の貯蔵穴以外では流路跡の堆積埋土中から縄文時代晩期を中心とする土器等が確認されている。

縄文土器の出土は広範に認められるが、大半の遺物が弥生時代を中心とする後世の遺構埋土に混入する状況で確認される。出土土器の年代的な中心は縄文時代後期であり、下限は晩期中葉頃である。発掘調査における出土資料の中で最も古式に位置付けられるのは縄文時代後期初頭に比定される中津式段階のものである。これらの土器が下部地区における生活痕跡の初現と考えることもできる。しかしながら、遺跡の西側を流れる大分川の河床において、前期の甕式土器や中期に比定される船元式土器などが採集されていることから^{③2}、生活痕跡の初現が縄文時代後期初頭よりもさらに遡る可能性も考えられる。

弥生時代

弥生時代に関しては、早期に比定される刻目突帯文土器の出土をごく少量確認することができるが、遺構の明確な検出事例は今のところ認められない。

弥生時代前期では、一部に弥生時代前期中葉から後葉頃に比定される遺物の出土が確認できるが、明確な遺構の検出事例は乏しい。出土遺物に関しても遺跡群の東側地域で確認されるのみである。弥生時代前期末から中期初頭の段階には急激に検出遺構の増加を確認することができる。遺物、遺構の検出が顕著なのが下部桑苗遺跡、およびその周辺の旧河道跡周辺であり、特に旧河道跡からは多量の土器、木器、動物遺体などが出土している。近隣に当該期の大規模集落の存在が想定される。



第2図 下部遺跡群第120次調査弥生土器

弥生時代中期には、さらなる遺跡の拡大傾向が看取され、遺構の分布も広範な展開を示すようになる。特に弥生時代中期中葉以降に関しては、前代まで分布の中心であった東側地域に加え、西側地域にも遺跡の展開が顕著となる。弥生時代中期後半には、この遺跡の西側地域には、大分川方向を意識した長大な溝状遺構を南北に掘削する状況が認められる。検出遺構の大半は貯蔵穴であり、堅穴住居跡の検出事例は極めて少ない。これは明治期の水田耕地の整備に伴う削平により住居跡等の掘削深度の浅い遺構が欠失した結果である。こうした事由により一定程度の深さを有する貯蔵穴のみが遺存し、検出されるといった状況となっている。貯蔵穴の配置に関して、径7mほどの円を描くように分布する状況が複数地点で認められ、配置に関して一定の規範が存在してことを想定させる。

弥生時代前期・中期の出土遺物には、弥生時代前期末から中期初頭の段階において西部瀬戸内、特に豊予海峡を挟み対峙する位置にある伊予地域の影響が強くみられる。具体的には多条沈線を描く甕や壺の出土が認められ、豊後水道を介した瀬戸内圏の影響が看取される。ところが、こうした土器様式への瀬戸内地域の強い影響力は弥生時代中期前葉以降には継続しない。この後は、瀬戸内地域に代わって北部九州系の要素が急速に増大する。このような外来系の要素に対して在地系の土器には、「下城式土器」と呼ばれる地域性の強い土器があり、弥生時代前期末から中期が主体となる。しかしながら、中期前葉以降、次第に北部九州系の土器文化の影響が強くなり、下城式土器と東北北部九州系の甕が集落の中で並存する。

土器以外のもので、外から持ち込まれたものに福岡県今山産の石斧の出土がある。福岡県今山産石斧出土事例の東限となる資料である。さらに、青銅製ヤリガンナも北部九州を介してもたらされたと考えられ、北部九州との密接な交流関係が示唆される。

弥生時代中期末から後期初頭には、ふたたび瀬戸内文化の影響が大きくなり、凹線文土器などの流入等が認められる。甕にも西部瀬戸内の影響が色濃くみられるようになり、大型器台の出土等が弥生時代後期全般を通じて確認される。また、弥生時代後期初頭、弥生時代後期後葉から終末期に遺構の増加のピークが認められる。なかでも弥生時代後期後葉から終末期には、下郡遺跡群中央部と南西部の2地点に断面V字形を呈する環濠が掘削され、多くの住居跡が検出されている。

弥生時代終末期から古墳時代初頭の時期には集落範囲が変化し、前代に造られた環濠は廃絶する。

古墳時代

古墳時代初頭から前葉の集落は、広範な分布を示すようになる。土器組成の中に布留式系土器を包摂し、在地系土器と新来の外来系土器が共存する状況が前期末まで継続する。

古墳時代中期には、集落地域は縮小し、竪穴住居が点在する様態が想定される。下郡遺跡群の所在する大分川河口付近の右岸地域には古墳時代を通じて顕著な高塚古墳が存在しないという点も大きな特徴として指摘できる^{註1}。古墳時代後期には遺跡群東側の鶴崎台地崖面に多くの横穴墓群が造営されるが、こうした多くの横穴墓の分布から大規模集落の存在が想定される。しかしながら、これらの横穴墓に対応する集落跡の確認はなされていない。

古代

古代については、8世紀中頃に遺跡の大規模化が看取され、これ以降、9世紀前半頃をピークに規模を縮小しながら10世紀頃まで継続する。検出遺構には大形の掘立柱建物跡、井戸跡、道路跡などがある。なかでも遺跡群の中央（F区）、西側（H区）、東側（B区）に当該期の遺構の集中分布が認められる。各区は道路によって接続されていたようである。各地点での出土遺物には、円面硯、墨書土器、刻書土器、石帯などが認められる。

中世

11世紀から12世紀には、8・9世紀のような遺跡の大規模化は認められないものの、11世紀後半から12世紀を中心に畿内産土師器、楠葉型瓦器碗、和泉型瓦器碗などの出土が確認される。こうした遺物群は河口部に立地する下郡遺跡群の地理的環境を反映し、継続して交易の要衝として機能していたことを示している。

中世前期に関しては、いまひとつ様相が明らかでない。中世後期の戦国時代になると方形館の築造や華南三彩陶器、タイ・ノイ川窯産の陶器、朝鮮王朝産陶磁器の出土などがみられるようになる。こうした遺構・遺物は、中世大友府内町跡（豊後府内）との強い関連性を示すものである^{註4}。



第3図 滝尾百穴横穴古墳群



第4図 大分川左岸から下郡を望む

註1 大分県教育委員会 1989『下郡桑原遺跡』七歩川河川改修工事に伴う発掘調査報告書

註2 大分市教育委員会 1996『大分市の文化財—大分市域の縄文土器資料集成Ⅰ』第30集

註3 大分市教育委員会 2001『長迫遺跡』—大分市大字牧に所在する発掘調査報告書—

註4 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001『南宮都市・豊後府内 都市と交易—中世大友再発見フォーラム』

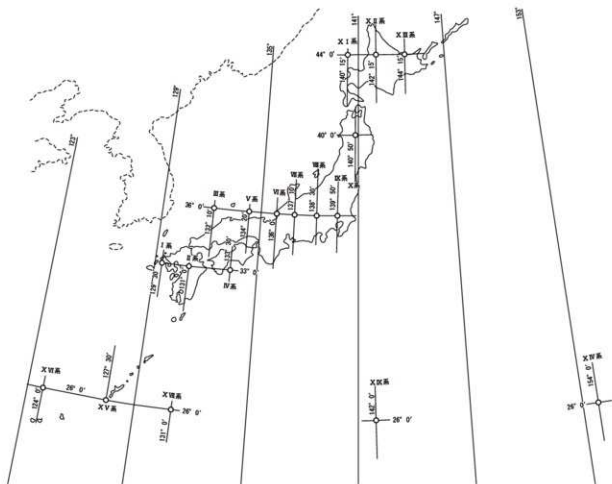
2. 調査の方法

発掘調査については、表土は原則として機械力を使用し、除去、搬出をおこなった。

調査区の設定にあたっては、国土地院第Ⅱ座標系を使用し、下記の図郭に基づき、調査区内に4 m方眼の地区杭を設定し、グリッド番号を決定した。こうして設定され、設置されたグリッドピン（基点）は調査終了段階まで使用され、図面の作成以外にも遺物取り上げの際の標記や調査単位等にも使用される。

遺構検出後は、このグリッドを基準に1:100の遺構配置略図を作成する。これに頭にSを冠した遺構番号が付され、遺構番号として、遺物取り上げ、写真ボード、遺構実測図等の整理番号となる。これに対応して遺構番号台帳が作成され、各遺構に関する所見を記入していく。各遺構の性格付に関しては、調査途中では保留とし、最終的には調査終了後に決定する。その段階では、遺構番号は調査時のままとし、遺構種別により遺構の個別の性格を表記している。たとえば、現場段階でS 80と付された遺構が、調査終了段階に竪穴住居跡と判断された場合SH 080と表記されることになる。

個別遺構の完掘図面、遺物出土状況図面等については、対象ケースによるものの、原則的には1:20を基本とし作成している。また、遺跡の全体完掘図面に関しては、一定程度の遺構占有率と調査面積のある場合には、航空写真測量図面を積極的に利用している。



第5図 平面直角座標系

【図郭表示についての表記】

位置の基準は、平面直角座標系（昭和43年建設省告示第3059号）を用いて表示し、以下に示す区分単位により、大分市域を4mメッシュで区切った上での表記をおこなう。大分県の場合、平面直角座標系は第Ⅱ系であり、この座標系はさらに、各座標系のY軸及びX軸を基準として、南北300km、東西160kmを含む区域を30km×40kmの長方形に分割し、その区画はアルファベットの太文字の組み合わせにより表示される。大分市の場合、大半がこの区画の「J」Fであり、当然ながら、下部遺跡群が存在する地域の区画コード（第1次区画コードメッシュ）も「J」Fとなる。

第1次区画コードメッシュは30km×40kmの長方形であることはすでに述べたが、この座標系内をさらに100等分し、次図に示すようなアラビア数字で表

示される。これにより示される図郭は、5000分の1の国土基本図に一致することになり、これをさらに4等分することで、国土基本図の2500分の1の図郭となり、アラビア数字で区画番号を定める（第2次区画コードメッシュ）。

次にこの2500分の1の図郭を25等分し、500分の1の図郭を生成し、これにアラビア数字の図郭番号を付し、これをさらに25等分して、100分の1の図郭を作成する（第3次区画コードメッシュ）。

さらに、この100分の1の図郭に相当する区画を25等分したものが、20分の1の図郭となる（第4次区画コードメッシュ）。

以上の各コードメッシュは以下のように読み直される。

第1次区画コードメッシュ

[第1次地域区画：座標系番号と座標系内の区画名]

第2次区画コードメッシュ

[第2次地域区画：国土基本図番号]

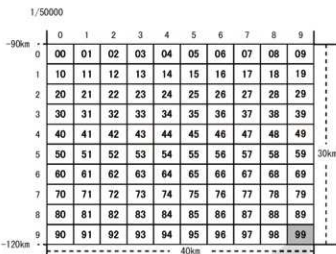
第3次区画コードメッシュ

[第3次地域区画：遺跡図面番号]

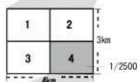
第4次区画コードメッシュ

[第4次地域区画：詳細遺跡図面番号]

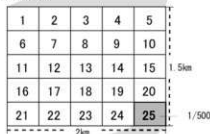
この区画コードは遺跡の図面整理番号として使用に供され、その際には、第4次区画コードメッシュにおいて、20分の1遺跡図面の図郭に相当する部分を4等分し、アルファベットの太文字で標記されることになる。また、このコードは現場段階においては、調査グリッド番号に準用される。すなわち、第3次区画コードメッシュにより生成された100分の1図郭を単位として、これを4mメッシュで区切り、北西角を基点としてアルファベットと数字による組み合わせにより標記される。この場合、4mメッシュ12マスの単位が20分の1の図郭と一致することになる。



1/5000（外枠）

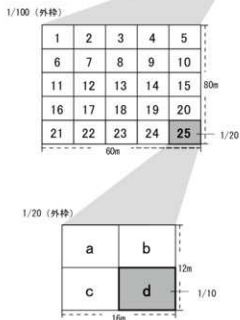


1/2500（外枠）



1/500（外枠）





◎調査グリッド (1/100 4m メッシュ)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
A																				
B			1					2			3				4				5	
C																				
D																				
E			6					7			8				9				10	
F																				
G																				
H			11					12			13				14				15	
I																				
J																				
K			16					17			18				19				20	
L																				
M																				
N			21					22			23				24					
O																				

12m
16m

※外枠は 1/100 の図郭である。(範囲は 60m×80m である。)

一つの太い枠は 1/20 の図郭と番号である。(範囲は 12m×16m である。)

一つの細い枠は 4m ピッチの杭幅を表している。

杭の番号は北西より A—O として 4m 置きに増える。

グリッドは北西にあたる杭番号と同じである。

図郭はいずれも 60cm×80 cm である。

第1表 下部道路群調査地点一覧表

調査 次数	調 査 地 点 名	面 積 (㎡)	調査年度	調査 次数	調 査 地 点 名	面 積 (㎡)	調査年度
1	B区 b ~ g・16・17地点	2130	昭和62年度	73	H区 q・16地点	223	平成7年度
2	D区 j・k・22~24地点	800	昭和62年度	74	I区 s・10地点	100	平成7年度
3	C区 e ~ g・9・10地点	2600	昭和62年度	75	H区 r・s・20・21地点	300	平成7年度
4	F区 j・k・5~7地点	1900	昭和62年度	76	E区 k・13地点	660	平成7年度
5	H区 p・q・18~23地点	2007	昭和63年度	77	G区 p・q・4地点	315	平成7年度
6	F区 m・5地点	120	昭和63年度	78	I区 r・16地点	100	平成7年度
7	G区 l・2~5地点	530	昭和63年度	79	D区 o・n・18・19地点	468	平成7年度
8	B区 トレンチ調査第1~第26トレンチ	2399	昭和63年度	80	J区 o・n・10地点	84	平成7年度
9	D区 n・22地点	418	昭和63年度	81	J区 p・9・10地点	238	平成7年度
10	B区 c・14・15地点	383	昭和63年度	82	B区 f・16地点	161.4	平成8年度
11	E区 j・11・12地点	331	昭和63年度	83	H区 p・22地点	65	平成8年度
12	E区 l・m・10地点	450	昭和63年度	84	F区 m・8地点	120	平成8年度
13	H区 s・20~23地点	2500	平成元年度	85	D区 o・17・18地点	345	平成8年度
14	F区 m・n・5地点	200	平成元年度	86	I区 q・16地点	339	平成8年度
15	F区 o・9・10地点	500	平成元年度	87	E区 o・p・16地点	1596.6	平成8年度
16	D区 o・p・17~19地点	2200	平成元年度	88	H区 p・21地点	300	平成8年度
17	E区 n・o・11・12地点	700	平成元年度	89	G区 s・t・3地点	210	平成8年度
18	E区 k・l・12地点	150	平成元年度	90	I区 q・r・15・16地点	1315	平成9年度
19	F区 l・8・9地点	700	平成元年度	91	H区 q・r・18地点	80	平成8年度
20	B区 c・13地点	240	平成元年度	92	I区 q・16地点	850	平成9年度
21	B区 c・d・14・15地点	1600	平成元年度	93	F区 l・m・6・7地点	467	平成9年度
22	E区 j・12・13地点	791	平成2年度	94	F区 l・m・8・9地点	1576	平成9年度
23	A区 h・21・22地点	850	平成2年度	95	D区 o・p・17・18地点	300	平成9年度
24	E区 o・12・13地点	210	平成2年度	96	D区 o・p・18地点	215	平成9年度
25	B区 g・14地点	900	平成2年度	97	J区 p・q・7地点	327	平成9年度
26	D区 m・n・17・18地点	360	平成2年度	98	E区 p・15・16地点	207	平成9年度
27	E区 k・l・16・17地点	450	平成2年度	99	D区 p・16・17地点	313	平成9年度
28	J区 r・5地点	52.5	平成2年度	100	E区 j・13地点	543	平成9年度
29	B区 e ~ g・14地点	2800	平成3年度	101	F区 o・7地点	25	平成9年度
30	B区 e・f・13地点	2500	平成3年度	102	E区 o・14地点	200	平成9年度
31	J区 q・r・9・10地点	500	平成4年度	103	E区 n・o・13・14地点	270	平成9年度
32	F区 l・m・4・5地点	1400	平成4年度	104	I区 q・15・16地点	150	平成9年度
33	F区 j・6地点	24	平成4年度	105	F区 o・n・7地点	100	平成9年度
34	F区 l・m・8・9地点	1000	平成4年度	106	J区 r・q・9地点	120	平成10年度
35	A区 g・21地点	6	平成4年度	107	D区 n・23地点	305	平成10年度
36	E区 o・n・11地点	16	平成4年度	108	I区 r・15地点	771	平成10年度
37	J区 p・11~13地点	110	平成5年度	109	I区 q・15地点	183	平成10年度
38	F区 l・n・5・6地点	3196	平成5年度	110	I区 p・r・10・11地点	1434	平成10年度
39	H区 r・s・22・23地点	1200	平成5年度	111	E区 n・o・15地点	165	平成10年度
40	I区 p・q・13~15地点	246	平成5年度	112	E区 l・14・15地点	160.5	平成10年度
41	G区 o・p・4・5地点	81.5	平成5年度	113	H区 q・16・17地点	301	平成10年度
42	G区 n・3・4地点	48	平成5年度	114	E区 k ~ n・14地点	451	平成10年度
43	I区 p・11地点	70	平成5年度	115	F区 j ~ i・6~8地点	8740	平成10・11年度
44	G区 s・4地点	120	平成5年度	116	E区 o・15・16地点	246	平成10年度
45	H区 r・s・21地点	41	平成5年度	117	E区 o・14・15地点	120	平成10年度
46	B区 c・12・13地点	310	平成5年度	118	J区 s・7地点	149	平成10・11年度
47	H区 q・r・20・21地点	589	平成5年度	119	D区 o・16・17地点	150	平成11年度
48	E区 l ~ m・13地点	96	平成5年度	120	H区 q・r・16・17地点	1600	平成11年度
49	H区 q・18・19地点	350	平成6年度	121	G区 p・2・3地点	189	平成11年度
50	H区 q・r・21地点	481	平成6年度	122	E区 m・n・16・17地点	800	平成11年度
51	H区 q・18地点	936	平成6年度	123	B区 d・15・16地点	158	平成11年度
52	H区 q・17地点	1088	平成6年度	124	J区 r・s・8地点	360	平成11年度
53	H区 r・q・17地点	460	平成6年度	125	J区 q・8・9地点	550	平成12年度
54	D区 n・o・17地点	203	平成6年度	126	F区 j ~ i・6~10地点	1150	平成12年度
55	E区 o・11地点	110	平成6年度	127	I区 q ~ s・13・14地点	840	平成12年度
56	F区 o・p・6地点	298	平成6年度	128	J区 r・s・6・7・8地点	523	平成12年度
57	H区 r・21地点	16	平成6年度	129	H区 k・14地点	33	平成12年度
58	E区 m・n・15地点	256	平成7年度	130	G区 n・o・2・3地点	212	平成12年度
59	E区 m・16・17地点	236	平成7年度	131	D区 n・o・16・17地点	442	平成12年度
60	J区 p・8地点	46	平成7年度	132	J区 q・9地点	188	平成12・13年度
61	H区 p・19地点	247	平成7年度	133	I区 q・15・16地点	79	平成13年度
62	E区 l・15地点	234	平成7年度	134	H区 s・22地点	416	平成13年度
63	F区 n・o・9・10地点	742.5	平成7年度	135	J区 r・6・7地点	152	平成13年度
64	B区 f・g・15地点	120	平成7年度	136	H区 q・r・17地点	417	平成13年度
65	E区 p・16地点	93.3	平成7年度	137	H区 s・20・21地点	508	平成13年度
66	F区 n・o・9地点	1062	平成7年度	138	H区 r・s・19・20地点	1774	平成14年度
67	B区 e・15地点	251	平成7年度	139	F区 n・8・9地点	302	平成14年度
69	E区 p・16・17地点	405	平成7年度	140	J区 q・p・8・9地点	1136.3	平成14年度
70	E区 n・o・16・17地点	1655	平成7年度	141	D区 l・m・18地点	214	平成14年度
71	E区 j・k・12・13地点	1050	平成7年度	142	B区 f・11・12地点	100	平成14年度
72	F区 n・o・8	113.5	平成7年度	143	E区 m・15地点	176	平成15年度

t s r q p o n m l k j i h g f e d c b a



第6図 下部副都心エリアグリッド・商業地区位置図 (1/4,000)

第Ⅲ章 下郡遺跡群総論

第1節 縄文時代の様相

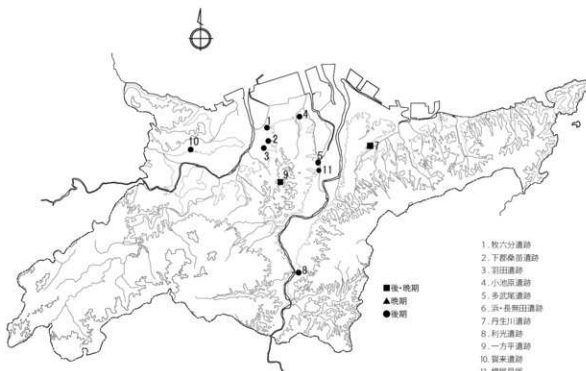
(1) はじめに

下郡遺跡群で検出される遺構、遺物は弥生時代、古代を中心とし、この二つの時期が質・量ともに群を抜いている。そうした状況の中でも微量ながら縄文時代の遺構、遺物が検出されている。遺構では、後期の貯蔵穴、晩期の包含層等のみであるが、遺物については後期以降のものが後世の遺構埋土等から出土している。本項では遺跡群内で出土している縄文土器の様相についてまとめる。

大分県中部、別府湾の南岸に展開する大分平野は大野川、大分川の二大河川によって形成された沖積地と河川堆積物によって形成された自然堤防が河川周辺に広く展開する。下郡遺跡群はこうした自然堤防上に立地しており、市内には同様の立地を示す遺跡が点在する。牧六分遺跡では縄文時代晩期後葉の刻目突帯文土器が出土し、本遺跡群に隣接する羽田遺跡では、後期中葉に比定される北久根山式土器等が出土している。

下郡遺跡群内では南北方向に延びる無数の旧河道やその支流の存在が確認されており、縄文時代後期から晩期の土器群の出土が確認されている。なかでも下郡遺跡群第25次調査では、弥生時代の旧河道の埋土から北久根山式土器を中心とする後期の土器が多数出土しており、近隣に当該期の生活空間の存在が想定される。

以下には下郡遺跡群内において縄文土器を確認した主な調査区について整理を行い、さらに遺跡群全体を通しての土器相について検討する。



第7図 大分市域主要縄文時代遺跡及び遺物出土分布図

第2表 大分市内主要縄文時代後期・晩期遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	立地	出土土器	時期
1	牧六分遺跡	大字下郡字有洞・六分	沖積平野自然堤防上	後期中頃和製深鉢 西平式	後期中頃 後期後半、後期末
2	下部桑苗遺跡	大字下部桑苗	沖積平野旧河道	西平式 晩期鉢	後期中葉 晩期
3	羽田遺跡	大字羽田	沖積平野微高地	北久船山式 晩期和製浅鉢・深鉢	後期中葉 晩期後半～終末
4	小池原貝塚	大字小池原字宮田	中位Ⅰ段丘端部	小池原下層式 小池原上層式	後期前半
5	多武尾遺跡	大字横尾字下横尾	中位Ⅱ段丘	蹄崎式	後期
6	浜・長無田遺跡	大字浜・太在	砂丘	割目突帯文	晩期後葉 後葉～後期末
7	丹生川遺跡	大字丹川字丹生	沖積平野低湿地	小池原上層式 下泉野式 割目突帯文	後期前半 晩期後半
8	利光遺跡	大字上戸次	低位Ⅱ段丘	西平式	後期後半
9	一方平遺跡	大字横尾字一方平	中位Ⅰ段丘	西平式 割目突帯文	後期 晩期終末
10	賀来遺跡	大字賀来	小扇状地	小池原上層式 西平式	後期前半～中葉
11	横尾貝塚	大字横尾	低位Ⅰ～Ⅱ段丘	福田KⅡ式 西和田式 轟B式・コウゴロ松式	早期後半～後期

(2) 縄文式土器出土調査区及び出土資料

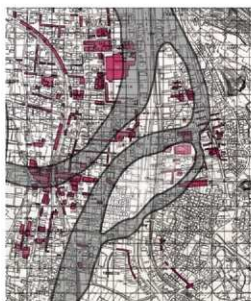
第5次調査 O05SX200 ではO05SE093 等と重複する位置に流路跡と考えられる溝状遺構を検出している。この流路埋土の最上部層に縄文土器を内包している。

第8次調査 総計26のトレンチのうち、第4・第5トレンチについては、遺構が欠失している部分と旧河道に起因する落ちが確認されている。調査区の東側には遺構が確認されていないが、泥炭層の分布が認められ、弥生時代中期を中心に出土した弥生土器に混在して縄文時代後期初頭の遺物が少量ながら出土している。

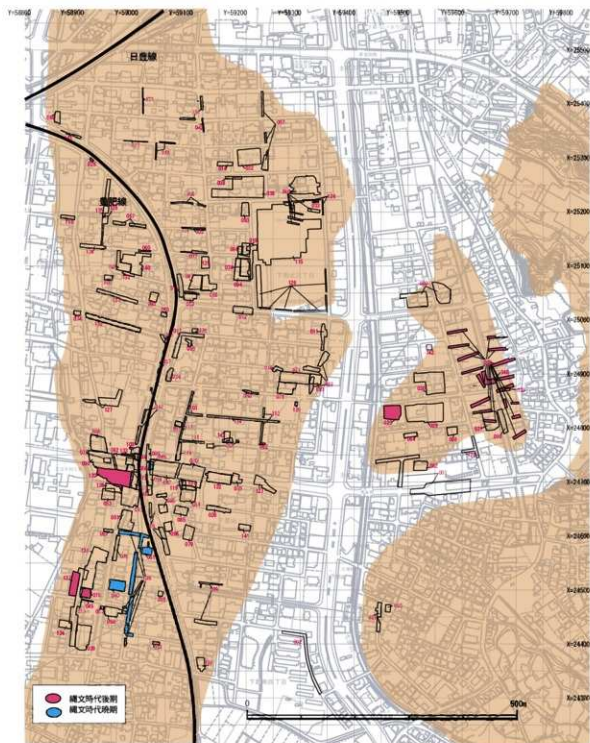
第25次調査 O25SD001 において弥生時代前期末前後の流路内堆積土層を確認している。前期末に編年される弥生土器を中心に出土が認められるが、これに縄文時代土器が混在状態で出土している。なお、流路跡の西側部分は調査区内外に延びており今回の調査結果をもって流路跡の幅を確定することができないが、本地点では最大幅15mを確認している。

第75次調査 O75SX017 からは縄文時代後期に比定される遺物群が出土している。これは調査所見により旧河道上部の帯状に形成された窪みに堆積した層より出土していることが判明している。

第120次調査 I20SX005 土坑から後期前半の遺物が出土している。他遺構からの混入によるものと推定されている。

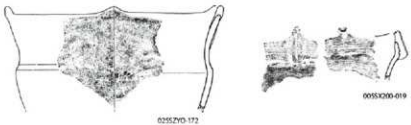


第8図 下部遺跡群周辺の旧河道状況



第9図 下部遺跡群縄文時代後期・晩期遺物出土調査区 (1/7,000)

第 137 次調査	縄文時代後期前葉のものから晩期のものが出土している点から、近隣地域に当該期の遺構が存在していることを示唆している。
高い居住性	下郡遺跡群で出土している縄文土器には縄文時代後期の中津式から晩期に比定される浦久保式まで、出土量に差異はあるものの、ほぼ途切れることなく連続しており、当該地域の居住性の高さを示している。
縄文時代後期が大半	出土土器には中津式、宿毛式、福田 K II 式、小池原上層式、鐘崎式、北久根山式、西平式、三万田式、浦久保式等が出土しており、出土量、種類ともに縄文時代後期のものが大半を占める。さらに、全体的な傾向として晩期土器は遺跡群の南北に展開する自然堤防の中でも大分川により近い西側の自然堤防上から検出されるケースが多く、こうした偏重の傾向は東西の自然堤防の形成時期に起因する可能性が指摘される。下記には、下郡遺跡群内から出土した主要縄文土器資料について説明を加える。
中津式	046SK005-003 は中津式土器深鉢口縁部片である。これは口縁上端部に刻目を施文し、破片下部には透かしが認められる。外器面にやや太めの沈線を 4 本配置している。
宿毛式	025SZYO-001 は宿毛式土器口縁部片。口唇部欠損。外傾する口縁部片の外面にはやや太いへう描き沈線が施され、方形区画文が認められる。
福田 K II 式	025SZYO-003 は福田 K II 式胴部片資料である。胴部はほぼ直立に立ち上がり、磨消縄文施文後、4 本単位の沈線が施されている。
小池原上層式	005SX200-033 は小池原上層式胴部片資料である。胴部は内湾気味に立ち上がったボウル型を呈する。沈線は先端 U 字形の棒状工具で施文したと考えられる。それらの線に囲まれた部分に縄文を充填されている。 025SZYO-034 は小池原上層式である。頸部がなく胴部から口縁部まで外反して延びている器形である。口唇内外端部に沈線の一端が見受けられ、口縁下部には二本の沈線間に磨消縄文が施されている。
鐘崎式	025SZYO-012 は鐘崎式土器口縁部片である。口縁部外面直下にコブ状の突起を持つ土器である。口縁部上面には 2 本の沈線をめぐらせている。 025SZYO-017 は鐘崎式土器胴部片である。頸部で外反し、胴部中位が張り出す器形である。胴部には磨消縄文帯に入組文を配置している。 025SZYO-021 は鐘崎式土器胴部片である。胴部外器面に入組文や渦巻文が認められる。胴部文様中の下位にあたる部分である。
北久根山式	025SZYO-172 は北久根山式口縁部片である。口縁部には山形状の突起があり、頸部からゆるやかに外反して口縁部まで立ち上がる器形である。
西平式	025SZYO-189 は西平式土器口縁部片である。口縁部を断面三角形に肥厚させている。口唇部には 3 本の沈線を配置している。 005SX200-005 は西平式土器深鉢である。体部にヨコ方向の沈線を施文し、沈線間に縄文を充填する。
三万田式	075SX017-005 は三万田式土器深鉢である。口縁部から胴上半部の資料。平縁口縁で、丸みを帯びた体部から上方へ長く外反している。口縁端部内面に 1 本の沈線を配置している。
浦久保式	005SX200-29 は浦久保式土器深鉢である。やや外反した口縁部は立ち上がっており、胴部はゆるやかに底部に向かって内反する。口縁部外面には 3 本の沈線を有す。

中津式	 0465K005-003
宿毛式	 025SZYO-001
福田 K II 式	 025SZYO-003
小池原上層式	 025SZYO-034 005SX200-033
鐘崎式	 025SZYO-012 025SZYO-0171 025SZYO-021 025SZYO-017
北久根山式	 025SZYO-172 005SX200-019
西平式	 025SZYO-189 005SX200-005 137502020-001
三万田式	 0755Z000-004 0755X017-005
浦久保式	 005SX200-019 005SX200-29

第 10 図 下郡遺跡群縄文時代後期・晩期遺物型式様相

○福田KⅡ式(後期前葉)



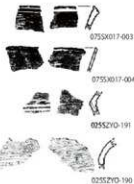
○小池原上層式(後期前葉)



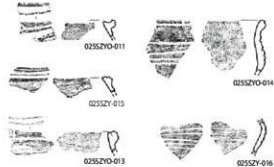
025SZYO-029



○西平式(後期中葉)



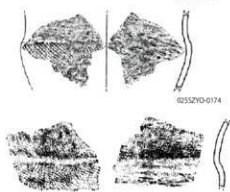
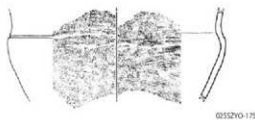
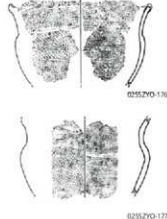
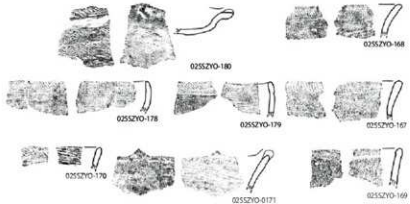
○種崎式(後期中葉)



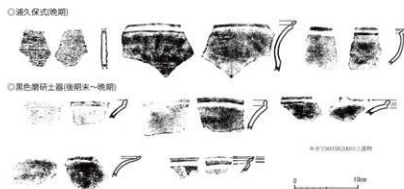
○三万田式(後期後葉)



○北久保山式(後期中葉)



第 11 図 下部遺跡群縄文時代後期・晩期出土遺物実測図① (1/6)



第12図 下郡道跡群縄文時代後期・晩期出土遺物実測図②(1/6)

参考文献

- 大分市教育委員会 2003『下郡横穴墓群』大分市大字下郡加納に所在する発掘調査報告書
- 大分市教育委員会 1993『羽田道跡』大分市営羽田住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 大分市教育委員会 1995『羽田道跡Ⅱ』大分市営羽田住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 大分県教育委員会 1989『下郡桑苗道跡』七歩川河川改修工事に伴う発掘調査報告書
- 大分市教育委員会 2005『玉沢地区条里跡第8次発掘調査報告』一病院建設に伴う発掘調査報告書一
- 大分市教育委員会 1991『下郡道跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書概報(2)
- 大分県教育委員会 2001『上野道跡群』大分上野丘高校地区大分上野丘高校管理棟増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 大分県教育委員会 2000『玉沢地区条里跡』 ガランジ地区茨川原近世墓 田仲地地区 一般国道442号(木の上工区)道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
- 大分市教育委員会 2002『下郡道跡群Ⅰ』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1
- 大分市教育委員会 2003『下郡道跡群Ⅱ』大分市立下郡小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 大分市教育委員会 2005『下郡道跡群Ⅲ』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2
- 大分市教育委員会 2006『下郡道跡群Ⅳ』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3
- 大分市教育委員会 2007『下郡道跡群Ⅴ』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4
- 大分市教育委員会 2008『下郡道跡群Ⅵ』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5
- 大分市教育委員会 2009『下郡道跡群Ⅶ』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6

第2節 弥生時代前期から中期の様相

(1) はじめに

弥生時代の遺構・遺物は地点により粗密があるものの、ほぼ調査対象地の全域において確認されている。弥生時代早期に比定される刻目突帯文土器も少数ながら出土するが、当該期の明確な遺構の検出例はない。明確に遺構が確認されるようになるのが、弥生時代前期中葉から後葉頃である。遺跡群の東側エリア（B区）で見られるものの、量はそれほど多くない。続く弥生時代前期末から中期初頭には遺構や遺物の量が増加し、東側エリア（B区）を中心に展開する。なかでも下郡桑苗遺跡^{註1}や、その周辺の旧河道に位置する第25次調査地点などからは多量の土器、木器、動物遺体などが出土している。出土状況から河道の上流、しかも至近な位置からの流入遺物であると判断され、下郡遺跡群の南側に当該期の集落が展開していたことが想定される。

弥生時代中期になると遺跡の拡大傾向はさらに増し、広範な分布状況を示すようになる。前代までは遺跡群の中央を南北に走る河道の東側エリアを中心に遺構が分布していたが、西側エリアにも遺構が構築されるようになる。さらに、弥生時代中期中頃から末の段階には、大分川が所在する遺跡西側に長大な溝状遺構が南北方向に掘削される。集落内部と想定される溝状遺構東側に展開する遺構の遺存状況は悪い。これは、後世（明治期）の水田耕地の整備に伴う削平によるものと考えられる。これによって遺構深度の浅い堅穴住居跡などの遺構は削平されたと想定され、一定程度の深さを有する貯蔵穴と想定される多くの土坑のみが遺存している。これらの土坑は各所で円を描くような分布を示す状況が確認される。土坑の集中域は東側の微高地上に5ヶ所、西側の微高地上に3ヶ所ほど認められ、集落域が確認できる。

ここでは特徴的な遺構と遺物について個別に検討する。

(2) 遺 構

堅穴住居跡

平面プラン

下郡遺跡群検出の弥生時代前期から中期段階の堅穴住居跡は極めて少ない。集成図（第15図）にあるように平面プランの検出例は円形を呈するものと、方形を呈するものがある。このうち方形の住居は中期に比定されるものの、時期が明確ではない。

分布状況

分布図（第14図）に示すように、堅穴住居跡は、弥生時代中期段階に下郡遺跡群西側に掘削された南北方向の溝状遺構と旧河道によって囲まれた内側部分の微高地上に分布する。

溝状遺構

一部溝状遺構の外側に位置する第127次調査区でも検出しているが、第127次調査区では弥生時代後期段階の住居跡を検出しており、集落の中心時期は、弥生時代後期であると考えられる。弥生時代前期から中期の堅穴住居跡の分布状況は、貯蔵穴と思われるものを含む土坑の分布状況と比べて、極めて少ない状況を示している。これは前述のとおり、後世（明治期）の水田耕地の整備に伴う削平

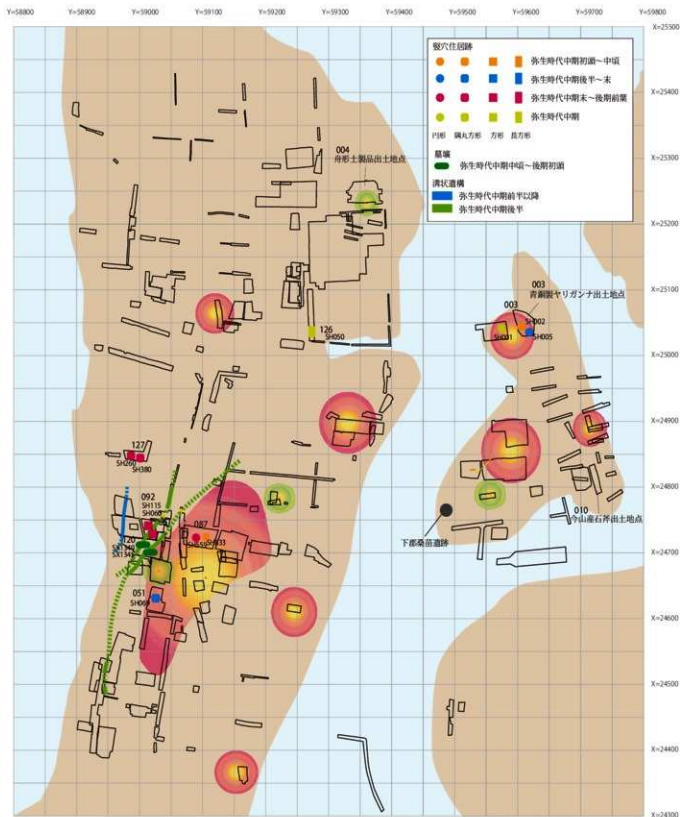
掘削深度が浅いを受けているとともに、堅穴住居跡の掘削深度が、比較的浅いことに起因しているものと考えられる。



第13図 守国遺跡弥生時代前期堅穴住居跡分布図

註1 大分県教育委員会 1989『下郡桑苗遺跡』七歩川河川改修工事に伴う発掘調査報告書

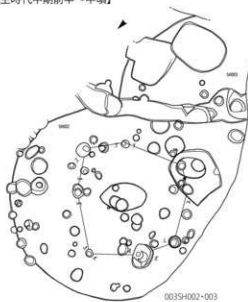
註2 大分市教育委員会 1979『守国遺跡』昭和50・51年度発掘調査概報



- 弥生時代前期末～中期初頭集落範囲
- 弥生時代中期集落範囲
- 概高地
- 田河堤

第 14 図 弥生時代前期～中期整穴住居跡・墓・溝状遺構時期別分布図 (1/6,000)

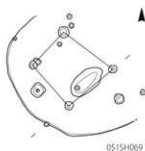
【弥生時代中期前半～中頃】



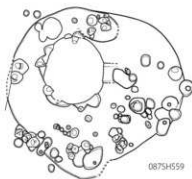
【弥生時代中期後半】



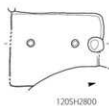
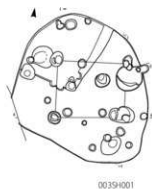
【弥生時代中期後半～末】



【弥生時代中期末～後期初頭】



【弥生時代中期】



第 15 図 弥生時代中期墾穴住居跡集成図 (1/160)

守岡遺跡 同時期の竪穴住居跡を検出した大分市内守岡遺跡³⁸²では、弥生時代中期の住居跡の深度が、後期の住居跡に比べ浅い状況が確認されている。守岡遺跡は、標高63mの独立丘陵上に位置する弥生時代前期末から古墳時代前期の遺跡である。守岡遺跡では多くの竪穴住居跡と貯蔵穴を検出した。住居跡は一部弥生時代中期のものを含み、ほとんどが弥生時代後期から古墳時代前期のものである（第13図）。

平面プランは円形と方形を呈するものがある。弥生時代中期の竪穴住居跡と、弥生時代後期の竪穴住居跡を比較すると、中期のほうが浅い状況が見られる。守岡遺跡は台地上に存在する遺跡であることから、削平の影響は少なく、竪穴住居跡が浅い状況は弥生時代中期の竪穴住居跡の特徴を示していると思定される。

低地に存在 下部遺跡群は、守岡遺跡と比較すると低地に所在する遺跡であり、守岡遺跡と比べて後世の削平を受けている調査地点が多い。そのためもとと掘削深度の浅い弥生時代中期の竪穴住居が削平の末、失われた可能性が高い。一定程度の深さを有する貯蔵穴と考えられる同時期の土坑が集中して検出されるものの、竪穴住居跡がほとんど検出されない状況は、上記の想定を裏付けていると考えられる。

近接して構築 さらに守岡遺跡では、竪穴住居跡の周辺に貯蔵穴と見られる土坑が分布している。同様に下部遺跡群でも竪穴住居跡と貯蔵穴は近接して構築されていると思われる、第3次調査のように土坑が集中して分布する調査区では、かつて竪穴住居が存在しており、集落を形成していた可能性を想定できる。

第3表 弥生時代中期竪穴住居跡一覧表

遺跡番号	検出番号	時期	平面形状	規模 (m)	主柱穴数	火処	壁溝	内部施設	掲載報告書
087SH833	—	弥生時代中期前期	円形	径6.5					下部遺 P242 第197図 (全体透視図)
003SH002	15	弥生時代中期前半～中葉	円形	径7.0 + a 壁高0.12					下部遺 P20 第14図
003SH014 (ST)	—	弥生時代中期前半～中葉	不明	不明 深さ0.18	不明	不明	不明		下部遺 P110 第135図
003SH005	15	弥生時代中期後半	円形か	径6.0 + a 壁高0.05	6 ?	竪穴跡			下部遺 P21 第15図
003SH004	15	—	不整形円形	5 + a 壁高0.15	4 (6 ?)	9跡か			下部遺 P21 第15図
051SH069	15	弥生時代中期後半～末期	円形基調の隅丸方形	6.0 × 3.0 + a	4			南側柱穴間に1.6 m × 0.8 mの長土坑	下部IV P42 第43図
092SH060	15	弥生時代中期(後半～後期前半)	方形	4.94 × 4.6 + a 壁高0.1	4	—	—		下部I P211 第237図
092SH155	15	弥生時代中期(後半～後期前半)		3.2 × 4.9 深さ0.15	2 ?	9跡なし		柱穴間に0.9 × 0.72 深さ0.18の土坑	下部I P213 第241図
127SH260	—	弥生時代中期末～後期前半	隅丸方形		2	—			年報12 P25
127SH380	—	弥生時代中期末～後期前半	隅丸方形		4	—			年報12 P25
087SH559	15	弥生時代中期末～後期前期	円形	径7 m		—		北東隅に青白色粘土塊あり用途は？	下部遺 P248 第212図
003SH001	15	弥生時代中期か？	不整形円形	長軸5.4 短軸4.2	4			入り口か？ (内部北西部分に深さ0.2 mの段差を有する平面面)	下部遺 P19 第13図
126SH50	15	弥生時代中期	長方形	4.5 × 3.5	4				下部II
120SH2800	15	弥生時代中期	長方形	3.8 × 3.12	2	—	—		下部VI P367 第341図

溝状遺構

2条の溝状遺構 下部遺跡群では、分布図（第17図）に示すように主に弥生時代中期後半を中心に掘削された2条の溝状遺構を検出している。埋没時期は弥生時代中期末から後期であるが、どちらも大分川の自然堤防上に南北方向に構築されている。調査区内において2条の溝を検出した第120次調査では、その延長部にあたる調査区で、第120次検出溝と接続すると想定される溝状遺構を検出している。2条の溝のうち、より東側に位置する溝状遺構は、接続すると考えられる調査区を結んでいくと、下部遺跡群の中央部分から南側にかけて延びている。120SD1100・73SD001・053SD001・013SD004・075SD003などが一連のものと思われる。さらにその最北端にあたる第103次調査で検出した103SD126では、橋脚跡と見られる柱穴跡が確認されている。西側に位置する溝状遺構は、120SD1200・092SD300・133SD005が一連のものと考えられ、さらに第109次調査・第40次調査でも延長部とみられる溝状遺構を確認している。

下部遺跡群では、遺跡群の中央部分に南北方向の旧河道が存在しており、土坑などの遺構の検出は旧河道と大分川に挟まれた微高地上に展開している。さらに微高地上に検出される遺構の密度は、溝状遺構の東側で密になっており、これらの溝状遺構が集落の西端を区切る目的で掘削されたと想定される。さらに、これらの溝状遺構の周囲に分岐する小河川や低湿地を組み合わせて独立した集落域を構成していたものと考えられる。

大分川方向に造られた溝状遺構は、最も広いもの（073SD001）で幅3.5m、最も深いもの（103SD126）で深さ1.0～1.5mを測り、断面形状は弥生時代後期段階に掘削される溝のようなV字形を示すものではなく、おおむね逆台形を呈している。第16図に、主な溝状遺構の土層断面を示している。

これらの溝状遺構は、接続すると南北長350+a m以上にわたって掘削されており、溝状遺構によって区画されるエリアには貯蔵穴と考えられる土坑を多数検出することができ、複数の集落単位が存在しているものと想定される。

西側に1条 また、弥生時代中期後半を中心とする2条の溝状遺構のほかに、さらに西側に1条の溝状遺構を検出している。090SD201であり、幅1.7～2.0mを測り、弥生時代中期前半以降と考えられ、古い様相を示している。第90次調査では、ほかに弥生時代中期に遡るような遺構はほとんどなく、この溝状遺構がより古い段階の集落の西端を区切る目的で掘削された可能性も想定できる。108SD315は、その延長と考えられる。第108次調査では弥生時代中期前半の土坑が検出されているが、わずかである。この古い様相を示す溝状遺構は、弥生時代中期後半に掘削される溝状遺構より規模が小さく、包摂される集落の規模も弥生時代中期前半の土坑の検出状況を見ると、小規模であったことが想定される。

【弥生時代中期前半以降】



108SD0315

【弥生時代中期頃～後半】



120SD1100

【弥生時代中期後半】



013SD004

【弥生時代中期後半～後期初頭】

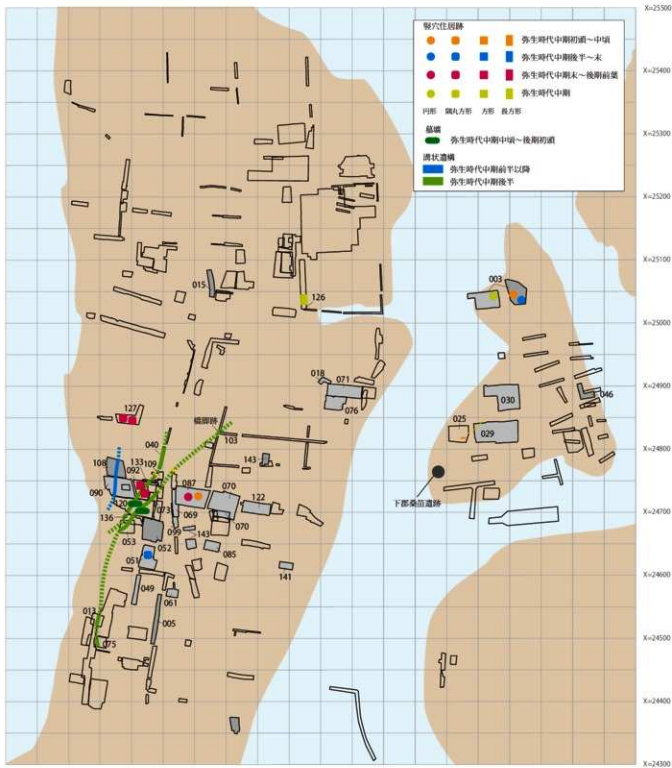


103SD126



第16図 弥生時代中期溝状遺構土層断面実測図（1/100）

Y=58800 Y=58900 Y=59000 Y=59100 Y=59200 Y=59300 Y=59400 Y=59500 Y=59600 Y=59700 Y=59800



第Ⅲ章
弥生時代前期

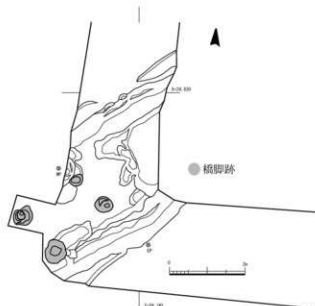
○ 弥生地
■ 旧河堤

■ 貯蔵穴検出調査地点 (弥生時代早期～弥生時代中期前半ごろまで)
■ 貯蔵穴検出調査地点 (弥生時代中期～未まで、弥生時代中期のみ含む)

第 17 図 弥生時代前期～中期溝状遺構及び貯蔵穴検出調査地点 (1/6,000)

橋脚跡

103SD126 の底面で橋脚跡と思われる柱穴が確認されている（第 18 図）。103SD126 は、堆積土層中に複数回に及ぶ掘り返しが認められており、時期としては出土土器の様相から弥生時代中期Ⅳ期から弥生時代後期Ⅲ期（中葉）までの時間幅が想定されている。溝の方向性と地形を照合すると、第 103 次調査で検出した溝は、下部遺跡群内の西側に南北に展開し、2ヶ所の最高位面を形成する微高地の境界部分を横断している状況を看取することができる。つまり 103SD126 は南北の微高地の幅が狭くなった位置を分断するような位置に掘削されているのである。こうした地点に橋が存在することは極めて示唆的であり、地形に沿って南北に分かれていたと考えられるそれぞれの集落の出入口となる位置と考えられる。



第 18 図 103SD126 遺構実測図（1/100）

第 4 表 弥生時代前期～中期溝状遺構一覧表

遺構番号	時期	断面形状	規模			方向	掲載報告書
			長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)		
025SD010	弥生時代前期末～中期前期前後	V 字～U 字	検出長 12	1.1	0.6	南東～西	下部Ⅲ P134 第 106 図
090SD201	弥生時代中期前半以降	逆台形	検出長 31	1.7～2.0	0.65～1.6	南北	下部Ⅰ P73 第 47・48 図
108SD315	16 弥生時代中期前半～	逆台形		2.0～2.7	0.65	南北	下部Ⅴ P230 第 234 図
053SD001	弥生時代中期（中頃～後半）	線形	検出長 24	検出幅 2.4～5.0	検出深 1.0	北東～南西	下部Ⅳ P92 第 124 図
073SD001	弥生時代中期中頃～後半（機能停止段階）	逆台形		検出幅 3.5	1.1	北東～南西	年報 7 P33
075SD003	弥生時代中期中頃～後半（埋没年代）	凹レンズ状	—	検出 2.1	0.5	北西～南東	下部Ⅳ P188 第 287 図
133SD080	弥生時代中期中葉～後葉	逆台形		2.7	0.7	N-35°・E	年報 13 P14
133SD005	弥生時代中期中葉～後葉	逆台形		3.5	1.5	南北	年報 13 P21
136SD015	弥生時代中期中葉～後葉	逆台形		3	0.9	南北	年報 13 P21
013SD004	16 弥生時代中期後半	U 字形	17	2.1	0.9	南北	下部Ⅲ P160 第 195 図
120SD1200	16 弥生時代中期後半	逆台形	検出長 8.0	検出幅 2.8	0.9	南北	下部Ⅳ P236 第 329 図
040SD001 (1 トレ)	弥生時代中期後半	a…U 字形 b…逆台形	検出長 33.6	検出幅 1.2～1.85	a…0.9 b…0.63	N-10°・E	下部Ⅴ P87 第 82～84 図
120SD1100	16 弥生時代中期後半～末	逆台形		検出 4.5	1.5	北西～南東	下部Ⅳ P223 第 316 図
092SD300	弥生時代中期後半～末	逆台形	検出長 32	2.7	0.70	北東～南西	下部Ⅰ P184 第 193 図
103SD126	16 弥生時代中期後半～後期初頃	逆台形		3.3	1.0～1.5	南西～北東	下部Ⅴ P233 第 215 図
029SD201	弥生時代中期	鈍い V 字～線形	8.0	0.5	0.2	N-40°・E	下部Ⅴ P252 第 305 図
109SD145	弥生時代中期	逆台形	—	検出幅 2.4	0.7	N-35°・E	年報 10 P27
098 第 1 トレンチ	弥生時代中期					南西～北東	下部Ⅲ P171 第 116 図 （全体遺構図）

土 坑

貯蔵穴

下部遺跡群では、弥生時代中期を中心に多くの土坑を検出している。弥生時代早期・前期の土坑も散見されるものの、中心となる時期は弥生時代中期中頃から後半である。この時期は前述の通り、大分川に沿って存在する自然堤防上に長大な溝状遺構が2条掘削される時期である。土坑の分布はこの溝状遺構の東側を中心とした自然堤防上の微高地と、旧河道を挟んだ東側の微高地上に集中している。

第3次調査区

具体的な事例として下部遺跡群内で数多くの土坑を検出した第3次調査区（下部報告書Ⅶ）の様相を記す。検出した土坑総計149基（+α）のうち、円形もしくは、楕円形プランのものが8割を超えている。断面形状がフラスコ状、袋状のものの割合は少ない。断面形状はほとんどが浅い逆台形状や方形、皿状を呈しており、一定の割合で中央に柱穴もしくは皿状のくぼみを持つ土坑が存在する。

土坑の平均深さは、およそ0.3mで、最も浅いもので0.15～0.1mである。しかし、最も深いもので0.72mを測る土坑の例もあり、大半が後世の削平を受けているものと見られる。土坑を検出したその他の調査回数でも、同様の様相を示していると考えられる。下部遺跡群内で検出した土坑のうち、比較的遺存がよく、時期比定の可能な遺構について抽出し集めた（第23図～31図）。分布図（第17図）には検出した調査地点を時期別に示した。

土坑の分類

第3次調査区の例に見られるように、下部遺跡群では、平面形が円形・楕円形・方形・長方形を呈する土坑や長土坑状のものを検出した。検出された土坑の断面形状の多くは方形・皿状・逆台形を呈しており、断面形状が袋状を呈する土坑をわずかが検出している。

また、土坑の床面中央部に皿状もしくは柱穴状のくぼみを有するものや、床面に周溝をもつものが存在する。

これらの施設の役割については、貯蔵穴を覆屋で覆う際の柱の支えや、排水のためなどが考えられるが、前者の場合実際に証拠となる木片などの発見には至っていない。

また、ドーナツ状に中央部分を掘り残す例（046SK004）があり、排水のための施設とも考えられる。このように各調査区で検出した土坑（SX）を前述の形態的特徴をもとに、出土遺物等で時期の比定が可能なものに限って分類した。

平面形態

床面形態

円形（楕円形も含む）・・・A類

床面に施設があるもの・・・1類

方形（長方形も含む）・・・B類

（おもに床面中央部に皿状もしくは柱穴状のくぼみを有する）

長土坑・・・C類

（床面に周溝をもつものも含む）

不定形・・・D類

フラットで施設がないもの・・・2類

平面形態で分類すると、A類が8割、ついでB類が1割程度存在している。床面形態で分類すると、1類は、全体の3割程度、2類が7割程度である。

これらの多くは、後述する類例から貯蔵穴と考えられるが、用途不明の長土坑状を呈するC類も存在する。

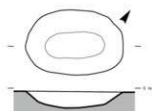
平面形と断面形状との関係

平面形態と床面形態との関連については、1類はA類及びB類の平面形態を呈する土坑に存在する。なかでも円形の土坑につくられる割合が最も多い。平面形状と、床面形態の関係は、円形土坑の割合が一番多いものの、それ以外の平面形状を呈するものの中にも、一定程度の割合で1類が存在するため、明確な関係性が認められるものではない。

時期差

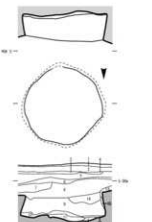
時期差について言えば、弥生時代中期中頃を中心とする時期に1類の出現は少ないものの、形態と時期についての明確な関係は認められない。

特徴的な土坑 特徴的な土坑としては、051SK005（第19図）が挙げられる。弥生時代中期の土坑で、明確な時期比定はできないものの、平面形状は楕円形プランを呈し、断面形状は皿状を呈している。規模は2.0m×1.3mで深さ0.17mを測り、床面は皿状に窪んでおり、A・2類にあたる。土坑内からは、炭化米と豆類を多量に内包した甕形土器が出土しており、貯蔵穴と推定される。



第19図 051SK005 平面・断面
実測図 (1/80)

プラスコ状の断面 同じく、時期を特定できないもの、071SK221（第20図）のようにプラスコ状の断面形状を呈す土坑を、わずかながら検出している。このような土坑は、他遺跡に類例が多く貯蔵穴と考えられる。しかし、下部遺跡群での検出数は、後述する市内遺跡（東田室遺跡・米竹遺跡など）^(註3)と比較するとごくわずかである。このことは、絶対数が少ない可能性を示している。市内遺跡と下部遺跡群検出の土坑の深さは1m未満と共通しているものの、下部遺跡群では上記のような土坑をごくわずかしか検出していないことが理由として挙げられる。このように検出数の差異は、貯蔵穴の断面形状における地域的な特徴を示していると考えられる。しかし、前にも述べたとおり後世の削平により、遺構機能時の断面形状が失われた結果である可能性も否定できない。



第20図 071SK221 平面・断面
実測図 (1/80)

東田室遺跡 市内遺跡の例を挙げると、東田室遺跡からは、弥生時代前期の貯蔵穴が検出されている。遺構の形態には袋状のもの、断面が方形プランのもの、平面形が長方形を呈するものなどがあり、深さは1m未満のものがほとんどである。米竹遺跡からは、弥生時代中期の貯蔵穴が検出されており、断面形状がプラスコ状もしくは袋状を呈するものが多い。両者とも深さは1m未満のものがほとんどである。

台ノ原遺跡 大分県北部地方の代表的な例と比較すると、宇佐市台ノ原遺跡では、いずれも食物あるいは凹石・石皿といった道具の貯蔵・収納の用に供されたばね同時期の所産と考えられる遺構が検出されている。円形の袋状貯蔵穴のほか、長辺150cm前後、短辺100cm前後の長方形貯蔵穴、小形の円形貯蔵穴、断面皿状となる楕円形貯蔵穴が検出されている。このうち、長方形貯蔵穴は、円形袋状貯蔵穴より浅く、一時的な保管場所であり、また地中深く掘り込んだ後者は、長期の貯蔵を目的としたものであると想定されている。後者を台ノ原遺跡では、以下のように分類している^(註4)。



第21図 東田室遺跡貯蔵穴模式図
(25SK030) (1/80)

円形の袋状貯蔵穴の分類

A：底径100～130cm、深さ30～50cmの小規模なもの。壁面の傾斜度はあまり大きくなく垂直に近い。床面は平坦。

B：底径150～210cmを測る大形のもので入口部が小さくすばま

註3 大分市教育委員会 2005『第9章まとめ』『東田室遺跡2』都市計画道路室町春日線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分市教育委員会 2009『米竹遺跡 第3次調査』一集合住宅建設に伴う発掘調査報告書一

註4 真野和夫・後藤宗俊 1975「Ⅱ B地区の調査 小結」『台ノ原遺跡』大分県文化財調査報告 第33輯 大分県教育委員会

り、したがって壁面傾斜の大きい堅穴である。比較的現状が遺存しているとみられる1号堅穴では、底径180cm、深さ90cm、入口部分の径70cm。

Bは床面形態に次の3つがある。

- 1：床面平坦でなんらの施設ももたないもの
 - 2：床面に周溝をもつもの
 - 3：床面中央部に径30cm、深さ15cm前後のくぼみ穴を有するもの
- (2・3の床面施設は水抜き等の目的であろう。敷草を行ったとおもわれる土坑もあり)

下部遺跡群ではそもそも断面形状が袋状を呈するものが少ないため、B類に類する土坑は検出されていない。規模としてはA類に類する小規模な土坑がほとんどである。床面形態では、下部遺跡群で検出した1類は、この-2及び-3類に相当すると思われる。

遺構の性格

下部遺跡群内で検出された土坑の多くは、貯蔵穴と推定される類別との共通点も見出されるが、遺物の出土が乏しく積極的に判断する材料に欠ける。ただ、円形を呈してさらに床面中央に掘り込み等を有するというA-I類など特徴が共通する遺構については、同じ目的で構築された可能性が高い。さらに台ノ原遺跡の想定に従えば、貯蔵穴とはいえ、一時的な保管場所であり長期的貯蔵を目的としたものではないと考えられる。

サークル分布貯蔵穴群

これらの貯蔵穴と考えられる土坑について、下部遺跡群内の複数の調査区で、特徴的な分布状況を示す例がある。弥生時代中期後半を中心とする時期に、貯蔵穴が6～8基のグループを形成し、径7～8mの円弧状の分布を示す例があり、サークル分布貯蔵穴群として報告したものである^(註5)。第3次調査、第46次調査、第76次調査、第51次調査、第79次調査などの地点で確認されている。

下部遺跡群第79次調査(第22図)の例では、弥生時代中期の土坑が多数を占めている。土坑埋土には暗黒茶褐色土と黄茶褐色ブロック土の混土層が充填されており、人為的な埋め戻しの結果と考えられる。さらに径8m程度の円を描くように分布しており、この円周上で貯蔵穴の造り替えが想定できるような様相が認められる。埋め戻しはこの造り替えに伴って行われたものである可能性がある。造り替えに伴う土坑の配置は、なんらかの基準に基づいているものと考えられるが、その基準については明らかになっていない。また、居住域を考える上で住居跡との関連性が注目されるが、遺構遺存率が悪く、この時期の住居跡の検出状況が僅かであるため、検証するにはいたっていない。

さらに、このようなサークル状の分布を示さない第87次調査区の例などもあり、その差異の生じる要因の解明についても、今後の課題である。

このように弥生時代前期から中期においては、貯蔵穴と考えられる土坑が数多く存在し、サークル状の分布を示す特徴が認められる。形態における特徴としては、平面プランが円形を呈し、床面中央に浅い掘りこみを有する土坑が多く存在し、他遺跡に見られるような袋状の断面形状を示す貯蔵穴があまりみられないといった点が挙げられる。また、これらの貯蔵穴と考えられる遺構は弥生時代後期以降になっても一部で造り続けられるといった特徴がある。

註5 大分市教育委員会 2007「第9章 下部遺跡群第46次調査(4)小結-弥生時代貯蔵穴「サークル分布貯蔵穴群」について」
『下部遺跡群Ⅴ』-大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4-



第 22 図 下部遺跡群第 79 次調査サークル分布貯蔵穴群配置図 (1/200)

【弥生時代早期～前期前半】

[A-1 類]

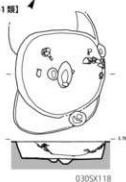


[A-2 類]

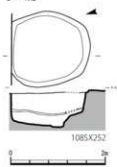


【弥生時代中期前半】

[A-1 類]



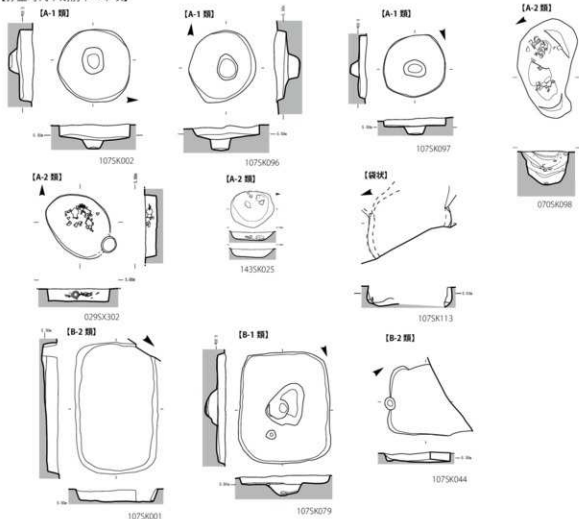
[A-1 類]



第 23 図 弥生時代前期～中期土坑集成図① (1/80)

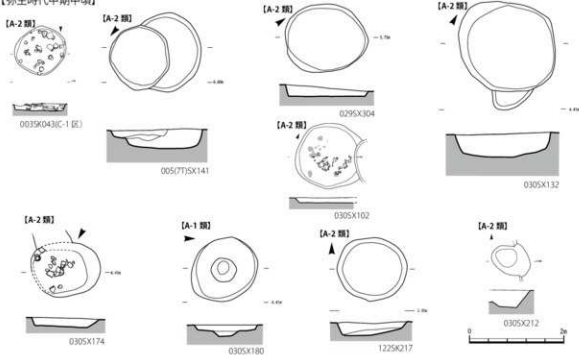
第 24 図 弥生時代前期～中期土坑集成図② (1/80)

【弥生時代中期前半～中頃】

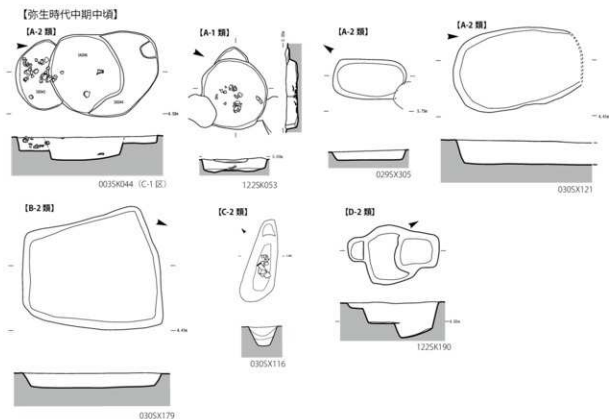


第 25 図 弥生時代前期～中期土坑集成図③ (1/80)

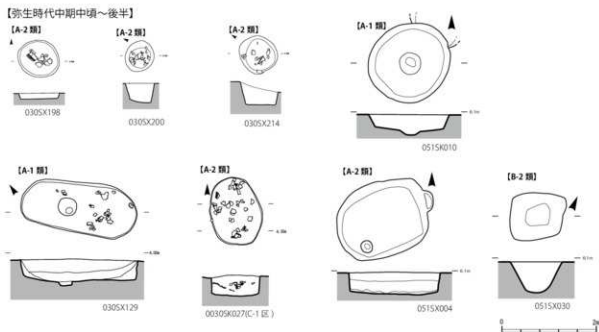
【弥生時代中期中頃】



第 26 図 弥生時代前期～中期土坑集成図④ (1/80)

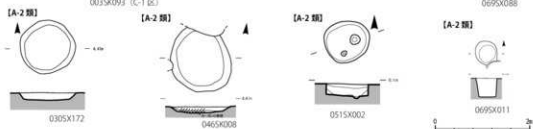
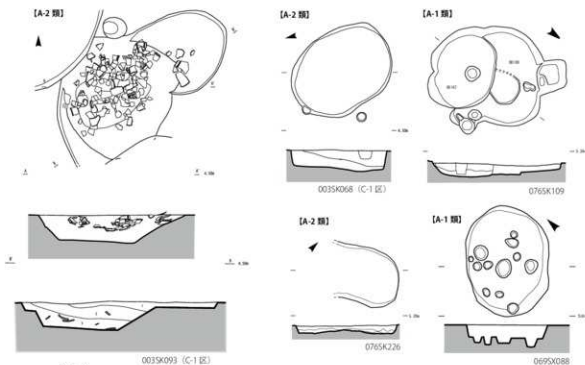
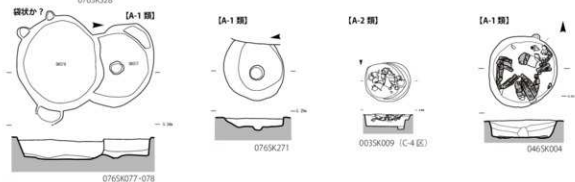
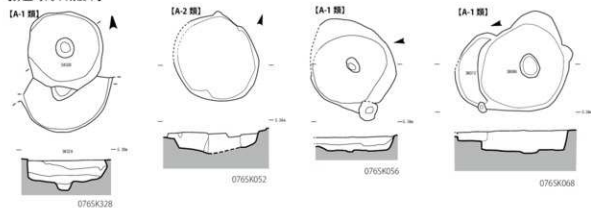


第 27 図 弥生時代前期～中期中土坑集成図⑤ (1/80)



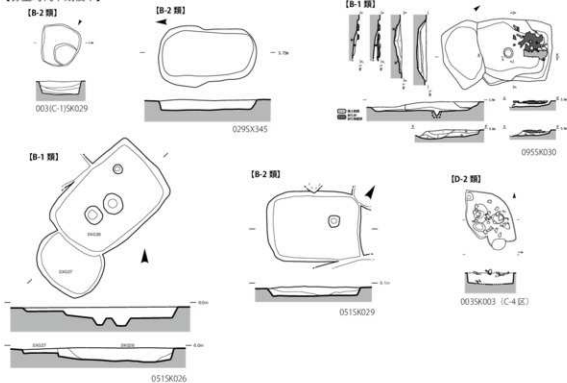
第 28 図 弥生時代前期～中期中土坑集成図⑥ (1/80)

【弥生時代中期後半】



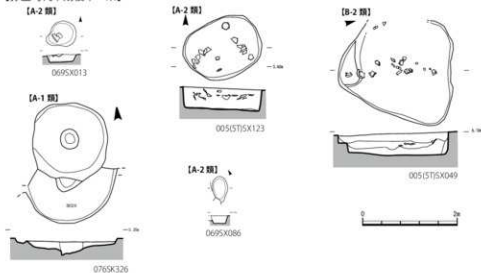
第29図 弥生時代前期～中期土坑集成図⑦ (1/80)

【弥生时代中期後半】



第 30 图 弥生时代前期～中期土坑集成图⑧ (1/80)

【弥生时代中期後半～末】



第 31 图 弥生时代前期～中期土坑集成图⑨ (1/80)

第5表 弥生時代前期～中期土坑遺構一覧表①

遺構番号	陣岡番号	時期	平面形状	断面形状	施設 (m)	規模		堀削報告書
						大きさ (m)	深度 (m)	
052SX100	23	弥生時代早期 ～前期	円形	逆台形	中央円形掘り込み 径 1.0、深さ 0.3	径 2.6	0.5	下部V P83 第 112 図
004SX011	—	弥生時代前期	大型の隅丸長方形	?		2.0 × 1.6		下部V P54 第 56 図 (全体遺構図)
143SX020	23	弥生時代前期 前期～中期	円形	皿状		1.1 × 0.94	0.3	下部V P339 第 337 図
003SX026	—	弥生時代中期 前半	長土坑	長方形		長さ 6 幅 1.0	0.5	下部V P41 第 44 図
030SX118	24	弥生時代中期 前半	円形	方形	中央柱穴 深さ 0.1	径 1.85	0.38	下部V P287 第 348 図
046SX002	—	弥生時代中期 前半	円形	?	中央円形ピット 径 0.3 深さ 0.2	径 1.82	0.2	下部V P97 第 95 図 (全体遺構図)
005SX019 (4T)	—	弥生時代中期 前半～中頃	楕円形か	逆台形		長軸 2.05	0.65	下部V P95 第 114 図
029SX302	25	弥生時代中期 前半～中頃	円形	方形		1.48 × 1.18	0.25	下部V P262 第 316 図
070SX098	25	弥生時代中期 前半～中頃	楕円形	U 字		2.12 × 0.88	0.7	年報 7 P24
107SX001	25	弥生時代中期 前半～中頃	長方形プラン	逆台形		2.3 × 1.7	0.2	下部V P247 第 229 図
107SX002	25	弥生時代中期 前半～中頃	円形プラン	方形	中央柱穴 0.55 × 0.45 × 0.2	1.6 × 1.5	0.3	下部V P248 第 232 図
107SX044	25	弥生時代中期 前半～中頃	長方形プラン	逆台形		1.2 + a × 1.4	0.2	下部V P247 第 231 図
107SX070	25	弥生時代中期 前半～中頃	長方形プラン	逆台形	中央柱穴 1.0 × 0.7 × 0.28	2.4 × 1.9	0.18	下部V P247 第 230 図
107SX096	25	弥生時代中期 前半～中頃	円形プラン	逆台形	0.55 × 0.45 × 0.2 中央柱穴	1.6 × 1.4	0.25	下部V P248 第 233 図
107SX097	25	弥生時代中期 前半～中頃	円形プラン	方形	中央柱穴 0.5 × 0.35 × 0.15	0.8 × 0.8	0.15	下部V P248 第 235 図
107SX113	25	弥生時代中期 前半～中頃	円形プラン	袋状		—	—	下部V P248 第 234 図
108SX252	24	弥生時代中期 前半以降	やや楕円形	方形	フラット 中央浅い窪み	2.1 × 2.3 + a	0.85	下部V P267 第 287 図
141SX002	—	弥生時代中期 前半～後半	隅丸長方形	逆台形		2.0 × 1.3	0.3	下部V P307 第 285 図
141SX003	—	弥生時代中期 前半～後半	円形	逆台形		径 1.0	0.2	下部V P308 第 287 図
143SX025	25	弥生時代中期 前期～中期	円形	皿状		0.9 × 0.77	0.25	下部V P340 第 339 図
141SX159	—	弥生時代中期 前半～後半	不整楕円形	逆台形		南北軸 1.5	0.2	下部V P309 第 290 図
141SX017	—	弥生時代中期 前半～後半	不整楕円形	逆台形		1.4 × 0.8	0.4	下部V P312 第 299 図
141SX113	—	弥生時代中期 前半～後半	楕円形	U 字		0.55 × 0.35	0.4	下部V P317 第 313 図
141SX133	—	弥生時代中期 前半～後半	楕円形	逆台形		1.3 × 0.9	0.3	下部V P318 第 315 図
141SX140	—	弥生時代中期 前半～後半	長土坑	U 字		長さ 3.3 幅 0.8	0.6	下部V P320 第 317 図
141SX151	—	弥生時代中期 前半～後半	円形	緩い U 字		径 0.45	0.25	下部V P321 第 320 図
003SX043	26	弥生時代中期 中頃	円形	逆台形		径 2.1	0.3	下部V P29 第 26 図
003SX045	27	弥生時代中期 中頃	楕円形か	方形か		長軸 1.5	0.28	下部V P31 第 28 図
005SX141 (7T)	26	弥生時代中期 中頃前後	円形	逆台形		径 1.68	0.43	下部V P126 第 160 図
029SX304	26	弥生時代中期 中頃前後	円形	逆台形		径 1.6	0.1～ 0.24	下部V P262 第 317 図
029SX305	27	弥生時代中期 中頃前後	楕円形プラン	逆台形		1.52 × 0.8	0.2	下部V P263 第 318 図
029SX318	—	弥生時代中期 中頃前後	不定形	方形?		0.9 × 0.67 + a	0.2	下部V P264 第 322 図
030SX100	—	弥生時代中期 中頃前後	不整な円形	皿状		径 1.2 + a	0.28	下部V P282 第 341 図

第6表 弥生時代前期～中期土遺構一覧表②

遺構番号	探検番号	時期	平面形状	断面形状	施設 (m)	規模		掲載報告書
						大きさ (m)	深度 (m)	
030SX102	26	弥生時代中期 中頃前後	円形	逆台形か		径 1.4	0.1	下部Ⅲ P283 第 343 図
030SX116	27	弥生時代中期 中頃	長土坑	階梯状		1.8 × 0.65	0.4	下部Ⅲ P285 第 346 図
030SX121	27	弥生時代中期 中頃	楕円形か	逆台形		1.7 × 2.8	0.5	下部Ⅲ P288 第 349 図
030SX132	26	弥生時代中期 中頃前後	円形	凹レンズ状		径 2.0	0.5	下部Ⅲ P290 第 354 図
030SX174	26	弥生時代中期 中頃	円形	逆台形		径 1.46	0.18	下部Ⅲ P292 第 357 図
030SX179	27	弥生時代中期 中頃前後	方形	逆台形		2.9 × 2.5	0.3	下部Ⅲ P293 第 358 図
030SX180	26	弥生時代中期 中頃前後	円形	逆台形	中央ビット 径 0.55 深さ 0.1	径 1.5	0.1	下部Ⅲ P294 第 359 図
030SX212	26	弥生時代中期 中頃	不整形円形	逆台形		0.84 × 0.6	0.37	下部Ⅲ P297 第 365 図
085SK072	—	弥生時代中期 中頃	不整形円形		直線中央にセンター ビット	径 3.0		年報 8 P19
087SX106	—	弥生時代中期 中頃	圓丸方形	竈状	中央ビット	2.3 × 1.4	0.25	下部Ⅲ P250 第 216 図
122SK021	—	弥生時代中期 中頃	円形	?		0.8 × 0.5	0.2	下部Ⅲ P419 第 373 図 (全体遺構図)
122SK053	27	弥生時代中期 中頃	楕円形	逆台形		1.5 × 1.4	0.25	下部Ⅲ P426 第 387 図
122SK190	27	弥生時代中期 中頃	不整形方形	階段状		1.9 × 1.2	0.7	下部Ⅲ P426 第 389 図
122SK217	26	弥生時代中期 中頃	円形	竈状		1.5 × 1.3	0.25	下部Ⅲ P426 第 388 図
003SK027	28	弥生時代中期 中頃～後半	楕円形	方形		1.43 × 1.1	0.43	下部Ⅲ P26 第 21 図
030SX129	28	弥生時代中期 中頃～後半	楕円 (II a 型)	方形	中央ビット 径 0.35 深さ 0.1	2.4 × 1.05	0.48	下部Ⅲ P289 第 351 図
030SX198	28	弥生時代中期 中頃～後半	円形 (I b 型)	逆台形		径 0.8	0.14	下部Ⅲ P294 第 360 図
030SX200	28	弥生時代中期 中頃～後半	円形 (I b 型)	逆台形		径 0.68	0.4	下部Ⅲ P296 第 362 図
030SX214	28	弥生時代中期 中頃～後半	円形 (I b 型)	逆台形		径 0.8	0.38	下部Ⅲ P298 第 368 図
051SK010	28	弥生時代中期 中頃～後半	円形プラン	逆台形	中央部み 径 0.45、深さ 0.05	径 1.7	0.3	下部Ⅲ P44 第 47 図
051SX004	28	弥生時代中期 中頃～後半	楕円形プラン	方形		2.0 × 1.6	0.47	下部Ⅲ P53 第 60 図
051SX030	28	弥生時代中期 中頃～後半	方形	階梯状		1.1 × 1.0	0.65	下部Ⅲ P56 第 72 図
087SX429	—	弥生時代中期 中頃から後半	不整形楕円形	方形		長軸 2.0 + a	0.2	下部Ⅲ P252 第 221 図
116SX091	—	弥生時代中期 中頃～後半	円形か	竈状		径 (0.8)	0.5	下部Ⅲ P322 第 331 図
003SK003	30	弥生時代中期 後半	不定形	方形		2.9 × 1.8	0.48	下部Ⅲ P38 第 38 図
003SK009	29	弥生時代中期 後半	楕円形プラン	方形		0.98 × 0.82	0.25	下部Ⅲ P38 第 39 図
003SK029	30	弥生時代中期 後半前後	圓丸方形	逆台形		1.8 × 1.65	0.5	下部Ⅲ P28 第 24 図
003SK068	29	弥生時代中期 後半	楕円形	方形		2.25 × 1.68	0.38	下部Ⅲ P32 第 30 図
003SK093	29	弥生時代中期 後半	不整形円形か	逆台形		径 (2.6)	0.6	下部Ⅲ P35 第 33 図
003SK124	—	弥生時代中期 後半	楕円形か	方形		2.7 × 1.9	—	下部Ⅲ P42 第 45 図
029SX345	30	弥生時代中期 後半	圓丸長方形 (II b 型)	逆台形		2.04 × 1.2	0.2	下部Ⅲ P267 第 326 図
030SX172	29	弥生時代中期 後半	円形 (I b 型)	逆台形		径 1.15	0.14	下部Ⅲ P292 第 356 図
046SK003	—	弥生時代中期 後半前後	円形	?	中央長径 0.9 m 深さ 0.3 m の楕円形ビット	径 2.0	0.22	下部Ⅲ P97 第 95 図 (全体遺構図)

第7表 弥生時代前期～中期土坑遺構一覧表③

遺構番号	時代 番号	時期	平面形状	断面形状	施設 (m)	規模		堀削報告書
						大きさ (m)	深度 (m)	
046SK004	29	弥生時代中期 後半	楕円形	逆台形	ドーナツ状の窪み	1.6 × 1.43	0.82	下部V P100 第99図
046SK007	—	弥生時代中期 後半前後	円形	?		径0.95	0.2	下部V P97 第95図
046SK008	29	弥生時代中期 後半	円形?	皿状		1.3 程度	0.12	下部V P104 第105図
051SK026	30	弥生時代中期 後半	長方形プラン	逆台形	中央に窪み 径0.4 深さ0.15	2.4 × 1.6	0.23	下部V P50 第52図
051SK029	30	弥生時代中期 後半	長方形プラン	逆台形		1.9 × 1.5	0.2	下部V P51 第55図
051SK002	29	弥生時代中期 後半	円形プラン	方形		0.95 × 0.85	0.24	下部V P52 第57図
069SX011	29	弥生時代中期 後半	不定円形	方形		径0.5	0.4	下部V P169 第242図
069SX088	29	弥生時代中期 後半	楕円形	逆台形	底面複数の柱穴 (径0.1 ～0.3、深さ0.3 程度)	2.35 × 1.7	0.3	下部V P175 第264図
076SK052	29	弥生時代中期 後半前後	円形	皿状		径1.9	0.35	下部V P143 第120図
076SK056	29	弥生時代中期 後半	円形	逆台形	中央窪み径0.27 深さ0.1	径1.9	0.3	下部V P145 第124図
076SK068	29	弥生時代中期 後半	円形	逆台形	中央窪み径0.47 深さ0.1	径1.8	0.45	下部V P146 第126図
076SK072	—	弥生時代中期 後半頃	楕円形	方形?		1.6 × 0.8	0.18	下部V P146 第126図
076SK077	29	弥生時代中期 後半前後	円形	方形	中央窪み 径0.25 深さ0.08	径1.6	0.3	下部V P147 第129図
076SK078	29	弥生時代中期 後半	円形	袋状か		径1.9	0.4	下部V P147 第129図
076SK109	29	弥生時代中期 後半	楕円か	方形か	中央窪み 径0.6 + a	長軸2.1	0.1	下部V P149 第132図
076SK167	—	弥生時代中期 後半	楕円形	逆台形か	中央やや北寄り窪み 径0.2 深さ0.3	1.7 × 1.4	0.3	下部V P149 第132図
076SK226	29	弥生時代中期 後半前後	楕円か	逆台形		1.2 × 1.5 + a	0.18	下部V P152 第137図
076SK271	29	弥生時代中期 後半	円形	逆台形	中央窪み 径0.28 深さ0.05	径1.25	0.18	下部V P153 第138図
076SK328	29	弥生時代中期 後半前後	円形	袋状	中央に径0.4 深さ0.15 の掘り込み	径1.6	0.45	下部V P155 第141図
087SX254	—	弥生時代中期 後半	不整形円形	方形	中央センタービット 深さ0.4 m	1.85 × 1.8	0.3	下部V P252 第250図
120SX0160	—	弥生時代中期 後半	円形ビット状	?		径1.0	?	下部V P277 ～ 278 第274図 (全体遺構図)
120SX1170	—	弥生時代中期 後半前後	楕円形	?		1.4 × 1.1	1.3	下部V P277 ～ 278 第274図 (全体遺構図)
095SX030	30	弥生時代中期 後葉	長方形 (B a 輪型)	皿状	中央ビット 径0.2 深さ0.1	1.5 × 1.3	0.3	下部V P388 第468図
076SK326	31	弥生時代中期 後半～末	円形?	皿状	中央柱状ビット 径0.25	径0.2	0.15	下部V P155 第141図
005SX017 (4T)	—	弥生時代中期 後半～末以降	円形か	底面中心に向かって緩やかに傾斜		径4.0 + a	—	下部V P112 第137図
005SX049 (5T)	31	弥生時代中期 後半～末以降	楕円方形	方形		2.38 × 2.18	0.47	下部V P114 第139図
069SX013	31	弥生時代中期 後半～末	不整形円形	逆台形		0.67 × 0.6	0.16	下部V P169 第244図
005SX123 (5T)	31	弥生時代中期 末	楕円形	方形		1.35 × 0.95	0.55	下部V P115 第142図
099SX018	—	弥生時代中期 末	円形	皿状		径 (0.4)		下部V P202 第153図 (全体遺構図)
069SX086	31	弥生時代中期 末～後期前葉	南北に長い楕円形	方形		0.6 × 0.32	0.16	下部V P174 第262図
099SX092	—	弥生時代中期 後半以降	円形	逆台形	中央窪み	1.3	0.36	下部V P227 第195図
003SK024	—	弥生時代中期	円形	方形		1.4 × 1.1	0.32	下部V P26 第20図
003SK028	—	弥生時代中期	楕円形	逆台形		1.6 × 1.3	0.5	下部V P28 第23図

第8表 弥生時代前期～中期土坑遺構一覧表④

遺構番号	探検番号	時期	平面形状	断面形状	施設 (m)	規模		掲載報告書
						大きさ (m)	深度 (m)	
0055X018 (4T)	—	弥生時代中期	不整形	方形		1.7 × 1.55	0.72	下部Ⅴ P95 第113図
0155X034	—	弥生時代中期	円形プラン	逆台形	中央僅かな窪み	径 1.5	0.4	下部Ⅴ P23 第10図
0155X035	—	弥生時代中期	円形か	段差をもって中央部が深くなる		?	0.35	下部Ⅴ P23 第11図
0185X002	—	弥生時代中期	円形プラン	逆台形		径 1.75	0.2	下部Ⅴ P29 第19図
0465X001	—	弥生時代中期	南北に長い楕円形	竪溝状	中央円形ビット 径 0.2 深さ 0.1	1.95 × 1.55	0.12	下部Ⅴ P97 第95図
0465X005	—	弥生時代中期?	不整形円形	方形		径 1.0	0.35	下部Ⅴ P102 第102図
0465X009	—	弥生時代中期?	円形	逆台形		径 1.21	0.18	下部Ⅴ P104 第106図
0495X009	—	弥生時代中期	円形	U字		径 0.52	0.38	下部Ⅴ P148 第146図
0515X005	—	弥生時代中期	楕円形プラン	竪溝状	底面皿状に窪む	2.0 × 1.3	0.17	下部Ⅴ P43 第45図
0515X003	—	弥生時代中期か	方形プラン	逆台形		1.6 × 1.65	0.13	下部Ⅴ P52 第59図
0515X008	—	弥生時代中期か	円形基調プラン	方形	東側が浅い	径 1.3	0.13	下部Ⅴ P54 第64図
0525X005	—	弥生時代中期	円形プラン	逆台形	中央窪み 径 0.5 深さ 0.2	径 1.7	0.35	下部Ⅴ P78 第96図
0525X012	—	弥生時代中期	円形プラン	方形 (残りよれば袋状の可能性)	中央窪み 径 0.4 深さ 0.12	径 1.6	0.4	下部Ⅴ P79 第100図
0525X014	—	弥生時代中期	円形プラン	方形	皿状の中央窪み 径 0.3	径 1.5	0.4	下部Ⅴ P79 第101図
0525X102	—	弥生時代中期	楕円形プラン	逆台形		3.2 × 1.9	0.15	下部Ⅴ P83 第114図
0615X045	—	弥生時代中期	円形か	逆台形		径 1.6	0.39	下部Ⅴ P109 第155図
0695X052	—	弥生時代中期か	円形か	?		検出長 1.8	0.4	下部Ⅴ P171 第250図
0695X056	—	弥生時代中期	柱穴状			径 1.7	0.35	下部Ⅴ P162 第233図 (全体遺構図)
0695X059	—	弥生時代中期	柱穴状			長径 0.3	0.44	下部Ⅴ P172 第253図
0695X061	—	弥生時代中期	?			?	0.8	下部Ⅴ P172 第255図
0695X062	—	弥生時代中期	円形か	逆台形か	中央円形柱穴状ビット 径 0.13 深さ 0.05	1.44 + a 0.8 + a	0.22 + a	下部Ⅴ P172 第257図
0715X212	—	弥生時代中期	円形	逆台形		径 1.4	0.2	下部Ⅴ P104 第96図
0715X221	—	弥生時代中期	円形	フラスコ状袋状貯蔵穴		径 1.6	0.65	下部Ⅴ P105 第97図
0765X055	—	弥生時代中期	楕円形	逆台形	中央窪み 径 0.45 深さ 0.07	2.4 × 1.85	0.2	下部Ⅴ P144 第122図
0875X007	—	弥生時代中期	隅丸方形	逆台形	中央ビット 0.7 × 0.55 深さ 0.2	1.8 × 1.7	0.2	下部Ⅴ P249 第214図
0875X200	—	弥生時代中期	不整形楕円形	逆台形	中央段落ち状の掘りこみに柱穴 0.25 × 0.3 深さ 0.25	2.3 × 1.4	0.15	下部Ⅴ P250 第217図
0875X215	—	弥生時代中期	不整形楕円形	方形		1.85 × 0.9	0.3	下部Ⅴ P250 第218図
0875X426	—	弥生時代中期	不整形円形	?		2.0 × 1.5	0.15	下部Ⅴ P242 第197図 (全体遺構図)
0875X445	—	弥生時代中期	?	?		1.6 × 1.0	0.2	下部Ⅴ P242 第197図 (全体遺構図)
0905X363	—	弥生時代中期	円形	方形		径 0.15	0.5	下部Ⅰ P122 第136図
0955X038	—	弥生時代中期	略方形	竪溝状		一辺 1.0	0.3	下部Ⅴ P388 第469図
0955X041	—	弥生時代中期	略方形	逆台形		径 1.0	0.2	下部Ⅴ P388 第469図
0955X045	—	弥生時代中期	方形	逆台形		最長 2.0	0.4	下部Ⅴ P388 第469図

第9表 弥生時代前期～中期土坑遺構一覧表⑤

遺構番号	探検番号	時期	平面形状	断面形状	施設 (m)	規模		掲載報告書
						大きさ (m)	深度 (m)	
099SX005	—	弥生時代中期	円形	緩やかな皿状	中央から西に円形の窪み	径 (1.2)	0.35	下部Ⅲ P225 第 191 図
099SX088	—	弥生時代	円形	皿状	中央柱穴 径 0.2 深さ 0.1	径 (1.3)	0.3	下部Ⅲ P226 第 193 図
099SX096	—	弥生時代中期	不明	皿状			0.3	下部Ⅲ P227 第 197 図
099SX112	—	弥生時代か	円形	皿状	中央窪み 径 0.7 程度	径 1.7	0.2	下部Ⅲ P227 第 198 図
120SX0120	—	弥生時代中期	?	?		1.3 × 2.0	?	下部Ⅲ P277 ~ 278 第 274 図 (全体遺構図)
120SX2804	—	弥生時代中期	半円形			長軸 0.46	0.18	下部Ⅲ P277 ~ 278 第 274 図 (全体遺構図)
141SX015	—	弥生時代中期	不定円形	フラット		径 1.1	0.15	下部Ⅲ P302 第 283 図 (全体遺構図)

第10表 弥生時代前期～中期墓壇遺構一覧表

遺構番号	探検番号	時期	平面形状	断面形状	施設 (m)	規模		掲載報告書
						大きさ (m)	深度 (m)	
120SX1340	32	弥生時代中期 中国～後期前部前段	隅丸長方形	方形		1.2 × 0.75	0.5	下部Ⅲ P387 第 363 図
120SX1345	—	弥生時代中期 中国～後期前部前段	隅丸長方形か			1.2 × 0.7		下部Ⅲ P277 ~ 278 第 274 図 (全体遺構図)

墓 壇

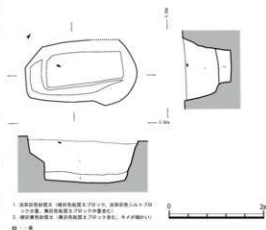
第120次調査 下郡遺跡群内における弥生時代中期の墓壇の検出事例は極めて少ない。わずかに第120次調査において溝状遺構(120SD1100)の遺構埋土内から検出した120SX1340(第32図)がある。

隅丸長方形

歯が出土

平面形は隅丸長方形で、断面形状は方形を呈する。規模は1.2m × 0.75m、深度は0.5mを測る。埋土中から歯が出土したが、副葬品は皆無である。同じ溝状遺構からは埋土状況や規模・基軸方向が略一致する120SX1345を検出している。さらに120SD1100延長部にあたる第109次調査で検出した溝状遺構からも同様の遺構を検出している。

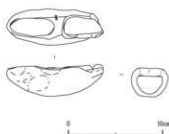
溝状遺構の埋土内 これらはいずれも溝状遺構の遺構埋土内から検出したもので、溝の埋没途中に構築されている点や平面形、規模等に共通点がみられる。しかしながら、副葬品なども皆無であり、詳細については不明な点が多い。



第32図 120SX1340 平面・断面実測図 (1/80)

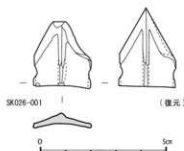
(3) 弥生時代前期から中期の遺物

- 第4次調査 下郡遺跡群の中で注目される遺物に第4次調査SX001から出土した舟形土製品(004SX001-001)がある。004SX001は2.0 m×1.6 mの隅丸長方形を呈する土坑であり、出土遺物には舟形土製品の他、大型の壺形土器、甕形土器が出土している。こうした出土遺物から、弥生時代前期中葉から後葉の時期に比定されると考えられる。他に姫島産の黒曜石製の打製石鏃と剥片等も数点出土している。出土した土製品は丸木船を模造したものであり、上部には平坦面を形成し、下部は舟底状を呈している。先端部の一部が欠損し、長さ12 cm+α、高さ3 cm、幅3.9 cmを測る。内側は例り貫かれ、へら様の施文具で面取りをおこなっている。中央端に径0.2 cmの孔穴をもち、全面に赤色顔料を塗布している。



第33図 004SX001-001実測図 (1/4)

- 第3次調査 青銅製ヤリガンナは、下郡遺跡群第3次調査SX026から出土した。2.5 cm×2.1 cm、厚み0.3 cmを測る。本来の長さを保持しておらず、両側に挟りが認められることから紐などで木柄等に結び付けて固定していたと考えられる。刃部には研ぎなおしの痕跡を明瞭に確認することができ、しかも右側刃部が使用により折れている。また、表面には長軸に対して垂直の方向の擦痕が認められる。片岡氏はこうした状況を「右利きの人が現在の Каттер-ナイフのように外側に向かって削りだした」結果であると推定している⁽²¹⁾。



第34図 青銅製ヤリガンナ復元図 (2/3)

- 本資料が国産であるのか舶載品であるのかは現段階では不明であるが、これまで鋳型の出土している遺跡には擬朝鮮系無文土器の出土と相関する点が指摘されており、こうした生産遺跡から拡散的に持ち込まれた可能性も否定できない。形態から片岡氏分類のB2-1類に相当する。B2-1類は日本のみで発見されている型式であることから、鋳型を出土する渡来系の要素の強い集落で生産され、下部にもたらされた可能性が高いのではないかと推定される。

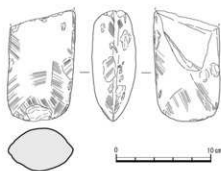
- 片岡氏によれば、1999年段階では13遺跡での出土が確認され、鋳型に関しても佐賀県小城郡三日月町土生遺跡(現小城市三日月町)、福岡県田川郡添田町庄原遺跡の2遺跡で出土が認められている。これにくわえ、1999年2月には新たに弥生時代前期に比定される我が国最古の鋳型片が和歌山県御坊市堅田遺跡において発見されている。

- 片岡氏の分析では、堅田遺跡出土鋳型例を除けば、日本で出土している青銅製ヤリガンナ資料の比定時期は弥生時代中期前葉に集中するという。下郡遺跡群で出土した資料もまた弥生時代中期前葉に比定される遺構から出土している。

- 第10次調査 下郡遺跡群第10次調査地点からは、弥生時代の土坑から太型蛤刃石斧が出土している⁽²²⁾。第35図は、玄武岩製の太型蛤刃石斧である。灰黒色を呈し、現存で長さ11.8 cm、幅7.5 cm、厚さ4.5 cm、重量620 gを量る。基端部が欠損しており、全長は不明である。残存する部分から推定すると、側縁部から基端部まで平行に伸びる可能性が高い。

註1 片岡宏二 1996「青銅製鋳考」『考古学雑誌』第8巻 第2号 日本考古学会

片岡宏二 1999「弥生時代 渡来人と土器・青銅器」雄山閣出版



第35図 010SK73-001 実測図 (1/4)



第36図 太型蛤刃石斧

太型蛤刃石斧 太型蛤刃石斧が出土した第10次調査地点は、B区に所在し弥生時代中期から古墳時代の遺構が高密度に分布する。出土遺物は弥生時代前期末から中期初頭に編年される下城式土器破片を中心とする。土坑には弥生時代の貯蔵穴と考えられるものがある。太型蛤刃石斧が出土したのは、010SK73であり、他の遺構(010SK74)と切り合い関係をもつ土坑である。

今山遺跡 本資料の石材は、概報報告時^(註3)にホルンフェルスと報告していたが、その後の調査の結果、福岡市今山遺跡産の玄武岩製石斧と判明した。今山遺跡は、海に面した標高80m余の岩山に立地し、玄武岩が露頭する弥生時代中期の太型蛤刃石斧の大生産地である。今山産の石斧は、福岡・佐賀平野を越え、ほぼ100キロメートルの範囲に供給されている^(註4)。

今山遺跡出土の石斧は器種を大きく3分類、すなわち太型蛤刃石斧2種と、小型蛤刃石斧に大別しているが、下部遺跡群出土石斧は、このうちのA類に属するものであると推定される^(註5)。すなわち、側縁線が刃部から基端にかけて平行し、全長が20cmになるものである。

今山産石斧の東限 下部遺跡群第10次調査で出土した本資料が、直接今山遺跡から持ち込まれたものか、今山遺跡から他の地点を経由して持ち込まれたものかについては不明である。しかしながら、現状において下部遺跡群出土資料は、今山産石斧出土例の東限であり、下部遺跡群と北部九州との交流を物語る貴重な資料といえる。

註2 大分市教育委員会 1990『下部遺跡群』大分市下部地区土地画整理事業に伴う発掘調査概報(1)

註3 註2に同じ

註4 岡村道雄 1998『歴史発掘① 石器の盛衰』講談社

註5 福岡市教育委員会 1981『V. 小結 1. 今山42・43地点出土の蛤刃石斧の分類』『今山・今宿遺跡』—玄海自転車道建設に伴う遺跡の調査—

弥生時代前期から中期の土器編年と概要

(1) 弥生時代前期の土器編年概要

時期変遷	大分平野部（別府湾沿岸部）の弥生時代前期に関しては、かつて弥生時代早期、さらにその前段階を含め、0期からⅤ期までの時期変遷を示した ^(註1) 。縄文時代晩期に相当する0期は無刻目突帯文土器を主体とする高橋徹氏による「上菅生B式」の内容 ^(註2) を示す段階であり、Ⅰ期を弥生時代早期に相応させた。Ⅰ期はⅠa期とⅠb期に細分し、Ⅰb期に一条の刻目突帯文を主要器種とする「下黒野式」 ^(註3) の内容を充てた。その上で前段階に位置づけられるⅠa期を無刻目突帯文と刻目突帯文が共存する段階として設定した。この段階に関しては、高橋徹氏により「二反田式」が設定され、具体的な内容検討がなされている ^(註4) 。Ⅱ期はⅠb期の「下黒野式」の各器種が型的に退化した型式群により構成される段階にあたる。条痕調整であった一条の刻目突帯文の調整は主体がナデ調整へと変化する。浅鉢も出土数量が減少し、端部形態についても屈曲が緩慢となる。Ⅲ期は「遠賀川式系土器」が伴出する段階である。Ⅲa期とⅢb期の二時期に区分する。Ⅲa期には大分市一方平Ⅳ遺跡出土土器を標識とする「一方平Ⅳ式」、「上七曾子式」 ^(註5) が相当する。Ⅲb期は大分市下志村遺跡出土土器群 ^(註6) が相当する。Ⅳ期は「下城式甕」へと展開する一条刻目突帯をもつ甕が主体となる段階である。板付系の壺が伴う。Ⅴ期は下部遺跡群第25次調査の第Ⅲ層出土土器群を標識とする前期末に比定される一群である。下城式甕は口縁部形状は多彩なバリエーションをもち、壺についても北部九州系のものから脱却した独自の器形や文様をもつものが主体を占めるようになる。あわせて、弥生時代中期に出現し、盛行する「下城式壺」 ^(註7) の前段階に位置づけられる資料の存在を確認することができる ^(註8) 。下部遺跡群において出土遺物が量的に激増するのがこのⅤ期の段階である。下部遺跡群での比較的材料とまとめた形で認められる弥生時代前期の資料の中で最も古相を示す資料が下部遺跡群第4次調査004SX001から出土している大型壺の資料であり、Ⅳ期あるいはⅢb期に比定されるものである ^(註9) 。
------	---

(2) 弥生時代中期の土器編年と概要

特徴的な器種	下部遺跡群が所在する大分平野での弥生時代中期を特徴づける器種は下城式甕、下城式壺、そして円盤充填技法による台付鉢（高坏）である。いずれも強い地域性を示すものであり、特に弥生時代中期の前半にはその傾向が極めて大きい。これに対して後半には東北部九州の影響が次第に強くなり、時間推移に伴ってその傾向は増大する。
弥生時代中期 四期区分	弥生時代中期に関しては、弥生時代中期Ⅰ期から中期Ⅳ期の四期区分により整理をおこなう。各期の年代比定は、弥生時代中期Ⅰ期が弥生時代中期初頭、Ⅱ期が弥生時代中期前半から中頃、Ⅲ期が弥生時代中期後半、Ⅳ期が弥生時代中期末にほぼ相当する。弥生時代中期Ⅰ期の土器構成は、弥生時代前期Ⅴ期のものを踏襲し、プロローション、文様施文法などに変化が認められる。弥生時代前期Ⅴ期でバリエーションの豊富であった下城式甕形土器は、前期のものに比して胴の張りが弱くなり、口縁端部外面に貼付されていた刻目突帯も、より下位に位置するようになり、口縁端部の刻みを省略する資料が次第に増えてくる点もこの段階の特徴である。弥生時代中期Ⅱ期は下城式甕形土器に加え、新たに東北部九州系の「く」字形口縁甕が一定量伴出する点を大きな特徴とする。甕以外の器種につ

註1 坪根伸也 1996「東九州（大分）の弥生前期土器—別府湾沿岸地域を中心として—」『西部瀬戸内の弥生文化—前期弥生土器の諸相—』山口考古学談話会百回記念大会実行委員会
 坪根伸也 2000「東九州における弥生前期土器の諸相—口縁下端凸状甕と下城式甕」『土器寄寄会論文集 突帯文と遠賀川』土器寄寄会論文集刊行会
 坪根伸也 2001「弥生文化成立期の具体像（東部九州）」『第47回埋蔵文化財研究集会 弥生文化の成立—各地域における弥生文化成立期の具体像—』第47回埋蔵文化財研究集会実行委員会

円盤充填技法	いては、おおむね弥生時代中期Ⅰ期のものを踏襲している。また、弥生時代中期Ⅰ期にすでに出現する下城式甕、脚部に透かし穴をもち、円盤充填技法により製作される台付鉢の出土が顕著となる。弥生時代中期Ⅲ期になると、弥生時代中期Ⅱ期から型式変化を遂げた器種に加え、壺などに須玖式系のものが認められるようになる。具体的には、鋤先口縁をもつ壺や広口壺であり、新来の器種として注目される。一方、甕には東北部九州系の「く」字形口縁甕の割合が大きくなり、下城式甕と拮抗する。
須玖式系	弥生時代中期Ⅳ期には須玖式系の鋤先口縁長頸壺などの出土割合が多くなり、装飾に多条の突帯が付けられるようになるのも当該期の大きな特徴である。あわせて、装飾文様に浮文が多用されるようになる。新出の器種として、東北部九州地域で特徴的な直口壺の出土があり、時期比定のメルクマールのひとつとなり、多くの遺跡から出土が確認される。また、これまで器種構成の中で微量であった小型器台の出土もこの時期に顕著となる。甕はさらに東北部九州系甕の出土量が圧倒的となり、下城式
直口壺の出土	甕の出土量を凌駕する。東北部九州系甕の形態的な変化として、口縁部形状の分化が認められる。ひとつはナデや粘土帯の貼り付けにより端部の強調を強めるタイプであり、他方は逆に跳ね上げ気味の端部形態を示さないものである。弥生時代中期から後期への変遷に伴い、前者に比して後者の比率が多くなり、弥生時代後期の「く」字形口縁甕へと変化していく。こうした口縁部の形態の分化に対応
口縁部形態の分化	するように底部形態についても二種が認められる。すなわち平底のものとして上底風のものの二種がある。これらの底部資料と二種の口縁部形態との相関状況は不明である。また、甕の内面底部付近にケズリ風の調整がおこなわれるのも弥生時代中期Ⅳ期の後半頃を境に顕著となる。瀬戸内方面からの影響である。弥生時代中期Ⅳ期の後半部分はいわゆる弥生時代中期末から後期初頭に相当するものを多分に含んでおり、現状では区分できていない。
二種の底部形態	

(3) 下城式甕形土器の成立過程について

下城式甕形土器の成立	豊後大分地域の弥生時代前半期を特徴付ける資料に下城式甕形土器がある。この甕の成立に縄文時代晩期（弥生早期）の刻目突帯文土器との強い関係性が想定されるため、下城式甕の成立をこれまでとは異なり刻目突帯文土器からのストレートな型式変化に求める傾向が強かった。しかし、ここでは祖形を同じ刻目突帯文土器として同時期に下城式甕と九州島を二分するように分布するいわゆる「亀ノ甲タイプ」との分布域、成立契機の違いを説明することができなかった。それが、近年の資料の充実に伴い、ある程度の見通しの想定が可能となった ^{註10} 。弥生時代前期Ⅲb期に編年している大分市下志村遺跡出土甕の資料の中には、瀬戸内に広く分布する遠賀川式系甕の起源と考えられる「口縁下端凸状甕」が一定量存在し（タイプA甕）、これに在地の突帯文系甕が融合して口縁直下に貼付突帯を巡らすタイプB甕が成立したと想定される。これ以降の甕の変遷を考慮すると、このタイプBの甕が下城式甕の祖形になった可能性が高い。弥生時代前期Ⅳ期、弥生時代前期Ⅴ期の下城式タイプの甕の口縁部形態に外反器形のものが多い点は、こうした背景によるものであろう。
口縁下端凸状甕	
タイプB甕	
折衷型	したがって、下城式甕形土器は、西部瀬戸内地域を介した遠賀川式系の甕と在地の突帯文系甕との折衷型の甕から発展・成立したと考えられるのである。

- 註2 高橋 徹 1980『大分県考古学の諸問題（1）—刻目突帯文土器の出現とその展開について—』『大分県地方史』大分県地方史研究会
- 註3 高橋 徹 1983『東九州における突帯文土器とその周辺』『古文化談義』第12集 九州古文化研究会
- 註4 高橋 徹 2001『大分の弥生・古墳時代土器編年』『大分県立歴史博物館 研究紀要』2 大分県立歴史博物館
- 高橋 徹 2009『大分の弥生式土器編年—早期—中期—（上）』『大分県立歴史博物館 研究紀要』10 大分県立歴史博物館
- 註5 井口あけみ 2003『上七曾子遺跡2号溝（SD02）出土の弥生土器について』『古国府遺跡群・上七曾子遺跡—共同住宅建設工事に伴う発掘調査報告書』大分市教育委員会
- 註6 高橋 徹 1996『第四章 付論大分平野周辺前期—中期の弥生土器について』『曲道跡 九州横断道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』大分市教育委員会

二種の甕

煮炊具

成形技法の相異

色調の相異

組成比率の逆転

漸移的な変化

(4) 弥生時代中期の甕形土器について—下城式甕形土器と東北部九州系甕形土器—

弥生時代中期Ⅱ期前後から下城式甕形土器に加え、東北部九州系のく字甕が土器組成の中に一定量を占めるようになる。導入段階（弥生時代中期Ⅰ期）での組成比率は極めて微量であるが、時期変遷に伴い組成比率を次第に増加させる。この二者は同一遺跡、同一遺構内から作出する。つまり、弥生時代中期の大分平野では、在来の下城式甕形土器と東北部九州系甕形土器という二種の異なる系統の甕が同一集落内において使用される状況が認められる。この二種の甕について、特に一方の甕に優位性を示すような出土状況は今のところ確認されていない。つまり、両者に機能差はなく、両者とも生活に伴う煮炊具として使用されているにすぎない。また、胎土の理化学的分析では東北部九州系甕の一部には下城式甕と同種の粘土が使用されている点が指摘されている^{註11}。しかしながら、この二者は、形態・色調・器厚の点において、著しく異なっている。また、東北部九州系の甕がタタキ成形によるものである点が確認されており^{註12}、粘土組積上げ技法により成形される下城式甕とは形態のみでなく、成形技法のレベルから異なるものであることが明らかとなっている。こうした成形技法の相異は器厚に特徴的に反映され、下城式甕の器厚の平均が6～8ミリであるのに対し、東北部九州系甕は4～5ミリであり、明確な差異を示す。色調についても、下城式甕が暗茶褐色系、東北部九州系の甕が淡黄白色系の色調を呈しており、両者の交雑は大きく異なっている。

すでに指摘したようにこの二種の甕の組成比率は時間経過に伴い次第に逆転し、弥生時代中期末段階には、東北部九州系甕が主体を占める^{註13}。すなわち、こうした成形技法にまで遡及するような違いをみせる異種系統土器の在り方は、旧来型式（下城式甕）の消滅という形で弥生時代中期末から後期初頭段階に解消する。しかも、この変化は急激なものでなく、ゆっくりと漸移的に変化する。くわえてその過程の中で折衷型の作成が顕著でないという特異な状況が認められる。

(5) 下城式甕形土器について

甕の文様

二又状工具

大分平野の地域性

口縁部形態の変化

弥生時代中期を通じての下城式甕形土器の変遷について若干の整理をおこなう。下城式系の甕の文様は、半截竹管状の二又状工具を用いた二条一組の線で平行線文、重弧文などを描く点を特徴とする。この種の甕文様は弥生時代前期Ⅴ期の資料の中にあるヘラ描きによるモチーフから発展し弥生時代中期段階において二又状工具という新技術の採用によって完成・定型化したものである。また、この種の文様施文の技術展開は、弥生時代中期を通じて櫛状工具への発展はなく、二本一単位の文様施文に固執する点も他の地域とは異なる大分平野の強い地域性を示している。

下城式甕は、出現時期である弥生時代中期Ⅰ期や次段階の弥生時代中期Ⅱ期では小型甕が主体を示すが、弥生時代中期Ⅲ期、弥生時代中期Ⅳ期には大・中型甕の出土量が増える。特に大分市浜遺跡や久原遺跡等のような祭祀に関連する遺跡・遺構からの出土が目立つ。こうした中で口縁部形態と文様施文方法の変遷に強い相関性を有する変化が認められる。口縁部形態には素口縁から肥厚口縁という変化の方向性が看取され、文様施文に関しては、時間の経過に伴い、タテ方向の分割を重視する施文

註7 小田富士雄 1958『下城式土器考』『白濁遺跡』佐伯市教育委員会

註8 坪根伸也 1992『B区 g-14 地点出土の弥生土器について』『下部遺跡群』大分市下部地区土地画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 3 大分市教育委員会

註9 『下部遺跡群Ⅷ』の報告では前期末頃とされていたが、土器様相を再検討した結果、さらに古相をしめす遺物群と判断した。

註10 註1 文献に同じ。

註11 大分市教育委員会 2000『井ノ久遺跡』—東九州自動車道及び併設市道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

註12 坪根伸也 1993『弥生土器の成形技法について—東九州における円盤空坑技法—』『下部遺跡群』大分市下部地区土地画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 4 大分市教育委員会

註13 坪根伸也 1998『東九州における異種系統土器の共存事例の検討—素甕—』『第1回弥生土器研究セミナー資料』弥生土器研究会

施文の割り付け方向 意識から次第に水平方向の割り付けをより意識する施文へと変化する。さらに弥生時代中期Ⅳ期になると水平方向の割り付け意識も希薄となり、肥厚口縁をもつ資料には下部のヨコ沈線を省略したものやその部分を突帯により代用するものも出現する。加えて、仕上げの器面調整と文様の施文の順番にも時間経過による変化傾向を読み取ることができる。すなわち、最終調整後に文様施文をおこなう追加型施文から最終調整前に施文を終了する順番型施文^{註14}へと変化する。

施文の順番変化

浮文・装飾の多用化 また、弥生時代中期Ⅲ期・Ⅳ期には勾玉状の浮文をはじめとする装飾の多用傾向の増加も特徴的な変化といえる。大局的にみれば、弥生時代中期Ⅲ期・Ⅳ期の壺形土器の文様変遷は沈線文系のものから多条の突帯を付す突帯文系への変化とみることができる。

(6) 台付鉢（高環）形土器について

透孔をもつ台付鉢 大分平野を特徴づける弥生時代中期の土器に、脚に透孔をもつ台付鉢（高環）がある。下部桑苗遺跡の調査所見から弥生時代中期Ⅰ期には確実に存在することが知られている^{註15}。この種の台付鉢（高環）の時間軸上の分布は、弥生時代中期Ⅰ期に続く弥生時代中期Ⅱ期から中期Ⅲ期に盛行する。終焉は源六原遺跡^{註16}等において弥生時代中期末の遺構からの出土が認められることから、数量を減しながらも弥生時代中期Ⅳ期（弥生時代中期末）まで存在したと推定される。これらの土器の最大の特徴はその成形技法にある。すなわち、鉢部（坏部）と脚部を一気に作り、鉢部（坏部）の底に開いた孔を粘土門盤でふさぐ、いわゆる門盤充填技法によって作製されている。台付鉢（高環）に採用されている他、大分市浜遺跡^{註17}出土資料には壺に脚が付けられている事例があり、こうした資料も門盤充填技法で製作されている。

成形技法

門盤充填技法

参考文献

- 坪根伸也 2000「東九州における弥生前期土器の諸相―口縁下端凸状痕と下城式痕」『土器持寄会論文集 突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 坪根伸也・服部貞和 2004「東南部九州地域の弥生中期中葉から後期前葉」『弥生中期土器の併行関係』第53回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 高橋徹也 1989『大分県史』先史篇Ⅱ 大分県
- 武末純一 2004「九州東部（豊後）」『考古資料大観』1 小学館

弥生時代前期～中期土器変遷表出土遺跡一覧

第11表

1：第25次SD001、2～6、8～11：久原遺跡、4：第142次SX004、7：浜遺跡、12・13：第125次SD1100、14：近中遺跡、15：成田尾遺跡、16：小川原遺跡、17：舞田原遺跡

第12表

1・2：第4次SX011、3～6：第25次SD001、7・9～12：第75次SD003、8：29次SX304、13～17：第120次SD1100

第13表

1～9・16：第25次SD001、10～15：第3次SK026、17：第30次SX118、18～21・23～26：第75次SD003、22：第70次SK098、27・28：第92次SD300、29～32：第120次SD1100

第14表

1～4・6・7：第25次SD001、5：第5次SD001、8：下部桑苗遺跡、9：第10次、10・14：第3次SK026、11・13：第30次SX118、12・16～18：浜遺跡、15：第51次SK010、19・21・22：第75次SD003、23：第87次SX429、20・24：第3次SK003、25・26：第76次SK109、27・28：第120次SD1100

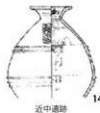
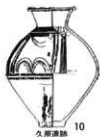
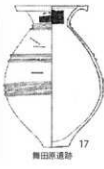
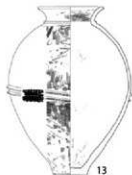
註14 深澤芳樹 1989「木葉紋と流水紋」『考古学研究』第36巻 第3号 考古学研究会

註15 大分県教育委員会 1992『下部桑苗遺跡Ⅱ』―弥生ブザー― 大分県文化財調査報告書 第89輯

註16 高橋 徹 1997「源六原遺跡」『直川村誌』南海部郡直川村

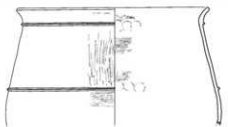
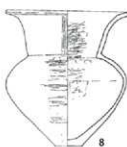
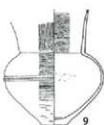
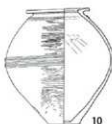
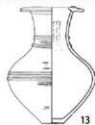
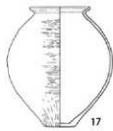
註17 村上久和 1995『大分古墳・浜遺跡第2地点』大分県教育委員会

第11表 弥生時代前期～中期土器変遷表①

前期Ⅴ期	 1
中期Ⅰ期	 2 久原遺跡  3 久原遺跡
中期Ⅱ期	 4   5 久原遺跡  6 久原遺跡
中期Ⅲ期	 7 浜遺跡  8 久原遺跡  9 久原遺跡
中期Ⅳ期	 14 近中通跡  15 成田尾遺跡  10 久原遺跡  11 久原遺跡  16 小川原遺跡  17 舞田原遺跡  12  13

(5=1/10, 13のみ5=1/10)

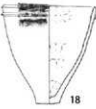
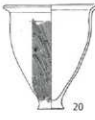
第 12 表 弥生時代前期～中期土器変遷表②

前期Ⅳ期				
前期Ⅴ期				
中期Ⅰ期				
中期Ⅱ期				
中期Ⅲ期				
				
中期Ⅳ期				
				

5=1/10

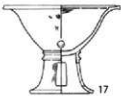
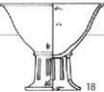
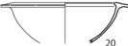
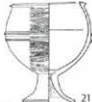
(5=1/10)

第 13 表 弥生時代前期～中期土器変遷表③

前期Ⅴ期	        
中期Ⅰ期	       
中期Ⅱ期	   
中期Ⅲ期	    
中期Ⅳ期	     

(5=1/10)

第 14 表 弥生時代前期～中期土器変遷表④

前期Ⅴ期	 1  3  4  5  6
中期Ⅰ期	 2  8 下部糸通跡  9  10  11  12 糸通跡  13  14
中期Ⅱ期	 15  16 糸通跡  17 糸通跡  18 糸通跡
中期Ⅲ期	 19 糸通跡  20  21  22  23  24
中期Ⅳ期	 25  26  27  28

(5=1/10)

第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の様相

(1) はじめに

弥生時代の下部地区には、中央を南北に走る河道が存在した^{註1}。集落はその河道を挟み両側に展開する微高地上（自然堤防上）に立地していたと考えられる。この河道の東側エリア（B区）は弥生時代前期から中期初頭にかけての遺物（土器・木器・動物遺体等）が多量に出土する。その中には西部瀬戸内地域からの搬入品等も認められ早い時期からの他地域との交流関係が示唆される。弥生時代中期には瀬戸内地方の影響を受けつつ北部九州との密接な交流も認められ、東北部九州系土器が地域色の強い下城式土器と並存する状況が認められる。また、弥生時代後期から古墳時代前期では、旧河道の西側エリアにおいて遺跡の形成が顕著になる。特に弥生時代後期後葉から終末期にかけては遺跡群中央部（E区）と南西部（H区）に断面V字形を呈する環濠が展開し、集落の大規模化が認められる。

出土遺物については、弥生時代中期に多量にしていた土器群が弥生時代後期には突帯の減少や装飾の簡素化が行われ、壺については口縁部が発達し複合口縁となる。その複合口縁には櫛描波状文が施文されるようになり、「安国寺式」と呼ばれる土器型式が形成されるのである。古墳時代初頭になると環濠内に大量の土器廃棄が行われ、環濠は廃絶し集落域が変化していく。本項では、こうした環濠や溝状遺構・竪穴住居跡・井戸状遺構・土坑等についての分布や概要を示し、当該期の下部遺跡群内の様相について検討する。また、環濠内やその周辺域から出土した土器を中心に弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器編年^{註2}についても改めて検討するとともに、特殊な遺物についても紹介する。

(2) 遺 構

溝状遺構

この時代の溝状遺構は、各調査区において多数検出しているが、中でも下部遺跡群中央部（E区）および南西部（H区）において環濠として確認されている事例が特徴的である。

まず、下部遺跡群中央部のE区の環濠（第38図）として確認されている溝状遺構は具体的に055SD001・



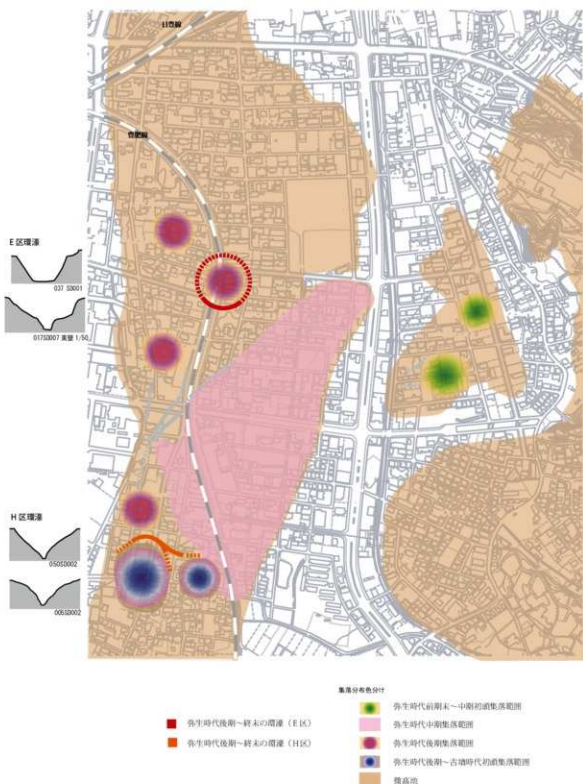
第37図 第50次調査SD001上層遺物出土状況

017SD002・017SD007・037SD001・043SD001が相当し、他地点に比して高位面であり地盤のしっかりした場所に構築されている。環濠の推定ラインは隅丸方形を呈するものと思われ、検出幅は平均して2.0～3.0m、深度は1.0～1.5mを測る。少なく見積もってもその推定規模は径65m、推定環濠内面積は3000㎡にのぼる。環濠の機能時期は先述のように弥生時代後期後葉から弥生時代後期終末である。土層状況からその間に数回の掘り直しを行っており、最終的に機能が停止した後大量の土器廃棄が行われている。055SD001が一度掘り返された後、055SD003が接続することも確認していることから、環濠最終段階には環濠に囲まれた集落内をさらに溝で区画していた可能性も想定

註1 大分市 1987『大分市史』上巻

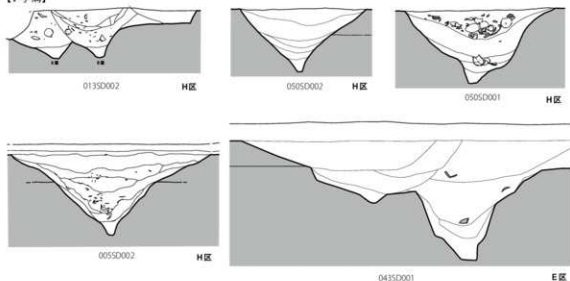
註2 当該期の土器編年については既刊の報告書（下部遺跡群Ⅳ・Ⅴ）においてすでに提示しているが、これにその後の調査で出土した遺物を補充した。

註3 大分市教育委員会 1982『多武尾遺跡調査概報』



第38図 弥生時代の集落・環濠分布図 (1/6,000)

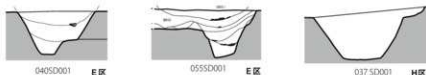
【V字溝】



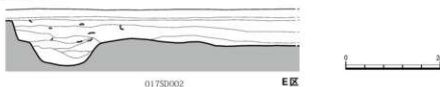
【U字溝】



【梯子型】



【逆台形型】



第 39 図 弥生時代後期溝状遺構断面図集成 (1/80)

される。また、第 39 図に溝状遺構の断面図を掲載しているが、H 区の溝状遺構の断面形状（V 字）に比して E 区の断面形状はどちらかといえば U 字に近い形状である。特に 017SD007 は一度 U 字に掘り込みその後一段の掘り下げを行っている。土層堆積状況から溝の南側からの地山土ブロックの流れ込みが確認でき、同様に 055SD001 においても溝の東側から基盤土の流れ込みが確認されることから、先述のように環濠外側に土塁等の施設が構築されていた可能性を指摘できる。

土塁の構築

H 区環濠

次に本遺跡群の南西部に所在する H 区環濠の溝状遺構は、013SD002・050SD001・050SD002・005SD002 であり、南北方向に延びる大分川右岸の自然堤防上を南北に分断し、その西側はさら

に自然堤防にそって南へL字状に展開していくものと考えられる。検出面での幅は最大で5.4 m (005SD002)を測り、深度は深いところで1.87 m (005SD002)を測る。第5次調査での検出長は12.0 mを測り、数回の掘り返しを伴うものの、その断面形状はシャープなV字形を呈している。埋土は大きく上層と下層に分別され、上層は弥生時代後期終末から古墳時代初頭にかけであり、下層は弥生時代後期後葉から終末にかけての土器が多く出土する。また、050SD001は050SD002に近接する溝状遺構であり、調査区内でこの溝は終結する。出土遺物の時間的位置づけの検討によりこの2本の溝状遺構は造り替えによるものと判明している。新旧関係は050SD001(旧)→050SD002(新)である。

土塁については、H区においては土層堆積状況から基盤土の流れ込みが環濠内側から認められ、従って土塁の構築がE区とは逆の位置にあったことが想定される。また、本遺跡の南側には羽田遺跡が展開しており旧来の調査により弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡や遺物を出土しており集落域の中心が南側にあったことを示している。

また、大分市域において同様の溝状遺構を検出した遺跡例としては、多武尾遺跡^{註3}・賀来中学校遺跡^{註4}・雄城台遺跡^{註5}・北の崎遺跡^{註6}・若宮八幡宮遺跡第1次調査^{註7}等がある。どの遺跡も環濠集落的景観を示すものとされている。溝状遺構の廃絶にともなう土器の大量廃棄も各遺跡地で行われており、廃棄時期は弥生時代後期終末から古墳時代初頭に集中する。また遺跡の立地条件をみても低地遺跡に限らず、独立丘陵上や舌状台地の先端部に位置する遺跡においても(雄城台遺跡・北の崎遺跡など)その例が増加している。

第15表 弥生時代後期～古墳時代前期溝状遺構一覧表

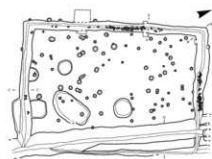
遺構記号	検出番号	時代(詳細)	断面形状	規模			方向	掲載報告書
				長さ(m)	幅(m)	深度(m)		
013SD003	30	弥生時代後期前期前後	V字形	11.0(検出)	1.2(検出)	0.34	東西方向	下部Ⅷ P159 第192図
055SD001	30	弥生時代後期後葉～終末	棒子型		2.0(最大)	1.0	南北方向	下部Ⅴ P154 第149・150図
050SD001	30	弥生時代後期～終末	V字形	12.0	3.25	1.54	ほぼ南北方向	下部Ⅵ P46 第31図
037SD001	30	弥生時代後期終末	V字形	不明	2.34(検出)	1.1	南北方向	下部Ⅴ P80 第70図
017SD002	30	弥生時代後期終末	逆台形	6.3(検出)	2.0	0.9(推定)	北から南西方向に弧を描く	下部Ⅵ 2 P19 第24図
017SD007	30	弥生時代後期終末	U字形後一段掘り下り逆台形	7.8(検出)	2.8(最大)	1.4	東西方向	下部Ⅵ 2 P18・19 第22・23図
043SD001	30	弥生時代後期終末	V字形	12.0(検出)	2.0	1.1	南北方向	下部年報5 P13 第6図
115SD1375	—	弥生時代	逆台形か?		9.0～13.0		南北	下部Ⅱ
115SD1357	—	弥生時代	V字形	19.0(検出)	1.7	0.66±α	東西	下部Ⅱ
050SD002	30	弥生時代後期～古墳時代初頭	V字形		2.70	1.34	北西～南東	下部Ⅵ P62 第50図
005SD002(4T)	30	弥生時代終末～古墳時代初頭	V字形	6.0(検出)	5.4(検出)	1.87	東西方向	下部Ⅷ P78・79 第93～95図
013SD002	30	弥生時代終末～古墳時代初頭	V字形	12.0(検出)	2.50	1.00	東西方向	下部Ⅷ P150・151 第184・185図
100SD025	—	古墳時代前期前半～中頃	U字形	18.0(検出)	0.4～0.5	0.1～0.2	北西～南東	下部Ⅵ P208・210 第197・200図
100SD026	—	古墳時代前期前半～中頃	U字形	18.0(検出)	0.4～0.5	0.2～0.3	北西～南東	下部Ⅵ P208・210 第197・200図
100SD028	—	古墳時代前期前半～中頃	逆台形か?	18.0(検出)	0.5～0.6	0.3～0.35	北西～南東	下部Ⅵ P208・210 第197・200図

註4 大分市教育委員会 1992『賀来中学校遺跡』大分市賀来中学校プール移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

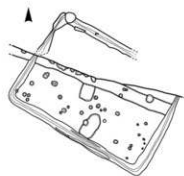
註5 大分県教育委員会 1987『雄城台第8次発掘調査の概要』

註6 大分市教育委員会 1990『北の崎遺跡』『大分市埋蔵文化財調査年報1』—平成元年度—

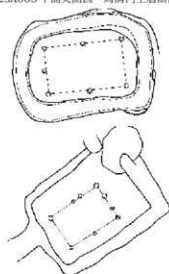
註7 大分市教育委員会 2006『若宮八幡宮遺跡第1次調査報告書』第1次発掘調査—上野ヶ丘中学校の校舎建替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



第40図 052SX003 平面実測図・周溝内土層断面模式図



第41図 052SX001 平面実測図・周溝内土層断面模式図および 113SX433 平面実測図



第42図 上野遺跡群 隅丸長方形周溝模式図(上)
横尾遺跡群 第62次調査 SX350(下)



第43図 方形周溝遺構検出地とその周辺

第16表 弥生時代後期～古墳時代前期周溝遺構一覧表

遺構名	調査番号	時期	規模		平面形状	断面形状	掲載報告書
			大きさ (m)	深度 (m)			
052SX001	41	弥生後期後葉～終末	東西長 12.0 南北長 7 + a	0.7	長方形	V字 (幅 0.55)	下部IV P75 第92図
052SX003	40	弥生後期後葉～終末	9.2 × 13.3	0.7	長方形	V字 (幅 0.55)	下部IV P77 第94図

方形周溝遺構

第50次調査の方 下郡遺跡群で確認されている方形周溝遺構は弥生時代後期後葉から弥生時代後期終末に比定される。第50次調査で052SX001・052SX003の2基が確認されており、また、第113次調査では、052SX001と接続する周溝遺構のコーナー部 113SX433を検出している。

第52次調査の方 052SX001の規模は12.0 × 7.0 + a m、深度は0.7 m、主軸方向はN-32° -E、052SX003は9.2 × 13.3m、深度は0.7 m、主軸方向はN-22° -Eである。断面形状はどちらもV字状を呈する。052SX001と052SX003の遺構間は5 mほどしか離れておらず、時期差を持って構築された、あるいは同時並存していたものなのかは現状では不明である。遺構内には建物跡等の施設は存在せず遺構の性格は不明である。同様の遺構としては弥生時代中期から弥生時代後期前葉の大大市内上野遺跡群^{〔註3〕}内の隅丸長方形の周溝遺構、また弥生時代後期後葉の横尾遺跡群第62次調査^{〔註3〕}検出の方形

市内の方形周溝遺構

周溝遺構等があるが、いずれも周溝内部に掘立柱建物跡が検出されており、こういった点で下部遺跡群内検出の遺構とは明らかに異なる様相を示している。また出土遺物もミニチュア土器等が多く出土しており祭祀的な空間であったと推定される。一方、下部遺跡群検出の方形周溝遺構からは遺物の出土量が極めて少量であり、その中でも高坏脚部の出土が大部分をしめる点から非日常的な空間地であった可能性を想定できる。

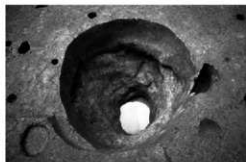
環濠と周溝

第43図はH区・E区の環濠集落と方形周溝遺構が検出された下部遺跡群第52次調査区の位置図である。E区環濠とH区環濠は直線距離にして200mほどであり、そのちょうど中間に第52次調査区は位置している。E区環濠の存続年代は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭であり、H区環濠は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけてである。それぞれの環濠の消長は時期幅にズレがあるが、両者の併存する時期は弥生時代後期後半である。第52次調査周辺の当該期の遺構は希薄となっていることから両集落の関連性の中で特別な空間・特別な場であったと考えられる。

井戸状遺構

本遺跡内においての井戸状遺構の検出例は少ないが、遺存状況の比較的良好なものを第47図に掲載した。また、第46図は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての井戸状遺構の分布図である。これを見ると前述した該期の住居密集域にはばらばらになっている。平面形状は円形またはいびつな方形プランを呈しており、井戸内部は素掘りであり袋状となっている。規模は平均して径2.0～3.0m、深度は2.0m前後であり、井壁には機能時の止水ラインと思われる挟りが認められる。

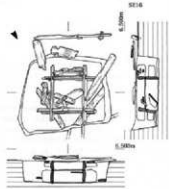
井戸状遺構



第44図 第127次SE170 完掘状況

全国的に見ても弥生時代における井戸状遺構は例が少なく、宇野隆夫氏の「井戸考」^[註8]においても弥生時代前・中期における井戸状遺構の検出例は36例となっており、その大多数が素掘りの井戸である。北部九州地方では井戸内から加工した木材が出土しこれが井戸材である可能性が示されている例もあるが、この段階では井壁を保護する技術が用いられつつあった時代としている。そのような中、佐賀県三日町（現小城市三日町）土生遺跡^[註9]では弥生時代中期にすでに一本割り貫き材を使用した井戸跡が検出されており、さらに井戸枠を伴った井戸跡も検出された。これは井戸枠を用いた井戸の祖形にあたることも全国的にも注目されている遺構である。弥生時代後期後葉以降になると丸太割抜き井戸例が認められるようになるが、古墳時代においても竪穴住居に住む人々

上生遺跡の井戸



第45図 佐賀県三日町土生遺跡SE116

実測図

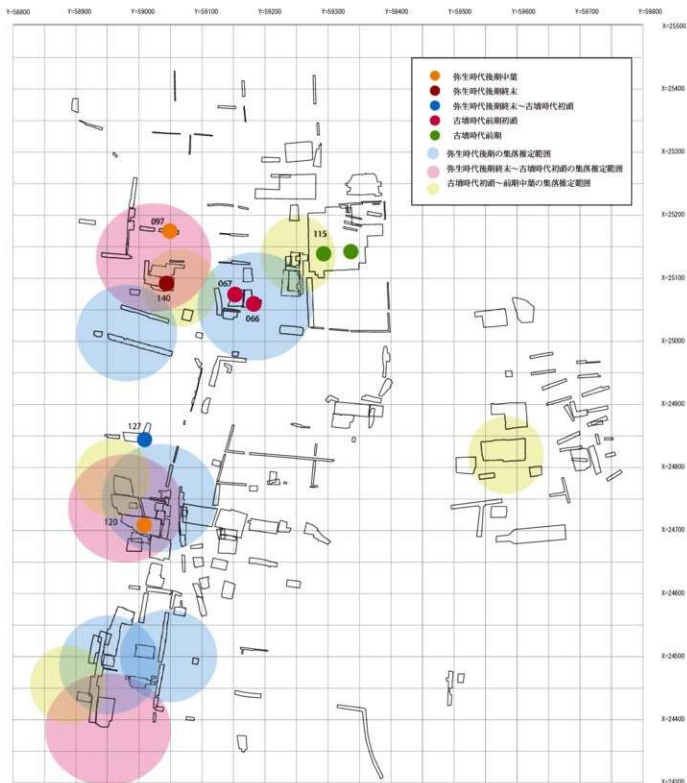
120次SE1090 素掘りの井戸を使うことが多かったと報告されている。また、本遺跡群内の井戸状遺構検出例の中で

註8 大分市教育委員会 1993『上野遺跡』一大分市立美術館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

註9 大分市教育委員会 1997『横尾遺跡群第62次調査』『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.8 1996年度

註10 宇野隆夫 1985『井戸考』『史林』第65巻 第5号 史学研究会

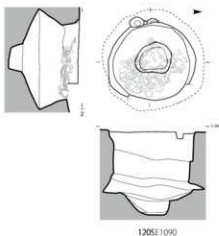
註11 佐賀県小城市三日町教育委員会 2005『第7章 土生遺跡』『戊 赤司 赤司東 深川南 土生』一佐賀県西部導水路工事に伴う文化財調査報告書一



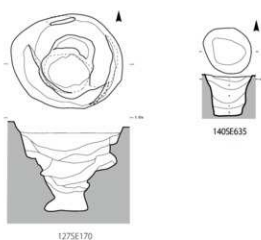
第 46 図 弥生時代後期～古墳時代前期戸状遺構分布図 (1/6,000)

も 120SE1090 は機能停止後、一定期間を経た後に人為的な埋め戻しを行っており、その際に大量の土器廃棄を行っている。その出土遺物の中には弥生時代後期中葉前後の大型の皿（盤）が出土しており注目される。この資料には、ムシロ目痕跡が底部に顕著に残っており、他に例を見ない遺物である。

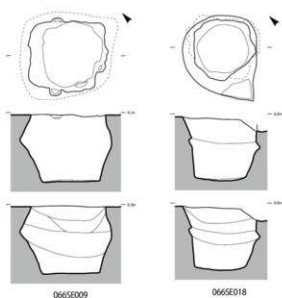
【弥生時代後期中葉前後】



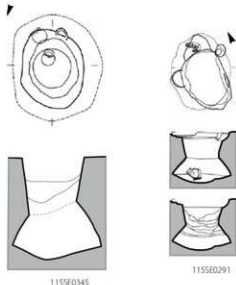
【弥生時代後期終末】



【古墳時代前期初頭】



【古墳時代前期～中期】



第 47 図 弥生時代後期～古墳時代前期井戸状遺構実測図集成 (1/100)

第 17 表 弥生時代後期～古墳時代前期井戸状遺構一覧表

遺構名	探洞番号	時 期	平面形状	規 模		構 造	掲載報告書
				大きさ (m)	深度 (m)		
120SE1090	47	弥生時代後期中葉前後	円形	径 2.3	2.2	・ 土盛りりの井戸 ・ 井戸機能停止後、ある程度の時間経過後人為的に埋め戻し	下部VI P326 第 291 図
097SE051	—	弥生時代後期中葉前後	円形	径約 3.0	1.6	・ 土盛りりの井戸 ・ 5 回以上の掘り直し ・ 0.6 m 下がったあたりに挟り (水による侵食) 当時の水跡線	年報 9 P34
140SE635	47	弥生時代後期終末	円形	径約 1.2	1.0 (現存)	・ 土盛りりの井戸	下部 III P 266 第 239 図
127SE170	47	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	楕円形	2.4 × 2.9	2.35	・ 土盛りり井戸 ・ 4 回以上の掘り直し ・ 旧水位点、挟りあり ・ 水の侵食作用により崩壊したものの	年報 12 P25・26
066SE009	47	古墳時代前期初頭	不整形	1.8 × 2.0	1.8	・ 土盛りりの井戸 ・ 標高 4.6 m の位置に挟り (潜水位の位置)	下部 IV P133 第 192 図
066SE018	47	古墳時代前期初頭	不整形円形	径約 2.0	1.6	・ 土盛りりの井戸 ・ 地表面から 0.5 m 下位に挟り (潜水ライン)	下部 IV P136 第 194 図

竪穴住居跡

弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴式住居跡の時代区分については切り合い関係や出土遺物から推定される年代から導き出せる小画期により弥生時代後期前葉から中葉、弥生時代後期後葉から終末、弥生時代後期終末から古墳時代初頭、ならびに古墳時代前期初頭以降の4時期に区分した。それに基

づき、第50～52図の集成を作成している^{註12}。

次に住居構造について検討する。

主柱穴

竪穴床面に掘り込まれた小ピット群を柱穴として扱い、中でも大きさ、形状、深度がほぼ一定の規格によるものを住居を支える主柱穴としている。弥生時代後期前葉から後葉にかけての主柱穴数はさまざまで、6本～7本柱のもの、4本柱のもの、2本柱のもの等がある。これは住居の規模に起因するものと考えられる。弥生時代後期後葉から終末になると、4本柱のものが主流となり、住居規模も平均化してくるようである。これについては第48図に各時代別の住居床面積を示してある。時代の推移に伴い床面積が縮小傾向にあることが看取されるが、弥生時代後期から古墳時代初頭には、住居建替に伴い規模の拡大・縮小が頻繁に実施されており、住居の大小にバラつきが認められる。その後、古墳時代初頭以降には住居の縮小化が齊一的に進行していったことが読み取れる。

住居規模

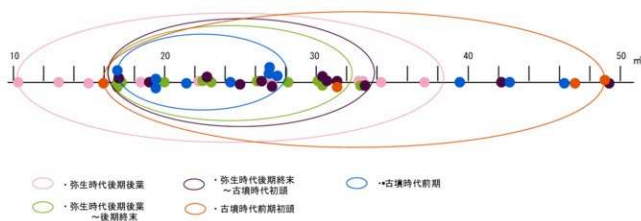
住居形態

平面プランについては県内各地の住居変遷（第IV章第3節参照）同様に、弥生時代中期の円形プランから弥生時代後期の方形へと移り変わっていく点と大筋では変わりはないが、本遺跡群を含む大分平野では弥生時代後期後半には円形住居、多角形住居、隅丸方形住居が混在し、後期終末には方形、長方形プランの住居へと収斂されていくといった特徴がある。弥生時代後期後葉から終末になってもO13SH111や市内城南遺跡SH001・市内守岡遺跡SH10などのように円形住居が残る点も他地域とは異なる大きな特徴である。

長楕円土坑

次に第二の特徴として住居の中央や南側の主柱穴間に長楕円形土坑を配する点があげられる。第50～52図の住居集成を見てもわかるようにこの土坑は住居のプランに関係なくほとんどの住居に設けられている。地床が¹の南に位置することが多く、土坑内部には灰が溜まっている例が大半を占めている為、灰溜まり遺構としての機能も想定されている。また深さは10cm～30cm前後のものが多く屋内の貯蔵穴とは考えにくい。この構造は、本遺跡群内だけに見られるものではなく、大分平野及び大野川流域の各遺跡内から検出される同時期の竪穴住居跡にも認められる特徴である。これについてはすでに、高橋徹氏が『萩台地の遺跡』^{註13}の中で言及している。遺構の性格等に関する詳細については現段階では不明である。

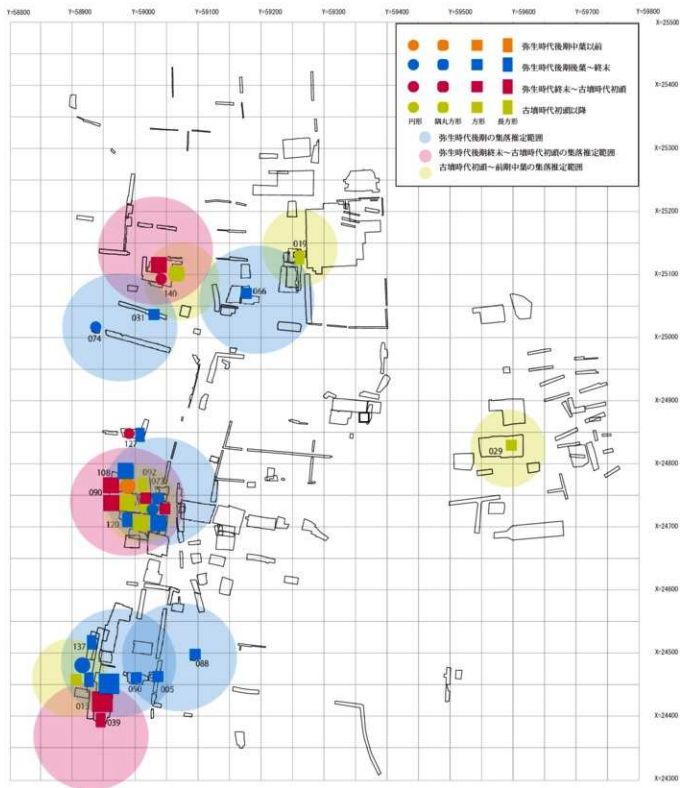
建て替え



第48図 弥生時代後期～古墳時代前期にかけての住居面積分布図

註12 大分県立歴史博物館 2003『特別展 二千年の鼓動 弥生土器の世界』

註13 高橋 徹 1983『寺の前遺跡および中山遺跡について』『萩台地の遺跡』 萩町教育委員会

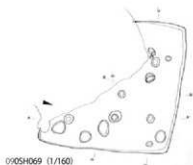


第 49 図 弥生時代後期～古墳時代前期住居跡分布図 (1/6,000)

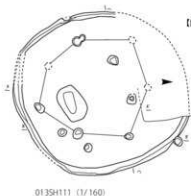
【弥生時代後期前葉～中葉の住居】



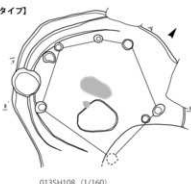
【弥生時代後期中葉～後葉の住居】



【弥生時代後期後葉の住居】



【円形タイプ】

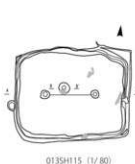


013SH108 (1/160)



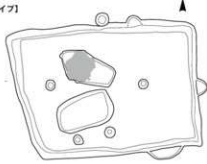
【隅丸方形タイプ】

005SH005(4T) (1/160)



013SH115 (1/80)

【長方形タイプ】



127SH140 (1/80)



第50図 弥生時代後期～古墳時代前期住居跡実測図集成① (1/80・1/160)

屋内施設

弥生時代後期終末から古墳時代初頭の竪穴住居の建て替えについては、その多くが同一地点において建て替えを実施しており、建て替えによって住居が拡大するものと縮小するものの2通りが認められる。貼り床は建て替えによって粘土により充填されることが多く、その際には先述の南側主柱穴間の長楕円形土坑は埋められ、最終段階（古墳時代前期）の住居跡には存在しない例が多い。

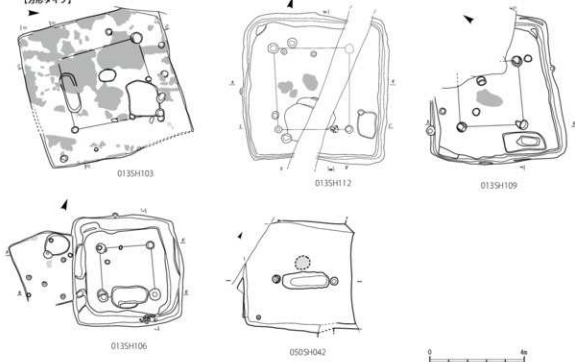
ベット状遺構

また、屋内に先述の灰溜め遺構・炉跡以外に複数の土坑（第51図013SH121）が認められる。この土坑の機能等詳細は不明ながら屋内貯蔵穴の可能性も想定できる。その他、比高0.1～0.2mの高床部が住居内の片側や四隅等に認められたり（第52図092SH270）、床面に小溝状の遺構が掘られていることがある。前者についてはベット状遺構と呼称しており、これは弥生時代中期後半から古墳時代中期に、主に西日本に認められる施設である。この高床部分の硬化は本遺跡群内では明確に認めることができず、機能に関しては、福岡県小郡遺跡の住居跡に見られるような物置等の可能性も想定できる^{註14}。住居内の間仕切りと考えられる小溝（第52図051SH023）は、弥生時代終末から古

註14 石野博信 1990 「第2章 竪穴住居の床面利用法」『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館

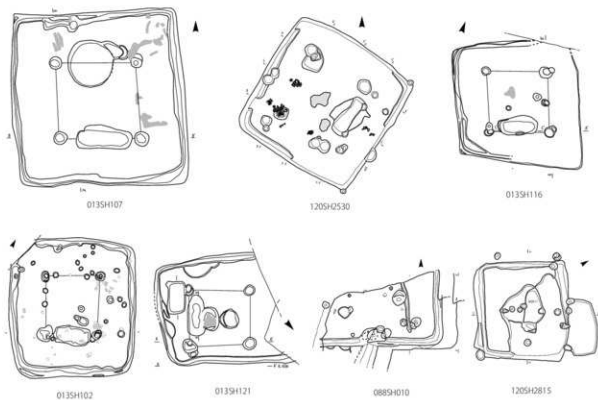
【弥生時代後期後葉の住居跡】

【方形タイプ】



【弥生時代後期末の住居跡】

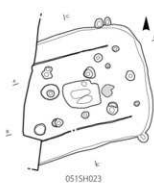
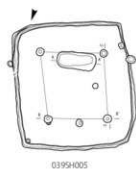
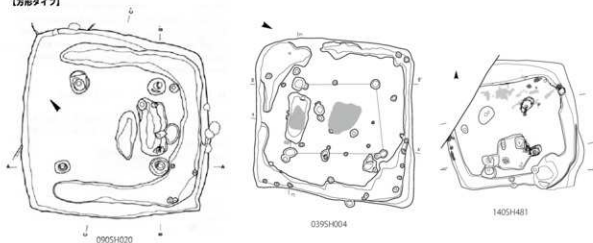
【方形タイプ】



第 51 図 弥生時代後期～古墳時代前期住居跡実測図集成② (1/160)

【弥生時代後期末～古墳時代前期の住居跡】

【方形タイプ】

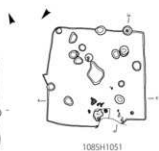


【隅丸方形タイプ】

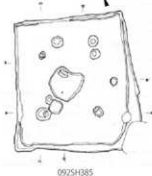
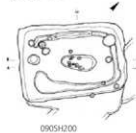


【古墳時代前期の住居跡】

【方形タイプ】



【長方形タイプ】



【隅丸長方形タイプ】



第 52 図 弥生時代後期～古墳時代前期住居跡実測図集成③ (1/160)

機能の検討 墳時代初頭以降には認められない施設である。また、注目される特異な構造をもつ竪穴住居跡に、第 92 次調査で確認した 092SH250 がある。この住居の時期は、出土遺物から古墳時代初頭から古墳時代前期前葉である。この住居内の床面中央において検出した土坑(092SX290)は、土坑の北方向にトンネル状の穴を掘り、煙突状の構造を呈している。さらにこの土坑の内壁及び土坑深部には被熱痕が認められ硬化している。通常の地床がとは明らかに異なっておりその機能が注目される。このような遺構は本道跡群内には他に例がなく、その用途、機能等の詳細についての検討が今後の課題となる。

集落について 第 49 図は弥生時代前期～古墳時代前期の時期を 4 つに区分し、それぞれ時期別に竪穴住居の密集地を全体図に落とし、その変遷を示したものである。

旧河道西側 旧河道の西側に広範囲に広がる微高地上の密集地は、弥生時代中期に一つの画期を示すが、その後中期の溝状遺構は廃絶し、住居遺構も減少する。しかしながら弥生時代後期に再び増加傾向を示し、環濠が機能する弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて爆発的な増加をみせる。この密集域を一つの単位と仮定すれば、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落域は、第 49 図の分布図に示すように下部遺跡群南側の H 区第 39 次・第 13 次調査を中心とした周辺やそのさらに南側に展開する羽田遺跡までの範囲を想定することができる。また E 区の環濠を中心とした周辺に二つほどの集中域が存在していたと推定される。この E 区環濠に圍繞される敷地内

H 区周辺



第 53 図 羽田遺跡上空から下部地区を望む

では後世の削平等により遺構が欠失しており住居跡の遺構は残念ながら確認できなかったものの、環濠内からは大量の土器が出土しており、大規模な集落の存在を想定させる。また、当地は大分川に近接する立地であり、リバーカット面の一部も確認している。すなわち、この調査区西端周辺では弥生時代後期の遺構がカットされているのである。143 地点におよぶ調査で検出した竪穴住居跡はおおよそ 210 基を数えるが、その大半は弥生時代後期から終末のもので占められている。

古墳時代前期以降 環濠が廃絶される古墳時代初頭以降についての居住域は第 108 次調査の周辺において確認しているが、盛行期は古墳時代初頭から古墳時代前期である。この集落域とみなされる一帯は弥生時代の二つの環濠集落のちょうど中間地点に位置し、住居形態は方形を主体とするものである。また、出土土器は在土土器と共伴して布留式系土器も出土する。その割合は環濠を有する集落跡に比して高く、時間の経過に伴って増加する傾向を指摘することができる。

市内道跡 市内の道跡には本道跡同様に弥生時代後期後葉に集落が大規模化する遺跡として、横尾遺跡群が挙げられる。また、賀東中学校遺跡のように新たに出現する低地の集落遺跡が散見されるのも弥生時代後期後葉以降である。その後弥生時代後期後葉の新段階に入ると守岡遺跡のように比高差 50 m の独立丘陵上にも進出し、さらに大分平野内にも遺跡数が増加するが、この時期に出現した集落遺跡はその大半が古墳時代前期前葉まで継続するものの、その後途絶する点を大きな特徴とする。

第18表 弥生時代後期～古墳時代前期住居跡一覧表①

遺構名	棟間番号	時期	平面形状	規模 (m)	主柱穴数	火処	壁溝	内部施設	掲載報告書
108SH175	50	弥生時代後期前期～中葉	隅丸方形 or 隅丸長方形	6.0 × 3.5+ a	1本 (現状)		貼床下にあり	・船床	下部V P237 第246図
090SH069	50	弥生時代後期中葉～後葉	方形	5.45 × 5.5	2本		0.25	・船床	下部I P98 第85図
120SH1215	—	弥生時代後期後葉前後	方形	5.3 × 4.2+ a	不明			・船床	下部VI P356 第329図
005SH005 (4T)	50	弥生時代後期後葉	隅丸方形	5.8 × 5.7	4本		0.28 (現状)	・南北面に張り出し部を持つ ・南側柱穴間に1.1 × 0.68、深さ0.11の土坑あり	下部VIII P92 第110図
013SH103	51	弥生時代後期後葉	方形	5.1 × 5.3	4本		なし	・南側柱穴間に1.46 × 0.5、深さ0.1の土坑	下部VIII P167 第203図
013SH106	50	弥生時代後期後葉	方形	4.7 × 4.7	4本		幅0.4 深さ0.24	・西側張り出し遺構、深さ0.4m ・南側柱穴間に1.6 × 0.64、深さ0.16の土坑	下部VIII P180 第215・216図
013SH108	—	弥生時代後期後葉	円形～不規則円形	7.0 × 6+ a	5～6本	中央に地床跡	幅0.48 深さ0.1	・地床跡の南側に1.6 × 1.36、深さ0.16の土坑	下部VIII P183 第220図
013SH109	51	弥生時代後期後葉	方形	5.5 × 6.0	4本 (推定)	中央に地床跡	幅0.4 深さ0.16	・横切面から床面までの深さ0.8 ・床面南西部に1.6 × 0.8、深さ0.1の土坑	下部VIII P184 第221図
013SH111	50	弥生時代後期後葉	円形	径6.9	7～8本		幅0.2 深さ0.1	・床面南に1.52 × 1.0、深さ0.2の楕円形遺構	下部VIII P187・190 第225・228図
013SH112	51	弥生時代後期後葉	方形	6.2 × 6.0	4本	中央に地床跡 (奥数あり)	幅0.4 深さ0.16	・横切面から床面までの深さ0.64 ・床面南西部に1.6 × 1.0、深さ0.1の土坑 ・床面の南東部1.52 × 0.6、深さ0.2の方形土坑	下部VIII P191 第230図
013SH115	50	弥生時代後期後葉	方形	3.8 × 4.8	2本		幅0.2 深さ0.1	・土柱穴間に径0.4の深さ0.15の円形張り込み	下部VIII P194 第237図
127SH140	50	弥生時代後期後葉	長方形	4 × 2.6	2本			・船床 ・壁土の残骸あり ・灰層土坑・不明土坑	年報12 P24・25
050SH042	51	弥生時代後期後葉	方形	4.6 × 4.55+ a	2本			・床面までの深さ0.45 ・柱穴間に1.95 × 0.7、深さ0.2mの楕円土坑	下部VI P66 第54図
013SH110	—	弥生時代後期後葉～終末	方形 or 長方形	不明					下部VIII P185 第223図
013SH101	—	弥生時代後期後葉～終末	方形 (推定)	3.2+ a × 3.6+ a	不明	不明	不明	・船床	下部VIII P163 第200図
013SH102	51	弥生時代後期後葉～終末	方形	5.8 × 5.2	4本 (径0.4)		幅0.35 深さ0.13	・南よりの土柱穴間に1.6 × 0.8、深さ0.2の土坑 ・住居中央が高く、壁溝付近が最も低くなるようになっている	下部VIII P164 第201図
031SH022	—	弥生時代後期後葉～終末	方形	5.5 × 5.6 (推定)				・南側柱穴間に楕円形土坑を配置	下部V P42 第34図
108SH254	—	弥生時代後期後葉～終末	方形	6.0 × 3.5+ a	2本 (現状) 4本 (推定)	地床跡 (床中央)	あり	・貼置土による船床 ・船床充填に伴う生活面の変化	下部V P241 第252図
108SH173	—	弥生時代後期後葉～終末	方形	3.7 × 3.8+ a	4本			・船床あり、その下から灰層土坑	下部V P235 第244図
005SH001 (3T)	—	弥生時代後期終末	隅丸方形 (推定)	不明	1本 (現状) 4本 (推定)			・船床あり (部分的) ・床面直上に壁土塊、広く分布する	下部VIII P75 第88図

第19表 弥生時代後期～古墳時代前期居住跡一覧表②

遺構名	探検番号	時期	平面形状	規模 (m)	主柱穴数	火処	壁溝	内部施設	掲載報告書
013SH107	51	弥生時代後期終末	方形	4.95 × 4.8	4本		幅0.4 深さ0.1	・南側主柱穴間に 2.4 × 0.8、深さ 0.16の土坑	下部Ⅴ P181 第218図
088SH010	51	弥生時代後期終末	方形	6.8 × 3.3 + a	4本 (推定)		あり	・東側に間仕切りの 痕跡	年報 8 P27 第29図
013SH116	51	弥生時代後期終末	方形	5.65 × 5.45	4本	地床印 (床中央)	幅0.32 深さ0.1	・南側主柱穴間に 1.68 × 0.8、深さ 0.48の土坑	下部Ⅴ P195 第239図
013SH113	—	弥生時代後期終末	方形	5.0 × 5.2	4本		幅0.3 深さ0.1		下部Ⅴ P193 第234図
074SH002	—	弥生時代後期終末	円形 or 隅丸 方形 (推定)	径 6.0 (推定)	6～8本 (推定)		幅0.3～0.5 深さ0.2		下部Ⅴ P168 第168図
108SH256	—	弥生時代後期終末?	方形	4.7 × 4.7	2本			・中央に灰層土坑 (貼床上面) 1.5 × 0.66、深さ0.13	下部Ⅴ P242 第253図
092SH360	—	弥生時代後期終末	長方形	6.5 × 3.45	2本			・壁高0.12	下部Ⅰ P243 第294図
092SH160	—	弥生時代後期終末	隅丸方形	4.15 × 4.25	2本	なし		・床面西側に 2.2 × 0.9、深さ0.65の 土坑。炭化物を含 む土層	下部Ⅰ P214 第243図
066SH008	—	弥生時代後期終末前後	方形	4.5 × 3.8	4本		幅0.2 深さ0.1	・壁高0.1	下部Ⅳ P139 第198図
120SH2815	51	弥生時代後期終末頃	長方形	4.41 × 3.86	2本 (推定)		あり	・灰層土坑	下部Ⅴ P368 第342～343 図
120SH2530	51	弥生時代後期終末前後	方形	5.74 × 5.84		2基の 地床印	幅0.15 深さ0.1 (柱穴内の 西・南西・ 北東角にあり)	・上面と下面で主柱 の位置あり ・建特えのみか ・灰層土坑 0.9 × 0.3 (東側主柱穴間)	下部Ⅴ P357 第331図
013SH117	—	弥生時代後期終末前後	楕円 (現状) 円形	不明	4本 (推定)		東側のみ残 存	・不整形土坑 (0.2 × 1.2、深さ0.16) が南側にあり	下部Ⅴ P197 第241図
013SH121	51	弥生時代後期終末前後	方形	4.6 × 5.6 + a	4本	砂跡 (径 0.7、深 さ1.76)	幅0.3 深さ0.2	・灰層土坑 (1.76 × 0.68、深さ0.46) ・中央に径0.8、深 さ0.42	下部Ⅴ P198 第246・248図
013SH123	—	弥生時代後期終末前後?	方形	5.5 × 3.0 + a	不明			・不明	下部Ⅴ P200 第249図
137SH003	—	弥生時代後期	隅丸方形 (現状)	4.4 (西壁長)	確認できず		部分的にあり (北壁のみ) 幅0.3	・中央南より 1.2 × 0.8、深さ0.1 の土坑あり	下部Ⅴ P346 第357図
013SH133	—	弥生時代後期	長方形	3.7 × 3.6			幅0.2 深さ0.1		下部Ⅴ P169 第205図
120SH0150	—	弥生時代後期	不整形な方 形	4.0 × 4.2	4本		なし	・南側主柱穴間に 1.5 × 0.68、深さ 0.2	下部Ⅴ P355 第328図
092SH365	—	弥生時代後期	長方形	3.8 × 4.2 + a	2本 (現存) 4本 (推定)				下部Ⅰ P244 第296図
051SH023	52	弥生時代後期終末～古 墳時代前期初頭	隅丸方形	5.0 × 5.5 + a	4本			・貼床 (厚さ10 cm) ・南北壁部にベッド 状遺構・間仕切り 板の痕跡あり。南 り出しではなく 10 cmほどの貼床 と同じ土で形成 されている	下部Ⅳ P32 第33図
073SH017	—	弥生時代後期終末～古 墳時代前期初頭	方形 or 隅丸 方形 (推定)		不明		一部あり	・東壁長 4.5 (推定)	年報 7 P32・33
127SH350	—	弥生時代後期終末～古 墳時代前期初頭	方形	5.6 × 4.8	4本 (推定)			・貼床あり ・やや東よりに灰層 土坑	年報 12 P24・25

第20表 弥生時代後期～古墳時代前期住居跡一覧表③

遺構名	探検番号	時期	平面形状	規模 (m)	主柱穴数	地床 が? 中央に 礎土	壁溝	内部施設	掲載報告書
039SH001	—	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	長方形	8.0 × 6.2	4本		なし		下部Ⅲ P222 第168図
039SH002	—	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	隅丸方形	4.0 × 4.2	4本		なし	・南側主柱穴間に 灰層土坑 (1.6 × 0.7、深さ0.15)	下部Ⅲ P222 第169図
039SH003	—	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	隅丸方形 or 方形	不明	不明			・灰層土坑 (部分) 深さ0.2	下部Ⅲ P222 第170図
039SH005	52	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	方形	5.0 × 5.4	4本		幅0.2 深さ0.1	・灰層土坑 (南側主柱穴間 1.7 × 0.7、深さ0.1)	下部Ⅲ P224 第172図
039SH006	—	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	方形	3.8 × 4.2 + a	3本 (現状) 4本 (推定)		なし		下部Ⅲ P225 第173図
039SH007	—	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	方形	5.0 × 2.8 + a	2本 (現状) 4本 (推定)			・南側主柱穴間に (1.48 × 1.2、深さ0.4) 不整形の 土坑	下部Ⅲ P225 第174図
039SH009	—	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	長方形	4.8 × 4.0	不明			・灰層土坑	下部Ⅲ P226 第175図
039SH013	—	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	方形	4.0 × 3.5 + a	4本	南側主柱穴間に 礎土	なし		下部Ⅲ P227 第177図
039SH016	—	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	方形	5.3 × 5.8	4本		幅0.3 深さ0.1		下部Ⅲ P227 第178図
039SH004	52	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	方形	6.5 × 6.5	4本	住居中央に 礎土	幅0.4～0.8 深さ0.2	・南側主柱穴間に 灰層土坑 (2.1 × 0.8、深さ0.15)	下部Ⅲ P224 第171図
140SH430	52	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	隅丸方形	5.6 × 5.6				・中央部に隅丸方形 (1辺1.6、深さ0.2) の土坑検出。 炭化物を多く含む	下部Ⅲ P 268 第243図
140SH455	—	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	方形	5.0 × 5.0					下部Ⅲ P 271 第247図
140SH481	52	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	方形	5.5 × 5.5	4本		幅0.8 深さ0.25	・南側主柱穴間に 1.5の隅丸方形土 坑 (灰層か?)	下部Ⅲ P 276 第253図
090SH020	52	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	方形	5.85 × 5.75	4本	地床砂 (床面中央)	幅0.5 深さ0.1 (コ の字状)	・南側に2基の土坑 (1.55 × 0.65、 深さ0.1) (1.8 × 0.9、深さ 0.2)	下部Ⅰ P74 第51～53図
092SH280	—	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	不整形方形	4.7 × 5.0	4本		確認されな い		下部Ⅰ P232 第275・276図
091SH001	—	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	方形		2本 (現状) 4本 (推定)			・長径1.0の土坑南 壁に沿ってあり	下部Ⅰ P164 第177図
108SH242	—	弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭	長方形	3.0 × 4.0 + a	2本				下部Ⅴ P239 第248図
140SH426	—	古墳時代前期初頭	隅丸方形 (推定)	4.0 × 4.0 (推定)	2本 (現状)			・船床	下部Ⅲ P267 第241図
140SH465	52	古墳時代前期初頭	隅丸方形	7.0 × 7.0 (推定)	2本 (現状)		幅0.2 深さ0.1		下部Ⅲ P272 第248図
140SH620	52	古墳時代前期初頭	隅丸方形	8.0 × 8.0	不明		幅0.3 深さ0.25	・船床	下部Ⅲ P271 第247図
120SH0050	—	古墳時代前期初頭	方形	7.0 × 6.7	4本		幅0.1～0.2 深さ0.1	・南側に屋内貯穴 (1.0 × 0.7、深さ 0.45)	下部Ⅵ P348 第317図
108SH1051	52	古墳時代前期初頭	方形	5.8 × 5.5	4本		幅0.2 深さ0.1 (部分分)	・南側主柱穴間に長 方形土坑 (2.1 × 0.6、深さ0.15) 灰層土坑	下部Ⅴ P250 第263図
051SH001	—	古墳時代前期初頭	方形 (推定)	3.5 + a m × 3.7 + a m					下部Ⅳ P31 第31図

第21表 弥生時代後期～古墳時代前期住居跡一覧表④

遺構名	採掘番号	時期	平面形状	規模 (m)	主柱穴数	火処	壁溝	内部施設	掲載報告書
090SH200	52	古墳時代前期初頭前後	長方形	0.45 × 3.15	2本	地床9 (1.45 深さ0.1 ×0.65 深さ 0.15)			下部 I P108 第100・101図
092SH250	—	古墳時代前期初頭	方形	6.65 × 5.95	4本			・床面までの深さ 0.5	下部 I P218・219 第249～ 251図
092SH270	52	古墳時代前期初頭	方形	6.4 × 6.65	4本		幅0.3～0.6 深さ0.3	・北、南壁に沿って 0.8～1.1、高さ 0.1程度のベッド 状遺構 (土の積み 上げ)	下部 I P228・229 第296・ 267図
092SH400	—	古墳時代前期初頭	方形 (推定)	2.6 + a × 5.5 + a	2本 (現状) 4本 (推定)		幅0.3 深さ0.1	・中央に3連の土坑 あり ・北壁方向から上字 状の惣仕切り溝	下部 I P257 第318図
013SH104	—	古墳時代前期前葉	長方形	6.4 × 7.2	4本		幅0.2 深さ0.1		下部Ⅷ P 169 第205図
013SH105	—	古墳時代前期前葉	方形	5.1 × 4.8	4本		幅0.35 深さ0.2	・南側土中穴間に 灰層遺構 (1.4 × 0.8、深さ0.2)	下部Ⅷ P 177 第213図
013SH125	—	古墳時代前期前葉	方形	5.0 × 5.4	4本		幅0.2 深さ0.1		下部Ⅷ P201 第251図
019SH005	—	古墳時代前期	長方形	3.6 × 4.92	2本	伊勢なし	なし		下部Ⅷ P236 第286図
092SH380	—	古墳時代前期	方形	4.65 × 4.7	4本		なし		下部 I P248 第301図
092SH385	52	古墳時代前期	長方形	5.5 × 5.05	4本			・奥面中央に径1.4、 深さ0.15の不整 円形土坑 ・敷り床	下部 I P251 第305図
005SH012 (5T)	—	古墳時代前期頃	櫛形基調	5.9 × 3.2 + a m	確認できな い				下部Ⅷ P108 第133図
092SH343	—	古墳時代前期前半	不整形方形 (台形状)	東壁長5.15 西壁長3.8 北壁長4.8	4本			・柱穴間に径0.65 の不整形土坑 (床面 から0.5m掘りこま れている)	下部 I P237 第283・284図
029SH001	—	古墳時代前期後半	方形	4.4 × 3.9	2本	伊勢なし	なし		下部Ⅷ P255 第310図

土 坑

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土坑についての分布を第71図に、また集成図を第55図に掲載している。これによると、分布状況が一定の規範に基づいてサークル状にもならず、断面形状も一般的な貯蔵穴のように袋状になっているわけでもない。平面形状は円形・楕円形・方形・長方形・略方形等バラつきが認められ、形態による時期差も現状では認められないが第137次調査の137SX002や第39次調査の039SK025などはその深さや様相から中期の貯蔵穴と類似するものである。この点に関しては、当遺跡群を含み大分市域で弥生時代の掘立柱建物跡の検出事例が極めて僅少である点との関連の中で、今後留意していく必要のある事象といえる。また、多くの土坑はその用途を明らかにしないが、検出状況や出土遺物等の状況から、焼成土坑、祭祀土坑、土器棺墓と想定される。いくつかの事例について言及する。

土器棺墓

小児用土器棺墓

下部遺跡群で検出した主な土器棺墓には、090SJ398 (弥生時代後期中葉～後葉)・050SJ043・039SJ043・039SJ102 (弥生時代後期後半～終末) 等がある。本遺跡群において検出した土器棺墓は北部九州の事例のような成人用の土器棺ではなく、どれも小児用土器棺墓である。これは大分市内の他遺跡から検出される土器棺もほぼ同様であり、成人用土器棺墓検出事例は市内では認められない。埋置状況はいずれも、大小2個体の土器の上部を打ち欠いて上下から遺体に被せるように埋置する

	タイプと合わせ口縁に埋置するものがある。平面プランは 039SJ102 が方形である以外は円形基調である。弥生時代の土器棺の大部分域内での例には、宮苑井ノ口遺跡・賀来中学校遺跡・玉沢地区条里跡第 2 次調査の 3 遺跡があげられる。
宮苑井ノ口遺跡	宮苑井ノ口遺跡^{註15}では弥生時代後期から古墳時代前期にわたって形成された土器棺墓群であり 11 基ほどが検出されている。複合口縁壺を使用し、切断した口縁部を土坑内に埋置する点、合せ口縁棺の接合部を棺とは別個体の土器片で被覆する点等がこの遺跡の特徴である。
賀来中学校遺跡	賀来中学校遺跡では、土器棺形成が弥生時代後期後葉に限定され、複合口縁壺を使用したものや複合口縁壺+台付鉢の組合せなどもあり、複合口縁壺の口縁部を棺の下に敷きこんだり、副葬品が全く認められない等の特徴がある。
玉沢地区条里跡	玉沢地区条里跡第 2 次調査^{註16}は、弥生時代中期中葉～後期終末まで土器棺形成が続いている。ここでは 19 基のうち 15 基は単棺であり、土器棺を埋置するものがほとんどであるが、4 基程度は合せ口縁棺である。組み合わせとしては、賀来中学校遺跡のような台付鉢を使用したものは認められず、埋設姿勢は水平位が多い、上棺と下棺の長さが同等か上棺のほうが大きい点、単棺例も含めて焼成後穿孔を施している例が多いことなどが特徴としてあげられる。以上の他遺跡の状況を踏まえて改めて下部遺跡群検出の土器棺墓をみると、090SX398 は遺構の上部が削平されており遺存状況が悪いため判然としないが、土器を打ち欠いて埋置しており、遺体に被覆する形で検出されている。また、039SJ102 は弥生時代後期後半の遺構であるが、土器棺の口縁部を破碎しそれを口部に被せるように配置している。下部遺跡群の土器種の組み合わせとしては台付鉢を使用した例はなく、複合口縁壺と襖、あるいは複合口縁壺同士を合わせているものである。土器棺に焼成後穿孔も認められない。このように先述の 3 遺跡とは異なる特徴が本遺跡に認められる。
焼成坑について	焼成坑については、本遺跡群内では弥生時代後期終末から古墳時代初頭に比定される 090SX464 を検出している。しかしながら、「7 世紀以前のものは皆無に等しく、大部分が 8 世紀後半以降のものである。従って古墳時代の焼成遺構の実態は把握されていない」といっても過言ではない^{註17}とあるように、古墳時代やまして弥生時代の焼成坑についてはその検出事例はほとんど確認されていない。このように全国的にみてもいまだに弥生時代の焼成坑の可能性が指摘される遺構は僅少であり、その中で代表とされる遺跡に岡山県の百間川原尾島遺跡^{註18}の遺構がある。ここは遺構の周辺の環境や集落遺構の密度が高く、出土遺物の量も多い理想的な中での検出であるため数少ない焼成坑の好例となっている。次いで大部分域内を見てみると、大部分域の弥生時代の焼成坑（土器窯）については、40 数年前に発見された本遺跡と至近な距離にある羽田遺跡^{註19}の弥生時代中期から後期にかけての 2 基と雄城台遺跡^{註20}からの 1 基が報告例としてある。いずれも円筒形を呈し、露天のものと覆い屋のあるものと推定されている。全国に先駆けた最初の発見であった。今日的な視点から疑問視^{註21}されていることも事実であるが、現状では完全に否定する要素もないといった状況である。
百間川原尾島遺跡	
羽田遺跡	

註15 大分市教育委員会 2005『宮苑井ノ口遺跡第2・3次発掘調査報告書』大分市都市計画事業賀来西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

註16 大分市教育委員会 2002『玉沢地区条里跡 第2次発掘調査報告書』玉沢地区画整理事業及び大規模店舗建設に伴う発掘調査

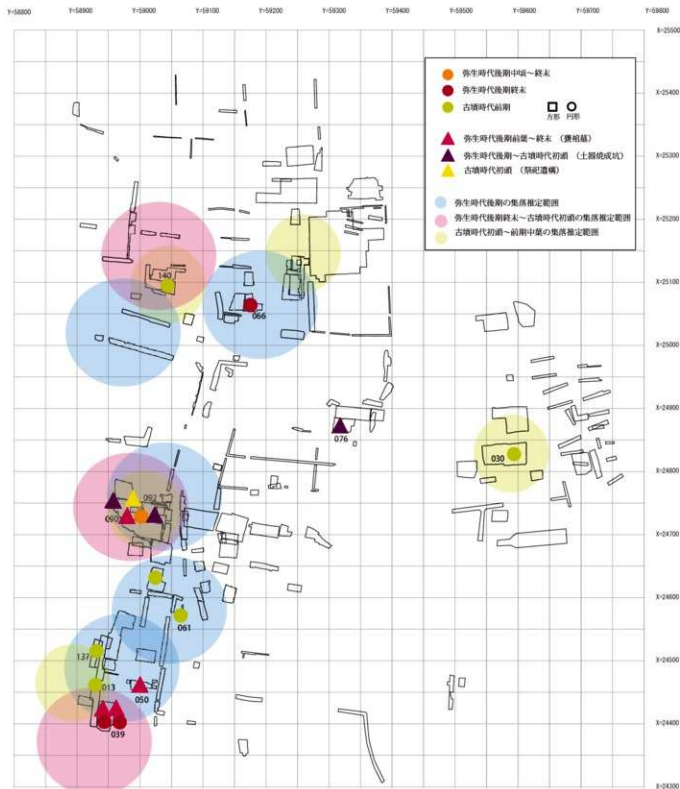
註17 久保田正寿 1989『第2節 土師器の焼成方法』『古代の土師器生産と焼成遺構』竊跡研究会編 真陽社

註18 岡山県教育委員会・国土交通省岡山河川事務所 2008『百間川原尾島遺跡 7 百間川二の荒手遺跡』旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査XⅦ

註19 大分市教育委員会 1995『羽田遺跡Ⅱ』大分市宮羽田住宅に建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

註20 大分県教育委員会 1987『雄城台第8次発掘調査の概要』

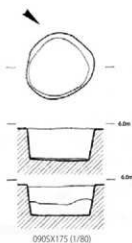
註21 大分市教育委員会 1995『羽田遺跡Ⅱ』大分市宮羽田住宅に建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）



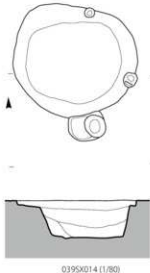
第 54 図 弥生時代後期～古墳時代前期土分布図（1/6,000）

【円形タイプ】

【弥生時代後期後葉～終末】

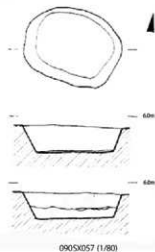


【弥生時代後期終末】



【楕円形タイプ】

【弥生時代後期中頃以降】



【古墳時代前期】

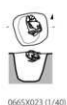


【古墳時代前期後半】

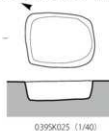


【方形タイプ】

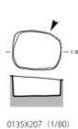
【弥生時代後期中頃】



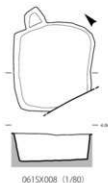
【弥生時代後期終末～古墳時代前期】



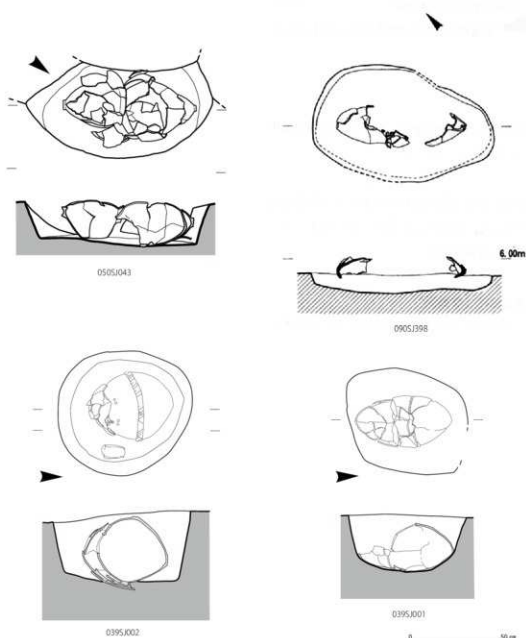
【古墳時代前期前葉】



【古墳時代前期】



第55図 弥生時代後期～古墳時代前期土坑実測図集成① (1/40・1/80)

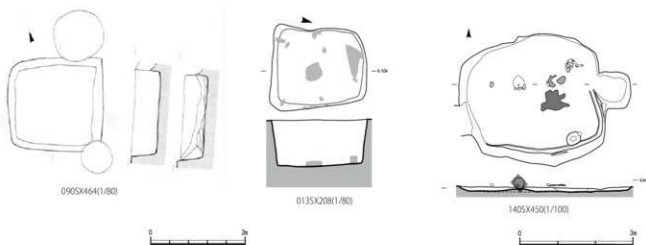


第 56 図 弥生時代後期～古墳時代前期土器棺墓実測図集成 (1/20)

【弥生時代後期末～古墳時代前期】

【古墳時代前期前葉】

【古墳時代前期】



第 57 図 弥生時代後期～古墳時代前期土坑実測図集成 (1/80・1/100)

複数回の土器焼成

090SX464については土坑内の床面付近や西側側面に被熱の痕跡が残っており、また土層観察により土坑使用時に粘土層を床面に貼っていたことがわかる。さらに粘土層と焼土層の互層になっていることから複数回の土器焼成が行われたことが認められる。その互層になって挟まれた焼土内から器面に剥離（焼成時の高熱により）が認められる土器破片が少量見られ、焼成が行われた可能性が高いと推定される。しかしながら原形を留める多くの出土土器群には使用痕が認められることから、焼成直後に廃棄されたものではなく、土坑が機能を停止した後に廃棄されたものと判断される。出土土器の多くは弥生時代後期終末から古墳時代前期前葉である。規模は1.7 m×1.7 mの方形で、深度は0.56 mを測る。

貯蔵穴の二次転用 こうした形態や規模から貯蔵穴の二次転用の可能性も視野にいておく必要があろう。

祭祀遺構について 弥生時代後期終末から古墳時代初期の祭祀遺構と考えられる遺構例には、092SX390、120SH0050内の120SX1080、076SX177・178、090SX448等があげられる。

092SX390は092SD300の埋没

120SX1080

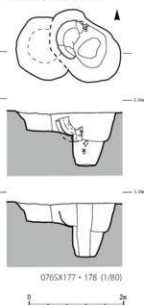
途上において構築されたもので、土坑内の底部に壺と高環を埋置する。これと類似したものが古墳時代初期頭に位置付けられる120SH0050内の120SX1080である。住居廃絶後、柱の抜き取りの際に、体部に焼成後穿孔した複合口縁壺を埋置している。092SX390と同時期のものには076SX177・178があげられるが、この遺構は遺構が廃絶する時の祭祀ではなく、柱を立てる際に裏込め土とともに埋置し祭祀行為を行っていると考えられる。壺棺墓の可能性も残るものの、土層状況から考えると何らかの祭祀に伴うものと推定される。090SX448については、埋土途中から出土した遺物がミニチュア土器であると言う点と、人為的な埋め戻しが認められること等から祭祀遺構と考えられるものである。この遺構には他遺構のような土器埋置は認められない。

【弥生時代後期前葉～中葉】



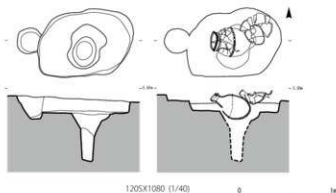
092SX390 (1/40)

【弥生時代後期終末】



076SX177・178 (1/80)

【古墳時代前期】



120SX1080 (1/40)

第58図 弥生時代後期～古墳時代前期祭祀土坑実測図集成
(1/40・1/80)

第 22 表 弥生時代後期～古墳時代前期土坑遺構一覽表

遺構名	探検番号	時 期	規模		平面形状	断面形状	掲載報告書
			大きさ (m)	深さ (m)			
018SK011	—	弥生時代後期	$0.8 \times 1.2 + a$	0.9	長方形	方形	下部Ⅵ P30 第 23 図
092SX390	—	弥生時代後期前葉～中葉	径 0.3	0.4 (現状)	円形	U 字形	下部Ⅰ P268 第 346 図
090SX434	—	弥生時代後期前葉～後葉	$1.2 \times 1.4 + a$	0.36	不整形	逆台形	下部Ⅰ P124 第 145 図
066SX023	55	弥生時代後期中葉	径 0.35	0.3	略方形	U 字形	下部Ⅳ P140 第 201 図
090SX057	55	弥生時代後期中葉以降	2.0×1.6	0.6	楕円形	逆台形	下部Ⅰ P116 第 113 図
090SX175	55	弥生時代後期後葉～終末	径 1.2	0.6	円形	方形	下部Ⅰ P119 第 126 図
076SX177	—	弥生時代後期終末	0.88×0.56	0.3	楕円形	逆台形	下部Ⅵ P160 第 145 図
090SX448	—	弥生時代後期終末～古墳時代初葉	2.0×1.6	0.65	楕円形	方形	下部Ⅰ P126 第 150 図
140SX610	—	弥生時代後期終末～古墳時代初葉	3.0×1.8	0.1	不整形楕円	皿状	下部Ⅲ P292 第 280 図
140SX470	—	弥生時代後期終末～古墳時代初葉	2.0×1.6 (現状)	0.8	隅丸長方形 or 不整形楕円形	方形	下部Ⅲ P289 第 276 図
039SX025	55	弥生時代後期終末～古墳時代初葉	1.4×1.2	0.4	長方形	長方形	下部Ⅵ P233 第 186 図
039SX026	—	弥生時代後期終末～古墳時代初葉	2.6×2.2	1.4	不整形	逆台形	下部Ⅵ P233 第 185 図
039SX014	55	弥生時代後期終末～古墳時代初葉	2.6×2.4	0.8	隅丸長方形	逆台形	下部Ⅵ P233 第 184 図
090SX464	—	古墳時代初葉	1.7×1.7	0.56	方形	逆台形	下部Ⅰ P128 第 155・156 図
137SX002	55	古墳時代初葉	径 1.6	0.8	円形	不整形逆台形	下部Ⅴ P347 第 360、361 図
061SX008	55	古墳時代前期	1.9×1.65	0.5	略方形	長方形	下部Ⅵ P103 第 135 図
051SX012	—	古墳時代初葉以降	1.8×1.2	0.6	長方形	U 字形	下部Ⅳ P54 第 65 図
013SX207	55	古墳時代前期前葉	2.0×1.8	0.8	長方形	長方形	下部Ⅵ P203 第 255 図
029SX333	55	古墳時代前期	径 2.6	0.2	円形	長方形	下部Ⅵ P266 第 324 図

第 23 表 弥生時代後期～古墳時代前期土器棺墓一覽表

遺構名	探検番号	時 期	規模		平面形状	断面形状	掲載報告書
			大きさ (m)	深さ (m)			
090SJ398	56	弥生後期前葉～中葉	0.95×0.6	0.1	楕円形	皿状	下部Ⅰ P114 第 107 図
050SJ043	56	弥生後期中葉～後葉前葉	$1.0 \times 0.45 + a$	0.2	楕円形	逆台形	下部Ⅵ P67 第 56 図
039SJ001	56	弥生後期後半～終末	0.65×0.52	0.3	円形	逆台形	下部Ⅵ P231 第 181 図
039SJ002	56	弥生後期後半～終末	径 0.7	0.25～0.38	不整形	U 字形	下部Ⅵ P231 第 182 図

(3) 弥生時代後期から古墳時代前期の特殊遺物

大型皿形土器

直径 2.3m の円形プランを呈する素掘りの井戸跡である 120SE1090 からは井戸跡の埋没途中にまとまった土器の廃棄が認められた。土器の出土位置は、検出面から底面までの深さ 2.2m を測る井戸跡に対して検出面から約 0.3 ~ 0.4m 下位の位置にあり、出土土器には、壺、甕、鉢などの完存品を中心とする多種多様な器種によって構成されている。これらの資料は弥生時代後期中葉前後の所産になるものである。

出土した土器資料の中には大型の大皿（盤）と考えられる資料が 2 点ある。いずれの底部にも植物質の繊維素材によるムシロ目圧痕が明瞭に残っている。破片資料のため全形は不明であるが、器高は 8cm 前後を測る。

青銅製品

005SH005 の埋土中から不明青銅製品 2 点が出土した。005SH005 は弥生時代後期後葉に比定される壺穴住居跡である。2 点の青銅製品は出土状況や銅質等の類似から同一個体である可能性が高いと考えられる。1 点は遺存部から枝分かれするような状況を確認することができ、他の 1 点は幅等において他方と近い量を示し、銅質も優良である。これら 2 点から現状で復元される形状の中で最も近似するのが有鉤銅剣であり、こうした想定に基づいて復元したものが第 59 図である。

大型器台

大型器台に関しては、破片資料として複数地点で認めることができる。なかでも全形の推定可能な大型器台に第 120 次 SD1200 出土の資料があり、東九州地域での大型器台の展開状況を考えるに際し示唆的な遺物として注意される。第 120 次 SD1200 は幅 2.8m、深さ 0.9m の規模をもつ溝状遺構である。遺物は溝の埋没途中の窪み状となった部分に大量に廃棄された状態で確認されている。

出土遺物の年代

出土遺物の年代的な中心は弥生時代後期初頭から前葉であるが、高坏の一部に後期中葉的な要素を少数ながら垣間見ることができる。120SD1200・314 は復元口径 19.2cm、底径 22.7cm を測る大型器台である。口縁部を幅広く拡張し、拡張部に三条 1 単位の櫛波状文を施文する。また、同一の工具により口縁部内面、胴部上下端に櫛波状文を施文するとともに、胴部中にタテ方向の櫛波状文を施文し、流水文風の文様構成をなす。体部に穿孔は認められず内器面にはケズリ調整痕を確認することができる。120SD1200・315 は胴部の随所に円孔が認められ、外器面は赤色顔料により塗彩される。口縁部は外方に大きく展開し、端部を複合口縁状に成形する。口縁部の内面にはタガ状に外反する受け部を形成し、口縁部には半截竹管状の工具による刺突文が施文される。このタガ部分にも円孔が穿たれている。外器面の装飾に波状文等はなく、胴部上位、および中部に三角突帯を貼付する。また、胴部上位の突帯の下端部にはヨコ方向の刻みを入れた棒状の浮文がタテ方向に貼付される。器高 34.9cm、復元底径 21.4cm を測る。120SD1200 からはこれら 2 点の大型器台の他、ラッパ状に外反する口縁部の外面下位に波状文を施文するものや、口縁部を複合口縁状に成形し、外面に櫛波状文を施文する資料などが出土している。

文様構成

円孔

大型器台の出自

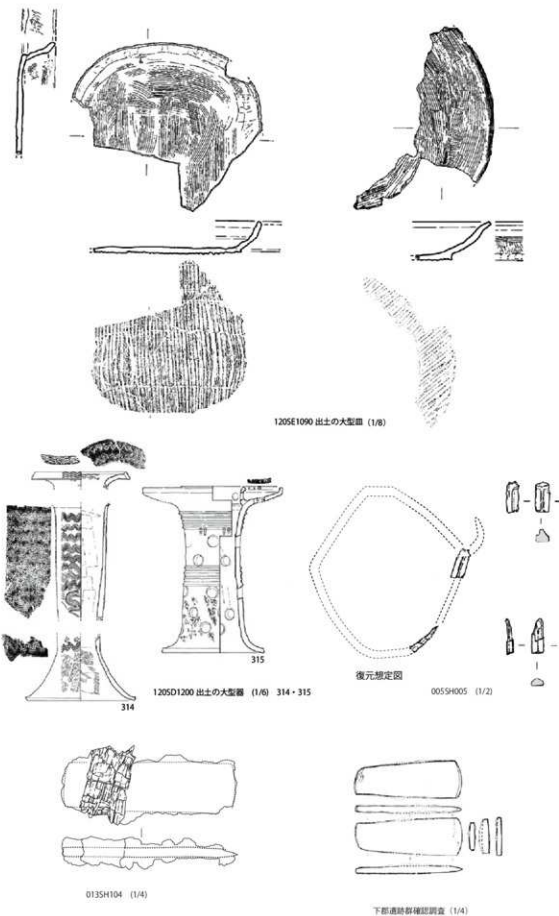
こうした大型器台の出自はどこに求められるのだろうか。松村さを里氏^[22]は中部瀬戸内を中心とした地域で四線文段階に出現したとされる大型器台の西部瀬戸内地方での展開について検討をおこなった。その結果、弥生時代後期後半に愛媛県中予地域を中心に盛行し、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に西部瀬戸内の周辺地域に分布するようになることを明らかにした。さらにこうした地域には大型器台の受容に共通した文化的様相を見出すことができるとし、中予地域を中心に展開する大型器台を「西部瀬戸内系大型器台」と評価した。

愛媛県中予地域

豊後大分平野で出土する大型器台は、豊後地域を含め、九州島内において系譜を求めることができず、やはり松村氏の指摘のように西部瀬戸内、もっと限定的に言えば愛媛県中予地域にたどることができるのであろう。しかしながら、下部遺跡群で出土している先述の大型器台は時間的に西部瀬戸内

註 22 松村さを里 2008『伊予地方における弥生時代器台の分布と変遷』『地域・文化の考古学—下條信行先生退任記念論文集—』

下條信行先生退任記念事業会



第 59 図 弥生時代後期～古墳時代前期特殊遺物実測図 (1/2・1/4・1/6・1/8)

系大型器台の盛行期である弥生時代後期後半よりも年代的に古く、さらに、120SD1200-315については、多条の突帯、タテ方向の浮文、そして赤色の塗彩など弥生時代中期末から弥生時代後期前葉段階に豊後地域にみられた壺の属性と共通する要素をもっている。こうした点は西部瀬戸内系大型器台にはあまり見られない特徴であり、大型器台の受容に伴い地域変容型として成立した可能性が高いと考えられる。つまり、豊後大分平野では、他地域に先駆けて中予地域からいち早く大型器台を受容し、すでに弥生時代後期前葉から中葉の段階には変容形態を製作していたことが推察される。こうした事例は両地域の濃厚な関係性を示すものである。

下部遺跡群では、弥生時代後期後葉から終末期の住居跡を中心に多くの鉄器が出土している。内容には鉄鍬、ヤリガンナ、手鎌などがあるが、注目されるものに下部遺跡群第13次調査SH104から出土した板状鉄斧、鉄剣がある。板状鉄斧は長さ18.0 cm、幅5.4 cm、厚さ1.0 cmを測るもので、体部には炭化した木質部（第61図）が遺存している。鉄素材として持ち込まれた可能性が指摘されることが多い板状鉄斧の中で、実際の使用例を示す資料として重要である。鉄剣は住居跡の床面直上から出土した。刃先が僅かに欠損するがほぼ完存する。現状で長さ38.9 cm、幅3.7 cm、厚さ0.1～0.5 cmを測る。柄と接合する部分には孔径0.6 cmの留孔を二箇所に確認することができる。



第60図 板状鉄斧



第61図 板状鉄斧（柄の部分拡大）



第62図 板状鉄斧（下部遺跡群確認調査出土）



第63図 鉄剣

(4) 弥生時代後期から古墳時代前期の土器による時期区分

本項では、下部遺跡群内で出土した大量の土器資料からの編年作業に基づく時期区分をおこなう。大分平野部の弥生時代後期の土器編年に関しては、すでにいくつか提示している^(註1)。こうした編年案のベースは、先学諸氏による大野川流域の資料を中心とした「豊後後期土器編年案」^(註2)である。今回の時期区分に関しても基本的にはこれらの成果に依っている。

時期区分の具体的な内容に関しては、弥生時代中期末から後期初頭に比定される弥生時代後期0期を設定し、これ以降の弥生時代後期をⅠ期からⅣ期に区分し、続く古墳時代を土師器Ⅰ期からⅢ期に区分した。ちなみに弥生時代後期0期の古相は先述の弥生時代中期Ⅳ期と一部重複する。また、古墳時代土師器Ⅰ期を庄内式土器併行期とし、古墳時代土師器Ⅱa期を庄内式新段階から布留式最古段階に充てている。ちなみに下部遺跡群で遺構、遺物の出土が顕著であるのは古墳時代土師器Ⅱb期までであり、古墳時代土師器Ⅲ期の資料は激減する。

弥生時代後期0期（中期末から後期初頭）

小柳氏の設定した「小川原式土器」の盛行する段階である^(註3)。小川原式土器に相当する壺は鉢先状の口縁形態をもち、頸部、胴部上半、胴部中位の三ヶ所に多条の突帯を有する。さらに胴部最大径を下位にもつ下膨れ状の器形を特徴とする。小柳和宏氏はこの「小川原式土器」が安国寺式壺形土器へ派生、発展すると指摘する。この段階の壺は「小川原式土器」を含め少なくとも口縁部の形態により2系統に分割することができる。頸部と胴部に三角突帯を多条に貼付する資料であり、口縁部内面を粘土紐の貼付により平坦面を形成するものと、単口縁となるものである。くわえて後者の資料には頸部のみに一条の三角突帯を貼付する資料と、頸部と胴部に数条の三角突帯をもつものの二種類が存在する。

壺は弥生時代中期Ⅱ期（前葉）の段階から器種組成に加わる東北九州系の壺から型式変化した資料が主流となる。このタイプの壺には底部形態に二種が認められる。底部を上げ底風に処理する壺（壺a）としっかりとした平底をもつ壺（壺b）の二種である。下部遺跡群内での検出事例は少ない。

弥生時代後期Ⅰ期（前葉）

大分平野部の資料では、上野遺跡群隅丸長方形周溝遺構の一括品等を標識資料とする。下部遺跡群では良好な資料の検出事例は極めて少ないが、120SD1200出土資料等の中に少量ながら確認することができる。壺に関しては、プロボーション、口縁部形態等に0期と大きな変化はないが、体部装飾について、胴部および頸部の突帯に多条化が著しく、さらに浮文の貼付が増加するといった変化の方向性が読み取れる。また、この段階には丹塗りの長頸壺等が伴出するようになる。上野遺跡群隅丸長

註1 坪根伸也 2006『東部九州（別府湾沿岸地域）編年概要』『下部遺跡群Ⅳ』・大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3・大分市教育委員会

坪根伸也 2007『第2節 下部遺跡出土の弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器について』『下部遺跡群Ⅴ』・大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4・大分市教育委員会

註2 羽田野（玉永）光洋 1978『東九州における弥生式土器研究Ⅰ—安国寺式土器の再検討—』『古文化談叢』5 九州古文化研究会

高橋 徹 1979『廃棄された鏡片—豊後における弥生時代の終焉—』『古文化談叢』6 九州古文化研究会 他

註3 小柳和宏 2007『大分の弥生時代はどこまでわかったのか—大野川上・中流域弥生社会再考—』『大分県地方史』第200号 大分県地方史研究会

方形周溝遺構から出土する長頸壺には、口縁部外面下位に櫛波状文を施すものや、胴部と頸部の境に突帯を巡らせるものなどが認められる。下部遺跡群第120次調査SD1200で検出されている多孔の丹塗り器台等はこの段階のものの可能性がある。

弥生時代後期Ⅱ期（中葉）

120SD1200出土資料 下部遺跡群では検出事例の乏しい時期の資料であったが、120SD1200出土資料の中に当該期の資料が多量に含まれており、良好な完形資料により具体的な様相を提示することが可能となった。壺に関しては、複合口縁+櫛波状文の組み合わせが完成し、いわゆる「安国寺式土器」が定型化する段階である。大分平野部では良好な共存資料の確認はなされていないが、豊後大野市の松木遺跡31号住居跡の資料⁽³⁴⁾では、口縁部形態に次の3タイプが認められ、①→②→③といった型式変遷過程から、安国寺タイプ ① 肥厚した口縁部に不連続な山形文を配したものの
② 肥厚およびやや立ち上がり気味の強い口縁側面に櫛波状文を施したものの
③ 逆「く」字形に発達した口縁に整美な櫛波状文を施したものの
しかしながら、近年の新たな発掘調査資料の状況から、これらの三つのタイプが系譜を異にした同時並存する異なる型式である可能性も想定される。

突帯の固定化 弥生時代後期Ⅱ期まで多変化が顕著であった頸部および胴部の突帯の数も3ないし4条に固定化され、頸部突帯の浮文も減少傾向へと転じている。甕は、弥生時代後期Ⅱ期で認められた2タイプ（甕a・甕b）の甕が型式変化した甕資料がそれぞれ存在するとともに、これに加えて口縁部下に幅広の刻目突帯を貼り付ける甕cが新たに器種組成の一画を占めるようになる。この3タイプの中で上げ底状の底部を有する甕aが量的な上では主体を占めている。また、前段階から型式変化の方向としての底部の小型化が認められ、この傾向は次の第Ⅲ期へと継続する。甕内面のケズリ調整も弥生時代後期Ⅱ期にほぼ限られ、弥生時代後期Ⅲ期以降に激減する。

弥生時代後期Ⅲ期（後葉）

複合口縁壺が 下部遺跡群内において遺構が増加し始める時期である。壺は弥生時代後期Ⅱ期で定型化した複合口縁壺が主体を占める。胴部突帯の数はほぼ固定化し、頸部一条、胴部三条の組み合わせが一般的となる。また、頸部の浮文などの装飾も減少する。甕の底部は小さな平底を基本とするが、量比において比較的安定した平底（弥生時代後期Ⅱ期）→不安定な平底（弥生時代後期Ⅲ期）→凸レンズ状を呈する底部（弥生時代後期Ⅳ期）といった変化の方向性を読み取ることができる。また、胴部突帯の中には、新相への推移に伴い胴部の三条の突帯を個別に貼付するものから、幅広の粘土帯を貼り付け、削り出しによりみかけ上の三角突帯を成形するものが出現する。これは弥生時代後期Ⅳ期に出現する幅広の刻目突帯（ベルト状突帯と呼称）への過渡的様相と理解される。さらに弥生時代後期Ⅲ期の複合口縁壺の中には比較的小型で胴部に突帯を持たないタイプ（I b形式）が出現する。複合口縁とならない単口縁の壺も複合口縁壺の底部変化に対応し、型式化する。新たな型式として口縁部の内湾するタイプの資料が新たに加わる。底部が凸レンズ状、丸底を呈する小型の広口壺の数が増加する点もこの時期の特徴である。先述のようにこの段階の壺は基本的に丸底となっておらず、底部変化は明らかに甕や壺よりも小型の広口壺が早い。弥生時代後期Ⅲ期の広口壺は、精製粘土を使用した精製品が多く、丹塗りするものの割合が圧倒的に多い点も特徴的である。甕は前代からの型式変化を踏襲し、底部の小型化と長胴化が進展する。

註4 大野町教育委員会 1980「松木遺跡」「大野原の遺跡」大分県大野郡大野町所在遺跡群発掘調査報告書

弥生時代後期Ⅳ期（終末）

弥生時代後期Ⅳ期は弥生時代終末期に相当し、壺に関してみれば、「安国寺式」タイプの複合口縁壺は前代の弥生時代後期Ⅲ期（後葉）から続く比較的大型で頸部および胴部に貼付突帯を有するタイプ（Ⅰa形式）と小振りて胴部突帯をもたないタイプ（Ⅰb形式）の2形式が底部形態に顕著な型式変化を示しながら継続する。なかでもⅠa形式の壺の胴部突帯は幅広の刻目突帯（ベルト状突帯）へと変化する。突帯は胴の中心あるいは下に貼付される。壺の底部は凸レンズ状を呈するものが圧倒的多数を占めるようになるが、僅かに平底を残す資料も遺存する。大型品であるⅠa形式の複合口縁壺は、複合口縁部を発達させ、文様についても複数段の櫛描波状文を施文する資料の割合が多くなる。小型品であるⅠb形式の複合口縁壺にはⅠa形式のような大きな変化は認められない。底部の凸レンズ状化はⅠa形式よりもⅠb形式の方が早いようである。また、Ⅰa形式、Ⅰb形式ともに壺の胴部は長胴化がさらに進んでいる。甕は、壺と同様に底部が凸レンズ状を呈する資料が大半を占めるものの、尖底状の資料が一定量出土する。また、大型器台等の数が増加する点もこの時期の特徴といえる。鉢等の小型の器種の大半は底部の丸底化が進展する。

古墳時代土師器Ⅰ期

庄内式に併行する段階であるが、大分平野では庄内式の要素は希薄であり、さらに各器種とも弥生時代後期Ⅳ期と古墳時代土師器Ⅱa期の間は漸次的な変化を示すため、様式としての画期を抽出することは難しい。壺・甕・鉢は、一部に凸レンズ状の底部や平底の痕跡を残すものも少量あるが、大半が丸底となる。高坏は、弥生時代後期Ⅳ期等に顕著であった口径30cm前後の大型品が数を減じ、口径25cm前後の小型品が増加する。高坏の口縁部は小型化の流れの中で、坏底部は水平化し、直線的に外方へ開く資料が増加する。高坏の脚部はラッパ状に開く資料の他、脚柱部と裾部との境に稜をもつ資料も出現する。壺・甕ともに長胴傾向は変わらない。

近年、岡山県百間川原尾島遺跡で大分平野から持ち込まれたと考えられる安国寺式壺形土器の完形資料が出土した^{註5}。本資料が「才の町式」と作っていることから、当該期の資料に相当すると思われる。百間川原尾島遺跡出土の安国寺式壺形土器は、底部に平底の痕跡を僅かに残す凸レンズ状を呈するなど、諸属性が次の古墳時代土師器Ⅱa期と弥生時代後期Ⅳ期の安国寺式土器の中間に位置づけられる属性を有している。下部遺跡群第90次調査SH020等の資料の一部がこの段階に相当すると思われる^{註6}。

古墳時代土師器Ⅱa期

庄内式新段階から布留式最古段階に相当する時期である。大分平野部では大分市守岡遺跡Ⅰ区第19号住居跡出土資料^{註7}を標識としている段階である。弥生時代後期以来の在地系の甕、壺、高坏、鉢に布留式系の甕や吉備系（下田所式）、山陰系（広義の酒津式）等の外来系の土器が一定量伴出する。

在地系の壺・甕は、古墳時代土師器Ⅰ期と同様に長胴の資料が主体を占める。底部形態は古墳時代土師器Ⅰ期に比して丸底の底部の割合が増加するものの、凸レンズ状の形態の名残を残す底部資料が一定量存在している。安国寺式タイプの複合口縁壺は底部が完全に凸レンズ状を呈するようになり、平底は姿を消す。さらに胴部に貼付されるベルト状突帯の位置が相対的に上位に移動する。布留式系の甕は、「ナデ肩」形状をなし、外器面にはタテ方向、上半にヨコ方向の細密なハケ目調整がなされる他、

註5 岡山県教育委員会・国土交通省岡山河川事務所 2008『百間川原尾島遺跡7 百間川二の荒手遺跡』旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査XⅧ

註6 大分市教育委員会 2002『下部遺跡群Ⅰ』大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

註7 大分市教育委員会 1979『守岡遺跡』昭和50・51年度発掘調査概報

ヘラケズリ調整 肩部には波状文、刺突文をめぐらす資料もある。内器面のヘラケズリは頸部屈曲部よりもやや下がった位置まで行われている。高環は、さらに小型化が進み、環部底面の水平化がさらに進展する。在来の系譜に連なる資料は、大きく外反する口縁部を有するものと深い鉢形の環部を有するものの二種がある。

鉢は新たに浅い椀形を呈し、口縁端部を外方に短く屈曲させるタイプのものが出現する。弥生時代から続く在来系の鉢は、浅くなり、口径が大きくなることで扁平となる傾向を示す。

第108次SH173 下部遺跡群第108次調査SH173出土資料の一部などがこの時期に相当する^{註8}。

古墳時代土師器Ⅱb期

布留Ⅱ式併行期 古墳時代土師器Ⅱb期は、後述する布留Ⅱ式に併行すると考えられる古墳時代土師器Ⅲ期の土器群と先述の古墳時代土師器Ⅱa期の間に位置づけられる土器群である。広域な併行関係に基けば布留Ⅰ式の内容を含んでいる土器群である。将来的には細分が可能である。

古墳時代土師器Ⅱb期の特徴は、布留式系の裏が増加する点と弥生時代から続く在地系の長胴甕の一部にヘラケズリが採用される点、加えて長胴甕に球形胴化が顕著となる点にある。壺・甕とも凸レンズ状の底部形態は姿を消し、丸底の底部が主流を占めるようになる。

底部丸底主流

壺は弥生時代後期Ⅲ期と同様に「安国寺式」タイプの複合口縁壺と単口縁の壺の二種がある。いずれの壺も球形胴化が進み、底部は丸底となる。これまでほぼ例外なくベルト状の突帯を有していたⅠa形式の複合口縁壺の中に胴部突帯を持たないものも出現する。Ⅰa形式の複合口縁壺の複合口縁部は大きく拡張され、垂直に立ち上がる資料が圧倒的に多くなる。同時に複合口縁部に施文される櫛描波状文もさらに粗雑化が進み、精美な施文をおこなう資料が僅少となる。Ⅰb形式の複合口縁壺も数量の上で細々と存在する。Ⅰb形式の壺には複合口縁部の拡張傾向は認められないものの、Ⅰa形式の複合口縁壺に先行して複合口縁部の文様施文を省略した資料が増加するようになる。複合口縁壺以外

内面ヘラケズリ

球形胴化

の壺に関しては、内面をヘラケズリする資料が増え、プロポーションも球形胴を指向するようになる。こうした球形胴化は安国寺式壺形土器よりも明らかに早い。

甕に関しては古墳時代土師器Ⅱa期の器種組成を踏襲する形で、在地系の長胴甕と布留式系甕の両者が出土する。量的に次第に後者が前者を凌駕していく傾向が認められ、古墳時代土師器Ⅱb期の新段階には後者の比率の増加が著しい。あわせて、在地系甕の球形胴化への進展が強く認められる。これに対して布留式系の裏は口縁端部を強調し面取り風に調整したものが多い。これは古墳時代土師器Ⅱa期の様相に連なる特徴である。プロポーション的には、前段階と同様に「ナデ肩」形状のものが多く、底部形態は丸底のものが主流を占める中で、僅かに尖底傾向を示す資料が存在する。

ナデ肩多い

弥生時代後期Ⅳ期に出現する大型の鉢は、底部の丸底化がさらに進むとともに、頸部に貼付された突帯は低平化し、ベルト状突帯のような様態を示すようになる。

高環は短い脚柱部に稜をもって外方向へ内湾気味に開く裾部をもつ資料が増加し、古墳時代土師器Ⅰ期で認められたラッパ状に開く脚部を有する高環資料は数を著しく減じる。水平の環部底面から直線的に立ち上がるタイプの割合が急増する。脚柱部内面に明瞭なヘラケズリが行われるようになる点

ラッパ状に開く

脚部

もこの段階の特徴といえる。また、小型丸底壺を模倣したような小型の鉢の出土量の増加も大きな特徴である。その他の器種に関しては、鼓形器台の出土が特筆される。

鼓形器台

古墳時代土師器Ⅱb期の資料には下部遺跡群第90次調査SX464出土資料^{註9}・下部遺跡群第92

註8 大分市教育委員会 2007『下部遺跡群Ⅴ』・大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4・

註9 大分市教育委員会 2002『下部遺跡群Ⅰ』・大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1・

註10 坪根伸也・中西武尚 1998「下部遺跡群第92次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.9 1997年度 大分市教育委員会

次調査 SH343 出土資料^{註10}と下部遺跡群第 90 次調査 SH020 出土資料^{註11}の一部 下部遺跡群第 108 次調査 SH256・SH1052・SX1068 出土資料^{註12}、下部遺跡群第 137 次調査 SX002 出土資料^{註13}が該当する。

古墳時代土師器Ⅲ期

稲田市遺跡	大分平野の土器編年においては、大分市稲田市遺跡 E 区溝Ⅰ資料 ^{註14} 等を標識とする段階である。布留 2 式併行段階にはば相応する時期である。基本的には古墳時代土師器Ⅱ b 期の各器種の退化した型式により構成される。「安国寺式」タイプの壺形土器の中でⅠ a 形式の壺の胴部突帯は消失する。また、古墳時代土師器Ⅱ b 期で数量が激減していたⅠ b 形式はすでに存在しない。Ⅰ a 形式の複合口縁部の伸張はさらに進み、複合口縁部の櫛描波状文も簡略化や省略する資料も増加する。くわえて体部の球形胴化はいっそう進行し、殆どすべての資料の底部が丸底となり、内器面の一部にヘラケズリの痕跡が認められる資料などが登場する。
体部の球形胴化	
布留式系壺	壺は、在来系の長胴壺の割合が著しく減少し、布留式系の壺が主体を占めるようになる。出土する布留式系壺は、口縁端部の処理の状況や体部上半のヨコハケ、ヨコナデ等に粗雑化が目立つようになり、器壁の厚みが増した資料が増加する。
布留式系高坏	高坏に関しては、坏底部から直線的に立ち上がる口縁部を有し、脚部がスラリと伸び、裾部が底面近くタイプの布留式系高坏の量が増加する。小型丸底壺には新たに口縁部が長く伸張したタイプが出現する。下部遺跡群での出土事例はないが、市内の他の同時期と考えられる遺跡出土資料には X 形小形器台の出土も確認される。「安国寺式」タイプの壺形土器をはじめとする弥生時代以来の在地系土器は、この段階でほぼ消失する。
在地系土器の消失	

弥生時代後期～古墳時代前期土器変遷表出土遺跡一覧

第 24 表

1～3・5～7：第 120 次 SD1200、4：第 120 次 SE1090、8・9：第 5 次 SD002、10：第 140 次 SH1430、11・20：第 50 次 SD001、12：米竹遺跡、13・18：第 90 次 SH020、14：岡山県原尾尾遺跡、15・26：第 5 次 SD002、16：第 51 次 SH023、17：第 13 次 SH104、19：第 120 次 SH050、21：守岡遺跡、22：第 13 次 SH105、23・27：第 90 次 SX464、24：第 92 次 SH343、25：第 120 次 SX1080、28：第 90 次 SH094、29・30：第 100 次 SX020

第 25 表

1～10：第 120 次 SD1200、11：第 120 次 SE1090、12・13：第 13 次 SH111、14・15：第 31 次 SH027、16・27・29～32：第 5 次 SD002、17：第 13 次 SX214、18：第 90 次 SH094、19：第 13 次 SH104、20：第 29 次 SH001、21・24～26：第 29 次 SH004、22：第 90 次 SX464、23：第 90 次 SH020、28・33：第 92 次 SH343

第 26 表

1・2：音無田遺跡、3・4・6・13：上野遺跡、5：第 92 次 SX390、7～11：第 120 次 SD1200、12：第 120 次 SE1090、14・18・23：賀来中学校遺跡第 2 次、15・16：第 31 次 SH027、17：第 51 次 SH023、19：多武尾遺跡、20・27：第 13 次 SH104、21：第 13 次 SX214、22：第 13 次 SH111、24：賀来中学校遺跡第 1 次、25：守岡遺跡、26：第 5 次 SD002、28・30：第 90 次 SH020、29：第 29 次 SH004、31：第 92 次 SH385、32・33・36：第 90 次 SX464、34：第 92 次 SH385、35：第 108 次 SX1068、37：第 13 次 SH105、38：第 92 次 SH270、39：第 92 次 SH343、40：第 13 次 SX221

第 27 表

1：第 92 次 SX390、2・3・5～7・10～12：第 120 次 SD1200、4・8・9・13：第 120 次 SE1090、14・15：第 31 次 SH027、16：第 13 次 SD002、17・18・22 第 50 次 SD001、19：第 13 次 SH102、20：第 5 次 SD002、21：第 120 次 SH2530、23・25：第 120 次 SH050、24：第 137 次 SX002、26・27・29～32：第 90 次 SH020、28：第 13 次 SX271、33：第 90 次 SH200、34・36～38：第 13 次 SH104、35：第 108 次 SH256、39：第 13 次 SX208、40・44・45・47：第 90 次 SX464、41・42・51：第 100 次 SX020、43：第 66 次 SE108、46：第 92 次 SH094、48～50・52：第 92 次 SH343

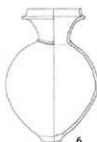
註 11 註 9 文獻に同じ。

註 12 大分市教育委員会 2007『下部遺跡群Ⅴ』大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4

註 13 大分市教育委員会 2007『下部遺跡群Ⅴ』大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4

註 14 吉田寛編 1994『稲田市遺跡一七瀬川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』大分県教育委員会

第24表 弥生時代後期～古墳時代前期土器変遷表①

後期Ⅰ期	 1	 2	 3	
後期Ⅱ期	 4		 5	 6
				 7
後期Ⅲ期	 8		 10	
後期Ⅳ期		 9		
				 11
				 12 米竹遺跡
土師器Ⅰ期	 13	 14 原尾島遺跡(岡山県)	 15	 16
				 17
				 18
土師器Ⅱa期	 19	 20	 21 守岡遺跡	 22
土師器Ⅱb期	 23	 24	 25	 26
				 27
				 28
				 29
				 30 (1/16)

第 25 表 弥生時代後期～古墳時代前期土器変遷表②

後期Ⅰ期	   
後期Ⅱ期	      
後期Ⅲ期	    
後期Ⅳ期	
土師器Ⅰ期	 
土師器Ⅱa期	   
土師器Ⅱb期	         

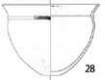
(1/16)

第26表 弥生時代後期～古墳時代前期土器変遷表③

後期0期				
後期Ⅰ期		菅無田遺跡 1	菅無田遺跡 2	
	上野遺跡 3			
後期Ⅱ期	上野遺跡 4			上野遺跡 6
				
	上野遺跡 7			上野遺跡 13
				
後期Ⅲ期				
	賀来中学校2次 14			賀来中学校2次 18
後期Ⅳ期				
	多武尾遺跡 19			
				賀来中学校2次 23
				
土師器Ⅰ期				
		賀来中学校1次 24		
土師器Ⅱa期				
		守阿遺跡 25		
土師器Ⅱb期				
				
				
				
				
				

(1/16)

第 27 表 弥生時代後期～古墳時代前期土器変遷表④

後期Ⅰ期						
後期Ⅱ期						
						
						
後期Ⅲ期						
後期Ⅳ期						
						
						
土師器Ⅰ期						
						
						
土師器Ⅱa期						
						
土師器Ⅱb期						
						

(1/16 8～12・1/20)

第4節 古墳時代中期から後期の様相

(1) はじめに

下部遺跡群では、古墳時代中期以降、前代の弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭に比して遺構の検出数が少なくなり、竪穴住居跡も散漫な分布を示す。

「陶質土器」

こうした中で、第18次調査地点では、古墳時代中期の住居跡から「陶質土器」を伴い多量の土器が出土しており、当該時期の土器編年作業に際して良好な標識資料となっている。

横穴墓群

また、第108次調査地点では、6世紀末から7世紀初頭の竪穴住居跡を検出し、市内でも検出例が少ない時期の事例として、貴重な資料である。さらに6世紀末から7世紀は、下部遺跡群東側に位置する鶴崎台地崖面に数多くの横穴墓群が造墓される時期であり、これらの造墓集団と下部遺跡群との関連が注目される。

本項では、これまでの調査結果から古墳時代中期から後期の遺構を抽出し、竪穴住居跡、土坑について分布図に示し(第64図)、竪穴住居跡については集成を行った。

(2) 遺 構

竪穴住居跡

住居の分布

古墳時代中期から後期の住居跡について、時期別に分布図に示し、遺存状況が比較的良好な遺構を集成した。竪穴住居跡は古墳時代前期までの密集に比して、古墳時代中・後期には分布が希薄になっている。

第108次調査

古墳時代中期には、全体的に散漫な分布を示し、古墳時代後期と比較してもさらに分布状況は希薄である。弥生時代後期終末から継続して竪穴住居跡を検出した第108次調査においては、集落が中期に一時断絶し、次に集落が営まれるのは6世紀末からという状況が確認されている。

古墳時代後期には、下部遺跡群南西のH区や隣接するI区、D区などで竪穴住居跡を検出している。

古墳時代中期に一時集落が断絶した第108次調査区では、6世紀末から7世紀初頭の集落の一部と考えられる竪穴住居跡を検出している。遺存状況は必ずしも良好ではないが、この時期の集落跡の事例は大大市内でも少なく、貴重な資料となった。しかしながら、第108次調査周辺の集落はその後には連続せず再び断絶する。次に遺構が検出されるようになるのは、8世紀段階である。

毛井遺跡B地区

同時期の竪穴住居跡を検出した市内毛井遺跡B地区でも、6世紀初頭からの集落は、7世紀に入っても継続するが、住居跡は激減し、その現象は古墳時代から飛鳥時代に入ってから政治的変革に伴う集落の再編成に関連することが想定されている。その後、7世紀初頭・前半の住居跡が廃絶した後は、100年前後の間は遺跡が形成された痕跡はなく、その後8世紀段階に遺跡が増える状況にある⁽²¹⁾。

このように7世紀初頭での集落の廃絶は、下部地区の中だけの事象ではなく、大きな政治的変革の影響を受けていることが考えられる。

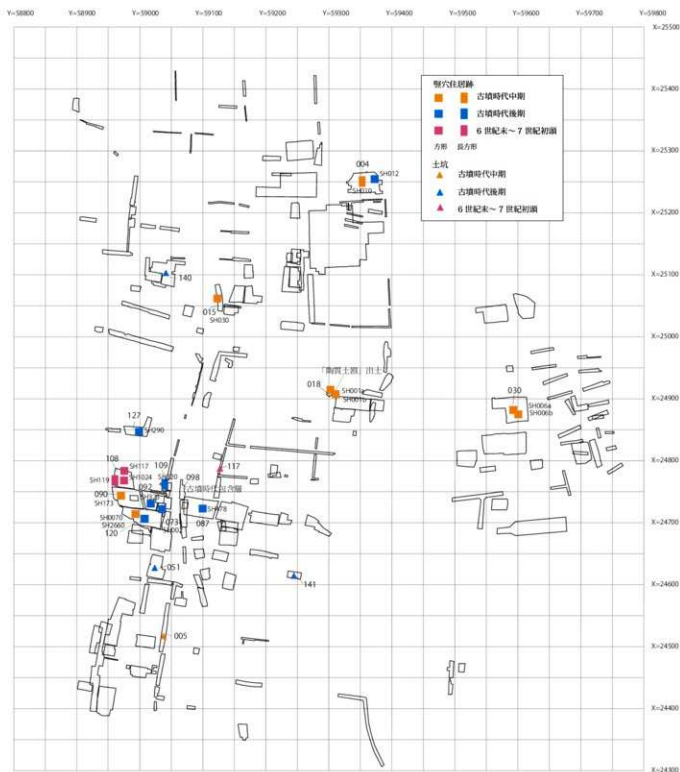
住居の構造

当該期の住居跡は、平面プランは方形と長方形を基本とする。規模は3.7～6.0m程で時期差は見られない。住居跡の柱柱数は4本を基本とする。古墳時代後期になると、ほとんどの事例にカマドが備え付けられており、備え付けられる方位は北壁の中心の事例がほとんどである。貼床を施す住居跡や、周壁溝を巡らせる住居跡も一部みられる。

第109次調査

第109次調査SH120では、カマドの焚口前面に袖石を2本横置き、焚口を意図的に封鎖している例が見られる。

註1 大分県教育委員会 2002『毛井遺跡B地区』国道197号線大分南バイパス工事に伴う発掘調査報告書



第 64 圖 古墳時代中期～後期遺構分布圖 (1/6,000)

毛井遺跡 B 地区 同時期の住居が検出された前述の毛井遺跡 B 地区では、6 世紀中頃から後半にかけて 58 棟が建て替えを繰り返しながら造られている。住居跡の支柱は 4 本を基本とし、これらの住居の大半からカマドの痕跡が確認されている。竪穴住居内にカマドを備え付ける方位は、北壁と西壁の中央の事例が多く、カマドには廃棄する時の祭祀跡が数多く見つまっている。このように下部遺跡群検出の住居跡も大分市内で検出される竪穴住居跡と共通する構造を示している。

横穴墓群との関連 第 108 次調査区で集落の一部と考えられる竪穴住居跡を検出した 6 世紀末から 7 世紀は、滝尾百穴横穴墓群をはじめ、下部横穴墓群・穴井前横穴墓群・長谷横穴墓群等多くの横穴墓群が、下部遺跡群東側に位置する鶴崎台地崖面に造墓される時期である。

長谷横穴墓群では、横穴墓が 50 基確認されており、6 世紀後半～7 世紀前半代に順次造墓が開始され 7 世紀後半代まで続いていたことが判明している^{〔註 2〕}。滝尾百穴横穴墓群では約 84 基の横穴墓が確認され、6 世紀後半～7 世紀前半頃の造営と考えられる^{〔註 3〕}。下部横穴墓群では、32 基の横穴墓が確認され、6 世紀後半代に造墓を開始、7 世紀後半代で終焉を迎えている。そのほか、小規模な横穴墓の造営も確認されている^{〔註 4〕}。

造墓集団 これら横穴墓群の造墓集団の居住域は、周辺の横穴墓群の分布状況を考慮すると、下部遺跡群よりも遠隔の地に求めることは困難である。すなわち、下部遺跡群内あるいはこの周辺とする想定が妥当である。しかしながら、現状での、竪穴住居跡を含め当該期の遺構検出数が少なく現状では明確に示すことはできない。

第 108 次調査 このような状況について、下部遺跡群第 108 次調査で、検出した住居跡の共通した特徴として、深さが浅い点が指摘されており、古墳時代前期の住居跡と比較しても明らかに浅い傾向が看取される。こうした特徴がこれまで住居跡の発見事例が少ない要因のひとつとも考えられる。他の調査地点でも、遺物は出土するが、住居プランを確認することはできないといったケースが多く、こうした状況は上面削平による欠失の結果を示していると推定される。比較的住居の検出数が多い H 区や 1 区周辺では、第 98 次調査区の事例のように住居跡は検出できないものの古墳時代の包含層が確認されている。こうした事例を含めれば、下部遺跡群内に広く同時期の集落が展開していた可能性を想定でき、数多く分布する横穴墓群の造墓集団の居住域もその周辺に求められる可能性が高い。

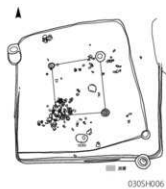
古墳時代の包含層

註 2 池邊千太郎 1992『第四章 ままととと考察』『長谷横穴墓群』大分県大分市羽田所在遺跡の発掘調査報告書 大分市教育委員会

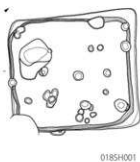
註 3 大分市教育委員会 1997『大分市の文化財』

註 4 池邊千太郎 2003『第五章 ままととと考察』『下部横穴墓群』大分市大字下郎字加納に所在する発掘調査報告書 大分市教育委員会

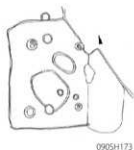
【5世紀前半】



【5世紀】



【5世紀末】



【古墳時代中期～後期】



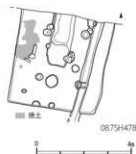
【古墳時代後期】



【6世紀中頃】

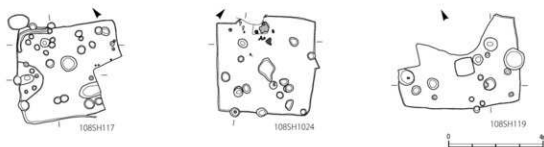


【6世紀後半】



第 65 図 古墳時代中期～後期竪穴住居跡集成図① (1/160)

【6世紀末～7世紀初頭】



第 66 図 古墳時代中期～後期堅穴住居跡集成図② (1/160)

第 28 表 古墳時代中期～後期堅穴住居跡一覧表

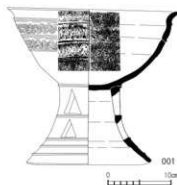
遺構番号	探検番号	時代	平面形状	規模 (m)	柱穴数	火竈	壁溝	内部施設	掲載報告書
018SH001a	65	5世紀	方形	4.8 × 4.2	4		全体		下部VI P22 第11図
018SH001b	65	5世紀	方形	5.4 × 4.9	2			北西コーナー付近 径0.7 深0.25の掘込み	下部VI P22 第11図
004SH010	65	5世紀代	長方形	3.7 × 3.0 深さ0.25	2			ベッド状遺構 高0.05 幅0.7	下部VI P62 第67図
030SH006a	65	5世紀前半前後	方形か	6.0 × 3.6 + a			あり 北側欠失		下部VI P278 第335図
030SH006b	65	5世紀前半前後	方形	5.0 × 4.6 深さ0.15	4			南壁床面焼土を含む円形土坑 0.5 × 0.36 深さ0.18	下部VI P278 第335図
015SH030	65	5世紀4頃	方形	一辺4.0 壁高0.28	4	北側壁 カマド	一部 北西 南東	敷床か	下部IV P22 第9図
090SH173	65	5世紀末	方形	4.6 × 3.2 + a	4	東側壁 土カマドか			下部I P107 第173図
120SH0070	65	古墳時代中期～後期?	方形	5.0 × 5.5	4	北壁中央 カマド	全体	敷床 (一部)	下部VI P353 第324図
092SH323	65	古墳時代後期	方形	4.8 × 4.7 深さ0.35	4				下部I P235 第279図
092SH370	—	古墳時代後期か	隅丸方形					柱穴の隣に楕円形土坑→民器 りか	下部I P245 第298図
109SH120	—	古墳時代後期	隅丸長方形	4.0 × 2.5 壁高0.25	?	北壁やや裏寄り に カマド			年報10 P27
127SH290	65	6世紀中頃か	隅丸方形		4	北壁カマド			年報12 P25
120SH2660	65	6世紀後半	方形	4.24 × 4.28	4	カマド 北壁中央	全体	敷床	下部VI P365 第338図
004SH012	65	6世紀後半	方形	5 × 5 深さ0.2	4	北側壁 ブリッジ状カマド			下部VI P63 第68図
087SH478	65	6世紀後半	方形		4	カマド			下部VI P248 第211図
108SH117	66	6世紀末～7世紀初	方形	4.2 × 3.8 深さ0.1	4	北西壁面中央 カマド			下部V P233 第241図
108SH119	66	6世紀末～7世紀初	長方形	5.3 × 3.8 深さ0.1	4				下部V P234 第242図
108SH1024	66	6世紀末～7世紀初	方形	4.0 × 4.0 深さ0.1	4	北西側 壁面中央 カマド		敷床	下部V P248 第260図
073SH002	—	7世紀後半	方形	4.6 × 5.0 壁高0.05	4	東側壁カマド			年報7 P33

第29表 古墳時代中期～後期土坑遺構一覧表

遺構番号	坪図番号	時代	平面形状	断面形状	規模		掲載報告書
					大きさ (m)	深度 (m)	
1415X001	—	6世紀中葉	楕円形・ピット状遺構	逆台形	0.35×0.25	0.2	下部遺跡 P311 第294図
0055X102 (1T)	—	古墳時代中期以降	不定形		長軸0.6	0.48	下部遺跡 P74 第86図
1175X036	—	古墳時代後期	楕円形	やや気味の傾斜	1.3×0.7	0.6	下部遺跡 P334 第345図
0515X007	—	古墳時代後期～8世紀前半	不整方形	長方形	2.0×2.0	0.09	下部遺跡 P53 第62図
1405X480	—	古墳時代後半以降	隅丸方形か	長方形か	一辺5.0	0.1	下部遺跡 P292 第278図

(3) 古墳時代中期から後期の遺物

「陶質土器」



第67図 018SH001出土遺物実測図(1/4)

下部遺跡群第18次調査区からは、「陶質土器」と考えられる器台形土器が出土している。(第67図)001は、口縁部を僅かに欠くだけで、ほぼ完形に復元することができた資料である。胎土には精製土が使用され、焼成は非常に良好であり、色調は暗青黒色を呈する。口径27.2cm、器高24.7cm、脚裾部径20.0cm、坏部高12.0cm、脚高12.7cmを測る。口縁端部は大きく外反し、坏部上半には3本の三角突帯を作出する。これらの三角突帯は下方部のものほどそのシャープさを減じている。また、突帯間のふたつの帯状の空間にはそれぞれ単位五条の櫛描波状文が施文されている。文様自身は全体として粗く、稚拙な印象を受ける。脚部は、裾部に焼成時のユガミがみられ、坏部から脚裾部の間に五条の三角突帯を作出する。これらの内、上位3本の突帯間に二段縦列式の三角透かしを3ヶ所配する。調整は内・外面ともに丁寧なヨコナデ調整が施される。

韓国産の可能性 本資料は、1990年当時の胎土分析により、韓国産の可能性が指摘されていた^{註5}。その後、日本国内において古式の須恵器窯が見つかるなど、状況は大きく変化している。現在では、これらの新しい研究データの蓄積も膨大となり、あらためて胎土分析を行うことで、より具体的な産地同定も可能と考えられる。この点は課題とし、分析が実施されたのちに改めて報告したい。

そのほか、注目される遺物としては、第18次調査SH001出土土師器(5世紀)、第30次調査SH006出土土師器・石製勾玉など(5世紀前半)などがある。

なかでも018SH001からは「陶質土器」のほかに高坏(出土割合が6割に及ぶ)、壺形土器や甕形土器など多量の土師器が出土しており、当該時期の土器編年作業に際して良好な標識資料となる。出土土器群の年代的な位置づけの検討からこれらの土器群は、おおそ陶器編年I型式I段階(≒TK73段階)並行期に位置づけられるものと結論付けている^{註6}。

註5 大分市教育委員会 2001『下部遺跡群』大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報(2)

註6 坪根伸也 2008『第1節 下部遺跡群第18次調査(3) 小結—018SH001出土土師器の年代的な位置づけと古墳時代中・後期土師器の分類—』『下部遺跡群VI』大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5・大分市教育委員会

第5節 古代の様相

(1) はじめに

下郡遺跡群の所在する下郡地区は「こおり」地名を擁していることから、古くから古代大分郡衙の推定地として考えられてきた。昭和62年から始まった発掘調査ではこうした想定を裏づけるように古代の遺構の発見が相次いだ。8世紀中頃を契機に大規模化が認められ、真南北を指向する大型の掘立柱建物跡群や道路状遺構、井戸状遺構、大型廃棄土坑等が検出されている。また、出土遺物についても刻書土器、墨書土器、陶甕、帯金具等、官衙遺跡に通有な遺物が各所において確認されている。その年代は8世紀中頃を上限としているのに対し、大分川を挟んだ対岸にある羽屋・井戸遺跡周辺で確認された官衙的な遺構群は7世紀後半から8世紀前半代を中心とするものである。このように両遺跡の消長は連続し、あたかも官衙としての機能を時間経過に伴って交代させるかのような動態を示す。豊後国府に近接するこのような遺跡の動向は、まさに「評」段階から「郡」への発展段階を示すものである可能性が指摘され注目される。こうした状況を踏まえて下郡遺跡群内の古代遺構の分布を検討し、さらに特筆される出土遺物についても紹介する。

(2) 遺 構

掘立柱建物跡

第70図は下郡遺跡群内における掘立柱建物跡の分布図である。古代の遺構は、本遺跡群内の北側(F区)と、中央西側付近に当たる(H区)で検出されている。また本遺跡群内の東側高位面(B区)においても、調査当初から円面硯が採集されるなど官的遺構の存在を想起させる状況が認められていた。また第68次調査区では井戸跡が検出され、この井戸跡(068SE001)から祭祀行為に伴うと考えられる一点の刻書土器が出土した。こうしたことから、B区についても遺構が広く分布する古代遺跡の分布域と考えられる。

中央北側(F区)においては8世紀中頃の規模的配置を有する大型掘立柱建物跡(115SB1602・SB0448)を検出している。主軸方向はN⁸°-W前後、2間×5間の南北棟であり梁行約12m、桁行約5m、身舎面積は60㎡を測る。柱の掘り方は隅丸方形基調を呈するものが多く、柱径はおおよそ24.0cmを示し柱穴内には柱痕が認められる。これは下郡遺跡群内の中でも最大規模のものであり、堅固な建物であったと推定される。出土遺物から8世紀中頃の所産と考えられる。また、第73図のグラフを見てもわかるように8世紀中頃からの建物跡はどれも平均して、主軸方向がほぼ真南北を示しており、正方位を意識して構築されている。これは下郡遺跡群中央部を南北に縦断している道路状遺構(第69次・98次・99次調査地点SF001)とも方向性において



第68図 下郡遺跡群航空写真(東から撮影、大分川を望む)

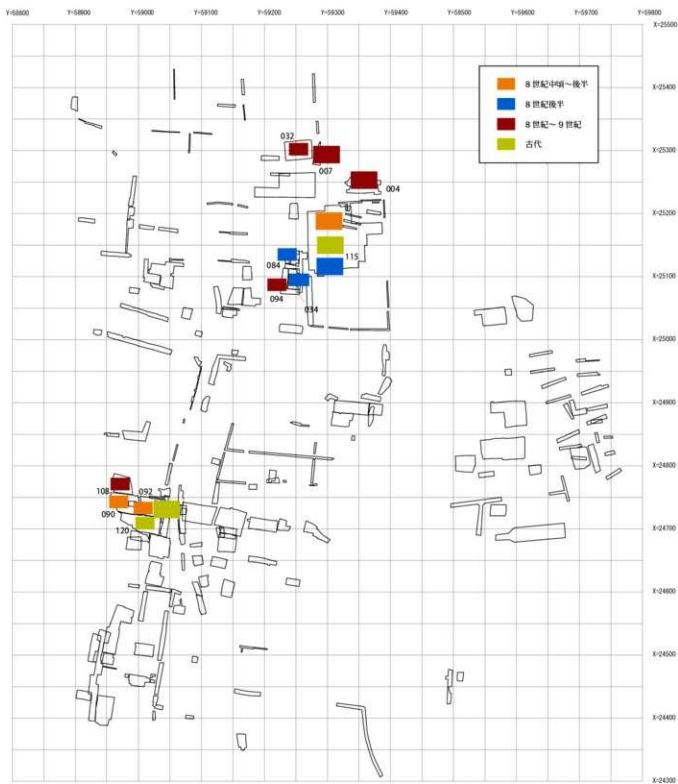


第69図 第115次調査区(F区)全景

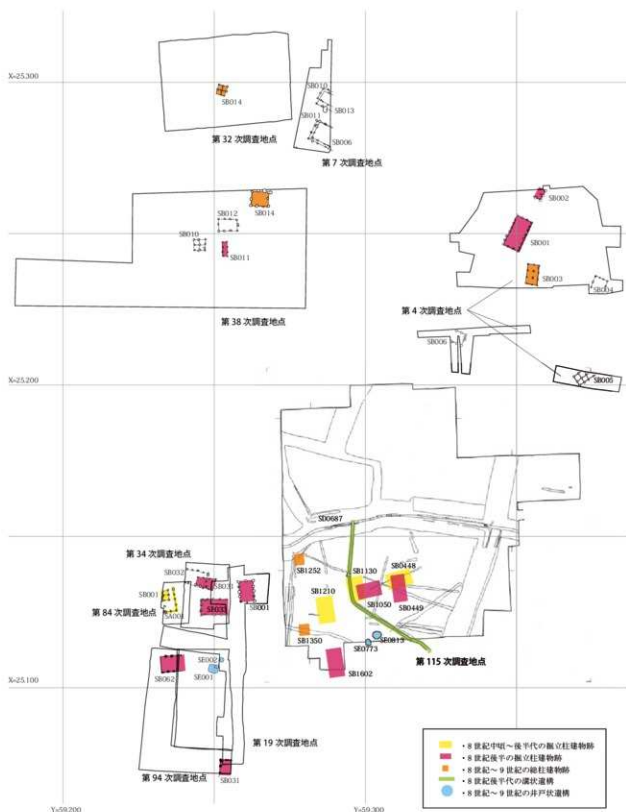
掘立柱建物跡
(B区)

掘立柱建物跡
(F区)

主軸方向



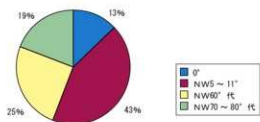
第70圖 古代獨立柱建物跡時期別分布圖 (1/6,000)



第 71 図 古代道構時期別位置図 (F 区中心)

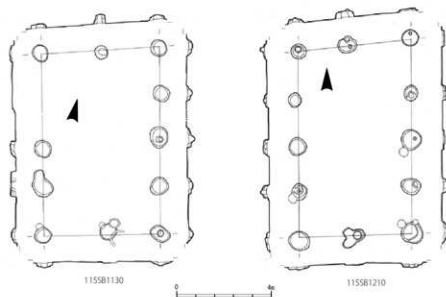


第72図 古代遺構時期別位置図 (H区中心)



第73図 古代掘立柱建物跡主軸方向の円グラフ

【8世紀中頃～後半】



第74図 古代掘立柱建物跡実測図集成① (1/160)

一致する。また、第115次調査の南側に位置する古代の井戸跡(115SE0813)を囲むように掘立柱建物跡と櫓列が展開する。さらにその北東部には大型の廃棄土坑や焼成坑が存在する。廃棄土坑からは、大量の供膳形態を伴った土器群や煮炊具等が出土している。これらの事象は第115次調査区周辺が郡衙政庁域に近接する地区であることを強く示唆するものであり、廃棄土坑からの土器群の内容を考え合わせると政庁域の中でも屈的な性格を帯びた区域であったと想定できる。しかしながら、第115次調査区の北西側周辺は後世の大規模な地下げ事業のために広範囲にわたって遺構が欠失しており、郡衙政庁の所在や政庁域の全容解明には至っていないのが現状である。

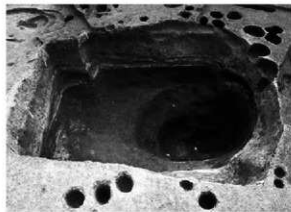
掘立柱建物跡H区 下部遺跡群南側(H区)における掘立柱建物跡については、第71図にあるように、F区と同様第90次調査において検出した掘立柱建物跡(090SB008)や第120次調査において検出した掘立柱建物跡(120SB2520・090SB008・090SB294等)の周囲櫓列跡(120SA2580・090SA007)がコ字状に配置されており、その内部空間には同時期の井戸状遺構(120SE1350)が確認されている。櫓列等に圍繞された中に井戸状遺構が検出されるのは先述したF区においても同様であり、この地域のひとつのパターンであった可能性が指摘できる。また、120SE1350は5.0m×4.2mの大型の長方形プランの掘り方を持ち、機能停止後に数回の掘り返しが行われている。土器埋置や埋め戻し時に刻子を封入するなど、呪術的な様相を見せる遺構でもある。さらに、埋土上部の土坑内では何度も火を焚くという行為を行っている。これは、H区周辺が祭祀や呪術的な面を強く持つ特殊な空間である事を示唆している。このF区とH区を南北に延びる道路状遺構が結び、F区においては先の南北道路に交差する東西道路の一部も確認されており、今後の推定政庁域周辺の様相を考察するうえでも注目されるものである。

参考文献

- 大分市教育委員会 2000『下部遺跡群第115次調査 F区』～r 6～8地点『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.11 1999年度
- 大分市教育委員会 2006『下部遺跡群Ⅲ』-大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2-
- 坪根伸也 2007「第2節 考察1. 豊後大分型道路について」『下部遺跡群Ⅳ』-大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3- 大分市教育委員会
- 大分市教育委員会 2008『下部遺跡群Ⅵ』-大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5-

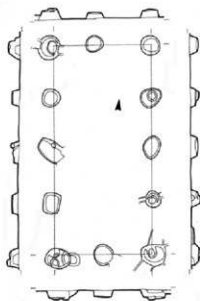


第75図 第115次SB1602

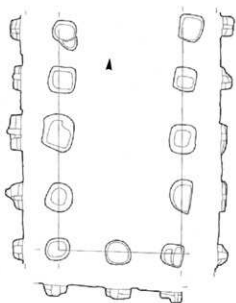


第76図 第120次SE1242

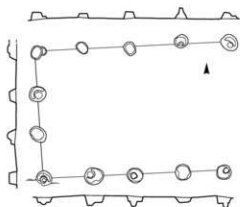
【8 世紀後半】



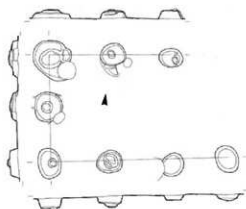
1155B449



1155B1602

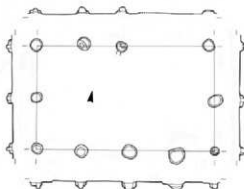


0345B033

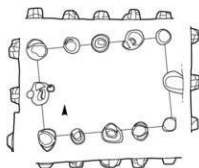


1155B448

【8 世紀後半～末】



1155B1050

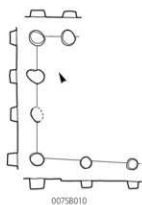


0195B001

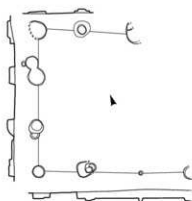


第 77 図 古代掘立柱建物跡実測図集成② (1/160)

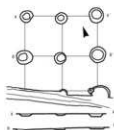
【8世紀後半～9世紀】



0075B010

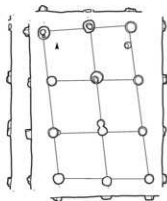


0075B006

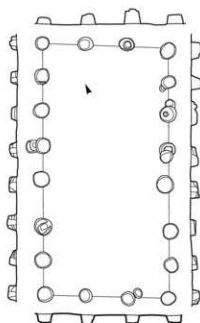


0325B014

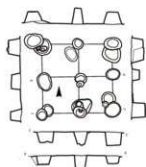
【8世紀～9世紀】



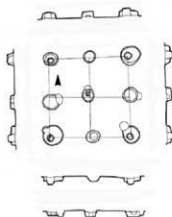
0045B003



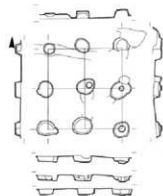
0045B001



1085B196



1155B1350



1155B1252

第78図 古代掘立柱建物跡実測図集成③ (1/160)

第30表 古代厩立柱建物跡一覧表

遺構名	採回番号	時期	規模					主軸方位	掲載報告書
			奥行×桁行(m)	奥行×桁行(m)	柱間距離(m)	柱穴の大きさ(m)	発見面積(m ²)		
094SB031	—	8C	2間+a×2間+a	3.6+a×4.4+a	1.7×2.0~2.2	0.6~0.8 深さ0.4~0.5		N-5°・E	下部VI P198 第186図
094SB062	—	8C	2間+a×不明	5.2×4.1+a	1.8×?	0.6~0.8 深さ0.5		N-5°・W	下部VI P199 第187図
090SB008	—	8C中頃~後半	4間×3間(現状)+a	7.7×6.8+a	1.8~2.1×2.2~2.4	0.6~0.8 深さ0.4~0.6		N-2°・E	下部I P60 第26図
092SB011	—	8C中頃~後半?	2間×2間	3.12~3.44×4.68		深さ0.6		ほぼ真南北	下部I P180 第184図
092SB111	—	8C中頃~後半	2間×2間	3.12×3.44			10.73		下部I P181 第186図
115SB1130	74	8C中頃~後半	2間×4間	4.94×7.86				38.82 N-11°・W	下部II
115SB1210	74	8C中頃~後半	2間×4間	4.80×8.10	2.1~2.7×1.86~2.34			38.88 N-8°・W	下部II
090SB294	—	8C中頃~後半	2間×5間	4.76×10.76	2.26~2.5×1.9~2.5	0.9~1.0 深さ0.6~0.7		52.5 南北	下部I P65 第32図
115SB0448	77	8C後半前後	2間×3+a間	4.42×7.5+a	2.2			N-78°・E	下部II
115SB1050	77	8C後半前後	2間×4間	4.4×7.3	2.15~2.16×1.55~2.0			32.12 N-79°・W	下部II
115SB1602	—	8C後半前後	2間×5間	5.0×12.0		0.65 深さ0.35~0.50	60.0		下部II
034SB033	77	8C後半頃	3間×4間(現状)	5.4×8.1+a	1.7~1.9×1.9~2.1	0.4~0.8 深さ0.2~0.4		E-4°・N	下部III P312 第379図
115SB0449	77	8C後半代	2間×4間	4.14×8.78	2.04~2.1×2.12~2.26			36.3 N-9°・W	下部II
019SB001	77	8C後半~末	2間×4間	4.6×6.9	2.3×1.7~1.8	0.8~1.1 深さ0.6		31.7 N-6°・W	下部III P227 第273図
086SB050	—	8C後半~末	2間×2間	3.0×3.0	1.4~1.5×1.4~1.5	1.0×1.0の礎 方形柱礎0.35		9 N-18°・E	年報8 P22
007SB010	78	8C後半~9C	3間×2間+a	5.3×4.0+a	1.6~1.9×2.0	0.5 深さ0.42		N-60°・W	下部VII P140 第170図
007SB013	—	8C後半~9C	3間×1間+a	5.2×2.2+a	1.4~2.0×2.2	0.3~0.6 深さ0.2~0.3		N-60°・W	下部VII P141 第172図
007SB011	—	8C後半~9C	3間×2間+a	3.4+a×6.0	1.6~1.8×1.4~2.0	0.6 深さ0.4		N-68°・W	下部VII P140 第171図
007SB006	78	8C後半~9C	3間×3間+a	6×6.4+a	1.7~2.0×1.8~2.2	0.7~1.0 深さ0.2		N-68°・W	下部VII P139 第169図
032SB014	78	8C後半~9C	2間×2間	3.2×3.6	1.6×1.8	0.5~0.7 深さ0.1~0.2		11.52 N-13°・E	下部V P62 第52図
108SB196	78	8C~9C	2間×2間	3.0×3.1	1.5×1.5	0.5~0.8 深さ0.3~0.6	9.3	N-88°・E	下部V P216 第221図
120SB2590	—	古代	2間×3間	3.7×4.5	1.6~1.8×1.2~1.4	0.3~0.6 深さ0.2~0.5	16.65	E-7°・S	下部III P314 第280図, 281図
120SB2600	—	古代	2間×3間	3.24×4.4	1.4~1.7×1.3~1.6	0.3~0.8 深さ0.3~0.4	14.256	E-2°・S	下部VI P315 第282図
120SB2520	—	古代	4間×4間	7.5×9.8	1.8~2.1×2.0~2.8	0.6~0.8 深さ0.5		73.5 N-1°・E	下部VI P313 第279図
115SB1252	78	古代	2間×2間	3.09×3.4	1.44~1.65×1.7~1.74			10.57 N-5°・W	下部II
115SB1350	78	古代	2間×2間	3.32×3.38	1.6×1.66~1.72			11.22 N-7°・W	下部II
004SB001	78	奈良~平安	3間×7間	5.4×10.5	1.8×1.5	0.6~0.7 深さ0.4~0.6	56.7	N-25°・E	下部III P56 第59図
004SB002	78	奈良~平安	2間×3間(推定)	3.6×3.6(推定)	1.8×1.7	0.9 深さ0.5	12.96	N-28°・E	下部VII P57 第60図
004SB003	—	奈良~平安	2間×3間	3.8×6.5	1.7~2.0×2.0~2.4	0.4 深さ0.2~0.3	24.7	N-6°・E	下部VII P58 第62図
004SB004	—	奈良~平安	3間×2間+a	4.5×4.8+a	1.3~1.5×1.5~2.0	0.5 深さ0.3~0.4		N-23°・E	下部VII P59 第63図
004SB005	—	奈良~平安	2間×3間+a	3.6×5.6+a	1.6~1.8×1.8~2.0	0.6~0.8 深さ不明		N-53°・E	下部VII P60 第64図
126SB053	—	古墳時代	2間×1間						下部II

溝状遺構・井戸跡

井戸状遺構の配置 下郡遺跡群内での井戸状遺構についてはその配置状況や建物等との関連ならびにその構造等が注目される。まず、古代の遺構を多く検出したF区内の第115次調査区から検出した115SE813の配置状況を見ると、他に同時期に機能している井戸はなく、コの字状に規格的な配置を有する掘立柱建物跡群の内部空間に位置している（第83図参照）。この井戸は複数回の造り替えを行っており、最初期には115SE773が機能していた可能性がある。ついで115SE728、さらに115SE813と造り替えられ、最終的には9世紀前半まで機能していたと考えられる。同様に第34次調査区内の034SE001に関してもこの井戸の北側から西側にかけてコの字状に掘立柱建物跡群が配置されている（第83図参照）。さらには本遺跡群南西部に位置する第120次調査区内の120SE1350の周囲には掘立柱建物跡と並列するように二重の柵列跡がコの字状に配されている。つまり、掘立柱建物跡とこれに付随する井戸跡の組み合わせに一定のパターンが存在し、こうした単位が遺跡群の各所に点在していた可能性を指摘することができる。

井戸状遺構の構造 115SE813の検出プランは楕円形～円形に近い形状を呈し、その規模は2.6m×3.0mを測るものである。井戸の平面プランは方形を呈し、一辺1.25mの木枠による井戸枠が確認されている。また、隅柱4本を設置し、横木により接続している。井筒に相当する井戸枠部分は最大1.5mの板材を横方向に用いて積み（横積）、柄により固定する。底面までは1.14mを測る。宇野隆夫氏^{註1}による横板組隅柱どめ井戸である。7世紀から9世紀にかけては木組みの井戸が下郡遺跡群と同様に他地域でも盛行する時期にあたる。

第84図・85図は8世紀から9世紀の井戸状遺構の集成であるが、これを宇野氏による井戸の型式分類に当てはめると、同じ木組みの井戸である横板井籠組みの井戸、丸太割貫き材を合せた構造を持つ井戸、素掘りの井戸、石組井戸に相当する。第76次調査区の076SE309や第32次調査区内032SE008は二段ないし三段以上横板を重ねる横板井籠組の井戸である。また、第5次調査区内検出の005SE093はクスノキを使用した丸太割貫き材を合せた構造を持つ井戸である。前者の



第79図 第32次調査SE001



第80図 第76次調査SE309

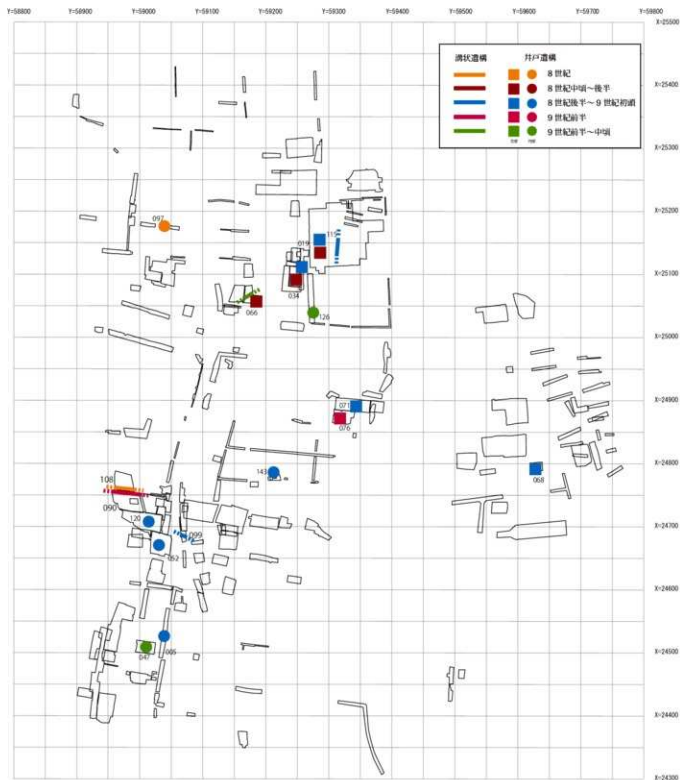


第81図 第5次調査SE093



第82図 第19次調査SE002

註1 宇野隆夫 1982「井戸考」『史林』第65巻 第5号 史学研究会



第 83 図 古代井戸状遺構・溝状遺構分布図 (1/6,000)

【8世紀】



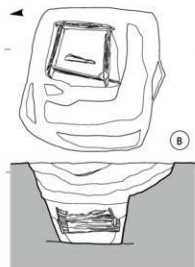
0935E037

【8世紀後半前後】



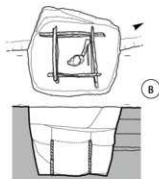
1155E773

【8世紀後半】



0345E001

【8世紀後半～末】



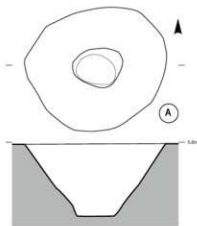
0325E008

【8世紀末】



0685E001

【8世紀末～9世紀前半】



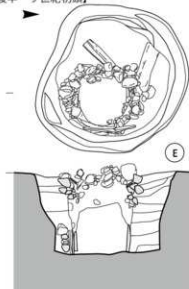
0525E002 (1/150)

- (A) ・ ・ ・ 素掘り井戸
- (B) ・ ・ ・ 横板井籠組井戸
- (C) ・ ・ ・ 横板組隅柱どめ井戸
- (D) ・ ・ ・ 横板組隅柱どめ井戸
- (E) ・ ・ ・ 横板組隅柱どめ井戸



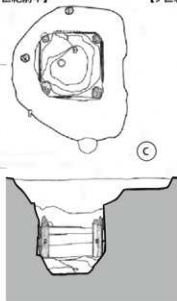
第84図 古代井戸状遺構実測図集成① (1/80・1/150)

【8世紀後半～9世紀初頭】



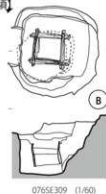
0195E002 (1/60)

【9世紀前半】



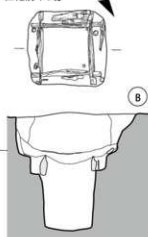
1155E813 (1/60)

【9世紀前半～中頃】



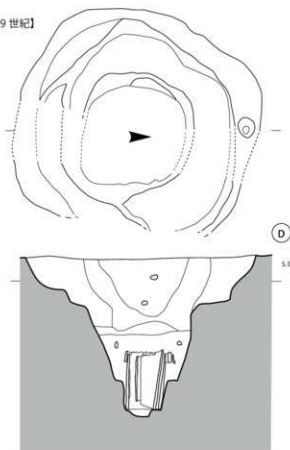
0765E309 (1/60)

【9世紀前半代】



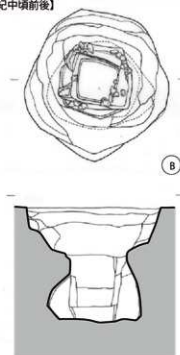
0715E089 (1/80)

【9世紀】



0055E093(ST) (1/80)

【9世紀中頃前後】



1155E057 (1/60)

- (A) ・素掘り井戸
- (B) ・横板井籠組井戸
- (C) ・横板組隅柱どめ井戸
- (D) ・丸太刺貫き井戸
- (E) ・石組井戸

0 2m

0 2m

第85図 古代井戸状遺構実測図集成② (1/60・1/80)

005SE093は3回ほどの掘り返しを行っており、最終段階においては掘り方が4.9mとかなり大きな規模の井戸となっており、これは本来の井戸廃絶後の二次的な転用により雨水等を貯水する為の施設とした機能した可能性が高い遺構である。第19次調査区内検出の019SE002は井戸上部を河原石により4～5段積み重ねた井戸である。内部の水溜めはクスノキ材を使用した丸太割貫き構造をもつ。『井戸考』^(註2)の中で丸太割貫きの井戸は弥生時代後期以降に広く普及した井戸型式とされていたが、木組の井戸の中でも横板井籠組の井戸が7世紀から9世紀にかけて著しく盛行することに宇野氏も注目している。本遺跡群内においても、横板井籠組井戸の割合が非常に高い点が注目される。

第31表 古代溝状遺構一覧表

遺構名	探洞番号	時期	断面形状	規模			方向	掲載報告書
				長さ(m)	幅(m)	深度(m)		
0875D100	—	8C 後半～末	—	—	—	—	—	下部Ⅴ P243 第199図
0995D008	—	8世紀後半～末	梯形?	7.5 (検出)	—	0.3	東西	下部Ⅲ P209 第163図
0755D001	—	8C	?	8.25 (検出)	0.5 (検出)	0.5	南北	下部Ⅳ P187 第286図 (全体遺構図)
0055D014 (6T)	—	8C	楕形	5.9	1.4	0.6	南北	下部Ⅶ P122 第151図 (全体遺構図)
1085X1049	—	8C	U字形	—	0.5	0.15	長土坑	下部Ⅴ P231 第237・238図
1155D0687	—	8C 後半代	浅い円形	46.5 (検出)	0.88	?	南北	下部Ⅱ
0905D076	—	9C 初期	逆台形	54.0	0.2～0.8	0.1～0.4	北側は弧を描きながら東西方向	下部Ⅰ P69 第40図
0665D010	—	9C	U字形	18.0 (検出)	1.1	0.4	北東～南西	下部Ⅳ P130 第184図

第32表 古代井戸状遺構一覧表

遺構名	探洞番号	時期	形状	規模		構造(単位はm)	掲載報告書
				大きさ(m)	深度(m)		
0935E037	84	8C	円形	径2.1～2.2	1.9	・井筒あり ・オーバーハングして笠状	下部Ⅵ P193 第177～179図
0975E023	—	8C 中頃	円形	—	—	・表掘りの井戸	年報9 P34
1275E030	—	8C 中頃以降	—	—	—	—	年報12 P24
0325E008	84	8C 中頃～後半	—	—	—	—	下部Ⅴ P66 第56・57図
0345E001	84	8C 後半	方形	3.05 × 2.7	1.74	・井籠組上下二段(0.3 × 1.2、厚さ0.05の4枚組)	下部Ⅷ P313 第381図
1435E005	—	8C 後半	不明	東西0.8 南北2.9	1.22	・掘り込み2段	下部Ⅷ P338 第333図
1435E015	—	8C 後半	不明	東西1.62(検出長) 南北1.1(検出長)	1.5	・不明	下部Ⅷ P339 第335図
1155E0773	84	8C 後半前後	長方形	1.9 × 2.3	1.1 + a (断面まで達していない)	・0.7掘り下げた位置にテラス、ここから径0.95の構内所掘り込み	下部Ⅱ
1205E1350	—	8C 後半前後	—	3.5 × 2.0 + a	6.8	—	下部Ⅵ P337 第301図
0685E001	84	8C 末前後	方形	1.6 × 1.7	0.8	・中に段状の平坦あり (井筒基部の一部として機能し段状平坦部を支えたと可能性考えられる)	下部Ⅵ P80 第66図
0195E002	85	8C 後半～9C 初期	円形	径3.2	1.8	・石組井戸 ・幅1.3、深さ0.7の位置でクスノキ材を使用した平截丸太割貫き材あわせたものを埋置し、水溜部を構築する。木材の大きさは、最大径1.2、最大高1.1、厚さ0.08～0.1	下部Ⅷ P231 第282図
0525E002	84	8C 末～9C 前葉	円形	径0.5	2.5	・表掘りの井戸	下部Ⅳ P74 第90図
1155E0813	85	9C 前半	楕円形～方形	3.0 × 2.6	1.14	・1辺1.25の木枠	下部Ⅱ
0715E089	85	9C 前半代	円形	径1.24	1.45	・木枠あり	下部Ⅵ P104 第94図
0765E309	85	9C 前半代～中頃	略方形	2.4 × 2.5	1.9	・木枠あり、板材4枚重ね	下部Ⅵ P136 第111図
1265E057	—	9C 中頃前後	—	—	—	—	下部Ⅱ
0055E093 (5T)	85	9C 代横溝・9C 末葉	円形	4.9	3.3	・クスノキの丸太割貫き材をあわせた構造、水溜部あり	下部Ⅷ P104 第128・129図

註2 註1に同じ

道路状遺構

下部遺跡群の発掘調査において確認されている古代道路状遺構は第 61・69・90・92・98・99・104・115 次調査地点等で検出されている。こうした検出調査地に共通するのは、いずれの検出地点とも下部遺跡群が占地する自然堤防上の最高位面であるという点である。さらに、基本的にはそれぞれの道路状遺構とも「豊後大分型道路」の構造を示す点も共通する要素として重要である。「豊後大分型道路」とは、周辺地形の状況とは無関係に掘り込みを伴うとともに下記の特徴を有するものである。

- 路面形成 ①掘り込み内を嵩上げて路面を形成する。
波板状凹凸面や連続土坑の上面に粘質土などを主体とする舗装剤で被覆し、路面を形成する。また、舗装面の下に土器細片やバラスによる路床材を充填するケースもある、
- 道路ルート ②道路ルートは直進性・規格性が高い。

道路ルートは直進性が高く、本来区画を強く意識していたものが、道路として利用された可能性が高い。加えて強い規格性をうかがうことができ、直線として認識されない場合も詳細に観察すると直線の組み合わせである場合が多い。

大分平野域内での「豊後大分型道路」の中で最古の例は中安遺跡第 2・3 次調査 SF655・755 であり、7 世紀末から 8 世紀初頭頃の所産と考えられる。11 世紀から 12 世紀のものには元町石仏参道調査区例があり、16 世紀を中心とする時期には中世大友府内町跡での多くの事例がある。近世には近世府内城下町跡の主要道路に「豊後大分型道路」が採用される他、下部遺跡群や横尾遺跡群でも確認されている。

すなわち、大分平野域では、一度路面幅を掘り込み、路面を形成するといった特徴を有する道路例が古代から近世にいたるまで広く認められる。こうした道路を「豊後大分型道路」と定義したのである。

下部遺跡群の古代道路状遺構は、段階を追った造り替えを随所に認めることができるが、こうした変遷を最も明確に示すものに第 69・98・99 次調査地点 SF001 がある。

道路変遷 SF001 は南北に延びる延長線上の調査地点での検出事例を繋ぐと総延長 98 m について確認したことになる。道路はほぼ真南北方向に構築されており、調査所見から 6 段階の時間経過に伴う変遷を明らかにすることができた。

第 1 段階 検出面での幅 1.8 m、深さ 0.8 m、路面幅 1.1 m を測る溝状を呈し、断面形状は逆台形をなす。溝の底面には灰白色粘土を主体とした粘質土が充填され、粘土の下部には径 0.6 m を測る不定円形の連続土坑が規則的に配置されている。

第 2 段階 第 1 段階の灰白色粘土による路面を暗褐色土と灰色粘土の混土により被覆し、第 1 段階よりも高い位置に路面を新たに形成する段階である。この路面下にも連続土坑を確認することができる。

第 3 段階 第 2 段階の路面を暗茶褐色土と灰白色粘質土により順次被覆し、路面を形成する。この段階の路面下には連続土坑は認められない。路面となる灰白色粘土の中央部分は窪んでいる。

第 4 段階 第 1 段階から第 3 段階の路面を形成していた溝はすべて埋められてしまい、新たに道路となる部分を幅 5 m 以上にわたり掘り下げ、平坦面（路面）を形成する。両側に造られる側溝は一連の溝状とはならず、幅 0.5 ～ 0.8 m の長土坑の連続として確認することができる。側溝の底面は平坦でなく随所に凹凸が認められる。これはいわゆる「土坑連結式掘削工法」⁽³¹⁾ によるものである。路面下の路床には長楕円形状の連続土坑が構築される。連続土坑内には土器小片が充填され、これらの上部を灰白

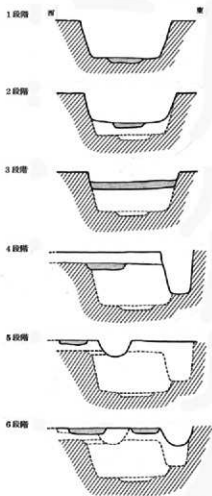
註 1 早川 泉 1997『古代交通研究』第 6 号 古代交通研究会



第 86 図 道路内連続土坑完掘状況



第 87 図 道路側溝調査状況



第 88 図 道路変遷断面図

色粘土等で整備する。後の補修に伴う可能性もあるが、路面の一部には土器小破片を敷き詰めた状況も認められる。また、この段階の道路の整備に伴い、T字路を形成する交差点部分に土師器裏の埋納が行われている。

第 5 段階

第 5 段階

路面幅が縮小したかあるいは道路中心部が西側へ移動したと考えられる段階であり、大規模な側溝は埋められ、1.2 m ほど西に規模の小さな側溝が新たに造られるようになる段階である。

第 6 段階

第 6 段階

側溝がふたたび東側に移動し、第 4 段階の側溝とほぼ同じ位置に掘りなおされる段階である。側溝の規模は第 4 段階に比して小さい。路面には波板状凹凸面、連続土坑などを明確な形で確認することができる。このような波板状凹凸面、連続土坑の上面には茶灰色砂質土が舗装部材として全面に被覆されている。この路面形成の際に土師器の埋納がおこなわれており、時期推定の手掛かりとなる。土器埋納は土師器環 1・小環 1・椀 1 を 3 段重ねに埋置したものであり、諸特徴からおおよそ 9 世紀末前後の年代を推定することができる。

それぞれの段階の年代であるが、第 1 段階～3 段階は、埋土内の出土遺物から 8 世紀中頃～9 世紀初頭に推定でき、第 4 段階の連続土坑内の土器には 9 世紀初頭に比定される土師器環を含むことから 9 世紀初頭以降の構築と判断される。第 6 段階は埋納土師器から 9 世紀末前後の年代が考えられることから、道路の最終機能段階をほぼこの時期に求めることができる。

一定の単位

普請制的な工事

溝から道路へ

大量交通・大量
輸送

官衙遺物の出土

欄列に囲繞され
た空間

各地点間を結ぶ
道路網

道路の構築工程に際して注目される点に路床に構築される土坑の形態差がある。第69次調査地点の第1段階の道路状遺構の路床土坑の形状に着目すると、形態の分布状況に一定の単位を抽出することができる。これは道路施工時の作業単位あるいは「普請制的な工事の請負者の単位」を示していると考えられる。

以上のように第1段階～第6段階に至る南北道路築造過程において、構造の変化から道路機能の変化を読みとることができる。直線的な計画性を重視した区画路的な道路である第1段階から第3段階の道路状遺構が、大量交通、大量輸送に対応した規模へと変化する第4段階以降へと変遷する。なかでも第1段階から第3段階の区画路については、地面を掘り込むという、排水面で極めてデメリットが大きな構造でありながら、数度の改修を伴う道路として機能している点は注意を要する。こうした状況はその第一義的な機能が、あくまで区画を意図したものであることに起因していると考えられる。

根源的には区画として機能していた溝が道路へと変化した、それが大量交通・大量輸送というニーズの変化により構造変遷を遂げたものと推定される。このような変化は遺跡群全体の質的な変化に対応していると考えられ、遺跡群全体の動向との関連の追求が今後の課題となる。

さて、こうした道路状遺構と同時代の遺構の分布についてみる。これまでの調査による下部遺跡群内での8世紀から9世紀の遺構群というのは、遺跡群のほぼ中央にあたるF区、東の鶴崎台地裾部に展開するB区、そして遺跡群の南西部分にあたるH区の3地点に集中的に分布する状況が把握されている。B区では、掘立柱建物跡、井戸跡、円面硯、「家釜」と焼成前に刻書された土師器環などが検出されており、ひとつの核をなす施設が存在が想定される。F区では真南北方向を指向する掘立柱建物跡群、刻書土器、墨書土器、円面硯などの遺物が大量に確認されており、遺構、遺物量ともに遺跡群内で最大量を示す。こうした点からも当遺跡群の中心的な施設の存在が予見されている地域となっている。このF区の調査対象地の西側にあたる第84次調査では南北・東西方向に直角に近い屈曲を示し西方向へ展開する欄列(084SA001)が確認されている。8世紀中頃～後半代と推定されるこうした欄列は明らかに区画を意図したものであり、調査対象地の西側に欄によって区画された空間の存在を示している。この空間の東側に調査によって屈的な空間利用が確認されていることから、従来からの下部遺跡群＝大分都衙とする推定が正しいとするならば、この欄列に囲繞された空間こそ政庁域である可能性が高いといえる。このような想定に基づけば、第66次調査地点をはじめとする地点で確認されている真南北方向を指向する大規模な直進道路の役割が明らかとなる。すなわち、ひとつの中心を形成していたH区と中心施設の存在が予見されるF区を繋ぐ機能を担っていたものと推定され、さらに南方向に延びる道路は推定「日向道」(注2)の大方右岸の起点となっていた「津守・片島」地区へと続くものと考えられる。



第89回 下部遺跡群内古代道路推定ライン

註2 出田和久 1987『古代の駅制』『大分市史』上巻 大分市

参考文献

- 坪根伸也 2007「第2節 考察1. 豊後大分型道路について」『下部遺跡群IV』・大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 - 大分市教育委員会
- 大分市教育委員会 2005「中安遺跡第2・第3次調査」『海部の遺跡1』都市計画道路横塚久土線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 大分市教育委員会 1996「発掘調査及び史料」『国指定史跡大分元町石仏保存修理事業報告書』
- 大分市教育委員会 2002「大友府内4」・中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書
- 大分市教育委員会 2003「大友府内5」・中世大友府内町跡第3次発掘調査報告書
- 大分市教育委員会 2004「大友府内7」・中世大友府内町跡第1・2次発掘調査報告書
- 木村幾多郎 2001「豊後府内城下町移転と旧府内町」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会
- 大分市教育委員会 2002「下部遺跡群第128・135次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.13 2001年度
- 大分市教育委員会 1999「横尾遺跡群第69次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.10 1998年度 他
- 大分市教育委員会 2001「横尾遺跡群第79次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.12 2000年度
- 小郡市教育委員会 2000「上岩田遺跡調査概報」小郡市文化財調査報告書 第142集
- 飯田充晴 1993「道路築造方法について一埼玉県所沢市東の上遺跡の道路跡を中心にして一」『古代交通研究』第2号 古代交通研究会
- 出田和久 1987「古代の駅制」『大分市史』上巻 大分市
- 近江俊秀 1993「道路状遺構の構造に関する検討」『鴨神遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 早川 泉 1991「古代道路遺構に残された圧痕一波板状凹凸面の性格について」『東京考古』9 東京考古談話会
- 早川 泉 1997「古代道路遺構の虚像と実像一東山道武蔵路の調査を通して一」『古代交通研究』第6号 古代交通研究会
- 山村信榮 1993a「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学』第68号 九州考古学会
- 山村信榮 1993b「大宰府周辺の道路状遺構」『古代交通研究』第2号 古代交通研究会

土 坑

古代の土坑については各調査区内において多数検出している。性格不明な土坑が大多数を占める中、大規模な廃棄土坑、焼成土坑や祭祀に關と推定される土坑等が認められる。それらの特殊土坑について分布状況を含めて改めて検討する。中には115SX668・669のような長土坑が2本東西方向に平行して存在する事例がある。ともに3.4～3.85mの長さを通り埋土は褐色で若干の粘性を帯び、炭化物を含む。両プランの間隔は約35cmと近く、土坑の様相も酷似する。周囲には柱穴と思われるビットを配しており、何らかの施設に伴うものと考えられる。

出上遺物 土坑について 下部遺跡群内の古代の遺構には廃棄土坑と考えられるものが数多く検出されている。その中でも第115次調査区内から検出された廃棄土坑は、本遺跡群内最大規模の大型廃棄土坑(115次SX450・SX322)である。115SX450は長軸9.0m、短軸4.4m、深さ0.5mを測り、楕円形プランを呈している。埋土の堆積は5層に分層でき、土坑内北側に3度の掘り返しが行われている。出土遺物は土坑内の東半分に集中して出土しており、8世紀中頃から後半前後の所産と推定できるものである。その出土遺物の器種構成はバラエティーに富んでおり、特に供膳形態が多く認められる。さらに移動式カマド、土師質甕等の煮炊具、また製塩土器や都城系高環、小壺等多彩な遺物内容を含んでいる。115SX322は115SX450と同様の様相を示すが、他遺構により切られており遺構の半分は欠失している。この土坑からも115SX450と同様の遺物が大量に廃棄された状態で出土している。この土坑に特徴的なのは、土坑中央に集中的に製塩土器が破棄されている状況が見られたことである。所産年代は115SAX450と同時期の8世紀中頃から後半にかけてである。これらの出土遺物について

はそれぞれ器種ごとに分類を行い形態的な変遷を示す(第104～110図)。その他、廃棄土坑と推定される遺構が数多く検出されており、それらのほとんどが掘立柱建物跡の周囲に認められる。また、115SX450、SX322の東側には焼成坑と考えられる遺構も検出されており、この周辺の土地利用状況を示すものとして注目される。

焼成土坑

次に焼成土坑であるが、代表的な遺構に第115次調査区のSX0427が上げられる。南北長4.5m、東西長4.12mを測る隅丸長方形プランを呈する土坑である。底面の東側2/3が著しく被熱し、南北東面には粘土による窯壁が遺存する。西側部分は底面の焼土が欠失していることから、掻き出し口として機能していたと考えられる。類似の遺構として、市内井ノ久保遺跡A区SX069^①がある(第93・94図)。この遺構も隅丸長方形のプランを呈し、底面が被熱により焼けている。以上の点を踏まえて望月清司氏^②による焼成土坑の認定条件^③と対比すると、両土坑ともに氏の掲げる3つの条件をいずれも満たしており、焼成土坑と認定できる。さらに、望月氏は遺構の形態、被熱の範囲、位置、強度によりA～C、その他の4つに細分している。これによれば下部遺跡群内の115SX0427はA-1類に相当すると考えられる。このA類は古代の焼成土坑の中で普遍的な構造のものであり、熱が最も上昇するタイプである。また井ノ久保遺跡A区SX069はA-1a2類に該当する。これらA類の土器焼成坑は9世紀代において九州内では大分以外では確認されていない^④。また、A類焼成坑は各地域で土器の需要に応じた生産の画期に採用される傾向を窺うことが出来るとしており、A類を大量生産に基づいた集約経営型土器焼成坑と位置づけている。下部遺跡群内の8世紀から9世紀にかけての様相はその検出遺構や出土遺物から明らかに官的様相を強く帯びているものである。

祭祀遺構

祭祀遺構には、第120次調査区から検出された120SX1330、120SX1420、120SX2715、120SX2731、120SX2730等があげられる。下部遺跡群内中央西側に位置する調査区で、古代の遺構も多数検出している。120SX1330は120SE1350の井戸の機能停止直後に掘り返されたプランである。井戸本体が存在する部分に位置し井戸本体に明らかに何らかの変更を意図して掘られたものである。

意図的改変

深さは検出面から約2.0mの地点にまで及んでいる。さらにその下部遺構として東西に長い船底状の断面形状を呈し、平面プランは方形を呈するその底部床面に土器短頸壺が埋置されている。さらに壺埋置後120SX1420、120SX1330は埋め戻されたと考えられるが、120SX1330の埋土からは刻

羽管の出土

骨が1点出土している。さらに120SX2715、120SX2731、120SX2730はその120SX1420に埋め戻された短頸壺の直上に位置し、各土坑とも揺鉢状を呈し内部で火を焚いた状況が看取された。このように120SE1350の井戸の機能停止後何らかの祭祀的な行為が何度も繰り返されており、極めてマジカルな様相を呈している。この祭祀土坑を中心とした周囲には第115次調査同様に掘立柱建物跡がコ字状あるいはL字状に配置されており、櫓列もまた同一方向で確認されている。また、この調査区の東側には古代の道路状遺構が南北方向に延びている。さらにこの南北道路に接続すると考えられる東西道路も第120次調査に隣接する第90・92次調査区において確認されている。このように8世紀中頃から後半の時期は下部遺跡群内に広範な官衙的建物群の展開が認められる時期に相当する。

南北道路に接続

参考文献

大分市教育委員会 2000「下部遺跡群第115次調査 F区」～r6～8地点『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.11 1999年度

註1 大分市教育委員会 2000『井ノ久保遺跡発掘調査報告書』-東九州自動車道及び併設市道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査-

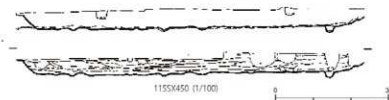
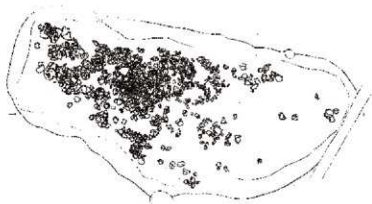
註2 望月清司 1997『古代の土器生産と焼成遺構』窯跡研究会編

【8世紀代】



115SX322 (1/100)

【8世紀～9世紀】



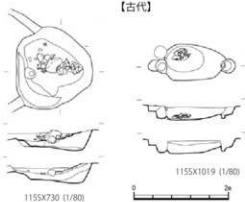
115SX450 (1/100)

【8世紀後半前後】



115SX427 (1/100)

【古代】

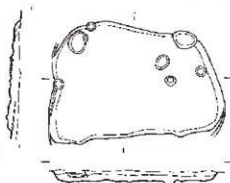


115SX730 (1/80)

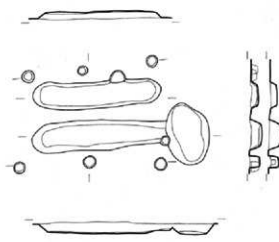
115SX1019 (1/80)



第90図 115SX450 土器出土状況



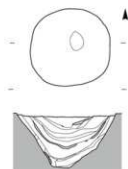
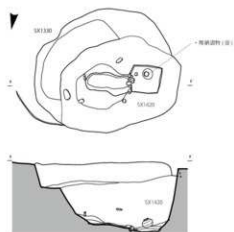
115SX1307 (1/100)



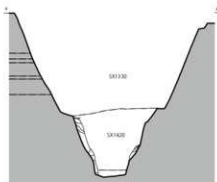
115SX668/669 (1/100)

第91図 古代土坑実測図集成 (1/80・1/100)

【8C 後半～末】



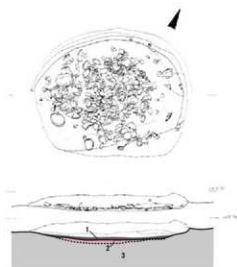
120SX1330 上層遺構 (SX2731) (1/160)



120SX1330・1420(1/160)

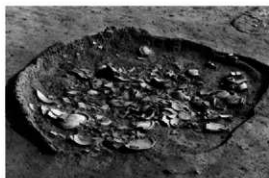


第 92 図 120SX1420 土器出土状況



1. 淡褐色土層（粘土層布）
2. 暗赤褐色被熱層
3. 暗黄褐色砂質土層

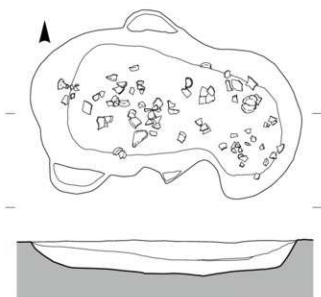
井ノ久保遺跡 A 区 SX069 (1/80)



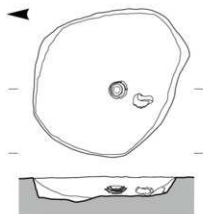
第 93 図 井ノ久保遺跡 SX069

第 94 図 古代祭祀遺構・土器焼成坑実測図 (1/60・1/80)

【8世紀後半前後】

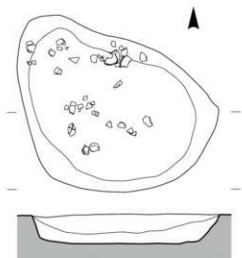


0345X0025



0345X0011

【8世紀後半】



0345X0004



0345X0012 (1/20)

第95図 古代土坑実測図集成 (1/20・1/80)

註3 望月氏の焼成土坑認定条件

- ①掘り込んだだけの単純な土坑であること
- ②土坑床面が赤色に焼けていること
- ③炭・灰・赤色焼土の塊・粒が原位置で確認されその土坑で直接火を使ったこと

註4 小林昭彦 2000『第V章-2 土師器焼成坑』『井ノ久保遺跡発掘調査報告書』一東九州自動車道及び併設市道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査一 第1分冊 一本文編一 大分市教育委員会

第33表 古代土坑一覧表①

遺構名	時代 番号	時期	規模 (m)		平面形状	断面形状	掲載報告書
			大きさ (m)	深度 (m)			
073SK007	—	8C 前半～中頃					年報 7 P32
088SK006	—	8C 後半頃					年報 8 P27
094SK041	—	8C	1.9 × 1.3 + a	0.35	楕円形	逆台形	下部VI P196 第 182 図
094SK054	—	8C	2.6 × 0.85	0.2	長楕円形	浅い皿状	下部VI P196 第 183・184 図
094SK064	—	8C	1.4 (現状)	0.35	不定形	なし	下部VI P191 第 175 図 (全体透視図)
094SK090	—	8C	2.6 × 2.0	0.85	不定形	なし	下部VI P191 第 175 図 (全体透視図)
095SK060	—	古代以降	1.7 × 1.3	0.2	楕円形	浅い皿状	下部VII P389 第 472・473 図
116SK102	—	7C 初頃	0.7 + a × 0.4 + a	0.1	楕円形		下部V P322 第 333 図
092SK101	—	7C 後半～	2.2 + a (長さ) 1.4 (幅)	0.3	長土坑		下部I P265 第 339 図
120SK1095	—	7C 末前後	2.6 × 2.2	?	円形	?	下部VI P277・278 第 274 図
120SK0045	—	7C 末～8C 初頃	2.3 × 1.8	0.22	略方形		下部VI P277・278 第 274 図
092SK100	—	8C 代～	0.6 × 0.4	0.4	楕円形	逆台形	下部I P262 第 325 図
092SK230	—	8C 代～	2.4 (長径)	0.2	円形	浅い逆台形	下部I P265 第 338 図
115SK0213	—	8C 代	3.32 × 2.92	0.16	不整形方形		下部II
115SK0322	91	8C 代	4.2 × 4.2 + a	0.2			下部II
092SK158	—	8C 中頃前後	径 0.5	0.3	円形	?	下部I P172 第 183 図 (全体透視図)
034SK028	—	8C 中頃～後半	径 0.8	0.25	円形	浅い皿状	下部VII P325 第 397 図
038SK027	—	8C 中頃～後半	径 0.4	0.09	円形	逆台形	下部VII P358 第 442 図
034SK015	—	8C 中頃～後半	1.9 (長軸長)	0.06	不定形	長方形	下部VII P319 第 392 図
090SK059	—	8C 中頃～後半	2.2 × 1.28	0.18	楕円形	浅い逆台形	下部I P116 第 114 図
092SK041	—	8C 中頃～後半	径 0.6	0.47	円形		下部I P172 第 183 図 (全体透視図)
007SK005	—	8C 後半前後	2.0 + a × 1.1	0.46	長楕円形	逆台形	下部VII P144 第 177 図
034SK025	95	8C 後半前後	2.9 (長軸長)	0.35	不定形	浅い皿状	下部VII P321 第 394 図
038SK005	—	8C 後半前後	1.9 (長軸長)	0.25	楕円形	浅い皿状	下部VII P344 第 421 図
038SK022	—	8C 後半前後	3.76 × 4.6 + a	0.3	楕円形	浅い皿状	下部VII P351 第 435 図
038SK023	—	8C 後半前後	1.22 × 0.8	0.22	楕円形	逆台形	下部VII P357 第 438 図
038SK015	—	8C 後半前後	2.4 × 2.54 + a	0.25	隅丸方形	浅い皿状	下部VII P347 第 427 図
038SK025	—	8C 後半前後	2.1 × 1.72	0.1	円形	逆台形	下部VII P358 第 441 図
038SK011	—	8C 後半前後	0.4 (周径長)	0.1	円形 or 楕円形	浅い皿状	下部VII P346 第 424 図
034SK011	95	8C 後半前後	1.7 × 1.5	0.28	不整形円形	逆台形	下部VII P316 第 388 図
090SK441	—	8C 後半前後	1.45 × 1.7 + a	0.36	楕円形		下部I P125 第 147 図
115SK0323	—	8C 後半前後	1.6 × 1.07	0.12	楕円形		下部II
115SK427	91	8C 後半前後	2.25 × 2.06	0.4	隅丸方形		下部II
038SK009	—	8C 後半頃	径 1.9	0.2	円形	浅い皿状	下部VII P344 第 422 図
019SK008	—	8C 後半頃	径 1.7	0.2	円形	長方形	下部VII P239 第 291 図
038SK019	—	8C 後半	径 1.8	0.2	円形	浅い皿状	下部VII P349 第 431 図
038SK021	—	8C 後半	径 2.1	0.2	円形	浅い皿状	下部VII P351 第 433 図
092SK090	—	8C 後半	2.8 (長さ) 1.3 (幅)	1.1	長土坑		下部I P172 第 183 図 (全体透視図)
092SK140	—	8C 後半	1.6 (南北長) 1.15 (東西長)	0.2	不明		下部I P262 第 329 図
092SK150	—	8C 後半	0.4 × 2.2	0.25	不定形	皿状	下部I P264 第 332 図
099SK021	—	8C 後半	径 0.6	0.25	円形	逆台形	下部VII P228 第 199 図
034SK012	95	8C 後半	径 1.7	0.28	円形	長方形	下部VII P318 第 390 図
034SK004	95	8C 後半	2.3 × 1.8	0.35	不整形円形	逆台形	下部VII P316 第 388 図
108SK090	—	8C 後半～末	2.1 × 3.35 + a	0.05	長方形基調 (不定形)	長方形	下部V P256・257 第 275・276 図
032SK007	—	8C 後半～末	1.65 × 0.73	0.15	長楕円形	浅い皿状	下部V P68 第 59・60 図
065SK001	—	8C 末前後	1.4 (推定)	0.35	円形	不明	下部IV P184 第 280 図
065SK002	—	8C 末前後	径 6.5 (周)	0.2	円形	逆台形	下部IV P184 第 280 図
092SK130	—	8C 末～	2.7 × 0.7	0.1	不明		下部I P172 第 183 図 (全体透視図)
065SK006	—	8C 以降	1.3 × 0.8	0.2	楕円形	逆台形	下部IV P185 第 283 図

第34表 古代土坑一覧表②

通称名	採掘 番号	時期	規模 (m)		平面形状	断面形状	掲載報告書
			大きさ (m)	深度 (m)			
038SX013	—	8C 後半～9C 初葉	3.8 × 3.2	0.1	隅丸方形	浅い皿状	下部Ⅷ P347 第 425 図
066SX034	—	8C 後半～9C 前葉	径 0.9	0.3	不整形円形		下部Ⅳ P127 第 178 図
007SX016	—	8C 末～9C 初葉	径 0.35	0.14	円形	方形	下部Ⅷ P144 第 178 図
038SX014	—	8C 末～9C 初葉前後	2.8 (横出長) 0.6 (幅)	0.15	長土坑	浅い皿型	下部Ⅷ P347 第 426 図
115SX0450	91	8C～9C	9.0 × 4.4	0.5	楕円形		下部Ⅱ
037SX007	—	9C 前葉前後	1.6 × 1.6	0.2	隅丸方形		下部Ⅴ P83 第 75 図
098SX005	—	9C 初葉～末	6.1 (長さ) 0.46 (幅)	0.36	長土坑		下部Ⅲ P179 第 124 図
069SX031	—	9C	2.0 (長さ現存)	0.7	長土坑		下部Ⅳ P170 第 248 図
061SX016	—	9C 代	5.5 (長さ横出) 0.1～1.0 (幅)	0.2～0.3	長土坑	部鉢状から逆台形	下部Ⅳ P105 第 140 図
120SX0065	—	古代	1.6 (長軸長)	0.05	不整形円形		下部Ⅴ P277・278 第 274 図
140SX460	—	古代	5.0 (縦状)	0.15	隅丸方形	壁溝北側溝周りにあり (幅 0.15m 字状の断面)	下部Ⅲ P247 第 220 図 (全体遺構図)
120SX1375	—	古代	1.9 × 1.3	?	方形基調		下部Ⅳ P388 第 365・366 図
115SX0730	91	古代	1.71 × 1.36	0.37	楕円形		下部Ⅱ
115SX0668	91	古代	3.4 (長さ) 0.7 (幅)	0.2	楕円形		下部Ⅱ
115SX0669	91	古代	3.85 (長さ) 0.8 (幅)	0.23	楕円形		下部Ⅱ
115SX0825	—	古代	1.92 × 1.0	0.33	楕円形		下部Ⅱ
115SX1019	91	古代	1.28 × 0.73	0.25	楕円形		下部Ⅱ
115SX1140	—	古代	9.5 × 3.2	0.26	不定形		下部Ⅱ
115SX1307	91	古代	4.6 × 3.1	0.23	隅丸台形		下部Ⅱ
115SX1545	—	古代	1.88 × 1.1	0.28	楕円形	逆台形	下部Ⅱ

条里地割り 下郡地区には「一ノ坪」や「鉢ノ坪」という古代の条里地割の名残と考えられる字名が現存している。

一ノ坪 さらに、「一ノ坪」は下郡遺跡群中央北側に位置し、「鉢ノ坪」は南東隅に位置している。また、発掘調査の成果では下郡遺跡群第7次調査で検出された中世末期段階の溝状遺構(007SD002)と掘立柱建物跡の主軸方向がほぼ同一の方向性を示している。くわえてこの溝状遺構と区画整理前の地割とがほぼ一致し、この地割は戦国時代以前まで遡る点^(注1)が明らかになっている。これは地割り自身が古代段階まで遡る可能性を示すものである。古代大分郡の条里の坪並びが千鳥式であった^(注2)可能性が指摘されている。先述の「一ノ坪」を基点に千鳥式の坪並びに従いつてはめていくと「鉢ノ坪」は「八ノ坪」に該当する。下郡地区の地割りは大分川の撓拌によりかなり乱れており、その中で一ノ坪に相当する場所が、一町程度の方格状の地割りを良好に残し、さらに地割りの施工が8世紀後半段階まで遡る点は特筆すべき事象である。

(3) 古代の遺物

官衙遺物 本項で取り上げる遺物には、墨書・刻書土器、陶硯、石帯、石権、櫛、斎車、刀子、不明青銅製品等がある。

墨書・刻書土器 墨書土器、刻書土器については、下郡遺跡群内のこれまでの調査によって墨書土器2点、刻書土器3点の出土を確認している。これは大分市全域の傾向として指摘できることであるが、刻書土器の割合が大きい点を特徴とする。墨書土器の中で土師器が1点、須恵器が1点となる。陶硯に関しては、総数16点の出土が確認されており、円面硯13点、転用硯3点といった内訳となる。風字硯や帳脚硯等の出土は認められない。また、中には034SE001出土の蓋のように墨置きと考えられる資料もある。

石帯 石帯については、第99次調査で出土している1点のみである。頁岩製の遡方である。また、下郡遺跡群第94次調査SK054から鉄製帯金具の出土が認められている。2.2cm × 2.2cmを測り表面には

雁股鐵 木質が付着している。094SK054 は長軸 2.6 m、短軸 0.85 m、深さ 0.2 m を測る長土坑であり、他に 8 世紀後半に比定される土師器環や鉄製雁股鐵などが出土している。出土した雁股鐵は長さ 12.4 cm を測る。石櫛は第 94 次調査で 1 点のみ出土が確認されている(第 99 図)。白色の粘板岩製であり、上部に穿孔の痕跡が認められるが欠損する。現存重量 59.8 g を測る。櫛は H 区において 9 世紀前半に比定される井戸跡(SE093)からの出土例がある(第 109 図)。また、同じ井戸跡の底部分からは木質部の遺存した刀子の出土も同時に認められている(第 102 図)。下部遺跡群内での竈の遺存事例は 2 点ある。第 19 次調査の SE002、第 34 次調査の SE001 の井戸底からの出土である。いずれの井戸跡も 8 世紀後半に比定される遺構である。

また、H 区にあたる第 99 次調査では、8 世紀後半から 9 世紀に比定される道路状遺構の路床に構築された連続土坑中から不明青銅製品が出土している(第 98 図)。3.9 cm × 5.3 cm の青銅製品片であるが、外面には唐草文と思われる文様が配されており、内面には擦過痕が認められる。破片のため全容は不明であるが、遺存部から想定される形態に「馨」がある。

以上が古代における特筆される資料の一部であるが、これらの多くが出土する第 19 次・第 34 次・第 94 次調査区は連続しており、本来一連のものである。こうした遺物の出土が集中する F 区(下部遺跡群の中央北側)には遺構のみならず官衙遺跡などで出土の確認される遺物が集中的に出土するという傾向を看取することができる。

下部遺跡群第 115 次調査 SX450 からは大量の土師器・須恵器が出土した。その中で九州では例を見ない底部に糸切り離し痕を残す灰色を呈する小型の須恵器壺が注目された。これは平城京において長頸壺 G に分類されている壺である。8 世紀後半(平城宮第 V 期)に突然出現するとされ、伊豆や駿河の東海地方、そして武蔵国等で生産されたものであることが判明している。

長頸壺 G は平城宮第 V 期に出現し、平城宮第 VI 期に相当する長岡宮期に盛行する。その後は平安京初期の 9 世紀初頭には姿を消すとされる短命な土器である。

全国的な視点での分布の特徴としては、平城宮や長岡宮といった都で出土する他、特に東日本を中心に出土が認められている。西日本での出土例はそれほど多くないものの、美作国府跡(岡山県)や出雲国府跡(鳥取県)などで出土が確認されており、官衙性格の強い遺跡や都城と深い関係のある遺跡から出土するとされる^(註3)。しかも、出土遺跡での出土の傾向から官衙の遺跡内においても、居住空間、日常空間から出土する例が多いという。

壺 G は底部に焼成時の粘土塊が付着したままで正立しない製品が多い点などから、平面に置いて液体を容れて使用するにはふさわしい容器ではないとする指摘がある。また、形態、法量的面から運搬容器に適しているとされ、かつて山中章氏は壺 G の用途について次の三つの仮説を提示した。

1 番目が「堅魚煎汁を運搬する容器」とする説である。この理由には、運搬具としての適正や伊豆・駿河国といった生産地が古代において堅魚煎汁を貢進する国であったという点に依拠している。

2 番目が「甘葛煎汁を運搬する容器」とする案である。この理由は武蔵国北部でも生産されていた可能性を受けて、伊豆・駿河国、そして武蔵国の三国に共通する税制に『延喜式』の『諸国例貢御費』の中に甘葛煎汁がある点による。

3 番目は「水筒」とするものである。これは 1 番目、2 番目の仮説が内容物の想定に基づくものであり、決め手に欠くという点から、形態的な特徴からの検討を踏まえたものである。まず、正立しないという点や壺 G が堅牢であるという特質をもっていること、そして底部糸切り技法による大量生産を前提とした製作技法が採用されている点などを根拠とするものである。

註1 坪根伸也・柴田義弘 2008「第2節 戦国時代末期の下部地区―発掘調査成果と文献史料による景観復元―」『下部遺跡群VI』・大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 大分市教育委員会

註2 大分市 1987『大分市史』上巻

註3 長頸壺G：奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告書VII』で命名

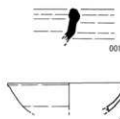


- 118 -

また、山中氏はこうした検討を通じて、なぜ大量の堅牢な水筒が必要であったのかという点を考察するにあたり、光仁・桓武朝の東国の制圧政策が契機になるとする。8世紀の後半には、主に軍事的要因によって東国を中心とした諸国から国（多賀城）へ、新しい物流が確立するが、壺Gの分布がこうした軍事物資の分布と一致するとする。つまり、壺Gは東国からの衛士の必需品（水筒）として長岡京へ持ち込まれるとともに、東日本では徴兵された兵士の携帯用水筒として多賀城を中心とする東国へ拡散するとした。また、西日本での出土事例は、中央から命令を伝える官人の携帯品として各地方へ持ち込まれたと考察する。しかも、水筒という用途であるが故に中心施設から出土することなく、居住空間、生活空間から出土すると想定している。

氏の想定に依拠すれば、下郡遺跡群で壺Gが出土する事実は重要である。すなわちこの遺物が中央（都）との直接的な繋がりを示す遺物であることから、下郡遺跡群の官衙的性格を強く物語るものとして評価されよう。

10世紀を前後する時期の出土遺物の中で特筆される遺物に下郡遺跡群第47次調査SE020から出土した篠窯系須恵器鉢がある。京都府亀山市にある篠窯で焼成されたと考えられる口縁部資料であるが、形態的特徴から石井清司氏の分類^{註4}による鉢Cに相当するものと考えられ、黒岩1号窯から西長尾5・6号窯への変遷途上の製品に位置づけられることができる資料である。篠窯跡群の第Ⅲ期にあたり、およそ10世紀後半の年代が想定される。

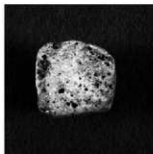


第97図 篠窯系須恵器・近江産緑釉陶器実測図（1/4・1/6）

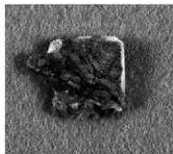
他に同一調査区内に所在する047SE003から出土した近江産の緑釉陶器碗がある。本資料も10世紀代に比定される。下郡遺跡群内で出土している他の緑釉陶器が周防産であると考えられる中で特異な存在である。当時における下郡遺跡群と中央との関連性を示す遺物として注目される。



第98図 不明青銅製品



第99図 石鏡



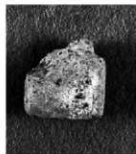
第100図 銅製帯金具



第101図 櫛



第102図 木製刀子



第103図 土製櫛

註4 石井清司 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

(4) 古代の土師器について

ここでは下部遺跡群で出土した土師器の変遷について概観する。

下部遺跡群で古代の土師器の出土が顕著となるのは8世紀中頃である。したがって、土師器の変遷についても8世紀中頃からを対象とする。

8世紀中頃

豊後地域における8世紀代の土師器環は、回転台成形による二つの系統により構成される。ひとつは8世紀前半段階まで存在した底部手持ちヘラケズリ技法の環から発展したと考えられる赤褐色系の色調を呈する環(環a)と、もうひとつは体部下半を回転ヘラケズリし、内外面に回転ヘラミガキをおこなう大宰府系の環の影響を受けて成立したと考えられる赤褐色系の色調を呈する環(環d)である。

環a

環d

環aは底部の成形技法において手持ちヘラケズリ技法→回転ヘラ切り技法へと転換する。初期の段階には成形に回転台を使用し、底部回転ヘラ切り離し後に手持ちヘラケズリ風の調整をおこなう資料(環a2)が一定量存在し、回転台導入前の前型式の属性痕跡を確認することができる。形態的にも古相を呈するものは体部に稜をもち、底部は丸底気味に成形されている。その後は時期変遷に伴い底部が平底を呈する資料が増加する。

環a2

環dは従来から大宰府における土器分類において環dと呼称されている資料の系譜になる土師器である。しかしながら、その導入は直接的なものでなく、豊後地域にかねてから存在する口縁部内面に沈線を持ち、器面に間隙を有する回転ヘラミガキ調整をおこなう土師器からの派生を想定した。ここでいうミガキは器表面のミガキ間に粗面を残すことから「粗面残しミガキ」略して「粗面ミガキ」と呼んでいたものである。ミガキaとの関連から便宜的にミガキa2と命名した⁽³¹⁾。ミガキa2の成立に関しては、環dの初現期の段階からかなりの割合でミガキa2が存在する。したがって、ミガキaからの型式的な退化、いわゆる手抜きとは考え難い。また、豊後地域で出土する環dの古相のものは、ミガキa2とともに口縁端部の処理ならびに形状が大宰府の環dと必ずしも一致するものではない。

ミガキa2

豊後大分平野出土の土師器を概観すると、ミガキa2はこの大宰府系環が初現ではなく、下部遺跡群第33次調査の2号土坑(033SX002)から出土した土師器碗の内外面にはミガキa2が施されている。この碗は体部外面をヘラケズリした後にミガキa2が施され、内湾気味の口縁部内面には一条の沈線がめぐっている。底部手持ちヘラケズリ技法をもつ土師器環(環a2)が共存しており、遅くとも8世紀中頃に比定されたと考えられる。さらにこれらの資料に後続する型式として同一の調査区内で検出されている1号土坑(033SX001)出土資料がある。土坑のほぼ中央に重ねた状態で土師器高台付環、土師器碗2個体が出土している。この3点の中で土師器碗2点が口縁部内面に一条の沈線をめぐらしている。同一調査区内の033SX002資料と同じように体部外面に回転ヘラケズリを施している。器面の内外面はナデ調整となっている。8世紀後半に比定される資料である。

回転ヘラケズリ

上記のように豊後地域で出土する大宰府系の環として認識されている資料の体部外面には回転ヘラケズリがなされ、内外器面にミガキを施しているがこれらの環は諸々の点で筑前大宰府地域の環dとは異なっている。以前、こうした点からこれを「豊後型環d」と呼称した⁽³²⁾。改めて豊後型環dの特徴を整理すると、初現期の口縁部形態が内面において面取りを意識するように段を有する点と、初現期からミガキa2が主体的に施される点にある。豊後型環dの成立に関しては、8世紀前半段階に畿内系土師器の影響下に成立したと考えられる口縁部内面に一条の沈線をめぐらす土師器碗が豊後地域に成立する。これらの資料にはある段階で回転台成形技法が採用され、体部外面を回転ヘラケズリ、内外面の調整にミガキa2をおこなうといった属性をもつ土師器の出現へと変遷したものと考えられる。そして次第に型式変化を遂げる中で、器表面の調整はヘラミガキからナデへと変化していく。こうした推移の過程で、大宰府系環が情報として豊後地域に波及し、豊後地域に以前から存在していた上述の碗との製作技法上のオーバーラップがおこなわれ口縁端部の形態、ミガキ手法を踏襲し、豊

豊後型環d

後型環 d が成立したと想定した。

豊後型環 d はミガキ a2 の手抜きと器高の低平化といった方向に型式変化し、9 世紀初頭にはほとんど姿を消す。一方環 a についている 9 世紀初頭段階に外反する器形のものが出現し、底部は丸底状を指向するようになり、なかには回転ヘラケズリを行う資料も散見することができるようになる。つまり、この段階で環 a と環 d は融合することになり、8 世紀中頃から続いた土師器環の 2 系統の並存状況はここで解消される。9 世紀以降は一元化された土師器環が法量の縮小化等といった方向に型式変遷し、10 世紀以降へと引き継がれる。

土師器蓋

土師器蓋に関しては、基本的に土師器高台付環とセットとなるものが主体となるが、8 世紀中頃から後半・末にかけては、扁平な形態、あるいは擬宝珠形のツマミを有し、古相のものは嘴状の端部形態、後半・末になると端部を S 字状に屈曲させた形態の土師器蓋が主流となる。調整にはミガキ a2 を施したものが多く、これも時期の推移に伴いナデ調整のみによるものが多くなるという傾向を看取することができる。さらに、9 世紀初頭にはツマミが消失し、9 世紀前半には端部処理もかなり退化したものが目立つようになり器種構成の中から消滅する。

高台付環

土師器高台付環は、8 世紀後半を中心に盛行し、器面の調整にミガキ a2 を使用するものもあるが、これも次第にナデ調整のものへと変化する。高台の貼付位置と断面形状も、底部の中心寄りであったものが、底部からの立ち上がり部に貼付されるようになり、断面形状も三角形→方形→小方形の資料へと変化する。

出土土器の分類

下部遺跡群 115SX450 からは様々な器種を含む大量の土器が出土した。ここでは、各器種に関して分類を試みる。分類とその標記方法に関しては、下記の基準によっておこなった。



土師器の分類

蓋

- 蓋 a 1 : 口縁端部を屈曲させる資料であり、端部にいたるまで屈曲を持たない形態の資料である。口縁端部は嘴状をなし、L 字状を呈している。
- 蓋 a 2 : 端部にいたるまでに屈曲部を有する形態の資料であり、端部の断面形状が S 字状等を示す資料である。

環

- 環 a : 古墳時代からの技術伝統の延長線上に新来の回転台の導入がなされたと考えられる環である。底部調整手法により次の二種に分類することができる。
- 環 a 1 : 底部の回転ヘラ切り離しの後に最終調整として手持ちヘラケズリあるいは手持ちヘラケズリ風のナデがおこなわれる資料である。器形変化との相関関係において、古相を示すものは底部が完全な平底ではなく、凸底を呈している資料が多い。
- 環 a 2 : 底部が平底となり、底部の回転ヘラ切り離しの後は、未調整か簡便なナデ調整により仕上げられる資料である。
- 環 b : 口径と底径の比率が大きく、平底を呈し、逆ハの字形の器形をなす資料を想定しているが、115SX450 には該当資料がない。

註 1 坪根伸也 1995 「付章 羽田遺跡出土土器に関する二・三の考察」『羽田遺跡Ⅱ』大分市教育委員会

註 2 坪根伸也 1996 「豊後の土器相 8・9 世紀の諸問題」『大分・大友土器研究会』第 15 号 大分・大友土器研究会

- 坏 c : 高台付坏と呼称される資料である。坏部は坏 a との共通点が多い、高台の形状、貼付け位置等により細分が可能である。
- 坏 d : 基本的に丸底の底部形態をなし、体部下半部に回転ヘラケズリをおこない、器面をヘラミガキによる最終調整により仕上げる資料である。

皿

- 皿 a : 平底の底部から直線的、あるいは若干外反する器形を有する皿形土器である。口縁部の形態により a 1 (口縁端部内面に沈線等をもつもの) と a 2 (素口縁を有するもの) の 2 種に分類することができる。径 18.0 cm 程度のものが一般的であるが、大型のものに関しては、I を付す。
- 皿 c : 坏との分類上の共通性を確保するために高台を持つものを皿 c とした。したがって、皿 b は存在しない。皿 c に関しても皿 a と同様に口縁端部形態によって分類することができる。大型品の標記についても皿 a に準じている。

高坏

高坏の分類に関しては、脚部の形態によって分類する。円柱状の脚部をもつものを高坏 A、脚部をヘラケズリにより面取りをしている資料を高坏 B とする。それぞれには高さ 10.0 cm のもの、他、低脚のものがあり、前者をⅠ類、後者をⅡ類とした。したがって、高坏に関しては、以下の都合四種に分類されることになる。

- 高坏 A Ⅰ類：円柱状の脚部を持ち、高さ 10.0 cm 以上のもの
- 高坏 A Ⅱ類：円柱状の脚部を持ち、低脚のもの
- 高坏 B Ⅰ類：脚部をヘラケズリにより面取りしており、高さ 16.0 cm のもの
- 高坏 B Ⅱ類：脚部をヘラケズリにより面取りしており、低脚のもの

鉢

鉢については次の三種に分類することができる。

- 鉢 a : 口縁部付近に屈曲を有する丸底の資料であり、多くは底部に手持ちヘラケズリによる調整痕を残す。
- 鉢 b : 直線的に端部まで延びる口縁部を有する資料である。底部は平底であり、全体器形はバケツを想起させるような形態となっている。数は少ない。
- 鉢 c : 内外面を回転ヘラミガキにより調整する碗形状の鉢である。底部付近に回転ヘラケズリをおこなう資料もある。資料数は極めて少ない。

甕

- 甕 A : 基本的にタタキ技法により成形される甕である。口縁部の外面下位にはカキ目による調整や丁寧なヨコナデによる調整が行われる資料があり、底部には手持ちヘラケズリ痕跡を残す資料が多い。口径 10.0 ~ 15.0 cm、器高 15.0 cm 程度の資料と口径 20.0 cm 以上の大型品がある。前者をⅠ類、後者をⅡ類に分類する。こうした分類基準により甕 A Ⅰ類、A Ⅱ類の二種に分類される。なお、A Ⅱ類は形態のバリエーションが大きくさらに細分されると考えられる。
- 甕 B : 下膨れ気味の体部形態をなし、暗茶褐色系の色調を呈する。基本的には粘土の輪積みによる成形がおこなわれており、外器面の調整は粗いハケ目、内面はナデにより調整される資料である。口径 13.0 cm、器高 15.0 cm 程度の資料と口径 24.0 cm、器高 26.0 cm 程度の資料がある。前者をⅠ類、後者をⅡ類に分類する。こうした分類基準により甕 B Ⅰ類、B Ⅱ類の二種に分類される。
- 甕 C : 把手付の甕である。器面調整や成形技法に甕 A との共通要素をもつものを C Ⅰ類、それ以外に関しては C Ⅱ類とする。

高坏

高坏 A I 類



高坏 A II 類



高坏 B I 類



高坏 B II 類



鉢

鉢 a



鉢 b



鉢 c



※ 調査次数及び遺構記号の記載がないものは第 115 次 SX450 出土遺物

第 105 図 古代土師器分類図②(高坏・鉢) (1/10)

甕

甕 a : 球形胴に外反する口縁部をもつ壺である。タタキ成形によるものであり、須恵器壺の成形技法を有する資料である。

甕

甕 a : タタキ技法による成形をおこない、把手の上端を体部に接続する特徴的な形態の把手を有する甕である。先述の甕 A と調整要素に共通点が多く、かつて「豊後大分形甕」と呼称した資料に相当する。

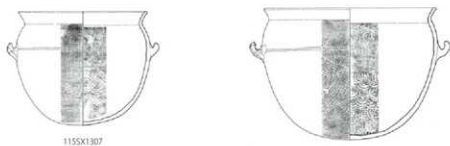
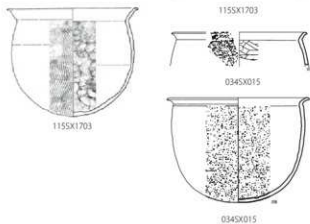
甕 b : 上記以外の漏斗状の形態を呈するものである。

甕 A

甕 AⅠ類



甕 AⅡ類



※ 調査次数及び遺構記号の記載がないものは第115次 SX450 出土遺物

第106図 古代土師器分類図③(甕) (1/10)

甕 B

甕 B I 類



甕 B II 類



甕 C

甕 C I



※ 調査次数及び遺構記号の記載がないものは第 115 次 SX450 出土遺物

第 107 図 古代土師器類分類図④ (甕) (1/10)

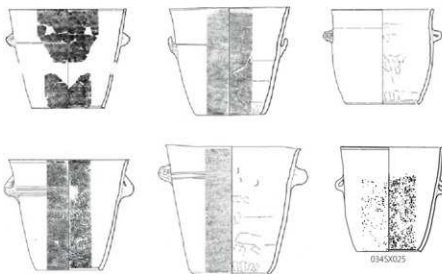
壺

壺 a



甗

甗 a



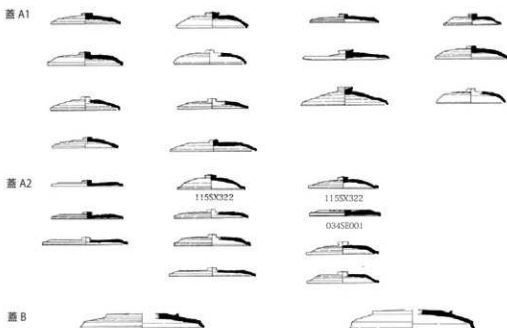
甗 b



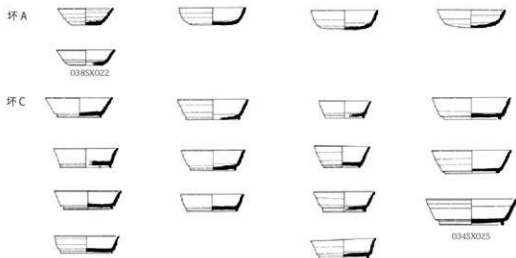
※ 調査次数及び遺構記号の記載がないものは第 115 次 SX450 出土遺物

第 108 図 古代土師器類分類図⑤ (壺・甗) (1/10)

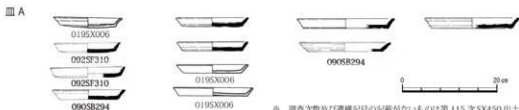
蓋



坏



皿



※ 調査次数及び遺構記号の記載がないものは第 115 次 SX450 出土遺物

第 109 図 古代須恵器類分類図①(坏・皿・蓋) (1/8)

須恵器の分類

須恵器の分類にあたっては、土師器と共通するものについては基本的に土師器のものを準用する。これに加えて須恵器にのみ認められる器種に関しては新たな分類を追加している。

蓋

蓋 A 1 : 口縁端部を屈曲させる資料であり、端部にいたるまで屈曲を持たない形態の資料である。口縁端部は嘴状をなし、L 字状を呈している。頂部にはツマミを有している。

- 蓋 A 2 : 端部にいたるまでに屈曲部を有する形態の資料であり、端部の断面形が S 字状等を示す資料である。頂部にはツマミを有している。
- 蓋 B : 輪状ツマミを有する資料である。

環

- 環 A : 古墳時代からの技術伝統の延長線上に新来の回転台の導入がなされたと考えられる環である。
- 環 C : 高台付環と呼称される資料である。環部は環 a との共通点が多い、高台の形状や貼付け位置等により細分が可能である。

皿

- 皿 A : 平底の底部から直線的、あるいは若干外反する器形を有する皿形土器である。

高坏

高坏の分類に関しては、脚部の形態によって分類する。円柱状の脚部をもつものを高坏脚部をヘラケズリにより面取りをしている資料を高坏 B とする。それぞれには高さ 15.0 cm のものの他、低脚のものがあり、前者をⅠ類、後者をⅡ類とした。したがって、高坏に関しては、以下の都合四種に分類されることになる。

- 高坏 A Ⅰ類：円柱状の脚部を持ち、高さ 15.0 cm 以上のもの
- 高坏 A Ⅱ類：円柱状の脚部を持ち、低脚のもの
- 高坏 B Ⅰ類：脚部をヘラケズリにより面取りしており、高さ 10.0 cm 以上のもの
- 高坏 B Ⅱ類：脚部をヘラケズリにより面取りしており、低脚のもの

壺

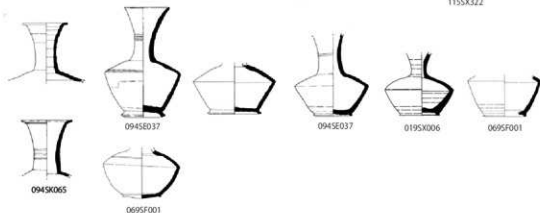
- 壺 A : 球形胴に外反する口縁部をもつ壺である。タタキ成形によるものであり、須恵器壺の成形技法を有する資料である。口縁部形状により細分が可能である。
- 壺 B : 長頸壺である。
- 壺 C : 偏球形の体部に広口の口縁部がつく小型の壺である。
- 壺 D : 偏球形の体部に細い長頸の口縁部がつく小型の壺である。
- 壺 E : 肩部に屈曲を有し、僅かに直立する広口の口縁部をもつ小型の壺である。
- 壺 F : 肩部に屈曲を有し、肩部から大きく広がる口縁部を有し、口縁部は二重口縁をなしている。
- 壺 G : 他地域（東海地方）からの搬入品である。長胴の体部に長い頸が付く小型の壺である。平城の分類との相関を重視し、分類名をあわせた。

壺

壺 A



壺 B



壺 C



壺 D



壺 E



壺 F

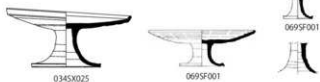


壺 G



高坏

高坏 A I 類



高坏 A II 類



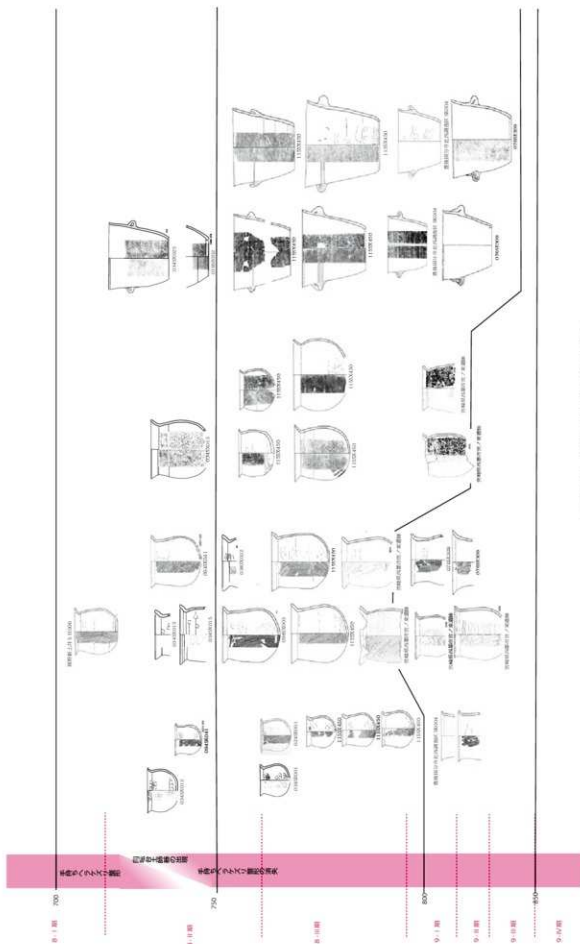
高坏 B I 類



※ 調査次数及び遺構記号の記載がないものは第 115 次 SX450 出土遺物

第 110 図 古代須恵器分類図② (壺・高坏) (1/10)





第112图 古代土師器福年图②(試案)

(5) 豊後における古代前期の煮炊具について

1. はじめに

下郡遺跡群内では、その中央にあたるF区（第115次調査区周辺域）、その西南に位置するH区（第69・90・92・98・99次調査区周辺域）、さらに旧河道を挟んだ東側のB区（第46次調査区周辺域）において古代前期の遺構・遺物の出土が数多く確認されている。なかでも、第115次調査の廃棄土坑から出土した古代前期の遺物量は他地点に比して群を抜いている。それらの資料を整理した結果、供膳形態、煮炊具形態の多様さや、井戸状遺構を中心として展開する掘立柱建物跡群等から、当時この周辺は官衛的施設の中でも厨施設に相当するものと推定されている。

2 種類の煮炊具 こうした出土資料の中で煮炊具形態については大きく二つの形式が認められている。一つは北部九州地域を中心に出土が確認されている煮炊具（いわゆる企救型甕）、もう一つは豊後地域を中心に出土する煮炊具（いわゆる豊後大分形甕）である。

本項ではこれら2種類の煮炊具について整理を行い、形態の比較、分類を行うことから時間軸上の位置づけについて考えたい。

2. 豊後国における古代前期の煮炊具の様相

豊後大分形甕・豊後国における、古代煮炊具については大きく2系統に分けられる。そのひとつは、本遺跡群内を はじめ、主に大分市内の古代遺跡地から出土する資料であり、器面の調整や形状が特徴的な、いわゆる豊後大分形甕・甕等である。その諸特徴についての詳細は後述するが、須恵器製作技法により作られている。またその時期については8世紀中頃～後半段階（下郡遺跡群出土の資料が該当）から9世紀前半段階（豊後国分寺跡出土資料や井ノ久保遺跡出土資料が該当）までと想定される。こうした点は、下郡遺跡群の資料に先行する大分市久土遺跡（8世紀初頭）段階の資料には含まれていないことから、今のところ、下郡遺跡群出土の資料が市内では最古のものと考えられる。

豊後大分形甕・分布については本遺跡群のほか、豊後国分寺跡^{註1}、横尾遺跡^{註2}、羽田遺跡^{註3}、井ノ久保遺跡^{註4}、地蔵原遺跡^{註5}等、からの出土が多く認められ、大分平野部を中心とするものと考えられる。しかしながら、福岡県大宰府条坊跡第68次調査^{註6}からの出土品に加え、近年、宮崎県宮ノ東遺跡^{註7}からも出土が認められ、その関連が注目されている。

企救型甕 もう一つの系統は、北部九州地域を中心に出土している企救型煮炊具、いわゆる企救型甕である。（以下企救型甕）この甕は、粘土輪積み技法により成形され、口縁部は肥厚し「く」字状に屈曲する。内器面調整にケズリをおこなわない点の特徴とする。分布については、佐藤浩司氏^{註8}によると旧豊前国を中心に山口県、広島県、愛媛県など西部瀬戸内沿岸域に広く及んでおり、大分県内では1995年に坪根伸也氏が指摘した8遺跡^{註9}のほか現段階では羽田遺跡や横尾遺跡、井ノ久保遺跡等からの出土が認められる。

註1 大分市教育委員会 1993『国指定史跡 豊後国分寺跡』豊後国分寺跡北西地区発掘調査報告書

註2 大分市教育委員会 1996『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 7 1995年度

註3 大分市教育委員会 1995『羽田遺跡Ⅱ』大分市宮羽田住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

註4 大分市教育委員会 2000『井ノ久保遺跡発掘調査報告書』一東九州自動車道及び併設市道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

註5 大分市 1987『大分市史』中巻

註6 太宰府市教育委員会 1998「第68次調査区」『大宰府条坊X』太宰府市の文化財第44集

註7 宮崎県埋蔵文化財センター 2008「宮ノ東遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第173集

註8 佐藤浩司 2001『豊前企救型甕考』大分・大友土器研究会 大分・大友土器研究会

註9 坪根伸也 1995『付章 羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題』『羽田遺跡Ⅱ』大分市教育委員会

豊後国企救郡内から出土した企救型甕については佐藤氏が整理・分類^{註10}を行っている。この企救型甕が豊後地域において出土が確認された当初は、企救郡内からの搬入品と考えられていた^{註11}。しかし、その後の調査により豊後地域において出土する企救型甕の胎土中に緑色結晶片岩片が含まれていることが判明し、少なくともこの豊後地域周辺から出土する企救型甕の多くは搬入品ではなく、在地で作られた甕であることが明らかになった^{註12}。さらに近年、井ノ久保遺跡では、上述した豊後大分形甕と企救型甕の折衷型が大量に出土しており^{註13}、豊後地域における2種類の煮炊形態の併存とその変遷を考えるにあたり良好な資料を提供した。

豊後大分形甕・
甕等の特徴

ここで改めて豊後大分形土師器の特徴を整理しよう。豊後大分形土師器とは須恵器の技法であるタキにより成形され、さらに回転台を使用しカキ目調整等を施した豊後地域特有の土師器である。器種組成は甕形土師器のほか鉢形土師器、甕形土師器、移動式竈等がある。これまでの調査により出現時期は8世紀中頃前後と推定される。これ以降、ほぼ半世紀というわずかな時間幅の中で盛行する。また、本遺跡群内の東側、鶴崎台地上には8世紀中頃から後半に操業されたと推定される4基の須恵器窯跡^{註14}が確認されており、須恵器工と土師器工との関係を考える上で注目される。

豊後大分形土師
器

甕については坪根伸也氏がかつて「豊後大分形甕」と呼称^{註15}したが、出土事例の増加に伴い鉢・移動式竈などの土器形態にも同様の特徵を持つ事が判明したことにより、今後はそれらの煮炊形態の土器群を総称して「豊後大分形土師器」と呼称したい。

第113図は第115次SX450の廃棄土坑から出土した甕形土師器資料を法量および口縁部の形状により分類したものである。器面調整について見るとさらに詳細な分類が可能と考えられるが、本稿では形状分類を主眼として図示している。

まず甕形土師器については、大分類として豊後大分形甕タイプをA、企救型甕をBとする。さらに形状から通常の縦長甕タイプをⅠ類、横幅のある鉢形に近いタイプをⅡ類とし、法量による分類には算用数字を当て、口縁形状等によりさらにアルファベット（小文字）で分けるものとする。以上の分類方法により第115次出土資料を中心に分類したものが第113図に示したものである。AⅠ類は口径が15cm以下のもの（AⅠ-1）、15cmから20cm未満のもの（AⅠ-2）、20cm以上のもの（AⅠ-3）とⅢタイプが認められる。さらにそれぞれ口縁形状によりAⅠ-1はaとbに、AⅠ-2のものは5タイプ（a・b・c・d）に細分が可能である。また、形態が鉢形に近く横幅の大きいタイプ（AⅡ類）も存在し、口径の大きさにより20cmから40cm以上のものまでにわけられる。さらに把手付のタイプも認められ、AⅢ類として分類している。

註10 佐藤浩司 1992「ケズリのない甕—豊前企救型煮炊具の語るもの—」『研究紀要』第6号 財団法人 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

註11 坪根伸也 1995「付査 羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題」『羽田遺跡Ⅱ』大分市教育委員会

註12 坪根伸也 1995「付査 羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題」『羽田遺跡Ⅱ』大分市教育委員会

註13 大分市教育委員会 2000「井ノ久保遺跡発掘調査報告書」—東九州自動車道及び併設市道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

註14 大分市教育委員会 2000「松岡古窯跡群」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.11 1999年度

註15 大分市教育委員会 1995「羽田遺跡Ⅱ」大分市営羽田住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

甕形土器

AⅠ類・通常の縦長甕形タイプ

AⅠ-1a・・・口径が15 cm以下のもので、口縁形状が「く」字状のもの

AⅠ-1b・・・口径が15 cm以下のもので、口縁形状が舌状のもの

AⅠ-2a・・・口径が15 cm以上20 cm未満のもので、口縁形状が「く」字状のもの

AⅠ-2b・・・口径が15 cm以上20 cm未満のもので、口縁形状が「く」字状のもので、口縁先端部に丸みを持つもの

AⅠ-2c・・・口径が15 cm以上20 cm未満のもので、口縁形状が舌状のもの

AⅠ-2d・・・口径が15 cm以上20 cm未満のもので、口縁形状が「へ」字状のもの

AⅠ-3a・・・口径が20 cm以上30 cm未満のもので、口縁形状が「く」字状のもの

AⅡ類・器高と口径の大きさがほぼ同率に近い、鉢形タイプ

AⅡ-1・・・口径が20 cm以上30 cm未満のもので、横幅が大きい鉢形タイプのもの

AⅡ-2・・・口径が30 cm以上40 cm未満のもので、横幅が大きい鉢形タイプのもの

AⅡ-3・・・口径が40 cm以上のもので、横幅が大きい鉢形タイプのもの

AⅡ-4・・・口径が30 cm以上のもので、把手を持ち横幅が大きい鉢形タイプのもの

鉢形土器

鉢については、資料が少ない為分類といえるような段階には至っていないが、洗面器タイプのものと、バケツタイプのものの2タイプには分けられるようである。成形はタキによるもので、調整はカキ目による調整がなされている点を特徴とする。また、両タイプの口径はほぼ同じである。バケツタイプの物には、内面の見込み部や口縁直下に環状にススの付着が確認できるものがあり、煮炊きに使用していたものと推定できるが、全てにその痕跡は認められておらず、食物の盛り付けや貯蔵に使用されていたことも考えられる。

甕

甕については坪根氏が基底部の返りについて形態的類縁度(第116図)^{[21][6]}により分類しているが、本稿では115SX450出土の資料について法量により大きく5タイプに分別した。ほとんどのタイプに把手が付随するが、中には把手のないものも数点認められる。甕Ⅰ-1は特大タイプであり、基底部の返りもしっかりしているタイプが多い。甕Ⅰ-2は大タイプである。基底部の返りはやや小さくなる傾向が認められた。甕Ⅰ-3は中タイプである。基底部の返りについては小さいものやはっきりしないものが多い。出土資料の中では甕Ⅰ-2とⅠ-3が一番多く出土しているタイプである。甕Ⅰ-4は口径、器高ともに一番小さいタイプである。基底部の返りについてはそのほとんどがはっきりしない。Ⅰ-5は器高に比して口径の数値があまり変わらない幅広タイプである。

甕Ⅰ-1・・・口縁径が34 cm以上、器高32 cm以上、底径18～20 cmの特大タイプ

甕Ⅰ-2・・・口縁径が29～33 cm、器高28～31 cm、底径16～18 cmの大タイプ

甕Ⅰ-3・・・口縁径が29～32 cm、器高24～28 cm、底径17～19 cmの中タイプ

甕Ⅰ-4・・・口縁径が26～27 cm、器高23 cm以下、底径16～18 cmの小タイプ

甕Ⅰ-5・・・器高と口縁径の比率がほぼ同率かそれに近いタイプ

企救型甕

企救型甕とは旧豊前国企救郡を中心に分布するもので、かつては豊後地域での事例は搬入品として企救型甕の特徴 理解されていた。佐藤氏によればその特徴は以下に示す通りである。

A I-1a

口径 15cm 以下
口縁「く」字状



A I-1b

口径 15cm 以下
口縁舌状



A I-2a

口径 15cm 以上
20cm 未満
口縁部「く」字状



A I-2b

口径 15cm 以上
20cm 未満
口縁部「く」字状
口縁先端部に丸みを持つ



A I-2c

口径 15cm 以上
20cm 未満
口縁部舌状



A I-2d

口径 15cm 以上
20cm 未満
口縁部「へ」字状



A I-3a

口径 20cm 以上
口縁部「く」字状

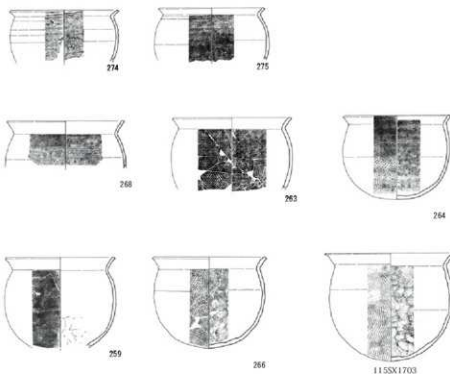


※ 調査次数及び遺構記号の記載のないものは第 115 次 SX450 出土遺物

第 113 図 豊後大分形土師器 A 類分類図

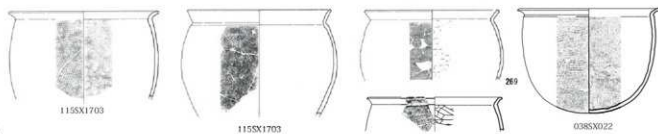
A II-1

口径 20cm 以上



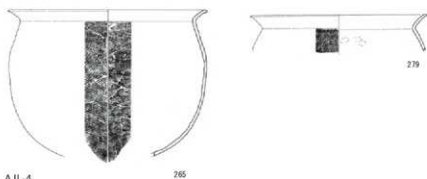
A II-2

口径 30 cm 以上



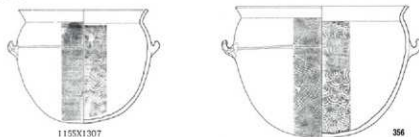
A II-3

口径 40 cm 以上



A II-4

把手付



※ 調査次第及び遺構記号の記載がないものは第 115 次 SX450 出土遺物

第 114 図 豊後大分形土師器甕 A 類（鉢形タイプ）分類図

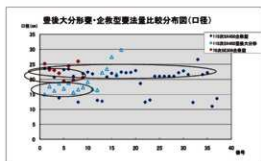
- ・口縁部は内湾気味に「く」の字に屈曲し、肥厚している
- ・口唇部は平坦面を形成する
- ・頸部内面には稜を持ち、ヨコナデするものが多い
- ・器面には凹凸があり、外面は粗いハケ目、内面は例外なくナデにより調整される
- ・色調は暗褐色
- ・胎土中には石英・砂粒が多い

豊後地域で出土する資料のほとんどが上記の特徴を具備しているが、先述のようにその後の調査により出土した遺物の胎土中に白朽一八代構造線周辺に分布する緑色結晶片岩片を内包していることが明白となり、在地で製作していることが明らかとなった^{註17}。また、この資料の盛行年代は8世紀中頃から9世紀に及んでおり、時間的には豊後大分形甕と同一の消長を示す。つまり、豊後地域においては、8世紀の中頃から9世紀前半代に及ぶまで、在地において製作された豊後大分形甕と企救型甕（模倣品あるいは搬入品）の2種類の煮炊具が併存していたことになる。

以下には佐藤氏の企救型甕分類を参考に、本遺跡群内から出土した資料を分類したものを掲載している（第119図）。115SX450の企救型甕（模倣）は、そのほとんどが佐藤氏の分類によるAタイプ（口唇部が肥厚し、平坦面を水平に形成する）あるいはBタイプ（口唇部は肥厚し、平坦面は内傾する）である。少数ではあるが口縁端部が平坦面を形成せずに丸みを持つもの（Dタイプ）も確認されている。さらに、企救型甕は内面にケズリ調整のない点を特徴とするが、本遺跡群内からの出土資料の中にはケズリを持つ甕も少量ながら出土している。このタイプは口縁形状によりCタイプの亜種として分類される資料である。また、第76次調査区の井戸遺構 076SE309 内から出土した資料の中

口縁形態による
分類

に上記タイプのどれにも当てはまらない口縁形状を持つタイプが出土している。体部から口縁部にそのまいたる形状を示し、井ノ久保遺跡で指摘されていた豊後大分形甕との折衷タイプとも明らかに違うものである。これは形式学的類縁度から企救型（模倣）甕の現段階における最も後出する退化型式ではないかと考えられる。これらの甕と併伴する遺物に、ミガキ a2 が施された在地の土師器蓋や黒色土器 A 類が認められ、9 世紀前半代の所産と考えられることから、少なくとも企救型甕（模倣）は、下部周辺地域において、8 世紀中頃から 9 世紀前半代まで折衷形を創出しつつ存在していた事が確認できる。



第115図 豊後大分形・企救型甕法量比較分布図

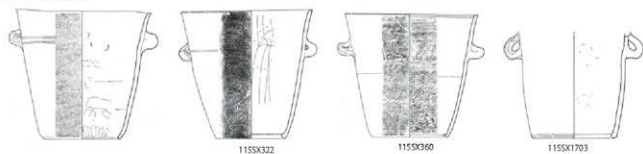
法量は口径 20 cm ～ 25 cm のタイプと 10 cm ～ 15 cm のタイプの 2 法量（第 115 図）が確認される。

- A タイプ・・・口唇部は肥厚し、口縁端部は平坦面で水平になるもの
- B タイプ・・・口唇部は肥厚し、口縁端部は平坦であり内傾するもの
- C タイプ・・・口縁部は肥厚し、口縁端部は平坦であり外傾するもの
- D タイプ・・・口縁端部は平坦であり外傾するもの
- E タイプ・・・口縁端部に丸みをもつもの
- F タイプ・・・体部からストレートに立ちあがる口縁形状をもち、口縁端部は丸みをもつ

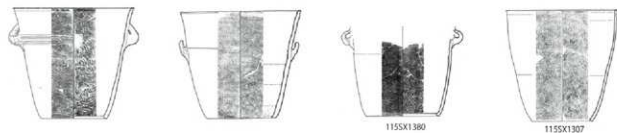
註16 大分市教育委員会 1995『羽田遺跡Ⅱ』大分市宮羽田住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

註17 大分市教育委員会 2003『下部遺跡Ⅱ』大分市立下部小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

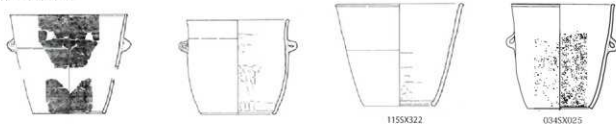
瓶Ⅰ-1 特大タイプ



瓶Ⅰ-2 大タイプ



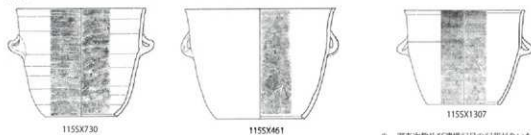
瓶Ⅰ-3 中タイプ



瓶Ⅰ-4 小タイプ

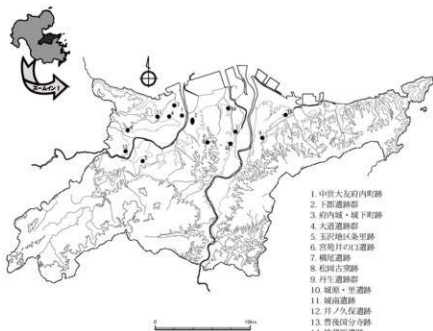


瓶Ⅱ-1 横広タイプ



※ 調査次数及び遺構記号の記載がないものは第115次 SX450 出土遺物

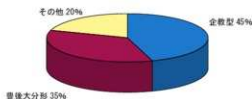
第116図 豊後大分形土師器瓶分類図



第 117 図 大分市内豊後大分形土師器出土主要遺跡分布図 (1/2,000)

3. 小結

第 115 次 SX450 下郡遺跡群第 115 次調査の中で、長軸約 9.0 m を測る SX450 という大型廃棄土坑が確認され、その中から供膳形態、煮炊具を中心とする完形復元の可能な資料が多数出土した。その資料数は 485 個体に及ぶ (図示可能で、報告書掲載数)。これにより煮炊具の成形技法やプロポーション、調整等の詳細検討が可能となった。その内訳は第 118 図に示したように全体のほぼ 3/4 が土師器類で占められ、



第 118 図 第 115 次出土の甕形土器形態別量比

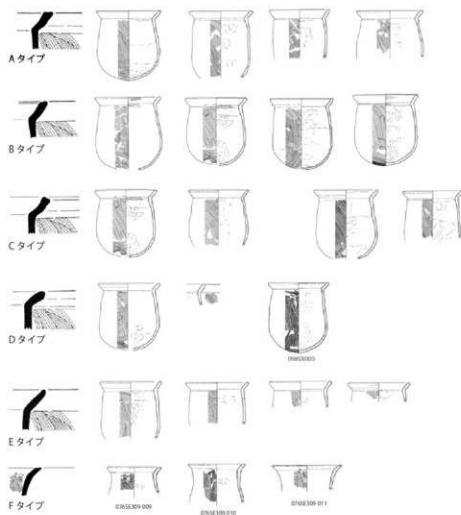
出土傾向

さらに器種別に分別すると甕形土器が圧倒的に多く土師器類全体の約 1/3 を占める。その中で企敷型甕は甕全体の 45%、豊後大分形甕は 35% を占める。今の所、豊後地域で唯一の須恵器生産窯^{註 18}が近隣に存在し、その影響下に生まれたと考えられる豊後地域独自の古代煮炊具が存在しながら、何故企敷郡で主体的に製作されていた甕型式を受容し 2 種の甕が半世紀以上も存続したのであろうか?。類似する法量の同一の機能を持つ 2 種の煮炊具がほぼ同一の比率で長期に渡り使用される状況には豊後地域における独自の生産・流通・消費システムが大きく関わっていたことは想像に難しくなく、こうしたシステムの解明が今後の大きな課題となる。また、近年、宮崎県西都市宮ノ東遺跡^{註 19}で豊後大分形甕類似資料や企敷型甕の出土が確認されており、これらの遺物と豊後地域で出土する同種の甕との関連が注目されるところである。(稗田)

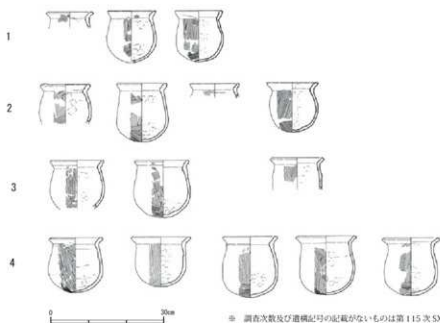
宮ノ東遺跡

註 18 大分市教育委員会 2000「松岡古窯跡群」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.11 1999 年度

註 19 宮崎県埋蔵文化財センター 2008「宮ノ東遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 173 集



※ 調査次数及び遺構記号の記載がないものは第115次 SX450 出土遺物
第119図 犬形埴輪口縁部タイプ別分類図



※ 調査次数及び遺構記号の記載がないものは第115次 SX450 出土遺物
第120図 犬形埴輪分類図(小型タイプ) (1/10)

第6節 古代末から中世前期の様相

(1) はじめに

本遺跡群内での古代末期から中世前半代は、全時代の中でも低調な時期となっている。しかしながら、第47次調査区では、10世紀代の井戸跡が2基ほど確認されており、出土遺物には近江産の緑釉陶器や、篠簾産須恵器などが出土しており、中央との交流を示す遺物として重要である。

(2) 遺構

12世紀代の遺構 中世前期に入ると、遺跡内南西部の一帯に掘立柱建物跡や、井戸跡が認められる(第121図)。中でも第108次調査区から検出された複数の溝状遺構(108SD120、108SD178)は同一地点において検出され、直線的に展開する遺構である。それぞれの遺構から出土した遺存状況の良い遺物からその所産時期は順に、12世紀中頃から12世紀後半(108SD178)、12世紀後半から13世紀(108SD120)と長期間継続して構築、利用されたと考えられる。遺構の性格については、土層観察により溝が機能していた時期に滞水していた状況が看取され、さらに溝の東側肩に沿って柱穴が列状井戸跡出土遺物に分布する状況が認められる点などから、何らかの区画施設の一部であった可能性が高い。

この時期の出土遺物には京都系土師器模倣資料、桶型瓦器碗、和泉型瓦器碗など下郡遺跡群と中央との結びつきを強く想起させる遺物が多数出土している。また、下郡遺跡群中央南よりの第122次調査区の井戸跡(122SE174・473)からは、国産陶磁器に混じって、同安窯系や龍泉窯系青磁碗・白磁の碗・皿等輸入陶磁器も出土している。これらの井戸跡の所産年代は13世紀中頃から14世紀初頭と考えられる。

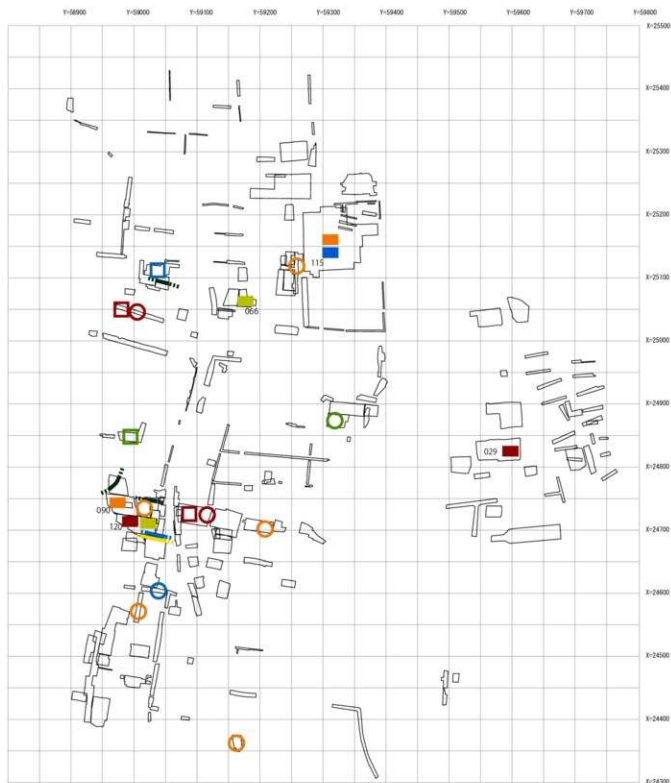
古代末期から中世前期にかけてはこのように道路状遺構や建物跡の検出は少ないものの、出土遺物

第35表 古代末期～中世前期掘立柱建物跡一覧表

遺構名	探検番号	時期	規模				主軸方位	陶磁報告書
			壁行×軒行(間)	壁行×軒行(m)	柱間距離(m)	柱穴の大きさ(m) 骨付断面(d)		
1205B0010	—	11C中頃	1間×2間	2.1×4.4	2.0～2.4×2.6	1.4 深さ0.5	9.24	N-12°・E 下部M P310 第276図
0905B003	—	13C前後	2間×4間	5.8×8.6	2.25～2.2× 2.1～2.25	0.4～0.5 深さ0.5	49.88	N-84°・W (N-6°・E) 下部I P58 第22図
1155B0095	—	13C	1間×3間	4.7×6.94	2.3～2.4× 2.12～2.5	1.0 深さ0.2	32.618	N-81°・W 下部II
1155B1365	—	14C代	3間×4間	4.8×6.09	1.5～1.8× 1.47～1.6	0.6～0.8 深さ0.4	29.232	N-12°・W 下部III
0295B101	—	古代末～中世前期	3間×5間	4.2×7.2	1.5～1.6× 1.5～1.6	0.3～0.5 深さ0.3～0.4	30.24	N-18°・E 下部IV P250 第301図
0665B004	—	中世前期	2間×4+a	2.4×4.2+a	2.0	0.25 深さ0.4	—	N-23°・W 下部IV P129 第180図
1205B2630	—	中世前期	2間×3間	3.42×4.23	1.0～1.05× 0.8～1.0	0.15～0.3 深さ0.1～0.2	14.47	N-24°・W 下部IV P316 第283図

第36表 古代末期～中世前期溝状遺構一覧表

遺構名	探検番号	時期	断面形状	規模			方向	陶磁報告書
				長さ(m)	幅(m)	深さ(m)		
087SD244	—	11C末～12C前半	U字形(南) V字形	29.0	1.0(北)～0.6(南)	0.5～0.6(北側) 0.4(南側)	N-10°・E	年報8 P26
052SD026	—	12C前半頃	方形	26.0(現存)	1.0	0.3	N-22°・W	下部IV P71 第84図
1405D360	—	12世紀中頃～後半	U字形	7.5(検出)	2.0(検出)	0.5	N-80°・W	下部IV P262 第229図
108SD178	—	12C中頃～後半	逆台形	12.0(検出)	2.5	1.4	—	下部V P217 第222図
108SD120	—	12C後半	逆台形	9.5(検出)	5.0	1.3	N-42°・E	下部V P217・218 第222・223図
092SD003	—	12C後半～13C	U字形	11.5(検出)	0.5	0.3	N-5°・E	下部I P183 第191図
1205D1270	—	14C代	—	4.0(検出)	1.0	0.2	N-12°・E	下部IV P277・278 第274図
1205D0474	—	14C後半代	逆台形	9.0(検出)	1.9(最大)	0.5	N-12°・E	下部IV P318 第286図
093SD062	—	中世以降	U字形	5.0(検出)	0.7～0.8	0.3	東西	下部IV P377 第454図



【堀立柱建物跡】

- 古代末～中世前期
- 中世前期
- 13C 前後
- 14C

【溝状遺構】

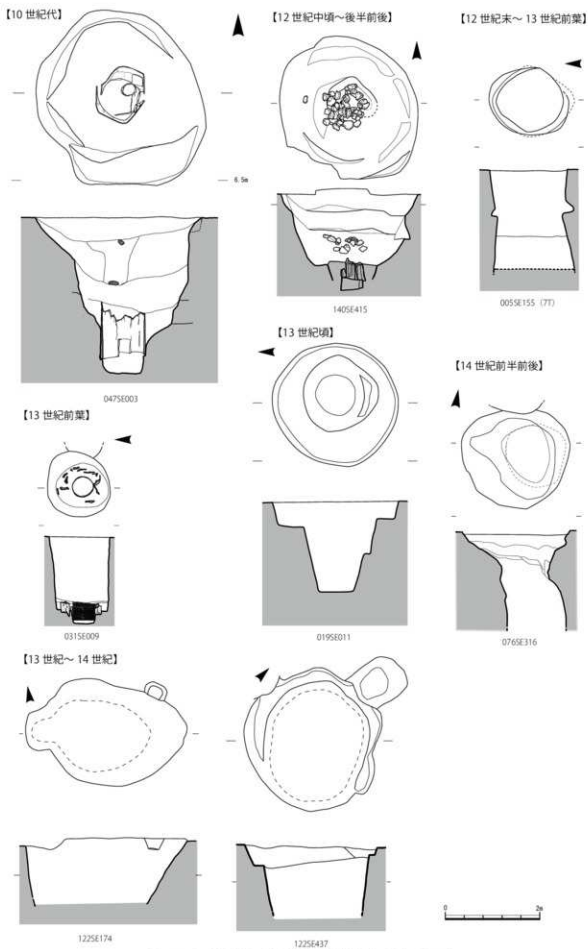
- 11～12C 前半
- 12C 中頃～13C
- 14C

【井戸状遺構】

- 12C 前半
- 12C 末～13C
- 13C
- 13C～14C
- 14C

方形 円形

第 121 図 古代末期～中世前期堀立柱建物跡・溝状遺構・井戸状遺構分布図 (1/6,000)

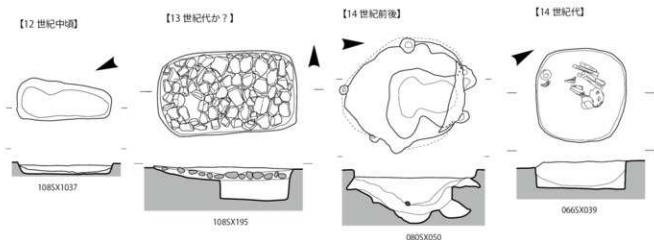


第 122 図 古代末期～中世前期井戸状遺構実測図集成 (1/80)

の量などから、複数の集落域が存在していた可能性は否定できない。また、輸入陶磁器の存在から他地域との交流が盛んに行われていた点も指摘され、大分川河口に近接しているなど、下部遺跡群の立地条件の優位性からも物流における主要な位置を占めていたと考えられる。

第37表 古代末期～中世前期井戸状遺構一覧表

遺構名	探検番号	時期	形状	規模		構造	掲載報告書
				大きさ (m)	深度 (m)		
047SE003	122	10C	不規則円形	3.83 (掘り方)	3.25	・クスノキの丸太割り貫き材をあわせて構造	下部V P119 第120図
047SE020	—	10C	長楕円形	?	2.56	・素掘りの井戸	下部V P115 第115図 (全体井構図)
079SE101	—	11C後半～12C	長方形				下部V
087SE670	—	12C前半代				・素掘りの井戸	年報8 P26
087SE074	—	12C前半代					年報8 P26
087SE360	—	12C前半代					年報8 P26
140SE415	122	12C末期～13C前半	円形	径2.9	1.9	・水溜部に曲物埋置、底板は存在しない ・径1.0、高さ0.5を2段にし、木製釘で閉じる	下部V P264 第235図
005SE155 (7T)	—	12C末～13C前半頃	円形	1.5	2.1 + a (井戸底まで達していない)	・素掘りの井戸	下部V P124 第156図
107SE064	—	13C	ほぼ円形	1.2 × 0.6 + a	1.1	・素掘りの井戸	下部V P246 第228図
019SE011	122	13C頃	円形	外径2.7 水部径1.6	外0.53 水部1.36	・素掘りの井戸 ・2段構造	下部V P235 第285図
092SE355	—	13C代	隅丸方形	3.6 × 3.8	1.84 + a (井戸底まで達していない)	・素掘りの井戸	下部I P193 第205図
049SE001	—	13C前半頃	脚型 (南北に長い)	1.75 × 1.35	2.2	・素掘りの井戸	下部V P141 第137図
122SE174	122	13C～14C	楕円形	3.4 × 2.2	1.3 + a (井戸底まで達していない)	・素掘りの井戸	下部V P424 第382図
122SE437	122	13C～14C	楕円形	3.0 × 2.8	1.5 + a (井戸底まで達していない)	・素掘りの井戸	下部V P424 第383図
076SE316	122	14C前半前後	円形	径2.3	2.0 + a (井戸底まで達していない)	・素掘りの井戸	下部V P142 第118図
127SE040	—	14C前半以降				・井筒をもつものと推定	年報12 P24・25
031SE008	—	古代～中世	円形	径1.45	1.79	・素掘りの井戸	下部V P37 第26図
031SE009	122	古代～中世	円形	径1.3	1.85	・水溜部径0.46、高さ0.3の曲げ物を敷き、周壁を木片で囲い土砂の流入を防ぐ	下部V P38 第28図
031SE011	—	古代～中世	円形	径2.05	1.28	・素掘りの井戸	下部V P41 第33図
005 (5T) SE069	122	中世か?	円形	径2.3 (掘り方) 井戸側内法径0.8	1.5 + a (井戸底まで達していない)	・石組み井戸	下部V P103 第126図



第 123 図 古代末期～中世前期性格不明遺構実測図集成 (1/40)

第 38 表 古代末期～中世前期性格不明遺構一覧表

遺構名	神田番号	時期	形状	規格		構造	掲載報告書
				大きさ (m)	深度 (m)		
120SX0085	—	11C 初頭頃	4.0 (長軸) 1.4 (短軸)		不定形		下部Ⅴ P277・278 第 274 図
108SX227	—	12C 中頃	6.4 (長さ)	0.23 (SD120 の底面から)	不明		下部Ⅴ P228 第 232 図
108SX1037	123	12C 中頃	2.05 × 0.86	0.12	長方形	逆台形	下部Ⅴ P270 第 292・293 図
120SX1210	—	12C 後半頃	径 0.6 + a				下部Ⅴ P277・278 第 274 図
115SX0105	—	12C 以降	0.67 × 0.74		楕円形	2 段階り方	下部Ⅴ
108SX205	—	12C 末葉～13C 初頭	1.86 × 0.72～1.18	0.1	不定楕円形	長方形	下部Ⅴ P264 第 285 図
092SX020	—	12～13C	径 0.8	0.45	円形		下部Ⅰ P172 第 183 図
092SX021	—	12～13C	径 0.5	0.4	円形ビット状		下部Ⅰ P172 第 183 図
108SX1009	—	13C 初頭～前半	0.76 + a × 0.82	0.06	楕円形	逆台形	下部Ⅴ P269 第 291 図
007SX001	—	13C 初頭前後	4.0 × 3.5	0.04	楕円形	浅い皿状	下部Ⅴ P143 第 176 図
031SX010	—	13C 前半か?	径 1.4	0.95	円形	長方形	下部Ⅴ P50 第 42 図
125SX026	—	13C 中葉前後	0.65 × 0.5	0.6	楕円形		年報 12 P15
108SX1002	—	13C 前半	1.31 × 0.98	0.12	楕円形	逆台形	下部Ⅴ P268 第 289・290 図
108SX195	123	13C か?	1.4 × 0.8	0.1	長方形	逆台形	下部Ⅴ P263 第 283 図
122SK001	—	13～14C	0.9 × 0.8	0.3	楕円形	逆台形	下部Ⅴ P419 第 373 図
080SX050	123	14C 前半	2.5 (長軸) 2.2 (短軸)	1.1	不定円形	廊鉢状	下部Ⅴ P178 第 182 図
066SX019	—	14C 中葉	1.5	0.9	楕円形		下部Ⅴ P127 第 178 図
066SX039	123	14C 代	0.95 × 0.95	0.25	略方形	長方形	下部Ⅴ P141 第 204 図
090SX005	—	14C 以降	2.64 × 5.0 × 4.05	0.1	台形状の不正方形	浅い皿状	下部Ⅰ P115 第 109 図
063SX003	—	中世	10.0 (横出長) 4.2 (幅)	0.6		逆台形	下部Ⅴ P121 第 169 図
050SX040	—	中世	13.0 (横出長) 1.0～1.1 (幅)	0.6～0.85		廊鉢状	下部Ⅴ P69 第 58・59 図
005 (3T) ST031	—	中世	1.1 × 0.65	0.58	略丸方形		下部Ⅴ P76 第 90 図
065SX004	—	中世以降	1.8 × 1.2	0.5	略方形	浅い逆台形	下部Ⅴ P184 第 282 図

(3) 古代末から中世前期出土の遺物

京都系土師器皿 下部遺跡群内から出土した古代末から中世前半期の資料の中には京都系土師器皿を模倣したと考えられるものが数例ある。これまでの調査では京都系土師器そのもの、あるいはその製作技法を充実にトレースして製作された資料は下部遺跡群内でも確認されていない。しかしながら、二十数年前、下部遺跡群に北接する牧六分遺跡で工事中に採集された資料の中にこうした資料が5点存在する。これまで資料化がなされたことのなかった資料であり、また、出土地が下部遺跡群から数百mと離れていない近接する遺跡であり、極めて強い関連性を示すと考えられることからここで紹介をしておきたい。

これら5点の資料の共時性は出土状況が工事中の採集ということもあり明らかでないが、遺存状況が良好であり京都の編年に照らしても同一時期のものとして齟齬のない内容を有している。いずれも完

供膳形態のセット形に近い形の京都系土師器であり、供膳形態の良好なセットである可能性が高い。001は口径8.1cm、器高1.4cm、底径4.2cmを測り、002は口径8.0cm、器高1.1~1.4cm、底径4.5cmを測る。胎土は精製土を使用し、調整はナデにより仕上げられる。色調は淡白黄色~淡橙色を呈する。コースター型小皿である。003は口径9.1~9.5cm、器高1.4~1.7cm、底径3.7cmを測る。004は口径9.0cm、器高2.0~2.4cm、底径4.9cmを測る。いずれも淡白橙色を呈し、調整は指オサエが顕著にみられるが最終的にはナデにより仕上げられる。005は京都系土師器坏である。口径14.0cm、器高2.6~3.1cm、底径8.6cmを測り、淡白黄色~淡灰白色を呈する。この資料も指オサエが体部立ち上がり部分に顕著に認められるが、最終調整はナデにより仕上げられる。001・002のようなコースター型の小皿は、初現期には口径が11.0cm以上のものも認められ、ⅢAから器種分化したと見られている。これらの資料を小森俊寛氏^[註1]の編年に照応すると、いずれも京都Ⅵ期の古段階(12世紀末~13世紀初頭)に比定されるものである。下部遺跡群内の第108次調査から出土した資料の中にこれらを模倣したと考えられる土師器小皿がある。口径7.1cm、器高1.26cm、底径6.5cmを測る資料であり、底部には回転系切離し痕を明瞭に残す。この資料が出土した溝状遺構の時期は上述の京都系土師器の時期とほぼ同様の12世紀後半前後に比定されるものであり、外見形態を模倣し、在地の製作技法で製作されたものと評価される。

白色研磨土師器碗 下部遺跡群内の古代末期から中世前半期にあたる時期から出土した資料の中に、「白色研磨土師器碗」と呼称する資料がある。他の出土遺物に比して、明らかに「白色」を意識して製作されたものであり、器面も丁寧なミガキあるいはナデにより極めて平滑に仕上げたものである。この資料については『下部遺跡群Ⅴ』^[註2]において、予察という形ですでに検討、報告しているが、改めて要約して報告したい。白色系研磨土師器碗の特徴は、回転台を使用し、底部は非押出し技法で、底面には回転系切り痕を残す資料である。また、器面調整の基本はヘラミガキによるもので、内外器面ともにあるもの、内面のみのもの、外器面のみのもので、都合3種が認められる。色調は白色~淡灰白色を呈し



第124図 牧六分遺跡出土の京都系土師器



第125図 牧六分遺跡出土の京都系土師器実測図(1/4)



第127図 第90次
表出土土師器実測図
(1/4)

第126図 第108次
SD120出土土師器実測図
(1/4)

註1 小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年の研究』京都編集工房

第39表 牧六分遺跡出土遺物観察表

遺物番号	採掘 番号	器 種	胎土	色 調		器面調整		法 量 (cm)				遺存率	備考		
				内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部 底径	底径				
SZ000-001	125	京都系土師器	小皿	精製土	淡白黄色	淡白黄色	胎オサエ後ナデ	胎オサエ後ナデ	8.1 (内径 7.1)	1.4		4.2	完形		
SZ000-002	125	京都系土師器	小皿	精製土	淡白黄色	淡白黄色	胎オサエ後ナデ	胎オサエ後ナデ	8.0 (内径 7.1)	1.1~1.4		4.5	完形		
SZ000-003	125	京都系土師器	小皿	精製土	淡白黄色	淡白黄色	ナデ	ナデ	9.1~9.5	1.4~1.7		3.7	完形		
SZ000-004	125	京都系土師器	小皿	精製土	淡白黄色	淡白黄色	胎オサエ後ナデ	胎オサエ後ナデ	9.0	2.0~2.4		4.9	口縁部→ 部欠損		
SZ000-005	125	京都系土師器	杯	精製土	淡白黄色→ 淡灰白色	淡白黄色→ 淡灰白色	ナデ	ナデ	胎オサエ後ナデ	14.0	2.6~3.1		8.6	口縁部→ 部欠損	

丁寧な調整

ており、11世紀以降、西瀬戸内地域に分布する防長系土師器碗と土器製作技法等が類似する。胎土中には別府湾南岸地域の出土土器に特徴的な緑色結晶片岩片を含むものがあり、明らかに当該地域周辺で製作されたと考えられる資料である。予察では口縁部形態と底部形態によりⅠ～Ⅲのタイプを設定し、東国東地域の土師器碗と高

回転台使用

台形状の変遷に同様の傾向が認められるものの、体部形状、特に口縁端部の緩い屈曲状況については、より古い段階に認められる属性であり、差異が認められると考えた。さらに、型式変遷に関して器高の低平化を型式変化の方向の一つとしている。こうした点を含めて検討した結果、東国東地域に分布する土師器碗における同種の器形の盛行時期は11世紀末から12世紀前半と考えられ、本遺跡群出土の白色系研磨土師器碗はこれに続く12世紀中頃から13世紀初頭に盛行するものと判断された。

胎土

盛行時期

瓦器碗

瓦器碗については、各調査地点から出土しているが、中でも注目される資料に、第31次調査区の井戸跡から出土した和泉型瓦器碗がある。瓦器碗が出土した井戸跡は、遺構の切り合い関係から先後関係の把握が可能であり、これに対応するように型式差を有する異なる型式のものが出土している^{註3}。本遺跡群内での、和泉型瓦器碗の割合は比較的高く、出土瓦器碗の大半を占める。これまでのところ、大分市内で和泉型瓦器碗が出土しているのは、本遺跡群の他、近年調査報告のあった丹生川遺跡、横尾遺跡、中世大友府内町跡、近世府内城域下町跡等で確認されている。また、瓦器碗の中でも県内では出土例の少ない桶型瓦器碗の口縁部が出土しており注目される。また、土師質鍋については、先述の第31次調査の井戸跡などから出土しており、鈐のつくタイプとそうでないタイプの2種類がある。これについては、後藤一重氏^{註4}が分類した土鍋A、及び土鍋Bに相当する。後藤氏によれば土鍋Bは11・12世紀にあつては散発的な出土を示し、あくまでも客体的な存在であり、畿内からの搬入品である場合が多いとする(Ⅰ期)。13世紀前半頃に比定される第31次調査出土の土鍋についてはその出自について胎土分析等の理化学的な検討を要するが、様相的には後藤氏による、土鍋Bが量産され始め一定量の割合を示すⅡ期(13～14世紀初め)と、Ⅰ期(11～12世紀)との過渡期にあたると思われる。下部遺跡群は遺跡の立地状況等から畿内方面との密接な繋がりを示す遺物の出土例が比較的多く認められることから、いち早く導入していたことが想定される。

和泉型瓦器碗

桶型瓦器碗

土師質鍋

参考文献

後藤一重 2003「Ⅰ、八坂久保田遺跡・八坂本庄遺跡・八坂中道跡の出土土器について」『八坂の遺跡Ⅲ 考察・付論篇』大分県教育委員会

註2 神田智美 2007「第3節 白色研磨土師器碗の偏年の検討について(予察)」『下部遺跡群Ⅴ』-大分市下地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書4- 大分市教育委員会

註3 大分市教育委員会 2007「下部遺跡群Ⅴ」-大分市下地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書4-

註4 後藤一重 2003「土鍋」『八坂の遺跡Ⅲ』大分県教育委員会



第128図 下部遺跡群出土の白色研磨土師器

第7節 中世後期の様相

(1) はじめに

これまでの発掘調査により下部地区内には、中世末期に遡ると推定される方形の地割区画が随所にみられ、方形の「館」が群集する景観が想定されている。このような方形区画部分では、大規模な堀や土塁を確認できた事例もあり、館を区画すると考えられる溝状遺構も多数検出されている。このように、現代にみられる方形の地割が方形館の存在を示しており、これらが戦国時代末期まで遡るものであることが考古学的な資料によって確認されている。また、方形区画の周辺には「城ノ内」や「高城」、「下屋敷」や「屋敷」などの字名が残っており、これらの地名の起源が中世末段階に遡る可能性が高いことを示している。

方形区画

さらに、下部地区の旧家に残る近世文書と発掘調査結果の照合により、中世末段階に多くの方形区画（屋敷地）が点在する状況と、居住した人々の多くが大夫氏の家臣であった様子が明らかとなっている^{註1}。

ここでは、中世後期の遺構を抽出し、溝状遺構・井戸跡・土墳墓について分布図（第129図）に示し、各遺構の概要についてまとめた。加えて近世期の文書と発掘調査結果との照合により明らかとなった方形区画を示した。

(2) 遺 構

下部の地名

下部の地名の初出は、貞治3（1364）年「大友氏時所領諸職等注進状」、永徳3（1383）年「大友親世所領諸職等注進状」に「同国（豊後国）下部号判田郷」とあり、大友惣領家の支配する所領として見えるようになる。

霜凍由来記

下部地区の旧家に残る近世に作成された文書の中には、戦国時代の下部に関する記載が散見されるが、なかでも、寛延4（1751）年に作成された「霜凍由来記」のなかの「道筋間敷之事」には現在まで続く字地名とともに、字地名に対応する屋敷主等についての記述がある。その屋敷主については、「大友家の土なり」といった記述がみられることから、大友の家臣団の居住域が下部に存在していたことが想定されている。

大友氏

このように下部地区は、中世を通じ大友氏の勢力消長と大きく関わっていたことが考えられる。

また下部地区は、戦国時代末期から区画整理が実施されるまで、大正3年に犬飼輕便鉄道として開通した現在のJR豊肥線の設置と、これに伴う新設の道路以外は大幅な土地利用の変更が行われておらず、中・近世の様相を原状に近い形で踏襲している。

参考文献

大分市 1987『大分市史』中巻

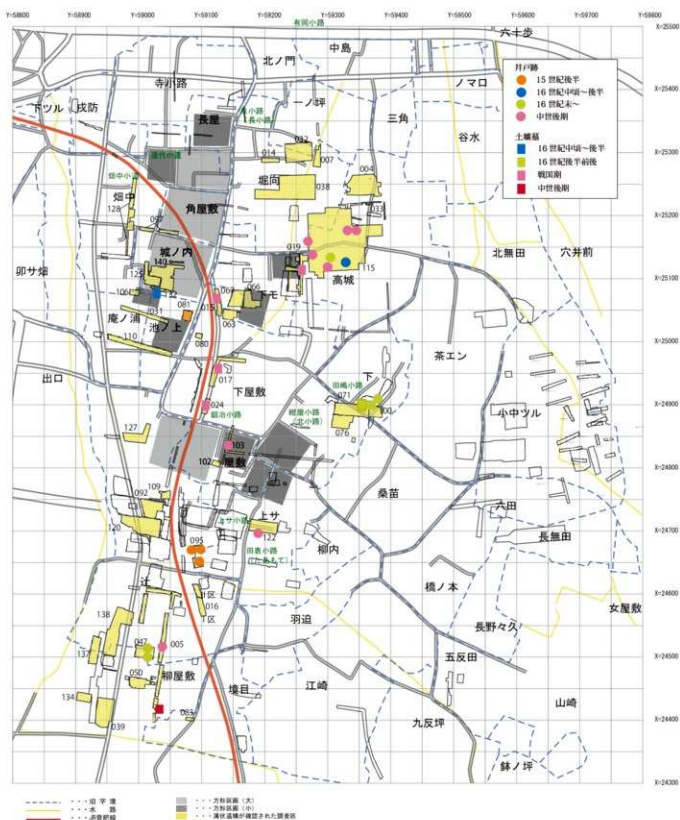
溝状遺構

溝状遺構の事例

中世後期には下部遺跡群内で多くの溝状遺構が検出されており、多くは道路跡や何らかの区画を意図したものと考えられる。これらの遺構は、区画整理前の地割や旧道と方向性が一致する場合が多く、中世末段階の区画や道路が現代まで踏襲されている様相を示している。

遺構の検出事例は、中世後期段階から末段階にかけて増加する傾向にあり、中世末段階には区画の規模が拡大するなど土地利用において画期がみられる。

註1 坪根伸也・柴田義弘 2008「第2節 戦国時代末期の下部地区—発掘調査成果と文献史料による景観復元—」『下部遺跡群VI』-大分市下部地区土地画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5- 大分市教育委員会



第 129 図 中世後期遺構分布図 (1/6,000)

第102次・103
次調査

第102・103次調査区は字屋敷に相当する。第103次調査区検出の3条の溝は近世段階のものだが、位置と方向性が中世末に存在した溝や区画に由来する可能性がある。近接する第102次調査でも掘り返しを伴う2条の溝を検出している。これらの数条の溝は一連のものであり、屋敷を区画する目的があったと考えられる。第103次調査で中世後半段階の井戸跡を検出した点などから、溝に区画された内側部分が屋敷地内の内部空間と想定される。

近世に入ると、旧道と方向性が一致する第103次調査区の溝は道路もしくは字境として踏襲されたが、第102次調査の溝は18世紀後半段階の溝に切られており踏襲されていない。区画の内部空間には、墓地が形成されており、屋敷が廃絶した後土地利用に大きな変化が認められる。

第102次調査区の溝内からは瓦や、龍泉窯系青磁片などが検出されており注目される。

第100次・76
次・77次調査

第100次・76次・77次調査区は、字下に相当する。第100次調査区の旧道以東は、近世段階の水田遺構が展開する。中世段階の耕作面は削平されているものの、中世段階の水田祭祀遺構とみられる100SX069^{註2}が検出されていることから、当時すでに水田化していたものと考えられる。溝は低湿地と微高地の境に沿って掘削されており、当初給水の目的であったものが、中世から近世段階に道路状遺構の側溝を兼ねる形へ変遷したものと考えられる。隣接する第71次調査区・第76次調査区では、現在の東西道路下に版築状の土層が幅3mにわたって確認でき、豊後大分型道路^{註3}の構造を示す道路跡が検出された。近世文書に登場する「田島小路」であると推定される。

この3つの調査区には道路状遺構に沿った複数の溝が構築され、屋敷地の区画を兼ねている。最終的に埋没するのは18世紀後半前後であるが、一部戦国時代末期の遺物を含んでおり、戦国期には滞水していた状況を示している。

溝状遺構によって区画された内部空間は屋敷地と考えられ、16世紀中頃から後半の井戸跡のほか、16世紀後半前後の土城墓を検出している。

戦国時代末段階の方形区画は、東西方向に延びる「田島小路」に面して配置され、幅22mを一つの区画とする地割の存在を確認することができる。「田島小路」の名称は、大友氏の家臣の一人と推定される田島氏の居宅があったことに由来しており、近世文書に「寛永年中 田島刑部田島屋敷に住す」という記載内容との関連が注目される。

第47次調査

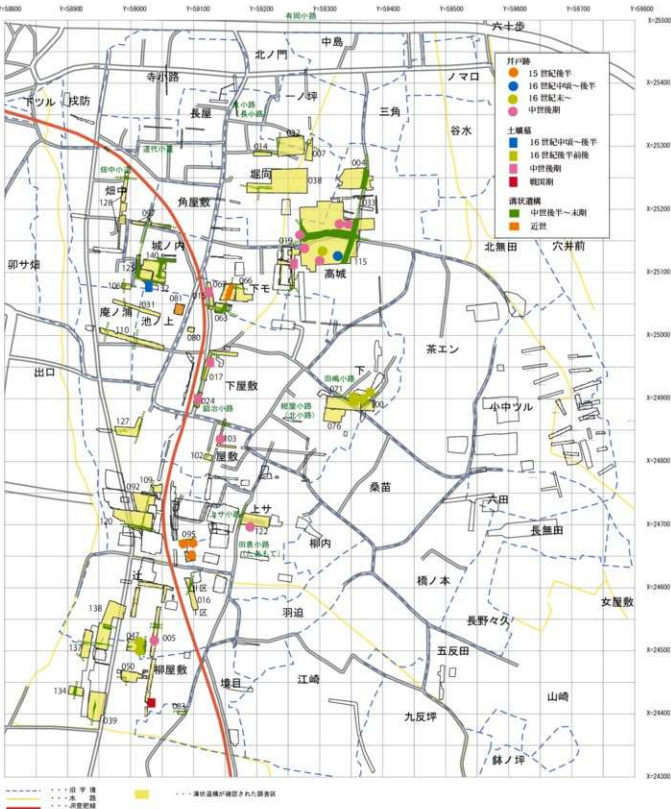
第47次調査区は、字柳屋敷に所在する。幅5m超の溝状遺構のほか、戦国時代末期の井戸、土坑などの遺構を検出している。溝状遺構が16世紀末段階で廃絶した後、井戸も短期間の内に廃絶している。大きく削平されているものの、溝と同時期の柱穴も検出されている。井戸は規模も大きく、朝鮮王朝産白磁片や丸瓦なども出土しており、所在地の旧字名が柳屋敷であることも考えると、溝西側の空間に屋敷地が広がっていた可能性が指摘される。

第5次調査

第5次調査区(5T)では、複数回の掘り返しを伴う戦国期の2条の溝を検出している。瓦片が出土し、溝の南側には、石組みの井戸跡を検出した。井戸跡からは遺物がほとんど出土していないため、時期比定が困難であるが、構造から中世末期のものである可能性が高く、溝に区画された内部居住空間を想定することができる。

註2 水田祭祀遺構 100SX069は、規模0.5m×0.55m、深さ0.13mの土坑である。完形の土師器環と底部のみの土師器を埋置しており、中世段階の水田祭祀遺構とみられるが、中世の耕作面は近世の水田によって削平されている。

註3 坪根伸也 2007『豊後大分型道路について』『下郡遺跡群Ⅳ』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 大分市教育委員会



第 130 圖 中世後期溝狀遺構分布圖 (1/6,000)

第110次調査 第110次調査区では、戦国時代末期に遡る2条1対の溝を検出している。これらは戦国期のそれぞれ館の外郭施設であったと考えられるが、東側の溝は踏襲されずにその後埋没する。一方、西側の溝は字境を区画する溝として近世段階に踏襲された様相が確認された。こうした状況は、戦国時代末期の大夫氏の豊後除国に伴った大友家臣団の解体に連動していると推定され、近世段階に踏襲される溝は、当地に残った家臣団の屋敷地に関連するものと想定される。

第106次調査 第106次調査区では16世紀後半から末段階の、並行する2条1対の溝状遺構を検出している。方形館に連なる屋敷地の外郭となる簡便な築地塼状施設と考えられ、屋敷地内部は、溝の東側の空間と考えられる。溝の間の空間には、混土層があり、人為的な積土を確認することができる。一部に柱穴と考えられる遺構が確認されている。溝内からは、丸瓦片や大形石製フイゴの羽口、タイ・メナムノイ川窯系統綿陶器四耳壺片が出土している。

このうちフイゴの羽口など鍛冶に関連する遺物は、中世末段階からこの付近に居住した関氏に関連するものであることが、下部地区に残る近世文書から明らかである^{註4}。第140次調査区などでも出土しており、いずれも大夫氏家臣の屋敷地と関連の深い地域で確認されている。

第63次・66次・67次調査 第63次・66次・67次調査区からは区画を意図したと思われる複数の溝状遺構を検出している。溝により区画される方形空間の規模は50mで、初現の時期は不明だが、最終的な機能時は18世紀後半である。16世紀前半から中頃の年代の溝状遺構も検出できることから、少なくともこの頃から地割に示される基本方位軸を踏襲していると考えられる。また、16世紀代と考えられる銭貨埋納遺構を検出している。近世には、溝状遺構に沿って墓地为営まれている。

第15次調査 第15次調査区は、第63次調査の溝状遺構と接続する位置関係にある。2条の溝状遺構が並行して存在し、中央に基盤土を掘り残した土橋を形成しており、入口として機能していたものであると考えられる。遺物が少なく、時期比定が困難だが戦国時代の遺構である可能性が高い。

第80次調査 第80次調査区は、戦国時代に遡る可能性のある地割が残る字下屋敷部分にあたる。戦国時代末期段階の櫓列（080SA031）を道路方向に直交する位置から検出しており、道路に伴うなんらかの施設が想定できる。

第140次・125次・132次・97次調査 第140次・125次・132次・97次調査区は字城ノ内に所在する。16世紀後半には逆口の字状に溝状遺構が展開し、区画の南東部分には土橋と、これに続く道路が付属している。16世紀末段階には字境に沿って、幅約7mの大規模な堀と、その内側に土塁が築かれている。内部空間には当該期の掘立柱建物跡などを検出している。堀内からは、華南三彩水注片などの輸入陶磁器が出土している。14・15世紀の遺構は確認できないものの、13世紀前半には整地が行われ、その範囲は、16世紀後半から末段階の区画の内部に限られる。

第3次・33次・115次調査 第3次調査区・33次調査区・115次調査区は字高城に所在する。3つの調査区の溝 003SD007 と 033SX001 と 115SD200 は接続し、16世紀末まで遡る南北に向かう旧道と方向性が一致する。

註4 天明3（1783）年に書かれた関家文書「代々庄屋覚書」には、関美作守が元亀元（1570）年に大友宗麟の命を受け、下郡に入ったとあり、元和元（1615）年にはその息子の喜兵衛が杵原八幡宮の鍛冶職人を務めていたという内容が記されている。

第 115 次調査の旧道より南では、掘立柱建物跡と、複数の井戸跡を検出した。

第 137 次・138 次調査 第 137 次・138 次調査区からは、中世段階の東西方向に並走する溝状遺構を検出している。同時に機能していた道路状遺構あるいは区画施設の一部と考えられる。

第 17 次・24 次調査 第 17 次・24 次調査区からは、旧道と方向を同じくする溝状遺構を検出している。字名は下屋敷であり、第 24 次調査区の南に位置する東西道路は、「鍛冶小路」に比定される。第 24 次調査の溝状遺構の東側からは井戸跡を検出し、さらにフィゴの羽口が出土しており、鍛冶小路との関連が注目される。

第 109 次・92 次・120 次調査 第 109 次・92 次・120 次調査区では、連続すると考えられる南北方向の溝状遺構を検出し、戦国時代末期の遺物が出土している。第 120 次調査区では、溝検出レベルで溝に直交する連続土坑を確認しているほか、東西方向に展開する溝状遺構も検出している。

このように、各所で方形の区画が確認でき、現状の地割や、旧道が中世末期に遡る可能性が高いことが想定できた。文献史料等との照合によりさらに中世末期の下郡地区の様相が明らかになることが期待される。

第 40 表 中世後期溝状遺構一覧表①

遺構番号	探検番号	時期	断面形状	規模 (m)			方向	掲載報告書
				長さ	幅	深度		
092SD002	—	15 世紀—	V 字	横市長 3.84	1.0	0.75	南北	下部Ⅰ P182 第 188 図
134SD024	—	15 世紀代	逆台形	横市長 12.5	1.8	0.4	N-0°-5°-E	年報 13 P16
134SD030	—	15 世紀代		横市長 12.5	3.0-3.2	1.1	N-0°-5°-E	年報 13 P16
066SD021	—	15 世紀中葉前後	U 字		1.6	0.35	東西	下部Ⅳ P127 第 178 図 (全体遺構図)
095SD040	—	15 世紀後半	逆台形→逆クジラ 背状へ		$3.6 + a - 2.5 + a$	0.8	東西	下部Ⅴ P378 第 456 図
019SD020	—	15 世紀後半	逆台形→V 字		1.3	0.4	南北	下部Ⅴ P230 第 279・280 図
083SD001	—	15 世紀後半～16 世紀前半 後	略方形		0.6	0.5	東西	下部Ⅴ P137 第 166 図 (全体遺構図)
019SD010	—	15 世紀末～16 世紀前半頃	略逆台形		2.1	0.7	南北→東西	下部Ⅴ P230 第 278 図
038SD003	—	15 世紀末～16 世紀前半	逆台形		0.55	0.3	南北	下部Ⅴ P340 第 411 図
017Ⅰ SD001	—	およそ 15～16 世紀	逆台形		0.6	0.1	N-17°-E	概観 2 P17
017Ⅰ SD002	—	およそ 15～16 世紀	逆台形		0.6	0.08	N-17°-E	概観 2 P17
017Ⅰ SD003	—	およそ 15～16 世紀	逆台形		1.0	0.3	N-17°-E	概観 2 P17
017Ⅰ SD004	—	およそ 15～16 世紀	逆台形		1.0-1.5	0.9	N-17°-E	概観 2 P17
017Ⅰ SD006	—	およそ 15～16 世紀	逆台形		1.2	0.85	N-70°-W	概観 2 P17
017Ⅱ SD001	—	およそ 15～16 世紀	?	?	?	?	N-70°-W	概観 2 P17
017Ⅱ SD003	—	およそ 15～16 世紀	?	?	?	?	N-70°-W	概観 2 P17
017Ⅱ SD004	—	およそ 15～16 世紀	?	?	?	?	N-70°-W	概観 2 P17
024SD002	—	15～16 世紀か	逆台形		1.8	0.6	N-15°-W	概観 3 P34
024SD003	—	15～16 世紀か	逆台形		2.0	0.67	N-15°-W	概観 3 P34

第 41 表 中世後期溝状遺構一覧表②

遺構番号	探検番号	時期	断面形状	規模 (m)			方向	記載報告書
				長さ	幅	深度		
092SD003	—	16 世紀後半前後	逆台形～V 字	横出長 30	1.0	0.7	南北	下部 I P192 第 203 図
115SD0069	—	16 世紀後半前後	楕円形				東西	下部 II
120SD1280	—	16 世紀後半代			0.52	0.26		下部 V P277 ～ 278 第 274 図 (全体遺構図)
132SD0025	—	16 世紀後半	箱型				東西	年報 12 P35
047SD001	—	16 世紀末頃	台形		5.2	0.6		下部 V P115 第 115 図
032SD001	—	16 世紀後半	浅い U 字		1.2 ～ 1.5	0.1 ～ 0.18	南北	下部 V P63 第 54 図
106SD001	—	16 世紀後半～末	緩やかな U 字	?	1.6	?	南北 N 4° - W	下部 V P193 第 201 図 (全体遺構図)
106SD004	—	16 世紀後半～末	?	?	2.0	0.45	南北 N 4° - W	下部 V P193 第 201 図 (全体遺構図)
106SD020	—	16 世紀後半～末		8.0			N 6° - W	下部 V P193 第 201 図 (全体遺構図)
106SD019	—	16 世紀後半～末		9.0	0.4		N 3° - W	下部 V P193 第 201 図 (全体遺構図)
106SD021	—	16 世紀後半～末	U 字状		0.4		N 2° - W	下部 V P193 第 201 図 (全体遺構図)
140SD290	—	16 世紀後半～末	逆台形		4.2	0.5	南北 N 10° - E	下部 III P248 第 221 図
140SD300	—	16 世紀後半～末		22.5	1.5	0.95	N 10° - E	下部 III P248 第 221 図
138B Ix SD096	—	16 世紀後半～末に廃絶	U 字状	横出長 8.5	1.0	0.4	東西	年報 14 P34
138B Ix SD097	—	16 世紀後半～末に廃絶	U 字状	横出長 13.5	1.35	0.4	東西	年報 14 P34
138B Ix SD065	—	16 世紀後半～末に廃絶	V 字	横出長 14.0	1.2	0.8	東西	年報 14 P34
138B Ix SD075	—	16 世紀後半～末に廃絶	逆台形	横出長 13.0	1.65	0.45	東西	年報 14 P34
137SD020	—	16 世紀後半～末か	U 字		0.5	0.25	東西 N 5° - E	下部 V P343 第 353 図
137SD025	—	16 世紀後半～末か	U 字		1.0	0.50	東西	下部 V P343 第 353 図
140SD260	—	16 世紀末 (機能停止年代)	逆台形	横出 7.3	1.5 (7)	5	N 75° - W	下部 III P248 第 221 図
140SD580	—	16 世紀末	逆台形	22.5		0.2	南北 N 10° - E	下部 III P248 第 221 図
140SD590	—	16 世紀末	U 字状	22.5	0.4	0.3	N 75° - W	下部 III P248 第 221 図
106SD013	—	16 世紀末		9.0	1.0	0.18	N 85° - W 東西	下部 V P199 第 211 図
106SD014	—	16 世紀末葉		1.5	0.5	0.2	N 82° - W	下部 V P199 第 211 図
125SD016	—	16 世紀末 機能停止	逆台形	南北 29m 東西 20 m	7.3	2.2	南北から東方向に傾斜	年報 12 P14
122SD039	—	16 世紀末	?		1.2	0.3	南北	下部 VI P420 第 374 図 (全体遺構図)
120SD0555	—	16 世紀末以降	U 字		0.7	0.53	東西	下部 VI P318 第 286 図
097SD0070	—	16 世紀末～17 世紀初	逆台形	横出長 24 m	4.5 + a		東西	年報 9 P34
100SD021	—	16 世紀	U 字		0.3 ～ 0.4	0.1 ～ 0.2	南西～北東	下部 VI P207 第 196 図
100SD022	—	16 世紀	U 字		0.3 ～ 0.4	0.1 ～ 0.2	南西～北東	下部 VI P207 第 196 図
100SD023	—	16 世紀	U 字		0.3 ～ 0.4	0.1 ～ 0.2	南西～北東	下部 VI P207 第 196 図
102SD019	—	16 世紀	U 字		1.8 ～ 2.6	0.9 ～ 1.1	南北	下部 VI P226 第 209 図
102SD028	—	16 世紀	楕円形		1.1 ～ 1.4	0.2 ～ 0.3	南北	下部 VI P226 第 209 図
110SD002	—	16 世紀代	U 字		1.5	0.9	N 16° - E 南北	下部 VI P260 第 241 図
110SD003	—	16 世紀代	U 字		1.5	0.8	N 4° - E	下部 VI P261 第 243 図
031SD003	—	16 世紀	浅い楕円形		3.0	0.17	南北	下部 V P36 第 25 図
016 I SD003	—	16 世紀					北東から西方面	概観 2 P12
016 II SD002	—	16 世紀	楕円形	横出長 14	1.5	0.6	南北	概観 2 P12
016 II SD003	—	16 世紀	楕円形		1.2	0.9	南北	概観 2 P12
134SD015	—	16 世紀代	逆台形	横出長 13	0.9		東西	年報 13 P16
134SD025	—	16 世紀代	不整逆台形	横出長 12.5	1.0 ～ 1.5	0.45	N 0° ～ 5° - E	年報 13 P16
099SD010	—	中世後半期	逆台形		1.7	0.6	東西	下部 III P210 第 165 図
137SD005	—	中世後半期	—	—	—	—	東西 N 75° - W	下部 V P342 第 352 図
007SD002	—	中世末期	方形	8	0.5	0.2	東西	下部 III P142 第 174 図
038SD001	—	中世末期	U 字		1.45	0.4	東西	下部 III P340 第 409 図

第 42 表 中世後期溝状遺構一覧表③

遺構番号	探検番号	時期	断面形状	規模 (m)			方向	掲載報告書
				長さ	幅	深度		
038SD002	—	中世末期	U 字		1.1	0.3	南北→東へ直角に屈曲	下部Ⅱ P340 第 410 図
039SD023	—	中世末～近世初頭	竪状	横出長 40	0.5～1.1	1.0～3.2 ±0.4	南北方向	下部Ⅱ P220 第 166・167 図
015SD032	—	戦国時代末期か	逆台形		0.7	0.35	東西 N 40° - W	下部Ⅱ P21 第 7 図
071SD006	—	戦国時代末期						下部Ⅱ P92 第 76 図
015SD033a	—	戦国時代末期	逆台形		0.6	0.5		下部Ⅱ P21 第 8 図
015SD033b	—	戦国時代末期	逆台形		0.7	0.5		下部Ⅱ P21 第 8 図
120SD0500	—	戦国時代末期			2.1	0.5		下部Ⅱ P318 第 286 図
120SD0001	—	戦国時代末期	U 字		1.3	0.68	南北	下部Ⅱ P317 第 285 図
115SD0068	—	戦国時代末期～近世						下部Ⅱ
115SD0076	—	戦国時代末期～近世						下部Ⅱ
115SD0161	—	戦国時代末期～近世					N 14° - W	下部Ⅱ
115SD1375	—	戦国時代末期～近世						下部Ⅱ
071SD005	—	近世以前 (戦国時代)	U 字		0.95	0.43	北西→南東	下部Ⅱ P92 第 76 図
049SD003	—	戦国時代	逆台形		0.75	0.25	東西	下部Ⅱ P141 第 136 図
033SX001	—	戦国時代か	台形状		3.5		南北	下部Ⅱ P76 第 65 図
005SD004 (ST)	—	中世後期	梯形		1.4	1.1	東西	下部Ⅱ 101 第 123 図
005SD005 (ST)	—	中世後期	梯形		1.4	1.1	東西	下部Ⅱ 101 第 123 図
024SD001	—	中世後期			1.6	0.3	N 35° E	横断 3 P34
115SD0520	—	中世後期					東西方向	下部Ⅱ
115SD0645	—	中世後期					南北方向	下部Ⅱ
115SD1339	—	中世後期						下部Ⅱ
115SD0928	—	中世後期					南北方向	下部Ⅱ
115SD1349	—	中世後期					南北方向	下部Ⅱ
115SD645	—	中世後期						下部Ⅱ
127SD011	—	中世後期					東西方向	年報 12 P25
127SD012	—	中世後期					東西方向	年報 12 P25

中世後半期の井戸跡

井戸跡の分布は、第 129 図のとおりである。下部遺跡群では、中世末期に方形の「館」が密集する景観が想定されている。井戸跡は、その屋敷推定地付近から検出される事例が多く、注目される。

第 103 次、100 次調査区は、16 世紀の溝状遺構を検出しており、方平町規模の屋敷地であると推定されている調査区である。いずれも屋敷地の内側に位置すると推定される場所から井戸跡が検出されている。

第 47 次調査区では、井戸跡のほか同時期の溝状遺構を検出している。井戸跡が屋敷に伴うものかどうか確証はないが、調査区が所在する地点は、旧字名が柳屋敷であり、中世から近世の屋敷地である可能性も考えられる。

第 5 次調査区は第 47 次調査区と隣接する位置にあるが、第 47 次調査区検出の溝状遺構によって隔てられている。第 5 次調査区からは井戸跡とその北側に戦国期の溝を検出している。

第 95 次調査区検出の井戸跡は、15 世紀の後半代に比定された。下部遺跡群内の検出事例のなかでも古い様相を示している。井戸跡に関連すると考えられる溝状遺構が付属しており、水場に関するものと推定されている。

第 122 次調査区では、井戸跡のほかに西側に道路状遺構が検出されている。

第 115 次調査区では、井戸跡を検出したほか、中世末段階の溝状遺構を検出しており、関連性が

注目される。

井戸の構造

素掘り

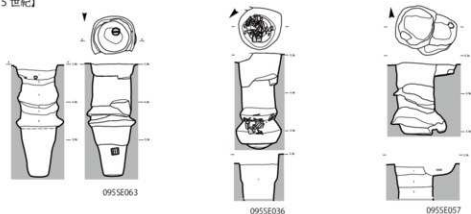
検出した井戸跡の構造は、素掘りの事例が大半を占め、平面形は円形を呈する。石組の井戸跡は005SE069のみであり、拳大から人頭大の凝灰岩が使用されている。

祭祀跡

上屋の存在が想定できるのは、115SE893であり、周辺において柱穴を検出している。095SE063からは釣瓶桶が出土している。同じく095SE036からは、馬骨が検出面から1.7～1.8 m下位の位置に集中して出土しており、井戸の廃絶に伴う祭祀跡と考えられる。

井戸跡の規模に注目すると、第47次調査区検出の井戸跡はいずれも規模が3mを超えている。さ朝鮮王朝前期磁碗らに047SE003からは朝鮮王朝産白磁碗が出土しており、井戸跡の規模と合わせて、第47次調査地点が屋敷地推定地である点との関連が注目される。

【15 世紀】



【16 世紀中頃】



【16 世紀末前後】

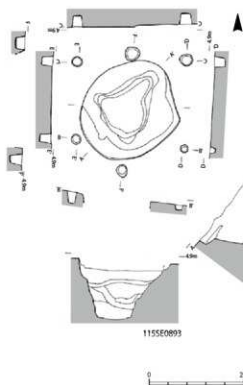


【16 世紀末～ 17 世紀初頭】

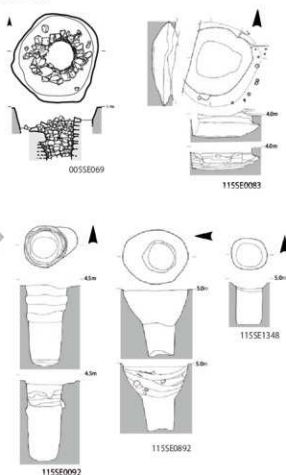


第131図 中世後期井戸跡集成図① (1/80)

【16世紀以降】



【中世後期】



第132図 中世後期井戸跡集成図② (1/80)

第43表 中世後期井戸跡一覧表

遺構番号	井戸番号	時代	平面形状	掘削		構造	掲載報告書
				大きさ (m)	深度 (m)		
095SE063	131	15世紀後半前後	円形	径 1.2	3.0	素掘り	下部Ⅷ P385 第466図
095SE036	131	15世紀後半以降	円形	径 1.1	2.5	素掘り	下部Ⅷ P384 第461図
095SE057	131	15世紀代	円形	径 1.1	1.9	素掘り	下部Ⅷ P384 第463図
1155E0523	131	16世紀中頃	円形プラン	2.0	2.48		下部Ⅱ
047SE028	131	16世紀末前後	楕円形	4.28 × 2.98	2.5 + a	素掘り	下部Ⅴ P126 第126図
047SE004	131	戦国末～近世初期	楕円形状	3.2 × 2.9	2.7	素掘り	下部Ⅴ P123 第123図
100SE008	—	16世紀	円形	0.9 × 0.8	1.0		下部Ⅵ P267 196図 (全体遺構図)
100SE014	—	16世紀	円形	1.0 × 1.1	1.1		下部Ⅵ P267 196図 (全体遺構図)
103SE108	—	16世紀	円形	0.9 × 0.8	1.0 + a	素掘り	下部Ⅵ P229 第212図 (全体遺構図)
1155E0893	—	16世紀以降	楕円形	2.77 × 2.43	2.36		下部Ⅱ
0055E069 (5T)	—	中世後期前	円形	掘り方径 2.3 片戸内径 0.8	1.5 + a	石積み	下部Ⅷ P103 第126図
1155E0083	132	中世後期	楕円形	3.6 × 3	1.16	素掘り	下部Ⅱ
1155E1348	132	中世後期	円形	0.9	1.16 + a		下部Ⅱ
1155E0892	132	中世後期	楕円形	1.74 × 1.42	1.74	素掘りではない	下部Ⅱ
1155E0092	132	中世後期	円形	1.2	2.12		下部Ⅱ
1155E0093	132	中世後期	円形	1.34	2.18		下部Ⅱ

土墳墓

下部遺跡群内で検出した土墳墓は、071ST081・132ST140・005(3T)ST031である。3基とも平面形は長方形であり、005(3T)ST031は鉄釘の出土から木棺墓と推定されるものの、他は埋葬施設が確認できていない。人骨はすべて屈葬姿勢をとる。出土遺物は、土師器碗や皿などであり、輸入陶磁器などを含まない。いずれも出土土器から中世後期の遺構であると考えられる。

出土遺物は、071ST081および132ST140の例では土師器碗と皿のセットが出土しており005(3T)ST031では、京都系土師器皿の出土が3個体認められている。木棺墓と考えられる005(3T)ST031においては、出土位置から棺外副葬であることが想定されているが、その他の遺構については棺内副葬か棺外副葬か不明である。

墓の分布状況は第129図に示した通りであるが、132ST140は、字城ノ内に存在する方形区画の溝(132SD260)に切られる形で検出した。溝は16世紀後半から末段階での区画の大規模化によって掘削されたものであり、16世紀末には最終的に機能停止している。さらに、同溝の最下層部で人骨が出土したものの、埋葬施設は検出されていない。溝の最下層部の掘削年代は16世紀後半から末であり、溝の機能停止後、溝が埋没する途中に掘り込まれたものと考えられる。

071ST081は、同じく方形区画が確認できる調査区に存在しており、その位置は区画の内部空間に相当する。

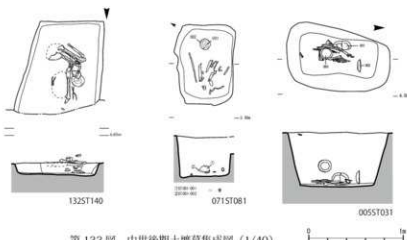
005(3T)ST031については、方形区画の存在が想定されている地区ではないが、同じ16世紀後半の遺構を検出する位置にあたり、調査区周辺の字名も柳屋敷であり、屋敷地の存在を示唆している。また、近接する位置に平面形および規模等が005(3T)ST031とはほぼ一致し、歯の一部が出土した遺構を検出しており、土墳墓と考えられる。

中世前半期には輸入陶磁器や湖州鏡などを伴い、屋敷地内に造営される場合があり、これらは切り合い関係もほとんどなく単独か数基程度存在する。中世後半期には、副葬品は少なくなる傾向にあり、土師器や瓦質の坏や小皿程度となる。また、切り合い関係をもって群集する例も知られている^{註5}。

下部遺跡群内の中世後期の墓は、屋敷地に比定される溝の内部から検出したものもあるが、すべてが屋敷地に伴うものと積極的に判断できる状況ではない。多くが屋敷地の廃絶後に営まれたものと考えられる。第5次調査区では、近接して2基の土墳墓を検出したものの、他は単独で営まれており、複数基が群集する近世墓の様相とは異なっている。

この他、中世段階の土墳墓とみられる遺構を第17次調査、第24次調査、第15次調査、第19次調査などで検出している。プランは円形のほか、方形や長方形、楕円形のものがある。

近世段階には集落に伴って墓が営まれるようになり、第143次調査地点及び、第99次調査地点等で近世墓をまとめて検出している。多くは円形プランを呈し早稲を使用し、六道銭を伴う。



第133図 中世後期土墳墓集成図(1/40)

註5 渋谷忠章 2007「第1節 大分県における中世墳墓の展開」『豊国の歴史考古学研究』アムリタ書房

これらの変化は中世末から近世にかけての支配体制の大きな変化が、集落のあり方、墓制にも変化をもたらした結果であると考えられる。

参考文献

- 佐藤良二郎 1990『宇佐の中世墳墓』『大分県地方史』137号 大分県地方史研究会
中島恒次郎 2009『九州の中世墓』『日本の中世墓』狭川真一編 高志書院

第44表 中世後期土壇墓遺構一覧表

遺構番号	発掘番号	時代	平面形状	断面形状	規模		掲載報告書
					大きさ (m)	深度 (m)	
132ST140	133	16世紀中頃～後半	長方形	方形	1.0×0.7～0.9	0.24	年報12 P25
071ST081	133	16世紀後半前後	長方形	方形	0.86×0.62	0.45	下部M P106 第100図
005ST031 (3T)	133	中世後期	不整楕円形	逆台形	1.1×0.65	0.58	下部M P76 第90図

(3) 中世末期の出土遺物について

中世末期に相当する出土遺物の中で注目されるものに中国南部産の出土遺物、タイ産メナム・ノイ窯系統締結陶器四耳壺、華南三彩陶器等がある。こうした遺物が集中的に出土した下部遺跡群第125次調査地点のSD106、この125SD106に続く同一溝である第132次SD025出土遺物様相について概観する。また、くわえて132SD025に先行して構築されている土壇墓132ST140出土遺物についてもふれる。

下部遺跡群125次調査^{註1}・132次調査^{註2}は公園内の防火水槽設置とこれに隣接する道路建設に伴うものである。調査区は霜凝神社の南西側に位置しており旧字名は「城内」と称する。

方一町・方半町規模 下部遺跡群内の各所で確認することができる方一町、方半町規模の方形地割部に相当する場所であり、両地点で確認されている溝状遺構は方一町規模の方形区画の外郭ラインを構成するものである。溝状遺構は幅約7.3m、深さ約2.2mを測り、断面形状は逆台形を呈している。溝内堆積土の下層で砂層と粘土層の交互堆積が認められ、複数の流水・滞水状況を示している。また、上部層には黄灰色土ブロックを多く含む土層の流れ込みの状況が確認される。溝によって圍繞された空間の内側に築かれた土塁からのものである。

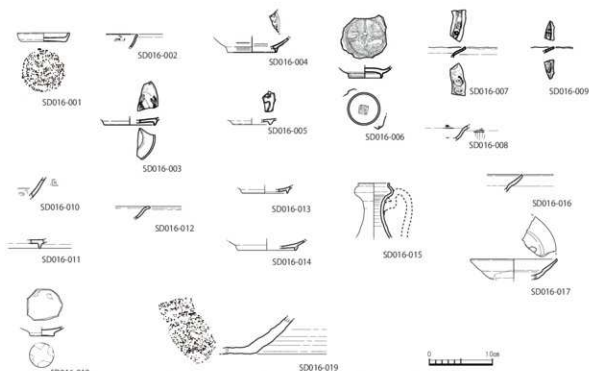
出土遺物 溝内からの出土遺物には土師器、中国青花、備前焼鉢鉢、朝鮮王朝産陶器、華南三彩水注、タイ産メナム・ノイ窯系統締結陶器四耳壺、瓦質土器、石製フイゴ羽口、瓦片等がある。

出土遺物には125SD016-001や古瀬戸壺である132SD025-006などの古い遺物の混入も認められるが、132SD025-001等の京都系土師器皿などの出土がみられ、溝が16世紀後半以降のものであることを示している。中国青花に関しては、小野正敏分類のE群・F群の碗皿の出土が確認される。備前焼鉢鉢については、乗岡編年の近世1期に編年される資料を確認することができる。朝鮮王朝産陶器には125SD016-020がある。淡灰緑色を呈する軸が掛けられており、見込み部分と底部に砂目積みの痕跡が認められる。釉薬は底部全面に施軸されている。朝鮮王朝産陶器は下部遺跡群内では、出土量は必ずしも多くはないものの、広範な地域からの出土が認められる。125SD016-017は華南三彩水注の口縁部である。口縁部は袋状に成形され、小さく上方に立ち上がる口縁部を有している。外器面は全面緑軸が施軸されているが、火を受けており、暗茶色に変色している。熊本県漬ノ館出土品^{註3}と同一のものであり、本来は把手が付くものである。下部遺跡群での華南三彩出土品としては

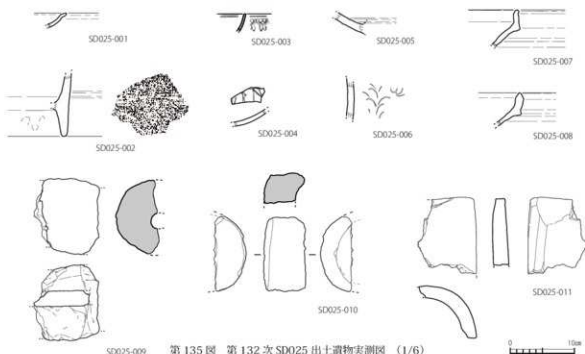
註1 大分市教育委員会 2001「下部遺跡群第125次」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.12 2000年度

註2 大分市教育委員会 2001「下部遺跡群第132次」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.12 2000年度

註3 熊本県教育委員会編 1977『濱の館—阿蘇大宮司館跡—』熊本県文化財調査報告 第21集



第 134 図 第 125 次 SD016 出土遺物実測図 (1/6)



第 135 図 第 132 次 SD025 出土遺物実測図 (1/6)

タイ・メナム・唯一の資料である。132SD025-005 はタイ産メナム・ノイ窯系統締締陶器四耳壺の肩部片である。下都遺跡群内のこれまでの調査では、本例以外に第 115 次調査、第 106 次調査などに出土事例がある。

132SD025-002 は瓦質火鉢の底部片である。外面にスタンプ紋が配されている。同タイプの火鉢は下都遺跡群内では 16 世紀後半前後の遺構に伴って比較的散見される資料である。

132SD025-009・132SD025-010 は大型の石製フイゴ羽口片である。いずれも角閃石安山岩製であり、一部に被熱による赤変が認められる。同種の石製フイゴ羽口は、他に第 106 次調査、第 140 次調査

等で集中的に出土する。また、大分川の対岸に位置する中世大友府内町跡で一定量の出土が認められ、両遺跡の関係性を示す遺物として注目される。瓦の出土量は極めて少ない。その中でも下郡遺跡群第 102 次調査地点周辺に比較的にまとまった出土が確認できる。

132SD025

132SD025 は、検出長東西約 23 m、検出幅は南北約 7 m であるが、溝の北側にはさらに調査区外に展開することから、溝幅は 7 m 以上の規模を有する。断面形状は台形を呈している。堆積埋土にはグラライ化した部分やラミナ状堆積物などが認められることから、溝機能時には滞水・流水に伴う自然堆積が想定され、こうした土壌の堆積に伴う複数回の掘り返しが認められる。ちなみに最下層部の暗黒灰褐色泥質土中からはばね一体分の人骨を検出している。埋葬施設は検出できないことから、溝底に遺棄されていたものと推定される。出土遺物様相から溝の機能時期は 16 世紀後半から末頃と考えられる。堆積埋土の状況からここでも北側、すなわち溝で圍繞された空間の内側から地山土ブロックを大量に含む土層の流れ込みの状況が確認されており、溝の内側部分に土塁の存在を想起させる。

溝の機能時期

132ST140

132ST140 は 132SD025 に切られる形で検出された墓坑である。長軸を南北に向け、平面プランは約 1 m × 0.7 ~ 0.9 m の長方形プランを呈している。土壌墓内の人骨はすでに溶解していたが、かろうじて埋葬形態を判別することができる。屈肢横臥葬と考えられる。また、土壌墓理土内からは、土師質土器碗、底部系切り離し痕を残す土師器皿が各一個体出土した。土師質土器碗は、口径 10.2 cm、底径 4.1 cm、器高 4.4 cm で、底部には小さな高台が貼付される。内外面とも淡黄褐色を呈し、内外器面ともナデにより調整される。土師器皿は、底部に回転系切り離し痕を残し、内外器面とも丁寧なナデにより調整される。口径 12.2 cm、器高 2.3 cm、底径 5.9 cm を測る。非常に薄手に作られており、形態的に京都系土師器を意識した造型となっている。当該時期の土壌墓において土師器の碗と皿のセットをもつ事例は、他に下郡遺跡群第 71 次調査地点で確認されている。

出土人骨
土師器皿



第 136 図 132 次 ST140 出土遺物実測図 (1/6)

第 45 表 第 125 次遺物観察表

遺物番号	検出番号	器 種		胎土	色 調		器面調整		法 量 (cm)		遺存率	備考		
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高			最大側面	底径
125SD016-001	134	土師器	皿	白色粘土 赤色粘土 長石 石英	淡棕色	淡棕色	ナデ	ナデ 回転系切 離し	8.1	1.5		0.7	完存	
125SD016-002	134	磁器	碗											別表
125SD016-003	134	磁器	碗											別表
125SD016-004	134	磁器	碗											別表
125SD016-005	134	磁器	碗											別表
125SD016-006	134	磁器	碗											別表
125SD016-007	134	磁器	皿											別表
125SD016-008	134	磁器	皿											別表
125SD016-009	134	磁器	皿											別表
125SD016-010	134	磁器	碗											別表
125SD016-011	134	磁器	碗											別表
125SD016-012	134	磁器	碗											別表
125SD016-013	134	磁器	碗											別表
125SD016-014	134	磁器	碗											別表
125SD016-015	134	陶器	水注											別表
125SD016-016	134	陶器	皿											別表
125SD016-017	134	陶器	皿											別表
125SD016-018	134	陶器	碗×皿											別表
125SD016-019	134	焼締	漆鉢											別表

第 46 表 第 125 次陶磁器観察表

遺物番号	持開番号	器種		装飾		法 量 (cm)			産地	備考
		種類	器種	絵付け・輪筆	文様	口径	器高	底径		
I25SD016-002	134	磁器	碗	青花					中国景德鎮	
I25SD016-003	134	磁器	碗	青花				(8.0)	中国景德鎮	
I25SD016-004	134	磁器	碗	青花				(7.8)	中国景德鎮	
I25SD016-005	134	磁器	碗	青花				(5.6)	中国漳州窯系	
I25SD016-006	134	磁器	碗	青花				5.2	中国景德鎮 興通心	小野分類 E 群
I25SD016-007	134	磁器	皿	青花	渦文				中国景德鎮	小野分類 F 群
I25SD016-008	134	磁器	皿	青花	渦文				中国景德鎮	小野分類 F 群
I25SD016-009	134	磁器	皿	青花					中国景德鎮	小野分類 F 群
I25SD016-010	134	磁器	碗	青磁	菊文 (内) 雲文帯 (外)				中国龍泉窯	
I25SD016-011	134	磁器	碗	青磁					中国龍泉窯	
I25SD016-012	134	磁器	碗	白磁					中国産	
I25SD016-013	134	磁器	碗	白磁				(7.0)	中国産	
I25SD016-014	134	磁器	碗	白磁				(9.0)	中国産	
I25SD016-015	134	陶器	水注			(4.8)			華南三彩	
I25SD016-016	134	陶器	皿						唐津	貫入あり
I25SD016-017	134	陶器	皿			(13.8)			唐津	見込み部に散土白磁あり (4ヶ所)
I25SD016-018	134	陶器	碗×皿	黒灰釉				3.9	朝鮮王朝産	底部及び見込み部にそれぞれ散土白磁あり (各 4ヶ所)
I25SD016-019	134	焼締	漆鉢		交叉唐目				備前	東国編年近世 1 前期

第 47 表 第 132 次遺物観察表

遺物番号	持開番号	器 種		胎 土	色 調		器面調整		法 量 (cm)			遺存率	備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大側面			底径
I32SD025-001	135	京都系土師器	皿	白色粘土 褐色粘土	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	スス付着 (灯明)
I32SD025-002	135	瓦質	火鉢	白色粘土 長石 角閃石	灰黄～灰 色	灰色	ナデ 削サエ	ナデ スタンプ 文					脚部のみ	双道線手飛雲文
I32SD025-003	135	磁器	碗											別表
I32SD025-004	135	磁器	盤×鉢											別表
I32SD025-005	135	陶器	甕											別表
I32SD025-006	135	陶器	甕											別表
I32SD025-007	135	焼締	漆鉢											別表
I32SD025-008	135	焼締	漆鉢											別表
I32SD025-009	135	石製品	羽口											別表
I32SD025-010	135	石製品	羽口											別表
I32SD025-011	135	瓦	丸瓦											別表
I32ST140-001	136	土師器	鉢	角閃石 長石 白色粘土	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	10.2	4.4		4.1	一部欠損	
I32ST140-002	136	土師器	皿	石英 白色粘土 赤色粘土	淡粉褐色	淡粉褐色	ナデ	ナデ 回転系切 磨し	12.2	2.3		5.9	口縁部一部 欠損	

第 48 表 第 132 次陶磁器観察表

遺物番号	持開番号	器種		装飾		法 量 (cm)			産地	備考
		種類	器種	絵付け・輪筆	文様	口径	器高	底径		
I32SD025-003	135	磁器	碗	青花	團縁 (内)				中国景德鎮窯系	
I32SD025-004	135	磁器	盤×鉢	青花					中国景德鎮窯系	
I32SD025-005	135	陶器	甕						タイ産	
I32SD025-006	135	陶器	甕		蓮花文				蘭戸	
I32SD025-007	135	焼締	漆鉢						備前	東国編年中世 5 期
I32SD025-008	135	焼締	漆鉢						備前	東国編年近世 1 期

第 49 表 第 132 次その他観察表

遺物番号	持開番号	器種		法 量 (cm)			備考
		種類	器種	長さ	幅	厚さ	
I32SD025-009	135	羽口		(10.0)	(12.0)	(6.0)	一部破損により赤変 角閃石・安山岩
I32SD025-010	135	羽口		(6.5)	11.9	(6.3)	角閃石・安山岩
I32SD025-011	135	瓦	丸瓦	(12.0)	(9.0)	2.2	内面に布目痕あり

第8節 近世の様相

(1) はじめに

下部地域の近世遺構については、中世末期段階の遺構を踏襲する溝状遺構（道路状遺構）や、明治大分水路開削以前の当地の水利状況を示すと考えられる端部方形不連続溝、井戸状遺構について触れる。また、近世集落についてはほぼ区画整理以前の集落域と重なり一部で整地を伴う事が確認されている。区画整理以前に墓地であったと思われる地域から検出した近世墓についてもその様相について言及する。さらに出土遺物については第79次調査から出土した焼継資料や近世備前焼の四角瓶、焙烙、土人形等を中心に改めて紹介する。

(2) 遺 構

溝状遺構

下部地域は、大分川に近接する立地条件でありながら、水利条件が悪く水田としての土地利用は当該地域の低地のみで行われており、そのほとんどは畑作地として利用されていた。これは発掘調査の成果のなかにも顕著に現れており、溝状遺構を調査すると、滞水していた痕跡が少なく、空堀状態であったことを示している。また第137図に示すように、溝の位置・方向ともに字図の境とほぼ一致する形で掘られており、中世段階の溝状遺構を踏襲するものが多い。中世末期の溝状遺構が重なる地点は下部道跡群の北側に多く、第137次調査を除く5地点（第4次・71次・115次・139次・140次調査）は現下部小学校・霜凍神社のあたりに集中する。単に排水施設としての機能より、屋敷地等の境となるような区画施設であったと考えられる。これに呼応するように字名の中には「堀向」・「城ノ内」・「高城」・「屋敷」等の名もあり、中世段階からこの地域には大友氏の家臣の屋敷地が点在していた^{註1}。この点は文献史料^{註2}からも裏付けられる。その後明治32年に「明治大分水路」が開削され、下部一帯の土地利用はここで一つの画期を向かえることになり地区内には多くの水田が造られるようになった。また、下部道跡群第32次調査に見られるように溝として連続せず、端部が方形に成形された「端部方形不連続溝」^{註3}が認められる。これは現在の土地境とほぼ一致し、周囲には同一方向の不連続な溝が集中している点などから、明治大分水路開削以前に、唯一の水源であった「はねつるべ」に付随するものであった可能性が高いと考えられる^{註4}。

端部方形不連続溝については、すでに報告書中において整理・検討をおこなっているが、改めてその機能や特徴を整理する。時期的には18世紀後半から19世紀代に比定される。第32次調査、第38次調査、第115次調査等F区を中心とする調査区において検出されている。その特徴を列記すると

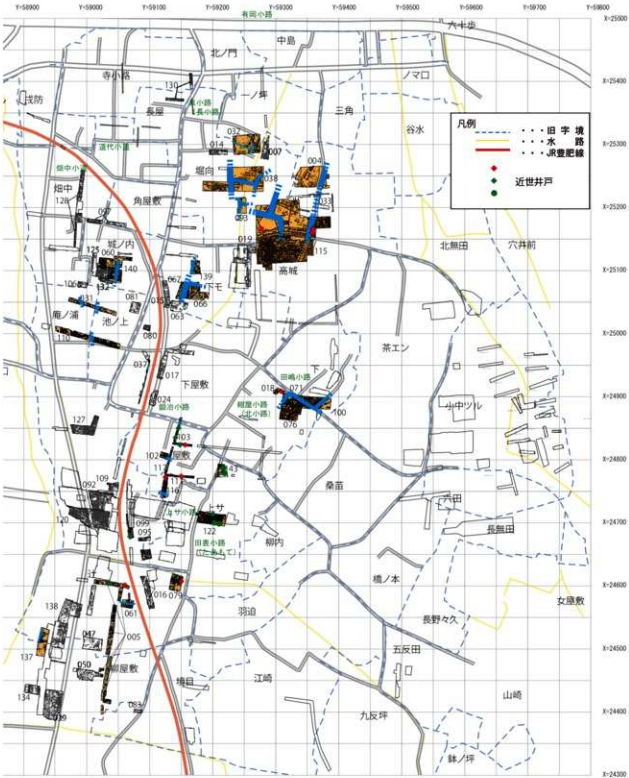
- 1 溝として連続しない
- 2 溝底はフラットであり、溝の途切れる端部は方形に成形される。
- 3 方向に一定の規則性を見出すことができる
- 4 複数の掘り返しが見られることが多く、ある程度の深さを持つ部分には一部グライ土層も認められ、滞水していた状況を想定できることである。

註1 坪根伸也・柴田義弘 2008「第2節 戦国時代末期の下部地区－発掘調査成果と文献史料による景観復元－」『下部道跡群VI』-大分市下部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書5- 大分市教育委員会

註2 「閑家文書」 大分市史編纂室

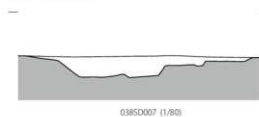
註3 坪根伸也 2007「第3節 小 結 端部方形不連続溝」『下部道跡群V』-大分市下部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書4- 大分市教育委員会

註4 註3に同じ

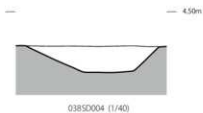


第 137 図 近世溝状遺構・井戸状遺構分布図 (1/6,000)

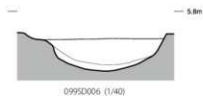
【17 世紀中頃以降】



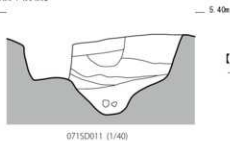
【17 世紀後半以降】



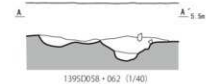
【18 世紀後半前後】



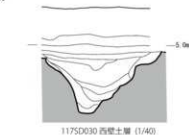
【18 世紀後半前後】



【18 世紀後半】



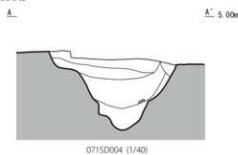
【18 世紀】



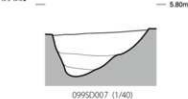
【18 世紀前半～中頃】



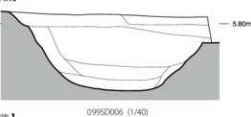
【18 世紀中頃前後】



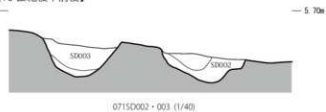
【18 世紀後半前後】



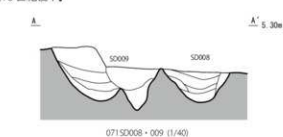
【18 世紀後半前後】



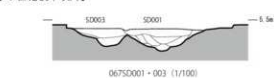
【18 世紀後半前後】



【18 世紀後半】

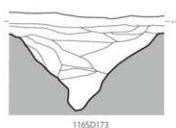
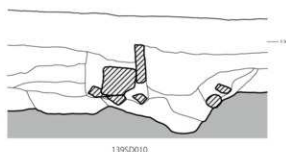


【18 世紀後半以降】

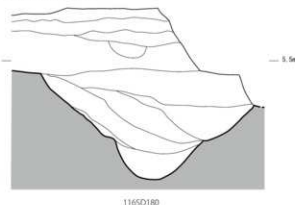


第 138 図 近世溝状遺構断面図集成① (1/40・1/80・1/100)

【18世紀～19世紀初頭】



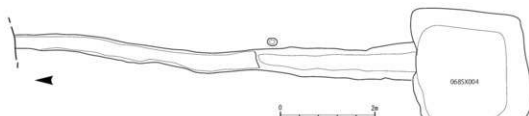
【18世紀末～19世紀前半】



【18世紀後半～19世紀前半】



第139図 近世溝状遺構断面図集成② (1/80)



第140図 第68次調査検出の端部方形不連続遺構 (1/80)

水利条件

明治大分水路

032SD003

下郡地区一帯は低地にありながら水利条件が悪く、明治32(1899)年に農地の開発に伴う明治大分水路本線が開削するまでは河川や谷水からの井路も利用できない土地柄であった。そのため僅かな水田を維持するには田ごとに溜池を掘り、はねつるべによる水汲みに頼らざるを得なかったのである。この様子は『大分県土地改良史』にも掲載されており、日照りが続くと米の収穫が平年の二、三分しか満たず、そのため土地を去るものも出てきたので、各村の個数は減少していったとある。このような状況を打開したのが前述の明治大分水路である^(註5)。幹線水路32km、支線水路41km、派線水路117kmに及び、その灌漑面積は明治32年当初で705ha、明治36(1900)年で800ha、大正3(1914)年で903ha、昭和4(1929)年で982ha、昭和12(1937)年で1225haにも及んだという。上述の内容を踏まえると、端部方形不連続遺構は明治大分水路開削以前にはねつるべにより溜池から供給された揚水を付近の小規模な田に引水する為に掘削された可能性が極めて高いと推定される。第32次調査において検出された032SD003は、出土遺物の年代観からその機能の停止と廃絶がこの明治大分水路の設置に伴って行われた可能性を想定できるのである。また032SD003に極

註5 大分市 1987『大分市史』下巻

第50表 近世溝状遺構一覽表①

遺構名	探検番号	時期	断面形状	規模			方向	掲載報告書
				長さ (m)	幅 (m)	深度 (m)		
098SD002	—	17C 初瀬 (埋没)	V字形		1.8	1.0		下部Ⅱ P171 第116図 (全体遺構図)
038SD007	138	17C 中頃以降	逆台形		4.8	0.4		下部Ⅲ P342 第415図
038SD004	138	17C 後半以降	逆台形		1.5	0.3		下部Ⅲ P340 第412図
139SD030	—	18C	逆台形		0.9	0.4		下部Ⅲ P358 第373図
099SD003	—	18 世紀前後		1.0～0.3	0.3～0.4		東西	下部Ⅲ P207 第156図
117SD030	138	18C 前半～中頃	Y字形		2.0	1.3	N75°・W	下部Ⅲ P331 第340図
117SD032	138	18C 前半～中頃	逆台形		1.2	0.5	N80°・E	下部Ⅲ P332 第341図
031SD001	—	18C 前半～後半	U字形		2.6			下部Ⅲ P335 第23図
071SD004	138	18C 中頃前後 (埋没)	V字～U字形	0.7～1.35	0.4～0.82			下部Ⅲ P95 第80図
061SD001	—	18C 中頃以降	U字形		1.7	0.7	東西	下部Ⅲ P98 第128図
137SD053	—	18C 後半	U字形	6.3	0.75	0.5	南北	下部Ⅲ P344 第354図
139SD058	138	18C 後半	U字形		0.4	0.4		下部Ⅲ P359 第375図
139SD062	138	18C 後半	U字形		0.5	0.3		下部Ⅲ P359 第375図
140SD351	—	18C 後半		5.5 (輸出)	不明	0.6	N10°・E	下部Ⅲ P261 第227図
116SD186	—	18C 後半	U字形		1.0	0.32		下部Ⅲ P318 第325図
037SD003	—	18C 後半			1.1	0.30	N20°・E	下部Ⅲ P82 第73図
071SD008	138	18C 後半 (埋没)	U字形		1.9	0.7	南北	下部Ⅲ P99 第85・86図
071SD009	138	18C 後半 (埋没)	U字形		1.2	0.6		下部Ⅲ P99 第85・86図
071SD002	138	18C 後半前後 (埋没)	にぶいU字形		0.9	0.3	N60°・W	下部Ⅲ P93 第77図
071SD003	138	18C 後半前後 (埋没)	U字形		0.9	0.3	N60°・W	下部Ⅲ P93 第77図
099SD006	138	18C 後半前後	U字形		2.0	0.8	東西	下部Ⅲ P207 第159図
099SD007	138	18C 後半前後	にぶいU字形		1.0	0.5	南北	下部Ⅲ P209 第161図
071SD011	138	18C 後半前後			1.7	0.8	N54°・E	下部Ⅲ P100 第88図
004SD007	—	18C 後半以降		27.0	8.3	1.1	南北	下部Ⅲ P61 第66図
032SD002	—	18C 後半以降			0.25	1.0	N20°・E	下部Ⅲ P63 第54図
067SD003	138	18C 後半以降	Y字形		3.0	1.1	南北	下部Ⅲ P148 第211図
115SD0062	—	18C 以降		12.7	1.0	0.1	東西	下部Ⅲ
098SD001	—	18C 以降	U字形		3.2	1.16		下部Ⅲ P171 第116図 (全体遺構図)
110SD027	—	18C 後半～19C 前半	U字形		1.4	0.7	南北	下部Ⅲ P263 第248・249図
093SD001	—	18C 後半～19C 代			4.0～5.0	0.4～0.6		下部Ⅲ P188 第171・172図 (全体遺構図)
093SD004	—	18C 後半～19C 代	階段～テラス 有する畚状		3.0 (南) 8.5 (西側山) 0.5 (北)	0.2～0.3 0.3～0.4 0.2	南西～北	下部Ⅲ P188 第171・172図 (全体遺構図)
093SD009	—	18C 後半～19C 代			2.0	0.2～0.3	北西部～南方	下部Ⅲ P188 第172図 (全体遺構図)
100SD004	—	18C 後半～19C			0.45～0.6	0.2～0.3		下部Ⅲ P207 第196図 (全体遺構図)
100SD011	—	18C 後半～19C			0.3～0.65	0.2～0.3		下部Ⅲ P207 第196図 (全体遺構図)
116SD173	138	18C 末～19C 前半	Y字形		2.7	1.4		下部Ⅲ P317 第322図
116SD180	138	18C 末～19C 前半	U字形		2.0	0.8		下部Ⅲ P317 第323図
139SD010	138	18C～19C 初瀬	U字形		1.1	0.3		下部Ⅲ P357 第372図
061SD003	—	18C～19C	U字形	12.0 (輸出)	1.4 (輸出)		東西	下部Ⅲ P100 第130図
071SD007	—	19C 初瀬 (埋没)	U字形		1.6	0.75	南北	下部Ⅲ P96 第83図
110SD028	—	19C 前半前後	U字形		1.1	1.6	南北	下部Ⅲ P265 第251図
117SD027	138	19C 以降	U字形		1.4	1.4	N75°・W	下部Ⅲ P331 第339図
066SD036	—	近世	V字形					下部Ⅲ P127 第178図
067SD001	138	近世	Y字形				南北	下部Ⅲ P148 第211図
103SD019	—	近世	畚状		1.0	0.5	東西	下部Ⅲ P230 第213図 (全体遺構図)
103SD049	—	近世	畚状		0.9	0.4	東西	下部Ⅲ P230 第213図 (全体遺構図)
103SD077	—	近世	U字形		0.5	0.3	東西	下部Ⅲ P230 第213図 (全体遺構図)

第51表 近世溝状遺構一覧表②

遺構名	探洞番号	時期	断面形状	規模			方向	掲載報告書
				長さ(m)	幅(m)	深度(m)		
030SD007	—	近世		14.8	切りあつていて不明	0.1	N-35°・E	下郡Ⅲ P275 第331図
115SD0082	—	近世	U字形	36.8		0.8		下郡Ⅲ
032SD005	—	近世		15.0(検出)	0.60	0.05	N-30°・E	下郡Ⅲ P60 第50図 (全体遺構図)
032SD004	—	近世		14.5(検出)	1.40	0.04~0.08		下郡Ⅲ P60 第50図 (全体遺構図)
071SD001	—	近世後半	鈍いV字形				N-60°・W	下郡Ⅲ P84 第71図
030SD008	—	近世以降		14.0		0.15	東西	下郡Ⅲ P275 第331図
039SD021	—	近世以降						下郡Ⅲ P229 第163図
140SD350	—	近世以降		5.5(検出)		0.30	N-10°・E	下郡Ⅲ P261 第227図
115SD0047	—	近世～近代	U字形	27.8		0.20	N-18°・E	下郡Ⅲ
115SD0049	—	近世～近代	U字形	16.8(東) + 14.9(南) = 31.7		0.18	N-18°・E	下郡Ⅲ
031SD002	—	近代	鈍いV字形		2.6	0.9		下郡Ⅲ P35 第23図
140SD550	—	近現代		6.0(検出)	0.5	0.15	N-10°・E	下郡Ⅲ P263 第231図

道路側溝

めて近い位置において検出された032SX013は、素掘りの井戸状の遺構と見られることから、掘水を供給するための施設である可能性が高いと推定される。

また、第71次・76次・81次・100次調査等において検出された溝状遺構は埋土状況から近世段階の道路状遺構あるいは道路側溝とも考えられる。調査では現在の道路下において確認した道路状遺構はいわゆる豊後大分型道路の構造^{註6}を示し、下郡遺跡群内の他地点で確認されている道路構造と共通するものである。

井戸状遺構

素掘りの井戸

近世段階の井戸状遺構については、近現代まで継続して使用されいる例が多く、そのため発掘調査での検出事例は必ずしも多くない。そうした中で、遺存状況のよいものについて第141図に掲載した。これを見ると形状は円形が多く、素掘り構造のものが大半を占める。規模は径1.5m前後のものと、3.5～4.0mを測るものに大別でき、さらに断面形状は底部に近づくにつれ窄まっていくタイプと袋状になるタイプがある。深度に関しては1.5～2.0m程であるが、多量の湧水の為完掘できていない事例も多い。

竹材を用いた構造

第103次調査において検出した103SE058のように径0.6mの円筒状の瓦質土器を重ねた井筒を持つタイプも認められるが、多くは素掘り構造のものである。特殊な例としては第130次調査において検出した130SE007がある。この井戸跡は帰属時期を概ね18世紀中頃から後半と推定できるものであり、竹材を使用して側面を構成している。一辺0.7mを測る方形の井筒である。断面形状は下部に向かうほど緩やかに窄まっていく。この遺構は本遺跡群のこれまでの近世集落調査事例の中でも検出事例のない特異構造を持つものである。

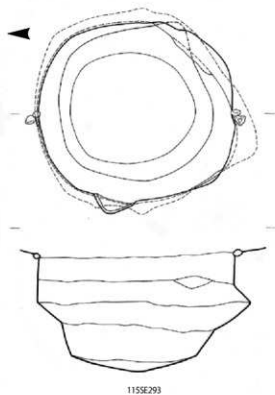
近世墓

構築年代

近世墓は、下郡遺跡群の中ほどに位置する第143次調査区並びにそのさらに南に位置する第122次調査区で数多く検出している。いずれの事例も土地区画整理事業に伴い一斉に墓地移転が行われており、そのため墓石等、墓の上部施設は存在しない。したがって墓地のはっきりとした構築年代の把握は難しい。しかしながら近年、他遺跡において近世墓地の調査が行われ、墓石形態、土坑形態、

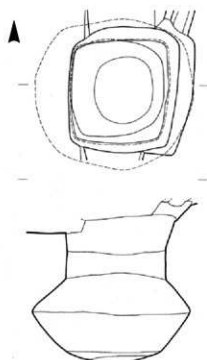
註6 坪根伸也 2006「第2節 考察 1.豊後大分型道路について」『下郡遺跡群Ⅳ』・大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書3・大分市教育委員会

【18世紀前半】



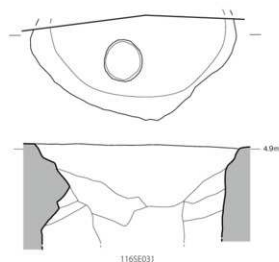
1155E293

【18世紀後半】



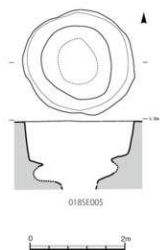
1155E061

【18世紀後半】



1165E031

【18世紀後半】



0185E005

第141図 近世井戸状遺構実測図集成 (1/80)

第52表 近世井戸式遺構一覧表

遺構名	探洞番号	時期	形状	規模		構造	発掘報告書
				大きさ (m)	深さ (m)		
H15E0293	141	18C 前半	円形	径 2.06	1.26		下部Ⅱ
H15E058	—	18C 中頃		径 3.5			下部V P302 第 307 図 (全体遺構図)
H16E0031	141	18C 後半以降	不規則円形	$4.4 \times 2 + a$	$2.0 + a$	・井筒あり	下部V P319 第 326 図
O18E0005	141	18C 後半	円形	径 2.35	$1.5 + a$ (井戸底には達していない)	・素掘りの井戸	下部VI P17 第 6 図
H15E0061	141	18C 後半	方形	1.35 (長軸) 1.15 (短軸)	1.54	・素掘りの井戸	下部Ⅱ
H15E002	—	18C 後半	隅丸方形	1.5×1.75	1.5	・素掘りの井戸	下部V P302 第 307 図 (全体遺構図)
H03E058	—	近世	円形	1.4×1.3	完照していない	・径 0.6 の円筒状の瓦葺土層を重ねた井筒使用	下部VI P231 第 214 図
005 (6T) SE134	—	近世		径 1.8			下部VI P121 第 150 図
O79SE088	—	近世					年報 8 12P

埋納状況、棺内外出土遺物等から時期比定が可能となっている。その一例として大分市高崎に所在する女狐近世墓地^{註1}がある。墓地の使用期間は1720年代末から1901年までの200年間に及び、139基の墓石と7基の石遺物からなる近世集落の共同墓地である。また、ここでは各家の累代墓が別々の寺域に設けられており、古墓の景観が良好に保存されている。それぞれの墓石に関しては、考古学的な墓石の型式分類と判読可能な墓石の年紀の両面の照合により推定している。

古墓の景観

この女狐近世墓地の成果を参考に下部遺跡群の近世墓地を比較検証してみる。

まず、墓形態の上部施設である墓石については、墓地移転にともないそれ自身が存在しないため、比較の対象にならない。ここで検討できる資料としては土坑の形態、棺の形式、副葬品等である。

土坑形態

土坑の形態からみると、女狐近世墓地ではすべて円形であるのに対し、下部地区のそれは円形と方形の二種類に分別される。棺の形式は女狐近世墓地では墓地形成当初から墓地廃絶期まで継続して早桶が使用されている。中には喪棺の使用も認められるが3例ほどであり、埋葬者はいずれも僧侶となっている。下部地区では棺の形態^{註2}は早桶使用によるものと、箱式木棺を使用する事例が認められる。先述の検出土坑が二種類に分別されるのは、この棺の形態に起因するものである。第143次調査検出の事例をみると早桶によるものが20基中16基、箱式木棺が20基中4基となっている。

棺の形態

中尾近世墓

この割合は本遺跡群内の他地点においても同様な様相を示している。また、市内鷺野の中尾近世墓地^{註3}では、17世紀後半代から18世紀代に墓地形成が行なわれているが、その中で、墓地形成当初の17世紀後半代では早桶の使用が多く認められ、18世紀後半代には方形棺となっている。下部遺跡群の近世墓地は17世紀後半から19世紀後半代に形成されたものであることを踏まえると、大分市内では少なくとも17世紀末から18世紀にかけては早桶による埋葬形態が主流であったと考えられる。

六道銭

次に棺内外の出土遺物についてみる。女狐近世墓地では棺内から六道銭が出土しており、その埋納枚数により年齢および性別の相違が認められる。また、棺外には土師質小皿を完形のまま墓坑底に埋置する例が多く認められ、これは時間経過とともに枚数に変化していくとの指摘がなされている^{註4}。すなわち、1720年代末から1750年代までは3枚組が多く、1750年代から19世紀初頭までは2枚組が多いという^{註5}。本遺跡群の第143次調査143ST100からは2枚の土師質小皿が出土している。その形状から18世紀中頃から後半の墓坑と推定されている。これは、女狐近世墓地の状況とも一致するものである。また、第95次調査区O95SX049は墓坑内から銅銭3枚と陶胎染付の碗が出土しており、土師質小皿を補充するものとして副葬されたと考えられる。中世段階では、土師

枚数の違い

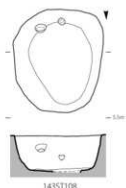
註1 大分県教育委員会 1996『女狐近世墓地』九州横断自動車道関連調査報告書5

註2 田中裕介 1996『墓坑と棺』女狐近世墓地』九州横断自動車道関連調査報告書5 大分県教育委員会

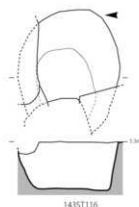
註3 大分県教育委員会 1999『中尾近世墓地』国道10号線鷺野原交差点拡幅に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

註4 田中裕介 1996『銭貨類』『土師質小皿』女狐近世墓地』九州横断自動車道関連調査報告書5 大分県教育委員会

【17世紀後半】



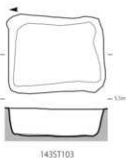
【18世紀前半】



【18世紀前半～中頃】



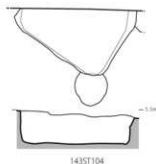
【19世紀前半】



【19世紀後半】



【19世紀後半】



第142図 近世墓実測図集成① (1/20)



副葬品

近世陶磁器

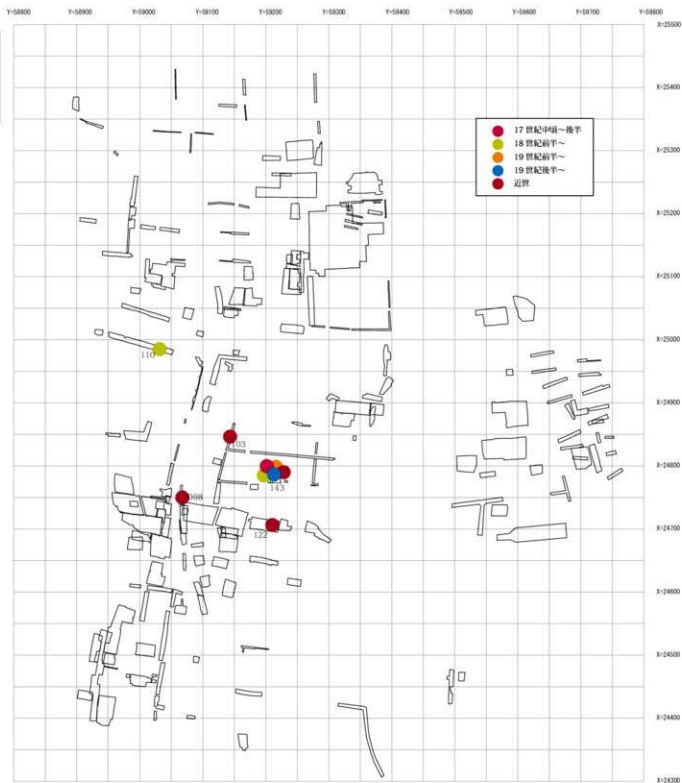
墓地規定

器を副葬品として用いる事例が本遺跡内でも認められていたが、近世段階に入ると陶磁器に暫時移行していくものと考えられる。第96次調査区からは同様の墓坑と考えられる遺構が検出されており、近世陶磁器が出土している。さらにこの調査区からは近世段階の溝状遺構、掘立柱建物跡も検出されており、墓群はその北側に集中して分布している。いずれもほぼ同じ方向を意識して造られている。これは当時の区画にそって諸施設が造られたと考えられるものであるが、当時の墓坑は居住地からそう遠くない位置にあったものと推定される。しかしながら、明治17(1884)年、明治政府が「墓地及埋葬取締規則方法細目標準」を発し、大分県では明治35(1902)年になって「墓地及埋葬制限細則」が改正され、墓地は人家等から60間以上隔てる事を定め、この規定に適合しない墓地における埋葬を禁じている。当時、大分県内ではかなり厳重に施行されたといわれており、本遺跡群内でのいくつかの墓地の移動の事例はこれに起因するものと考えられる。

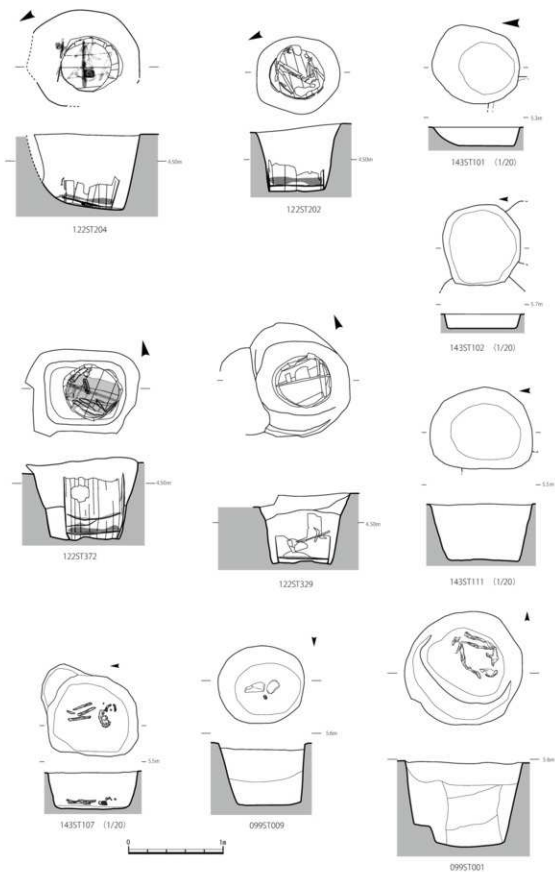
参考文献

- 大分市教育委員会 2006「第7節 下部遺跡群第143次調査」『下部遺跡群Ⅲ』-大分市下部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書2-
- 原田昭一 2002「墓にみる中世から近世・豊前・豊後における近世墓のはじまり」『大分縣地方史』第184号 大分縣地方史研究会
- 古田 寛 2002「大分県における近世墓地発掘調査の成果と課題-大分市域周辺の近世墓地調査事例を中心に-」『大分縣地方史』第184号 大分縣地方史研究会
- 田中裕介 2002「大分県における近世墓地研究の軌跡と論点-最近20年間の考古学的研究を中心に-」『大分縣地方史』第184号 大分縣地方史研究会

註5 田中裕介 1996「銭貨類」「土師質小皿」「女狐近世墓地」九州横断自動車道開通調査報告書5 大分県教育委員会



第 143 図 近世墓分布図 (1/6,000)



第 144 図 近世墓実測図集成② (1/20・1/40)

第53表 近世墓造構一覧表

遺構名	碑頭番号	時期	規模		平面形状	断面形状	掲載図表書
			大きさ (m)	深度 (m)			
143ST108	142	17C 中頃～後半	0.75 (底径)	0.4	楕円形		下部Ⅴ P346 第359図
143ST100	—	18C 前半	0.5 (底径)	0.1 (底径)	楕円形	逆台形	下部Ⅴ P341 第341図
143ST116	142	18C 前半	0.8 (長軸)	0.5	楕円形		下部Ⅴ P350 第374図
110ST062	142	18C 前半～中頃	径 1.3	1.05	円形		下部Ⅴ P270 第263図
143ST103	142	18C 前半	0.85 × 0.7	0.3	方形	方形	下部Ⅴ P343 第347図
143ST114	—	19C 前半	0.6 (底径)	0.5	方形		下部Ⅴ P349 第369図
143ST115	—	19C 前半	0.25 (底径)	0.3			下部Ⅴ P350 第372図
143ST104	142	19C 後半	1.1 × 0.8	0.45	方形	方形	下部Ⅴ P343 第350図
143ST106	142	19C 後半	0.7 (底径)	0.4	楕円形		下部Ⅴ P345 第354図
143ST112	—	19C 後半	0.8 (底径)	0.5	楕円形		下部Ⅴ P348 第365図
103ST075	—	近世					下部Ⅴ P230 第213図 (全体遺構図)
122ST202	144	近世	径 0.8	0.7	円形		下部Ⅴ P421 第377図
122ST204	144	近世	径 1.0 (推定)	0.8	円形		下部Ⅴ P421 第376図
122ST156	—	近世	径 0.75	0.6	円形		下部Ⅴ P421 第375図
122ST329	144	近世	径 1.0	0.75	円形		下部Ⅴ P421 第379図
122ST372	144	近世	1.1 × 0.85	0.85	方形		下部Ⅴ P421 第378図
103ST021	—	近世					下部Ⅴ P230 第213図 (全体遺構図)
103ST048	—	近世					下部Ⅴ P230 第213図 (全体遺構図)
103ST027	—	近世					下部Ⅴ P230 第213図 (全体遺構図)
122ST144	—	近世					下部Ⅴ P420 第374図 (全体遺構図)
122ST364	—	近世					下部Ⅴ P420 第374図 (全体遺構図)
099ST001	144	近世	径 1.2	0.9	円形		下部Ⅴ P211 第167図
099ST002	—	近世	径 0.8	0.35	円形		下部Ⅴ P211 第168図
099ST009	144	近世	径 0.85	0.6	円形		下部Ⅴ P212 第171図
099ST011	—	近世	径 1.1	0.7	円形		下部Ⅴ P211 第168図
099ST012	—	近世	径 0.8	0.5	円形		下部Ⅴ P211 第168図
099ST016	—	近世	径 1.2	0.75	円形		下部Ⅴ P214 第174図
143ST101	144	近世	0.55 (底径)	0.1 (底径)			下部Ⅴ P342 第344図
143ST102	144	近世	0.85 (底径)	0.15 (底径)	楕円形		下部Ⅴ P342 第345図
143ST105	—	近世	0.8 (底径)	0.15	楕円形		下部Ⅴ P344 第352図
143ST107	144	近世	0.75 (底径)	0.4	楕円形		下部Ⅴ P345 第357図
143ST109	—	近世	0.8 (底径)	0.6	楕円形		下部Ⅴ P347 第361図
143ST110	—	近世	0.5 (底径)	0.4	楕円形		下部Ⅴ P347 第362図
143ST111	144	近世	0.75 (底径)	0.6	楕円形		下部Ⅴ P348 第364図
143ST113	—	近世	0.5 (底径)	0.3	楕円形		下部Ⅴ P349 第367図
110SX140	—	18C 前半	1.8 × 1.5		方形基調		下部Ⅴ P312 第321図 (全体遺構図)
081SX009	—	18C 中頃	0.54 × 0.62	0.06	方形基調		下部Ⅴ P187 第194図
111SX043	—	18C 後半	0.9 (長軸)	0.15	楕円形	盤状	下部Ⅴ P305 第312図
093SX002	—	18C 後半～19C 代	1.9 × 1.9	1.0	隅丸方形		下部Ⅴ P188 第172図 (全体遺構図)
076SX088	—	18C 後半～19C	3.8 × 2.2		不定形		下部Ⅴ P129 第110図 (全体遺構図)
111SX064	—	18C 後半～19C	不明	0.6	不定形		下部Ⅴ P306 第314図
110SX121	—	19C 前半頃	2.45 (横出径)				下部Ⅴ P271 第267図
111SX072	—	19C 前半	1.6 × a × 1.0	0.3		U 字形	下部Ⅴ P307 第315図
005SX149 (7T)	—	近世	径 1.25	0.05	円形		下部Ⅴ P125・127 第158・161図
079SX007	—	近世	4.3 × 4.1 (横出)	0.4	略方形		年報 8 P12
067SX011	—	近世	径 1.0	0.8	円形	逆台形	下部Ⅴ P151 第219図
067SX015	—	近世	径 1.15	0.75	円形	逆台形	下部Ⅴ P151 第221図
067SX016	—	近世	径 1.45	0.9	方形基調	逆台形	下部Ⅴ P152 第223図
071SX092	—	近世	径 1.26	0.44	円形		下部Ⅴ P86 第74図 (全体遺構図)
071SX140	—	近世	0.9 × 0.68	0.15	円形		下部Ⅴ P86 第74図 (全体遺構図)
068SX004	—	近世か?	3.0 × 3.0	1.6 × a (底面まで達していない)	方形	逆台形状	下部Ⅴ P79 第64図 (全体遺構図)
076SX272	—	近世～近代	3.0 × 3.6 (現状)		方形		下部Ⅴ P129 第110図 (全体遺構図)
076SX296	—	近世～近代	1.3 × 0.7		方形		下部Ⅴ P129 第110図 (全体遺構図)
076SX373	—	近世～近代	径 0.8	0.5	円形		下部Ⅴ P129 第110図 (全体遺構図)
031SX029	—	近世～近代	径 1.0	0.24～0.76	円形		下部Ⅴ P52 第46図
116SX022	—	近世～近代	0.6 × 0.7 + a	0.2	楕円形		下部Ⅴ P312 第320図 (全体遺構図)
081SX003	—	近代	径 2.2	0.44	円形		下部Ⅴ P186 第192図

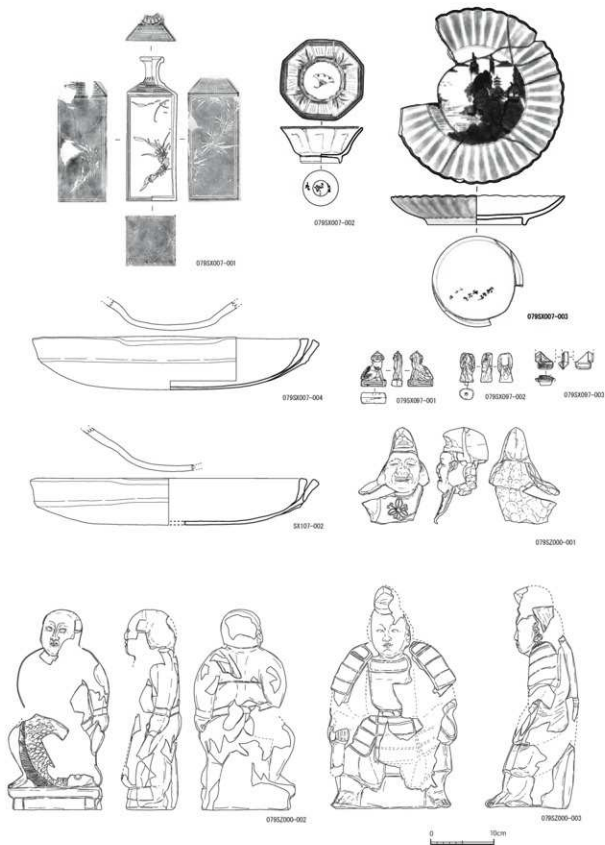
(3) 近世遺物について一 下郡遺跡群第 79 次調査出土の遺物を中心に一

武者人形	1996 年 5 月に下郡地区南西部に位置する第 79 次調査が行われた。調査区内の遺構の展開状況は南側部分に広く後背湿地が存在し、遺跡はその北側部分に形成されている。弥生時代中期の貯蔵穴多数、12 世紀代に比定される井戸跡、近世の溝状遺構・土坑等を確認した。調査区の南側部分は 18 世紀以降に掘削されたと考えられる大型の溝状遺構が存在している。その溝状遺構から近世段階の土人形や陶磁器が出土した。これらの遺物について報告していきたい。079SZ-001～003 は博多人形である。003 は高さ 35.2 cm、最大幅 20.5 cm を測る武者人形をかたどった作品である。これは博多中ノ子型の人形で、府内城・城下町遺跡第 9 次調査からも同様の補助人形が出土している。頭部は見つかっていないが、残存高 37.0 cm、最大幅 39.5 cm を測る大きな人形である。明治 13 年に刊行された「福岡区誌」には、当時の素焼き人形の販売ルートや生産個数等が記されており、それによれば
販売ルート	東は瀬戸内海ルートで安岐まで、西は玄界灘ルートで唐津方面まで、南は陸路で筑後、周防灘ルートで豊前、豊後まで販売が及んでいたことがわかる。また、町によって販売方面が異なっていたようであり、豊後方面には主に博多の東に位置する港町「津屋崎」という町から供給されていたようである。その津屋崎にある原田家は現在でも中ノ子系の型を使い人形生産を続けている。原田家に残る書簡には豊後の別府から津屋崎の店主あてに商いの現況を知らせる文書があり、その内容から、津屋崎を出帆して、周防灘沿岸に沿って港町に次々と寄港し、籠を単位として人形を売りさばいていた様子がかえる。また大分・別府で売れなかった場合は四国に回るルートもあったことを示している。この博多人形はそもそも素焼きの土人形から発展したものであり、その創始者は博多の中ノ子家の中ノ子安兵衛・吉兵衛親子と言われており、同家の口伝によれば文化 5 (1808) 年に製造が始まり、江戸時代後期の嘉永 3 (1850) 年に中ノ子吉兵衛らにより「組合」が組織されたという。また、「博多人形」という名称は明治 23 年の東京での第 3 回国内勲業博覧会に出品された人形が褒章を受け、その褒章状に「博多人形」と記載されており、以降この「博多人形」が公称になったとされている。
博多人形	079SX007-002・003 は焼継により補修された肥前青磁染付けの大名であり、高台裏には第 145 図に見られるように焼継文字が認められる。「萬や町中村や□□ケ□」とあり、判読できない文字もあるものの、この「萬や町」とは府内城下町の堀九井口に近い「万屋町」を示していると考えられ、当時大分川を介した下郡地域と「府内」との物流状況の一端を示す資料である。
焼継文字	079SX007-001 および 079SX109-001 は土師質の焙烙である。079SX007-001 の口径は 43.8 ～ 45.5 cm、器高は 8.4 cm を測り、079SX109-001 は口径 43.8 ～ 45.8 cm、器高 7.4 cm を測る。いずれも器壁が薄く、回転ナデにより調整されており外面にはススの付着が認められる。焙烙は食品を炒ったり、蒸したりする調理鍋の一種であり、底部が薄く壊れやすい消耗品である。そのため残存しにくい遺物の一つであるが、豊後地域では同様の遺物が「府内城三ノ丸遺跡」^(註 1)・「杵築小学校校内遺跡」^(註 2) から一定程度まで出土している。これには口縁部に貫通孔をもつ把手を有しており、これは徳川氏大坂城期の形態^(註 3)と類似し、難波洋三氏によって提示された D 類 (第 146 図) と判断される。この D 類は大坂・堺・京都に分布するのみで、その他の大坂地域近隣では E 類が主体となる。つまり現状では豊後地域の焙烙は大坂地域近隣よりも大坂地域の影響を強く受けていることになる。しかしながら、本遺跡出土の焙烙には把手や貫通孔は認められず、全体的なフォルムは D 類に類似しているものの、片口となっている。このような差異は当地域独自の、地域色を反映した形態なのかどうかについては資料不足のため検討できない。今後の資料の増加を期待して形態の系譜の検討、製作工人や製作技術の詳細等課題としておきたい。
焙烙	調理鍋の一種
調理鍋の一種	大坂城跡の形態

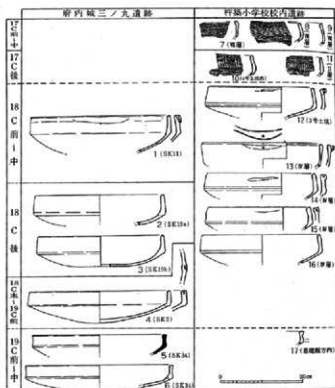
註 1 大分県教育委員会 1993 『府内城三ノ丸遺跡』一大分県共同庁舎 (仮称) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

註 2 高橋信武 1987 『杵築小学校校内遺跡』杵築市埋蔵文化財調査報告書第 1 集 杵築市教育委員会

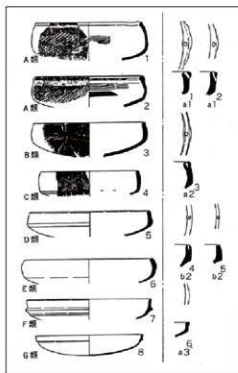
註 3 難波洋三 1992 『徳川氏大坂城期の焙烙』『難波宮址の研究』第九 財団法人大阪市文化財協会



第 145 図 第 79 次調査出土の近世遺物実測図 (1/6)



黒崎城跡における焼物の変遷（府内城三ノ丸から転載）



徳川氏大坂城跡の焼物とD類器手の形勢
（難波 1992 を改変）

第 146 図 豊後及び大坂城における焼物の変遷（各報告書より転載）

四角瓶

079SX007-001 は、焼締陶器四角瓶で、粘土板を組み合わせで体部を作り、頸部から口縁部を貼り合わせる。口径 3.5 cm、器高 22.9 cm、体部は 8.0 cm 四方である。頸部から肩部にかけて花弁文、八卦文に類似した文様がめぐる。体部の二面は無文だが、残りの二面には線彫りした二条の枠内に、彫り込みの竹笹文がみられる。外面は朱泥を塗り、一部に火押がみえる。外面底部の隅に「〇大」の印が押されている。法量と体部の文様に差異があるが、北九州市黒崎城跡 23 区 SX14 より同一型式の製品が出土している^{註 4}。これによると、保命酒瓶を作る窯で焼成された 18 世紀～19 世紀の備前焼と報告されている。

竹笹文

黒崎城跡

註 4 北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2009『黒崎城跡 9』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 411 集

第54表 第79次出土遺物観察表

遺物番号	拝開番号	器種		胎土	色調		器面調整		法 量 (cm)				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
079SX007-001	145	埴輪陶器	瓶											
079SX007-002	145	陶磁器	八角鉢											別表
079SX007-003	145	陶磁器	大皿											別表
079SX007-004	145	土師質	焙烙	褐色 黒色 石灰	淡茶褐色	淡茶褐色 ～黒色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	43.8～ 45.5	8.4	—	—	全体 1/4 欠損	19C 前～中 外面スス
079SX093-001	145	土製品	こま犬のミニチュア土製品		淡褐色	淡褐色				5.6	3.5			型作り (最大厚 1.8)
079SX093-002	145	土製品	土人形 (頭部欠損)		淡白灰色	淡白灰色					2.3			(最大厚 1.8)
079SX093-003	145	土製品	御役内天神のミニチュア土製品											(最大厚 2.0) 型作り
079SX107-001	145	土師質	焙烙	内面石灰石 白色粒子	淡茶褐色	黒色 ～淡茶褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	(43.8～ 45.8)	7.4		—	口径 1/2 底部 1/4 欠損	外面スス
079SX000-002	145	土製品	土人形	精製土 (面部)	淡黄褐色	淡黄褐色								内面指オサエ (スびす) 型作り。鑿ぎ目 を中からさらに 粘土で強化して いる
079SX000-003	145	土製品	土人形	精製土	黄灰色	黄灰色				35.2	20.5			(最大厚 13.6) 彩色ありと思わ れる
079SX000-004	145	土製品	土人形	精製土						31.6	15.0			(最大厚 8.9) 顔を持つ人物

第55表 第79次出土遺物陶磁器観察表

遺物番号	拝開番号	器種		装飾		法 量 (cm)			産地	備 考
		種類	器種	絵付け軸葉	文様	口径	器高	底径		
079SX007-001	145	備前	瓶		(外2面)に線形	3.5	22.9	8	備前	底部に印あり
079SX007-002	145	磁器	八角鉢	絵付	(内) 足込み 古 草花文 (外) 唐草	12.5	5.7	6.2	肥前	高台内底縁文字あり 18C 後半～19C 制作
079SX007-003	145	青磁	大皿	絵付	(外) 蓮花	27.8	4.8	14.4	肥前	底縁文字 [高台町中村中□□々□] 18～19C 制作

第9節 近代から現代の様相

(1) はじめに

この項では下部地区の近代から現代にかけての様相の概略を記述するとともに、その当時の世相を示すと思われる遺物について紹介する。

明治新政府が行った廃藩置県（1867年）後、県の統廃合が行われ、明治4（1871）年に大分県が誕生した。それに伴い戸籍法を基にした大区小区制の行政区域も同年施行され、下部村は第3大区第4小区に配された。その後、大区小区制は廃止され、明治22年に大分県で施行された市制町村制により下部村を含む5町村は滝尾村に合併したのである。昭和14年には大分市へと編入される。

交通機関

交通の便に関しては、明治44（1911）年に豊州線（現日豊線）が開通、さらに大正時代には、犬飼軽便線（現豊肥線）大分一中判田が開通した。この時下部地区の南に滝尾駅が設置され、物資の輸送は格段に便利になったのである。

青蘗（七島草）

この頃の特産物として青蘗（七島草）が上げられる。米・麦を中心とする農業が主体ではあったが、青蘗（七島草）は村民の約8割がその栽培に従事しており、重要な副産物となっていた。青蘗（七島草）とは、寛文3（1663）年ころ、府内の商人が在美大島、七島瀬付近（鹿児島県トカラ列島付近）の島から持ち帰り、府内藩主の保護の下に栽培、奨励したものである。この青蘗（七島草）の栽培、加工は昭和初期まで続き、昭和14年頃には工産物の中の半数を占めている。

明治大分水路

明治期にいたるまで、下部地域周辺はよく肥えた土地をもちながら、水利条件が悪く農地の開発には向ききない土地とされてきた。そのため、溜池が設けられ、はねつるべにより揚水されていたと言われる。こうした点は発掘調査によっても検証されている。そうした中、明治32（1898）年に明治大分水路が開削し水田開発が大規模におこなわれていった。また、水田への通水、水掛けに際し各所で地下工事が行われた。下部遺跡群内の各調査区で遺構の欠失が見られるのはこの時の地盤に起因するところが大々いである。

区画整理事業

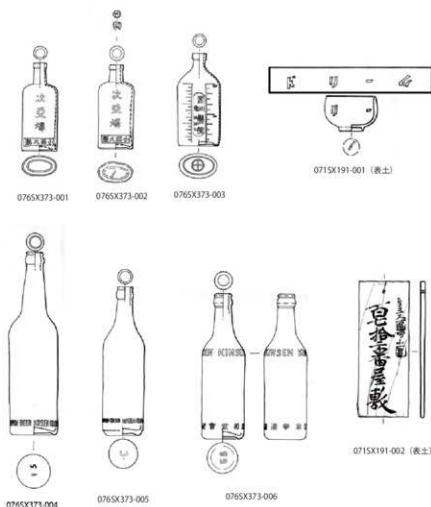
昭和20年、大戦の砲火は大分にもおよび、同年7月16日の大空襲により大分市中心部は焼野原となった。終戦後、急速な復興事業が行われ、大分市は目覚ましい発展を遂げていく。1980年代になり下部地区では昭和57年から区画整理事業が始まった。中世から近世の景観を現在まで良好に残していた当地の姿もこれにより新たな容姿へと変貌していったのである（第147図は下部遺跡群内の旧字図上に現在の様子とこれまでの発掘調査により出土した主な資料をわかりやすくイラストにして描いたものである。）

参考文献

大分市 1987『大分市史』下巻
大分県教育委員会 2000 第1回下部地区現地説明会資料



第147図 近代・現代の下部地区の様子



第 148 図 近代の主な出土遺物

(2) 出土資料について

次亜燐は明治の末に「小西九兵衛」という大阪市道修町の薬種問屋が作った滋養強壮・造血剤である。当時の新聞や立て看板には「牛乳の数十倍」「人体の肥料」「絶大の造血力を有する最有効強壮薬」等と書かれており、その効用を強く謳っている^(註1)。現代のドリンク剤の先駆けといったところである。

道修町は、享保 7 (1722) 年には江戸幕府に株仲間として (124 件) 公認され、薬種中買仲間として、唐薬種・和薬種を独占的に振ってきたいわゆる「くすりの町」である。当時大阪は長崎と直結した国際交易都市として栄えており、その中で道修町は薬種について海外との交流をもっていた。昭和 61 (1986) 年から始まった同市の発掘調査では江戸時代初期の薬種商の生活をうかがわせる海亀の甲羅や輸入薬種の容器と考えられる中国・タイ・ベトナム等の壺などが出土している^(註2)。その後、明治期に入ると西洋薬が主流となり、製薬産業も盛んになるなど医薬健康関連にも進出し、現在でも老舗の大手製薬会社 (田辺・武田・塩野義等) が軒を並べている町



第 149 図 次亜燐の当時 (明治期) の広告

註 1 東京大学総合研究博物館画像アーカイブス「日本の新聞広告 3000」(明治 24 年 - 昭和 20 年)

註 2 大阪歴史博物館 2003「特集展示おおさか町めぐり くすりの町・道修町」

木札 次に第 76 次調査区において出土した木札について触れる。この木札には、「第三大区 四ノ小区 172 番屋敷」と墨書されており、当時この下部地区の 172 番地に屋敷が構えられていたことを示している。

大区・小区	大区・小区とは、当時の行政区画を指すものである。1867年の廃藩置県により大規模な政治改革が行なわれ、明治4（1871）年11月には大分県が誕生した。新県政の始動にあわせ、中央のみならず地方の行政組織も新しく組み換えが行なわれることになった。このときに従来の庄屋を中心とした行政組織が取り払われ、全国的に勧められたのが大区小区制である。この新しい行政組織は、戸籍法が基になっており、戸籍編成の為に設けられた区画がそのまま行政上の区画となったものである。大区というのは各郡を単位とし、大分郡は第三大区となり、その下に小区となる町村が配置されたものである。木札に墨書されている第4小区には下郡村のほか、滝尾村・津守村・片島村・曲村の計5村が配属される。
戸籍編成	

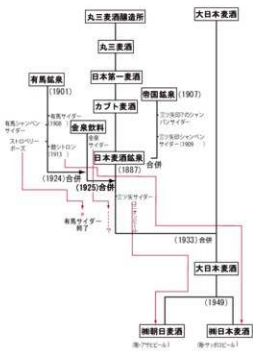
日本人が初めてビールを飲んだのは、1724年のことである。『和蘭問答』に、オランダ商館長が持ち込んだビールを幕府役人が飲んで、「味がなくてとてもマズい」と言ったと書かれているが、その100年後、福沢諭吉は『西洋衣食住』（1865）に「又ビールという酒あり、是は麦酒にて、其味至って苦けれど胸襟を開くに妙なり」と書いている。

現在、日本のビールメーカーは、キリン、サッポロ、アサヒ、サントリーの4社のみ（地ビールや沖縄のオリオンビールを除く）であり、サントリーがビールを発売したのは1963年であることから、戦前からのビールメーカーは3社ということになる。サッポロビールとアサヒビールは、実は元々同じ会社であり、元元は大日本麦酒という会社であった。最盛期、市場占有率は約70%という巨大メーカーであったが、戦後の1949年、「過度経済力集中排除法」の適用を受けて、両社に分割された。下郡酒造で出士しているビール瓶（第148図）

日本麦酒釀造 段左の2本)は、明治20年に設立された日本麦種 釀造において製造されたものである。この日本麦種 釀造は旧丸三麦酒が母体であり、明治20(1887) 年に設立された会社である。以降1933年に大日本

ジュース類 社である。ビールだけでなく、ジュース類も手がけており、出土した瓶はいずれも透明の瓶であることからジュース類が入っていたと考えられる。また、キンセンと陽刻されたサイダー瓶に四しては、明治10年頃に兵庫県の六甲山麓にあった金泉鉱泉という会社のことが、瓶の下に日本麦酒館と

キンセンも镌刻されている。これは、1925年に金泉鉱泉が日本麦酒鉱泉に合併された為、キンセンと社名を残しつつ日本麦酒鉱泉において製造されていた為である。その他、近世の遺物には汽車土瓶や個人医院の薬瓶、個人経営の会社の記念品として作られた湯呑等が出土しており、当時の下部地区の人々の生活の一端をうかがうことができる。



第150図 明治～昭和初期のビール・ジュース等
製造販売会社の変遷

参考文献

大分市教育委員会 2008『下部道跡群第76次調査』『下部道跡群Ⅵ』-大分市下部地区土地画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5-

大分市 1987『大分市史』下巻

第IV章 付 論

第1節 大分市下郡遺跡群第25次調査出土の動物遺体

西中川 駿幸・蓮沼 浩・藤原 達生・松元 光春

1 はじめに

大分県内の動物遺体の出土した縄文遺跡には、これまで河原田洞穴、大恩寺稲荷岩蔭、前高洞穴、粉洞穴、立石貝塚など9遺跡があり、特に粉洞穴、前高洞穴遺跡からは、モグラ、サル、ノウサギ、ムササビ、ネズミ、オオカミ、タヌキ、オオヤマネコ、アナグマ、テン、オゴジョ、イノシシ、シカ、カモシカの5目14種の出土が報告されている。また、大分市からは小池原貝塚、横尾貝塚の縄文遺跡からイヌ、タヌキ、イノシシ、シカ、クジラ、イルカなどが、弥生時代の下郡桑苗遺跡からは、西本（'09、'92）によりイヌ、イタチ、イノシシ、ブタ、シカの出土が報告されている。このブタについては渡来系ブタ説、イノシシの飼育説やニホンイノシシそのものなどの諸説があり、未だに論争されている。

下郡遺跡群は、大分市大字下郡にあり、第25次発掘調査は大分市教育委員会が下郡地区土地区画整理事業のために、平成2年5月から9月に発掘調査され、動物遺体は弥生時代前期末から中期のもので、発掘後方に持ち込まれたものである。ここでは特に哺乳類遺体について、その概要を報告する。なお、計測可能な骨については、Drieschの方法に従いノギスを用いて計測し、現生のものと比較検討した。また、今回検出されたイノシシ属の形態については金子浩昌先生の、DNA解析については小澤智生先生のご教示いただいた。ここではイノシシとして記述することにする。

2 グリッド別および動物別出土量

第25次調査出土の動物遺体は、哺乳類、鳥類、爬虫類および魚類で、同定された総重量は16370.1 gである。そのグリッド別、動物別出土量は表1に示した。上段は重量、下段は骨片数である。哺乳類が16334.6 g (597骨片)で、全体の99.7%を占め、次いで鳥類の25.8 g (10)、魚類の7.4 g (8)であり、爬虫類は2.3 g (1)と少ない。哺乳類はノウサギ、イヌ、テン、イタチ、イノシシ、シカの3目5種で、鳥類はカモ類、ツル類、爬虫類はスッポン、魚類はタイ類のものである。

まず、グリッド別に出土状況を見ると、11グリッドが5427.4 gで最も多く、次いで14グリッド2830.7 g、6グリッド1368.7 g、5グリッド1151.0 g、8グリッド948.8 gの順で、9、12、15グリッドは極めて少ない。次に動物別に出土状況を骨片数でみると、ノウサギは5、7、10グリッドから4点が検出され、イヌは1、6、14グリッドから4点、テンは6と11グリッドから各1点が、イタチは10グリッドから僅か1点の出土である。イノシシは全てのグリッドから検出され、特に11グリッドからの出土(156点)が多い。シカは3、9、12、15グリッドを除くグリッドから34点が検出されている。鳥類は1、6グリッドから10点、爬虫類は1グリッドから1点、魚類は2、4、7、8、10、11グリッドから8点が出土している。重量ではイノシシが15684.1 gで全体の95.8%を占め、次いでシカ(605.0 g)であり、他は量的に極めて少ない。

3 動物別出土遺体の概要

1) 哺乳類

動物別、骨格別出土量は、表2に示した。上段は重量、下段は骨片数を示す。

(1) ノウサギ (図版1の1～4参照)

ノウサギは5と10グリッドから左下顎骨各1点、7グリッドから左寛骨と左第三中手骨各1点出土している。下顎骨は2点共に下顎枝を欠損し、臼歯列長は16.06 mmと15.03 mmであり、また、寛骨の腸骨体の幅と径は1049×5.58 mmで、中手骨の最大長は44.91 mmであり、いずれも現生のノウサギより少し大きい。

(2) イヌ (図版Ⅰの5～8参照)

イヌは6グリッドから左側頭骨と左肋骨が、1グリッドから左中手骨、14グリッドから右脛骨が出土している。計測可能な脛骨の最大長は142.79 mm、中央の幅と径は9.58 × 9.46 mmであり、最大長から筆者らの方法で体高を推定すると41.36 cmであり、これは中型犬に属する。

(3) テン (図版Ⅰの9、10参照)

テンは6グリッドから右上顎骨、11グリッドから右下顎骨の2点が検出され、下顎骨の保存全長は60.14 mmで、第一後臼歯の歯冠長と幅は12.12 × 6.11 mmであり、これらの計測値は現生のテンよりも大きい。

(4) イタチ (図版Ⅰの11参照)

イタチは10グリッドから不完全な頭蓋骨1点の出土で、頬骨間幅は32.1 mmであり、現生のものより幾分か大きい。

(5) イノシシ (図版Ⅱの1～8、図版Ⅳの1～8参照)

イノシシは全てのグリッドから検出され、最も多い出土量であり、尾椎を除くすべての骨格が出土している。ここでは骨格別にその出土骨の概要を記述する。

① 頭蓋骨

頭蓋骨は1、2、4～8、10、11、14グリッドから検出され、左右の前頭骨、頭頂骨、後頭骨、側頭骨、頬骨、涙骨、上顎骨、口蓋骨、切歯骨などの骨片が多く(95点)、部分的に計測可能な6個体についてその概要を記述する。

No.1 (図版Ⅱの1、5参照)

14グリッドから出土し、鼻骨先端と頭頂骨の一部や切歯、犬歯、第一前臼歯は欠損し、特に第一後臼歯の磨耗が著しい5歳以上の成獣である。頭蓋骨の最大長は390.19 mm、基底長331.95 mm、頭蓋最大幅156.49 mm、前頭骨幅114.29 mm、口蓋幅68.96 mm、後頭骨高117.35 mm、後頭骨最大幅53.15 mmである。また、左第三後臼歯の歯冠長と幅は34.41 × 18.74 mmであり、大型の雄イノシシである。

No.2 (図版Ⅱの2、6参照)

出土グリッドが記載されていない資料で、鼻骨や切歯骨、後頭骨項稜の一部が欠損した標本であり、頬骨の張り出しなど他の個体と異なる形状をしている。しかし、第三後臼歯は萌出前の成長期の若い個体(1.5歳)で雄であり、また、骨の表面が粗く腫れぼったく骨軟症を思わせる資料である。正中前頭長152.97 mm、頭頂骨長56.76 mm、頭蓋最大幅139.98 mm、前頭骨幅99.70 mm、口蓋幅60.82 mmである。

No.3 (図版Ⅱの3、7参照)

11グリッドから検出され、頭蓋と上顎、口蓋部が分離して出土し、これらを繋ぎ合わせた標本であるので、少し歪になっている。鼻骨や左の上顎骨、涙骨、左右の頬骨側頭突起の欠損した資料で、第三後臼歯の萌出前の若い個体で雄である。正中前頭骨長140.80 mm、頭頂骨長52.06 mm、頭蓋最大幅130.76 mm、前頭骨幅91.47 mm、頭頂骨最小幅38.35 mm、口蓋幅60.09 mm、後頭高94.41 mm、後頭骨最大幅61.48 mmである。

No.4 (図版Ⅱの4、8参照)

8グリッドから検出され、前頭骨から切歯骨に至る顔面骨のみで鼻骨の先端は欠損した資料で、第三後臼歯の萌出前の若い雄である。前頭骨幅は81.78 mm、鼻骨基部の幅は37.00 mmで、口蓋幅59.04 mmである。

No.5 (図版Ⅳの1参照)

14グリッドから検出され、右前頭骨、頭頂骨、後頭骨、側頭骨の一部を有する資料で、冠状縫合、鱗状縫合、ラムダ縫合の明らかな若い雌雄不明の個体である。頭頂骨長は53.94 mm、頭頂骨最小幅30.90 mm、後頭骨高102.86 mm、後頭骨最大幅62.53 mmである。

No.6 (図版Ⅳの2参照)

出土地点は不明で、左前頭骨、頭頂骨、後頭骨および左側頭骨の一部を有する資料で、冠状縫合の明らかな雌雄不明の個体である。前頭骨長は151.48 mm、頭頂骨長53.08 mm、前頭骨幅94.99 mm、頭頂骨最小幅35.97 mmである。

② 下顎骨 (図版Ⅲの1～18 参照)

下顎骨は2、4～7、10、11 グリッドから左側10点、右側9点、左右対をなすもの4点が検出されている。片側のみの下顎骨は、切歯部、下顎枝の筋突起や関節突起が欠損し、臼歯部を有する下顎体のみからなるもの(図版Ⅲの4～18)、また、咬筋窩に孔をあけた下顎骨が3例みられる。臼歯を有する個体の年齢を林(77)の方法で査定すると、幼獣2例、7ヶ月未満3例、20ヶ月未満6例、32ヶ月未満5例、44ヶ月未満1例、55ヶ月以上2例である。左右対を成す下顎骨4体について、その概要を記す。

No.1 (図版Ⅲの1 参照)

11 グリッドから出土したほぼ完形骨であるが、切歯、犬歯は欠損し、左右第四前臼歯、左第一後臼歯、左右の第三後臼歯を有し、下顎枝に孔のある資料である。下顎全長は関節突起から281.59 mm、下顎角から262.39 mmで、下顎枝の高さ117.05 mm、第一後臼歯前縁における下顎体の高さと厚さは48.98 × 28.25 mmである。左右下顎幅は修復されているので正確ではないが、左右下顎最小幅40.21 mm、犬歯歯槽間幅60.65 mmで、左第三後臼歯の歯冠長と幅は35.58 × 12.65 mmである。犬歯窩の大きさからみて雄で、年齢は55ヶ月以上であると推定される。

No.2 (図版Ⅲの2 参照)

6 グリッドから出土した切歯部の一部欠損した資料で、第四前臼歯のある若い個体で雌である。保存全長225.27 mm、下顎枝の高さは112.12 mm、第一後臼歯前縁での下顎体の高さと厚さは37.97 × 19.85 mmで、左右下顎最小幅36.90 mm、犬歯歯槽間幅は41.81 mmである。

No.3 (図版Ⅲの3 参照)

2 グリッドから出土した切歯部の一部欠損した資料で、第二後臼歯が萌出していない若い個体で雌である。保存全長188.10 mmで、下顎枝の高さは88.34 mm、第一後臼歯前縁での下顎体の高さと厚さは31.81 × 18.51 mmで、左右下顎最小幅33.32 mm、犬歯歯槽間幅は35.49 mmである。

No.4 (図版なし)

7 グリッドから出土した両側の筋突起や関節突起、切歯部の欠損した資料で、No.3よりも若く7ヶ月未満の個体で雌である。左右下顎最小幅は31.29 mmで雄のものと思われる。

③ 胸骨 (図版Ⅳの8～34 参照)

頸椎は1、2、4～9、11、14 グリッドから、第一頸椎8点、第二頸椎3点、その他25点の計35点が検出され、少なくとも8個体分のものである。11 グリッドから出土した第一頸椎はほぼ完全で、最大長と幅は52.08 mmと84.49 mmであり、8例の第一頸椎背結節の高さは 14.03 ± 1.01 mmである。胸椎は2、4、6、7、13、14 グリッドから31点が検出され、すべて椎骨の骨端が欠如する6体分の資料である。腰椎は1、5、6、8、10、11、14 グリッドから24点が検出されているが、完形骨はなく、骨端の欠損する7体分の資料である。仙椎は2、4、6 グリッドから4点が出土しているが、第一仙椎と後位のものである。

肋骨は4、5、6、7、11、14 グリッドから左側33、右側48点の6体分が検出され、11、14 グリッドからの出土が多い(左側16、右側34)。胸骨は胸骨体、剣状突起など8点が出土している。

④ 前肢骨 (図版Ⅴの1～21、図版Ⅵの1～18 参照)

肩甲骨は1、2、5、6、7、8、11、14 グリッドから左側10、右側14点が検出され、計測可能な5グリッド出土の右肩甲骨の全長は221.03 mmで、14 グリッドの右肩甲骨は210.66 mm、左側は193.27 mmであり、また、6 グリッドの右肩甲骨は173.94 mmで短く、個体差のあることがわかる。肩甲骨の頸部の幅と径は、成獣で $27.17 \pm 1.85 \times 12.25 \pm 0.89$ mm (n=8)で、若い個体のそれらは $22.16 \pm 0.92 \times 10.67 \pm 0.79$ mm (n=6)であり、成獣のものは現生のものより大きい。

上腕骨は1、3、4、5、8、10、11、13、14 グリッドから左側9、右側17、合計26点が検出され、いずれも近位骨端縁の閉鎖はなく、右側の上腕骨の数から少なくとも17個体と推測される。14 グリッド出土のほぼ

完全な左上腕骨の最大長は、228.35 mmと227.55 mmであり、11 グリッド出土のそれは192.78 mmである。上腕骨骨体最小幅と径は $18.66 \pm 2.26 \times 24.76 \pm 3.16$ mm ($n = 10$) である。これらの計測値は現生のものより少し大きい。なお、滑車上孔のみられない個体が8、11 グリッドから各1点出土している。

桡骨は1、5、10、11、14 グリッドが左側6、右側7点が検出され、11 グリッドから出土した左桡骨は、遠位の骨端線が完全に閉鎖していない2個体があり、それらの最大長は166.26 mmと136.50 mmで、この差は雌雄差とみられる。また、出土した桡骨の近位端および中央の幅と径は、それぞれ $31.89 \pm 1.22 \times 21.57 \pm 1.22$ mm ($n = 8$)、 $20.10 \pm 2.16 \times 13.48 \pm 1.69$ mm ($n = 8$) であり、現生のものより大きい。

尺骨は1、2、5～7、10、11、14 グリッドから左側4、右側11点が検出され、肘頭骨端および遠位骨端の無い資料が殆どである。肘頭の最小径と幅は、 $29.69 \pm 2.27 \times 10.38 \pm 0.92$ mm ($n = 7$) であり、9個体の肘突起の位置での前後径は、 39.66 ± 4.27 mmで、個体差が大きい。また、6 グリッドからは幼獣の尺骨が出土している。

手根骨は、5、6、12 グリッドから左右第三手根骨、左第四手根骨、右中間手根骨、右桡側手根骨、左尺側手根骨の6点が検出され、5 グリッドの手根骨は同一個体のものである。

中手骨は4～8、11 グリッドから左右の第二～五中手骨10点が検出され、遠位端は殆ど欠損している。4個体の第三中手骨の近位端および中央の幅と径は、それぞれ $21.88 \pm 1.49 \times 17.61 \pm 1.31$ mm、 $13.87 \pm 1.57 \times 11.34 \pm 0.88$ mmである。また、第四中手骨の近位端、中央の幅と径は、それぞれ $18.30 \pm 1.40 \times 16.19 \pm 0.64$ mm、 $13.42 \pm 0.16 \times 11.34 \pm 0.38$ mmである。これらの計測値は現生のものより大きい。

指骨は5、6、11 グリッドから左右の基節骨2、右中節骨1、左末節骨2の5点が検出され、11 グリッド出土の左第四指基節骨と5 グリッドの左第三指末節骨は成獣のもので、その最大長は28.65 mm、29.68 mmである。

⑤ 後肢骨 (図版 VI の19～46 参照)

寛骨は4～8、10、11、14 グリッドから左側9、右側12点が検出され、若い個体のものも少数みられるが、14 グリッドから出土した成獣の右寛骨は、ほぼ完形骨で最大長256.20 mm、骨盤結合長75.94 mm、閉鎖孔の長径と短径は 41.53×33.67 mmである。また、6個体の腸骨体の幅と径は、 $24.86 \pm 3.16 \times 14.40 \pm 1.06$ mm、寛骨臼の長径は 15.95 ± 2.23 mmである。これらの計測値は現生のものより大きい。

大腿骨は1、5、7、8、10、11、14 グリッドから左側14、右側7点が検出され、殆どが骨端線の閉鎖していない個体である。11 グリッドから出土した左大腿骨はほぼ完形骨で、最大長229.54 mm、近位端、遠位端の幅と径は、それぞれ 63.05×37.61 mm、 52.36×60.60 mmである。また、3個体の大腿骨頭からの長さは、 232.32 ± 4.66 mmで、6個体の中央幅と径は、 $21.32 \pm 1.94 \times 25.64 \pm 2.92$ mmであり、いずれの計測値も現生のものより大きい。

脛骨は1、2、4、5、8、10、11、14 グリッドから左側11、右側11点が検出され、殆どが骨端線は閉鎖していない。11、14 グリッドから出土した右脛骨の最大長は、それぞれ219.23 mm、243.65 mmで、4個体の近位端の幅は 56.19 ± 3.39 mmであり、これらの数値は現生のものより大きい。

腓骨は2、4、11 グリッドから左側3、右側2点が検出され、完形骨はなく2個体の中央幅と径は 7.31×4.28 mmと 6.67×4.47 mmである。また、11 グリッドからは幼獣の腓骨1点が出土している。

足根骨は左右の距骨、踵骨、右第四中心足根骨など21点が検出されている。距骨は5、6、8、11 グリッドから左側1点、右側5点が検出され、うち2体はほぼ完全な状態で出土している。その最大長、幅と径はそれぞれ $26.65 \times 26.65 \times 26.24$ mm、 $27.39 \times 27.55 \times 27.47$ mmである。他の距骨は表面の磨耗が著しい。踵骨は1、4、7 グリッドから左側5、右側11点が出土し、近位端は殆どが欠如している。14 グリッドから出土した右踵骨は完形骨で、その最大長は100.70 mmで、近位端の幅と径は 21.77×23.03 mmである。6個体の踵骨最大幅は 22.97 ± 1.17 mmであり、現生のものより少し大きい。また、幼獣のものも1点検出されている。中心第四足根骨は、6 グリッドからほぼ完形形で1点が出土し、その幅と径は 20.74×25.5 mmである。

中足骨は2、5～8グリッドから左側3点、右側12点が検出され、3個体の第三中足骨はほぼ完全で、その最大長と遠位端の幅と径は 85.82 ± 0.51 mm、 $17.52 \pm 0.27 \times 18.36 \pm 0.48$ mmである。また、計測可能な6個体の近位端、中央の幅と径は、それぞれ $18.68 \pm 1.09 \times 23.84 \pm 1.46$ mm、 $13.65 \pm 1.04 \times 12.36 \pm 1.84$ mmであり、遠位端の幅と径は $17.52 \pm 0.27 \times 18.58 \pm 0.59$ mm ($n=3$) である。11グリッド出土の第四中足骨は完形骨で、最大長は93.99 mmであり、計測可能な4個体の近位端、中央の幅と径は、それぞれ $18.32 \pm 0.66 \times 26.13 \pm 1.07$ mm、 $14.34 \pm 0.25 \times 12.99 \pm 0.74$ mmである。これらの中足骨の計測値は現生のものより大きい。

趾骨は5～7、14グリッドから左右の基節骨4、左末節骨1の5点が検出されている。11、14グリッド出土の右第三、四趾基節骨は成獣のもので、その最大長は40.08 mm、39.74 mmであり、また、7グリッド出土の左第三趾末節骨の最大長は28.98 mmである。

以上、イノシシの各出土骨の概要を述べたが、下顎骨や上腕骨の数から少なくとも17体以上のものである。いずれの骨にも若い個体が多い中、成獣もみられ、量的には極めて少ないが、幼獣のものも検出されている。また、計測可能な骨については計測値を示したが、いずれの骨においても若い個体に現生のものより大きいことが示された。

(6) シカ (図版Ⅰの12～30 参照)

シカは2、4～8、10、11、13、14グリッドから頭蓋骨、角、下顎骨、遊離した臼歯、腰椎、左右上腕骨、左中手骨、左第二指骨、寛骨、脛骨、踵骨 中足骨など34点が出土している。6グリッドから出土した右前頭角は、角座を有し、その幅と径は 38.49×40.12 mmである。下顎骨は左側のみ4点の出土で、2グリッド出土の下顎骨は、第一、二後臼歯をもつ下顎体で、各後臼歯の歯冠長と幅はそれぞれ 16.88×8.53 mm、 18.38×8.70 mmである。上腕骨は左右各1点が出土しており、11グリッドの上腕骨の最小幅と径は 17.76×23.29 mmである。13グリッドから出土した右脛骨は、中央部から斜めに切断されており、遠位端の幅と径は 36.25×27.04 mmである。距骨は2点が検出され、5、8グリッド出土の左右の距骨の幅と径は、 36.26×23.64 mm、 37.79×24.15 mmである。これらの計測値は現生のキュウシュウジカのものとはほぼ同じ大きさである。

2) 鳥 類 (図版Ⅰの32～41 参照)

鳥類はカモ類2点とツル類8点が検出されている。カモ類は1グリッドから右肩甲骨、6グリッドから右上腕骨が出土し、上腕骨の中央幅と径は 8.40×7.41 mmである。ツル類は1グリッドから頸椎2、胸椎2、複合仙骨1、左肋骨1、右肩甲骨1、左趾骨1の計8点が出土し、同一個体のものと思われる。前位の頸椎2個の椎体長は、33.42 mmと35.08 mmでナベツルのものと思われる。

3) 爬虫類 (図版Ⅰの31 参照)

爬虫類は1グリッドからスッポンの甲羅と思われるもの1点の出土で、その大きさは幅 46.00×25.75 mmである。

4) 魚 類 (図版Ⅰの42-48 参照)

魚類はタイ類のもので、4グリッドから右前上顎骨、左歯骨、椎骨、7グリッドから左前上顎骨、8グリッドから左前上顎骨、椎骨など合計8点が出土している。

4 考察

大分市内の遺跡からは、これまで小池原貝塚、横尾貝塚の縄文遺跡からイヌ、タヌキ、イノシシ、シカ、クジラ、イルカなどが、また、弥生時代の下部桑苗遺跡からは、イヌ、イタチ、イノシシ、ブタ、シカの出土が報告されている。今回の下部遺跡群第25次調査で出土した哺乳類遺体は、ノウサギ、イヌ、テン、イタチ、イノシシ、シカのものである。

まず、動物別に出土状況を見ると、イノシシが最も多く全体の92.5%（骨片数）を占め、次いでシカの5.7%で、他の動物は極めて少ない出土である。九州の遺跡では6対4の割合でシカよりもイノシシが多い傾向にあるが、本遺跡ではイノシシが極端に多いという特色があり、この遺跡を遺した人々がイノシシを好んで食していたことがうかがえられ興味深い。

西本（'89、'92）は大分県教育委員会が発掘した下部桑苗遺跡の資料の中にブタの骨を見出し、弥生時代に家畜ブタがいたことを報告し、最近では縄文時代にもブタの飼育が存在したことを提唱している。その裏付けとして頭蓋骨の形態学的特徴について論じている。筆者らは福岡、大分、宮崎、鹿児島および奄美産の現生のイノシシや国立科学博物館に収蔵されている日本各地の現生のイノシシの頭蓋骨を調査し、形状や大きさに地域差や個体差のあることを報告している。しかし、頭蓋骨の計測値を用いた主成分分析では、大きさを表す第一主成分、形状を示す第二主成分共に大差はなく、日本本土の資料はすべてニホンイノシシの範疇にあり、奄美産のものは明らかに大きき形状共に、ニホンイノシシから分離され、リュウキュウイノシシの系統であることを確認した。また、成獣雄の頭蓋骨の最大長は、福岡産が最も大きく350.06 mm（n=6）、次いで大分産336.81 mm（n=5）、鹿児島産321.95 mm（n=4）順であった。九州で最も多くのイノシシが出土した熊本県黒橋貝塚の成獣の頭蓋骨最大長は393.99 mm（雄n=3）で、下部遺跡群第25次の頭蓋骨は黒橋とほぼ同じ390.19 mm（雄n=1）であったことから、当時のイノシシは現生のものよりはるかに大きかったことが示唆された。肉眼的観察では、現生のものと比較してNo.2の頭蓋骨のように個体によっては形状に幾分の違いを認めるものもあったが、現生の計測値に黒橋貝塚、本遺跡の計測値を加えて主成分分析すると、大きさを表す第一主成分では差がみられ、形状を表す第二主成分では差はなく、ニホンイノシシの範疇にあることが判明した。また、西本（'93）は第一頸椎の背結節の高さで家畜ブタとイノシシを区分できると述べているが、背結節に起始する小背頭直筋は雄で発達し、突起状の形状は老齢のものに多くみられることから、雌や若獣の多い遺跡では判別し難いと思われる。また、四肢骨の形態について、現生のイノシシと比較検討したが、大きさに差はあること以外に肉眼的な差異を見出すことはできなかった。これらのことから本遺跡の資料は、雌雄差とは別に当時この地域に生息していたニホンイノシシの集団的特徴とも考えられ、また、金子は全国各地の弥生時代の出土資料からみて、本遺跡の資料はニホンイノシシの弥生的特徴であろうとコメントしている。

一方、遺跡出土骨のミトコンドリアDNAの解析を行っている小澤（'00）は、佐賀県某畑遺跡、大分県下部桑苗遺跡、下部遺跡群第25次、愛知県朝日貝塚のイノシシの資料を分析し、いずれもニホンイノシシのものであったことを報告している（別項参照）。また、渡部ら（'03）は前述の朝日遺跡、下部桑苗遺跡、愛媛県阿方遺跡、宮前川遺跡、長崎県宮下遺跡などの資料を用い、ミトコンドリアDNA遺伝子解析を行い、朝日遺跡、下部桑苗遺跡の資料はニホンイノシシであることを報告している。これらの結果は西本が下部桑苗遺跡の資料を東アジア系の家畜ブタと同定した結果と異なっていることになる。

野澤ら（'81）は、家畜とは「その生殖がヒトの管理のもとにある動物である」と定義している。野生のイノシシを飼育していた可能性は考えられるが、イノシシを飼育しても生物学的にはブタではなくイノシシである。現在東南アジアで見られるようなブタの飼育形態は何千年の時を経て飼いに馴らされた結果であり、このような飼育形態が縄文、弥生時代に出来たかは疑問である。例えばこの時期に渡来系の家畜ブタが存在したとしても、発情期になると頑丈な柵や囲いが無い限り、野生のイノシシとの交雑が起り、また、稲作の生産だけでは十分な餌がなく、成育するまで飼育することは不可能ではなかっただろうか。弥生時代の家畜ブタの存在を完全に否定はできないが、今後、出土資料を蓄積し、形態学的な精査とDNA解析を進めると共に、考古学的調査で飼育の場所となる柵など

の遺構が発見されればイノシシの飼育や家畜ブタの存在は同意されるであろう。

一方、佐賀県菜畑遺跡や岡山県南方遺跡では、農耕儀礼に用いられたとされているイノシシの下顎骨に孔があけられた資料が報告されており、本遺跡からも成獣の下顎骨3例にみられた。大分では狩猟の神様である大野郡野津町に熊野神社の磨崖にシシ権現洞穴があり、数百体のイノシシ（今回現生資料として用いた）やシカの頭蓋が奉納されており、ここでは現在も豊饒の祈願など狩猟儀礼などが行われている。しかし、近世以降の資料が多いために下顎骨に孔があいたものはない。本遺跡の資料も菜畑遺跡や南方遺跡の資料と同様に豊饒を祈る祭祀に使われたものであろう。

本遺跡からはイノシシの他ノウサギ、テン、イタチが出土しているが、極めて少量のためその用途はわからないが、シカと共に食料として利用されたのであろう。また、本遺跡のイヌは推定体高41.36 cmで、現生の柴イヌより大きく中型犬に属し、当時は番犬や狩猟の伴侶として飼われていたことがうかがえる。なお、鳥類はカモ類、ツル類で、ツルの出土は珍しく、恐らくナベツルのものであろう。爬虫類はスッポン、魚類はタイ類のものであり、いずれも少量であるが食料とされたものであろう。

5 まとめ

大分市下郡遺跡群第25次調査（弥生時代前期末から中期）の動物遺体、特に哺乳類について調査したので、その概要を報告する。

- 1) 下郡遺跡群第25次調査区から出土した動物遺体は、哺乳類（16334.6 g）、鳥類（25.8 g）、爬虫類（2.3 g）および魚類（7.4 g）で、動物種が同定された総出土量は16370.1 g（616 骨片）である。
- 2) 哺乳類遺体はノウサギ、イヌ、テン、イタチ、イノシシおよびシカの骨片で、鳥類はカモ類、ツル類、爬虫類は陸カメ、魚類はタイ類のものである。イノシシが552 骨片（15684.1 g）で最も多く、次いでシカ34点（605.0 g）、ノウサギ4点、イヌ4点、テン2点、イタチ1点の出土である。鳥類はカモ類2点、ツル類6点、爬虫類はスッポン1点、魚類はタイ類の8点の出土である。
- 3) イノシシの出土量は全体の92.5%（骨片数）を占め、尾椎を除く全ての骨格が出土している。長骨は骨端線の閉鎖していない1～2歳の若い個体が多い中で、4歳以上や幼獣もみられる。頭蓋骨片は左右併せて95点が発出され、下顎骨は左右で23点、四肢骨では上腕骨、肩甲骨、大腿骨、脛骨などが多く、上腕骨の左側の数から少なくとも17個体以上のものと推測される。各骨の形態は現生のイノシシによく似ており、頭蓋骨の計測値を用いた主成分分析でも形状はイノシシの範疇にあることが示唆された。
- 4) イヌは脛骨の最大長から筆者らの方法で体高を推定すると41.36 cmで、これは中型犬に属するものであり、当時の人々によって番犬や狩猟の伴侶としてかわれたものであろう。

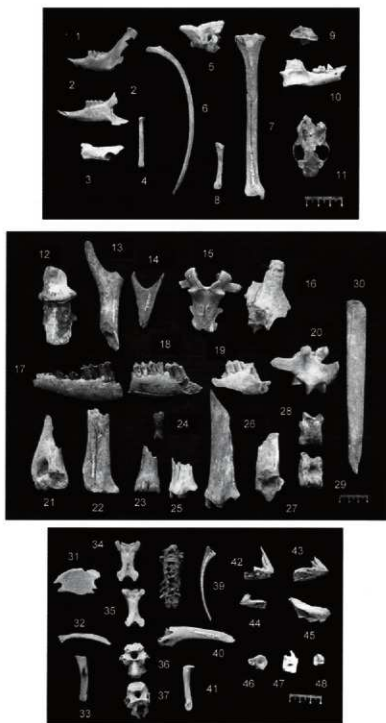
以上、本遺跡を遺した人々は、農耕を行いながらイノシシやシカを狩猟し、動物蛋白源として食していたことが想像される。なお、家畜ブタの存在については、今後、更なる検討が必要であろう。

謝辞：本遺跡出土のイノシシの一部の資料について、形態学的な面から元早稲田大学金子浩昌先生に同定を、DNA解析については名古屋大学名誉教授の小澤智生先生に調査を依頼し、両先生から貴重なご意見、ご指導ならびにコメントをいただいた。ここに厚く御礼を申し上げます。また、本遺跡出土資料につきましては、長年お預かりしたままで報告しなかったことに対し、大分市教育委員会へ心から深く詫言申し上げます。

（*鹿児島大学名誉教授・鹿児島大学獣医学部解剖学教室）

参考文献

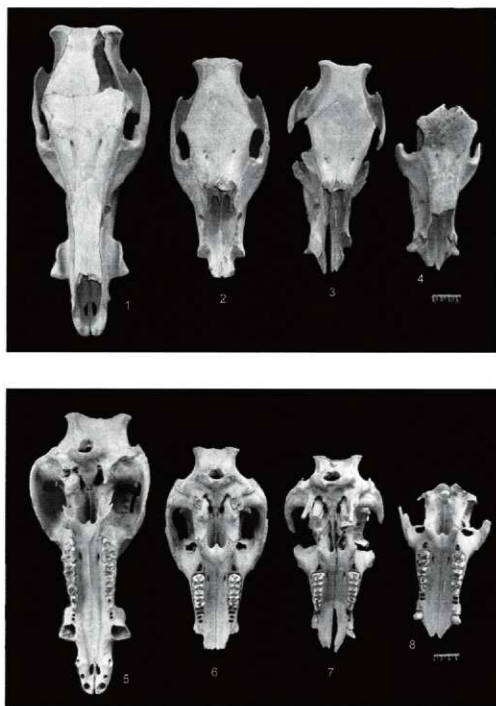
- 姉崎智子 2003「先史時代におけるイノシシ飼育の検討」『動物考古学 20』23-39
- Driesch, A. 1976「A guide to the measurement of animal bones archaeological sites.」Pub. Peabody Museum Harvard Univ., USA. pp.1-137
- 江口保暢 1998『動物に観る人の歴史』pp.174-193 日本図書刊行会
- 林 良博他 1977「日本産イノシシの歯牙による年齢と性の判定」『日獣誌 39』165-174
- 金子浩昌 2004「金子浩昌著作目録 2」pp.32-50 金子浩昌著作目録を刊行する会
- 甲元真之編 1999『環東中国海沿岸地域の先史文化 2』3-45
- 熊本県教育委員会 1998『黒橋貝塚』熊本県文化財調査報告 166 263-275
- 松井 章他 2003「動物考古学的方法による日本および周辺地域における古代家畜史の研究」『平成 12 年度～平成 14 年度科学研究費補助金（基盤 B）研究成果報告書』pp.1-14
- 西中川駿他 1999「古代遺跡出土骨からみたわが国のイノシシとブタの起源ならびに飼育に関する研究」『文部省科学研究費補助金（基礎研究・B2）研究成果報告書』pp.1-113
- 西中川駿他 2004「九州の縄文遺跡出土の哺乳類遺体」『鹿児島考古 38』53-64
- 西中川駿他 2008「イヌの骨計測値から骨長ならびに体高の推定法」『動物考古学 25』1-11
- 西本豊弘 1989「弥生時代のブタ」『季刊考古学 28』91-92
- 西本豊弘 1991「弥生時代のブタについて」『国立歴史民俗博物館研究報告書 36』175-194
- 西本豊弘 1993「弥生時代のブタの形質について」『国立歴史民俗博物館研究報告書 50』49-69
- 西本豊弘編 2008『人と動物の日本史 1』pp.215-225 吉川弘文館
- 野澤 謙・西田隆雄 1981『家畜と人間』pp.1-67, 239-268 出光書店
- 大分県教育委員会 1989『下部桑苗遺跡』大分県文化財調査報告書 第 80 輯 48-61
- 大分県教育委員会 1992『下部桑苗遺跡Ⅱ』大分県文化財調査報告書 第 88 輯 92-110
- 大分市教育委員会 1991『下部遺跡群 大分市下部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報 2』pp.61
- 大分市教育委員会 2005『下部遺跡群Ⅲ 大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～第 61 集』1-138
- 扇崎 由・安川 満 1995「岡山市南方（済生会）遺跡のイノシシ類下顎骨配列」『動物考古学 5』69-73
- 小澤智生 2000「縄文・弥生時代に豚はかわれていたか？」『季刊考古学 73』17-22
- 芝田清吾 1969『日本古代家畜史』pp.100-293 学術出版会
- 渡部琢磨他 2003「弥生時代の遺跡から出土したイノシシの遺伝的解析」『動物考古学 20』1-14
- 山崎京美 1998「遺跡出土の動物遺存体に関する基礎的研究」『平成 7 年度～8 年度科学研究補助金 研究成果報告書』pp.185-211
- 在来家畜研究会編 2009『アジアの在来家畜一家畜の起源と系統史一』pp.215-251 名古屋大学出版会



図版 I

1-4:ノウサギ 5-8:イヌ 9, 10:テン 11:イタチ 12-30:シカ 31:スッポン 32, 33:カモ 34-41:
ツル類 42-48:タイ類

1, 2. 左下顎骨 3. 左寛骨 4. 左第三中手骨 5. 左側頭骨 6. 左肋骨 7. 右脛骨 8. 左第三中手骨 9. 右上顎骨 10. 右
下顎骨 11. 頭蓋骨 12. 右前頭(角座) 13. 右角(第三枝) 14. 左角(第四枝) 15. 後頭骨 16. 右前頭骨 17. 左下顎骨
18. 左下顎骨 19. 左下顎骨 20. 腰椎 21. 左上腕骨 22. 右上腕骨 23. 左中手骨 24. 左第三指中節骨 25. 左脛骨 26. 右脛
骨 27. 左踵骨 28. 左距骨 29. 右距骨 30. 右中足骨 31. 腹甲 32. 右肩甲骨 33. 右上腕骨 34. 35. 頸椎 36. 37. 胸椎
38. 複合仙骨 39. 左肋骨 40. 右肩甲骨 41. 右趾骨 42. 43. 左前上顎骨 44. 右前上顎骨 45. 右歯骨 46. 48. 椎骨

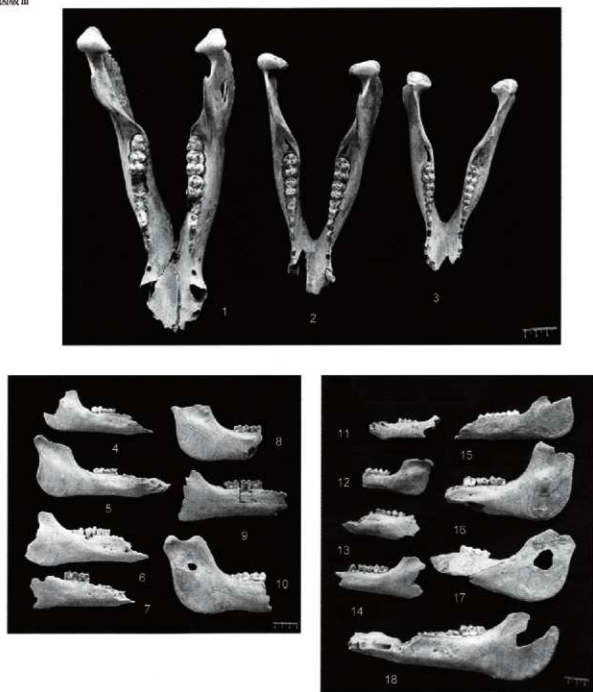


図版 II

イノシシ：若獣、幼獣別のみ記載、記載のないものは成獣のもの（以下同じ）

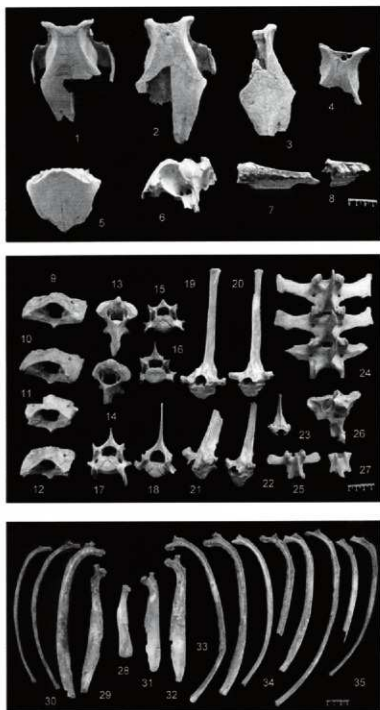
1－4：頭蓋骨背側面（左から No.1～No.4 の頭蓋骨） 5－8：同一固体の腹側面

図版Ⅲ



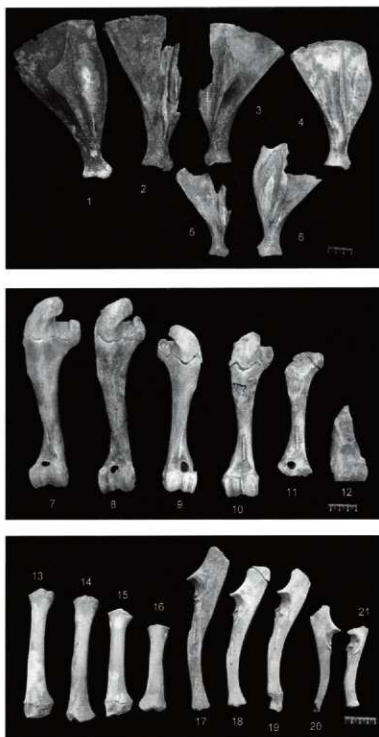
図版Ⅲ

イノシシ: 1-3, 下顎骨背側面(左から No.1 ~ No.3 の下顎骨) 4-10, 右側下顎骨(若獣から成獣) 11-18, 右側下顎骨(若獣から成獣)



図版IV

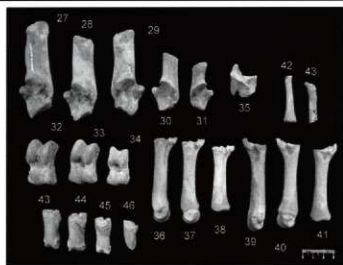
イノシシ：1-6. 頭蓋骨片 7. 8. 右上顎骨片 9-12. 第一頸椎 13. 14. 第二頸椎 15-18. 第四～七頸椎 19-22. 前位の胸椎 23. 後位の胸椎 24. 上から第三～第五腰椎 25. 腰椎 26. 27. 仙骨 28. 左第一肋骨 29. 30. 左第三～後位の肋骨 31. 32. 左第二. 三肋骨 33. 34. 35. 右中位から後位の肋骨



図版 V

イノシシ：1. 2. 右肩甲骨 3. 左肩甲骨 4. 右肩甲骨（若獣）5. 右肩甲骨（幼獣）6. 左肩甲骨（若獣）7. 8. 右上腕骨 9. 10. 左上腕骨（若獣、10. 滑車上孔なし）11. 右上腕骨（幼獣）12. 右上腕骨（滑車上孔なし）13. 14. 左橈骨 15. 16. 左橈骨（若獣）17. 18. 19. 左尺骨 20. 21. 右、左尺骨（若獣、幼獣）

図版VI



図版VI

イノシシ：1. 右機側手根骨 2. 右中間手根骨 3. 右尺側手根骨 4. 左第四手根骨 5. 6. 左第三手根骨 7. 8. 左第三中手骨 9. 左第四中手骨 10. 右第四中手骨 11. 左第三中手骨 12. 左第二中手骨 13. 右第五中手骨 14. 左第四指基節骨 15. 左第三指基節骨 16. 右第三指中節骨 17. 18. 第三、四指末節骨 19. 右寛骨 20. 右寛骨 21. 22. 左右大腿骨 23. 右大腿骨 (若獣) 24. 25. 右脛骨 26. 右脛骨 (若獣) 27. 右踵骨 28. 29. 右左踵骨 (若獣) 30. 31. 右左踵骨 (幼獣) 32. 33. 右距骨 34. 右距骨 (若獣) 35. 右中心第四足根骨 36. 37. 右第三中足骨 38. 右第三中足骨 (若獣) 39. 40. 右第四中足骨 41. 左第四中足骨 (若獣) 42. 左第二中足骨 (若獣) 43. 右第四中足骨 (若獣)

第2節 下郡桑苗遺跡産イノシシの古代DNA解析

サイバー大学世界遺産学部教授 小澤智生（おざわ・ともお）

西本豊弘（1991、1993）は弥生時代に家畜化された豚、いわゆる“弥生ブタ”が大陸から持ち込まれていたと言う学説を展開した。弥生豚が水田稲作技術とともに大陸から移入された豚であるなら、大陸系とりわけ中国系の豚の遺伝的特性を有している可能性が考えられる。

小澤（2000）は弥生時代の遺跡から産するイノシシ骨が大陸から持ち込まれた家畜ブタであるかを検証するため、弥生遺跡産イノシシの古代DNA解析ならびに形態学的研究を行なった。研究試料としては、古代豚が最初に認定された弥生時代中期の大分県下郡桑苗遺跡（3試料）、縄文時代晩期一弥生時代前期の佐賀県某畑遺跡（4試料）、愛知県朝日貝塚（5試料）から出土した典型的な古代豚とされた計12試料を選び、これらの試料から古代DNAの抽出を行った。次に抽出された古代DNAを鋳型としてミトコンドリアDNAのD-loop領域の一部255塩基対をPCRで増幅し、増幅物をクローニングし、その塩基配列を決定した。古代豚とされる試料の塩基配列をアジア・日本のイノシシおよび大陸系の豚の配列と比較を行ないその起源を考察した。

D-loop領域は、ミトコンドリアDNAの転写の開始点を含む遺伝子をコードしていない1055塩基対からなる領域で、分子進化速度が速いため人間間の系統関係や動物の品種間の系統関係を調べたりすることに利用されてきている。

塩基配列を決定したD-loop領域255塩基対（最初の塩基から数えて356番目から611番目の座位）のうち、変異が多く見られる8つの座位（387、390、403、452、474、501、506および575座位）の塩基を取り出し、塩基の配列の組み合わせによって特徴付けられるいくつかの遺伝子型（ハプロタイプと呼ばれる）を基に系統の解析を行なった。中国の在来豚の多くの品種は8つの座位はそれぞれATACCATGであり、同じ組み合わせを持つ野生のミナミシナイノシシがこれらの品種の原種であったことが判明した。ニホンイノシシの集団にはいくつかのハプロタイプが認められるが、その多くはATATCGTGの組み合わせからなっている。中国や韓国の大陸系の種とニホンイノシシでは6番目（501番目の座位）が大陸系ではアデニン（A）であるのに対し、ニホンイノシシではほとんどがグアニン（G）であることによって容易に区別できる。古代豚の試料の分析結果は、12試料中の11試料の配列はニホンイノシシ集団に最も普通に認められる配列であり、残りの1試料の配列はニホンイノシシ集団と東南アジアの一部の豚に認められる配列であることを確認した。この事実からいわゆる弥生豚は遺伝学的にニホンイノシシそのものであり、大陸から日本に移入された豚ではないことが判明した。

その後、Morii et al.（2002）、渡部琢磨ほか（2003）は、遺跡数・分析試料を増やし弥生遺跡産のイノシシの古代DNA解析を行ない系統について考察したが、下郡桑苗遺跡産のイノシシを含め大部分の遺跡の試料はニホンイノシシであることが明らかにされている。

西本豊弘 1991「弥生時代のブタについて」『国立歴史民俗博物館研究報告』36,175-189

西本豊弘 1993「弥生時代のブタの形質について」『国立歴史民俗博物館研究報告』50,49-63

小澤智生 2000「縄文・弥生時代に豚は飼われていたか？」『季刊考古学』73,17-22

Morii Y, Ishiguro N, Watabe T, Nakano N, Hongo H, Matsui A, Nishimoto T. 2002「Ancient DNA reveals genetic lineage of *Sus scrofa* among archaeological sites in Japan」*Anthropological Science*, 110 (3) 313-328

渡部琢磨・石黒直隆・森井泰子・中野益男 松井章・本郷一美・西本豊弘 2003「弥生時代の遺跡から出土したイノシシの遺伝的解析—ancient DNA解析に基づく考察—」『動物考古学』20 1-14.

第3節 弥生時代竪穴住居跡の集成

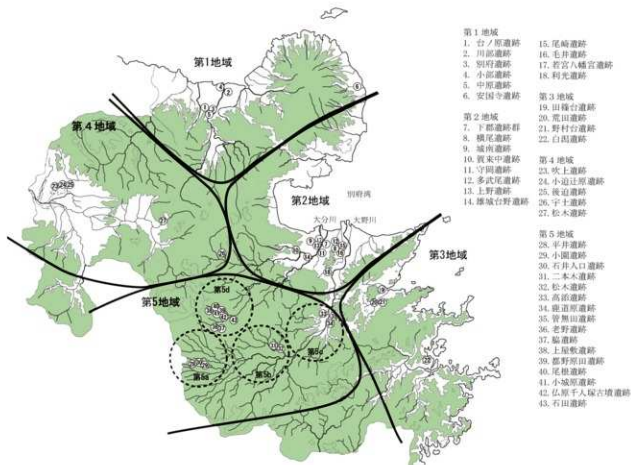
榊田 智美

(1) はじめに

九州島の東北部に位置する大分県は山地が多く、県内を中央構造線の延長と考えられる3本の構造線が走り、大規模な平野は存在しない。このように複雑な地形や自然環境は人々の生活環境や気候に大きな差異を生じさせ多様な地域性を示している。こうした地域特性によって県内を北部の周防灘周辺、中部の別府湾沿岸周辺、北西部の筑後川上流域、南西部の大分川上流域・大野川中、上流域、南部の豊後水道沿岸部の5つの地域^(註1)(第151図)に分けることができる。本項ではこの5地域ごとの弥生時代の主な竪穴住居跡を抽出し、平面形を主にして弥生時代前期、中期、後期、終末から古墳時代初頭までの小画期ごとに表にまとめた。これをもとに、弥生時代竪穴住居跡について平面プランの比較検討、および変遷を追いながら他地域との関連状況等も併せて検討する。

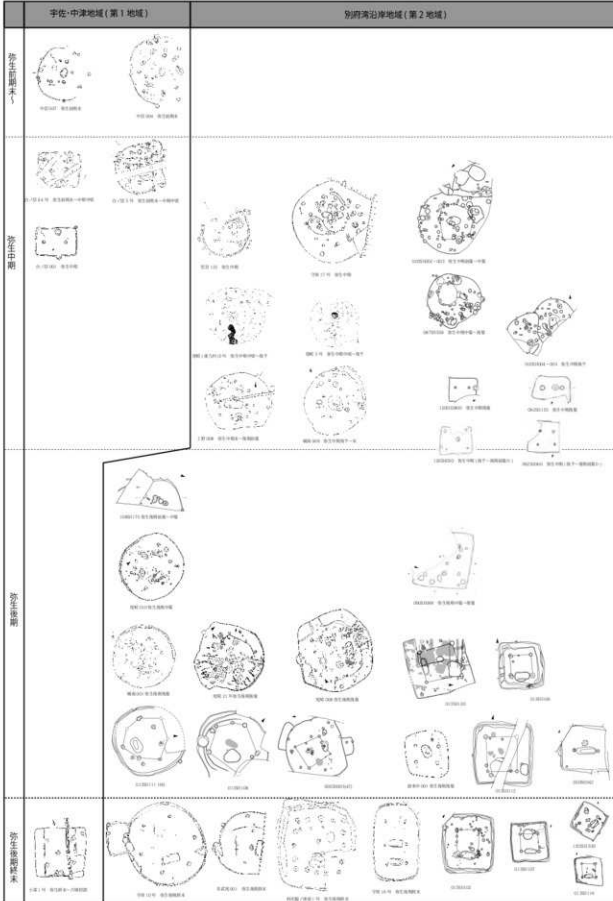
(2) 各地域別竪穴住居跡の様相

弥生時代の大分県内は先にもふれたように自然環境やそれに伴う生活環境により5つの地域に大きく区分できる。その中で土器形態はもちろんのこと、住居形態においても地域差が生じている。県内西部にあたる日田・玖珠地域(第4地域)、県北部にあたる中津・宇佐地域(第1地域)等は北部九州からの弥生文化の波及に伴い変遷していく。また、大分川・大野川下流域(第2地域)と第5c地域は弥生時代後期以降の変遷に大きな特徴が認められる地域であり、その変遷は畿内や瀬戸内地方と類似する。第3地域はこれまで弥生時代の大きな報告がなされていなかった地域であるが、近年荒田遺跡や田篠遺跡において少例ではあるが第2地域の影響もしくは瀬戸内地方

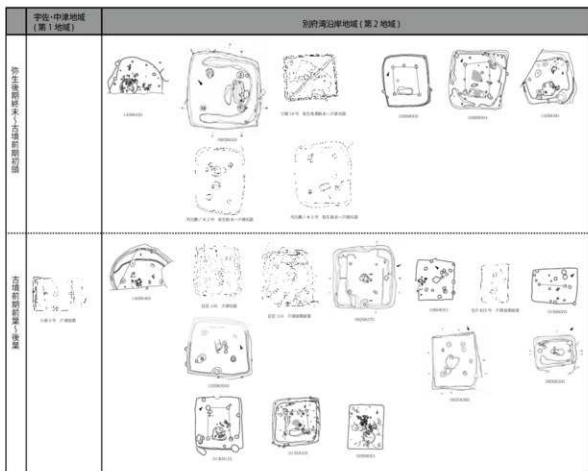


第151図 弥生時代地域別遺跡分布図

註1 坪根伸也 2009「大分県における弥生時代後期の社会変化」『第58回埋蔵文化財研究集会 弥生時代後期の社会変化』埋蔵文化財研究会 第58回埋蔵文化財研究集会実行委員会



第 152 図 第 1・2 地域弥生時代時期別住居跡変遷図①

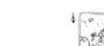


第153図 第1・2地域弥生時代時期別住居跡変遷図②

の影響を少なからず受けている様相が明らかにされつつある。また大野川上・中流域（第5a・b・d）は、これまでのどの地域とも様相を異にする地域である。弥生時代前期に関する住居跡の事例は未発見であり、現状では、弥生時代中期前葉を上限とするようであるが、当初から方形住居を採用し、一度も円形住居を造らない地域である。このように、独特の変遷を遂げていく各地域の住居形態について、5地域それぞれの代表的な住居プランを時代別にまとめ表にしたのが第152～157図である。

第1地域（宇佐・中津周辺）

第1地域は、中津から宇佐にかけての周防灘沿岸に面する地域であり、「瀬戸内型」と呼ばれる気候帯に属する。北部九州と隣接し、本州西部とも相対する地域である。その為、福岡・山口両県の影響を早くから受けている。弥生時代前期の住居跡は見つかっておらず、弥生時代中期になってから住居形態は明らかになってくる。宇佐市台ノ原遺跡、中原遺跡、東上田遺跡等に該当する遺構が認められる。その平面プランは円形が主体である。その後弥生時代後期中頃から終末になると、宇佐市別府遺跡、上ノ原遺跡、小部遺跡等で住居跡が多数検出されている。その住居形態は全て方形であり弥生時代中期の様相とは全く異なる。福岡県側の行橋市下稗田遺跡（弥生時代前期末～中期）は163軒の竪穴住居跡が確認されているが、そのほとんどが円形である。ところが弥生時代後期～古墳時代前期初頭になると同遺跡内では方形の住居形態が主体となる。さらに、北九州市京都郡苅田町の葛川遺跡でも同様の結果が示されている。このように、第1地域における住居形態は、北部九州の変遷と同様、弥生時代前期が円形あるいは方形であり、中期は円形主体となる。そして後期以降になると方形に変化していくといった様相である。

	臼杵・佐伯地域 (第3地域)	日田・玖珠地域 (第4地域)
弥生前期末		
弥生中期	 弥生11号 弥生中期前半	 弥生11号 弥生中期前半  弥生12号 弥生中期前半  弥生13号 弥生中期前半
弥生後期前半・中葉	 弥生14号 弥生後期前半  弥生15号 弥生後期前半  弥生16号 弥生後期前半  弥生17号 弥生後期前半  弥生18号 弥生後期前半  弥生19号 弥生後期前半  弥生20号 弥生後期前半  弥生21号 弥生後期前半	 弥生22号 弥生後期前半  弥生23号 弥生後期前半  弥生24号 弥生後期前半  弥生25号 弥生後期前半  弥生26号 弥生後期前半  弥生27号 弥生後期前半  弥生28号 弥生後期前半  弥生29号 弥生後期前半
弥生後期後半	 弥生30号 弥生後期後半	 弥生31号 弥生後期後半  弥生32号 弥生後期後半
古墳前期切頭・前期	 弥生33号 弥生後期後半	 弥生34号 弥生後期後半  弥生35号 弥生後期後半

第154图 第3・4地域弥生時代時期別住居跡変遷図

第2地域（東国東半島から大分市域）

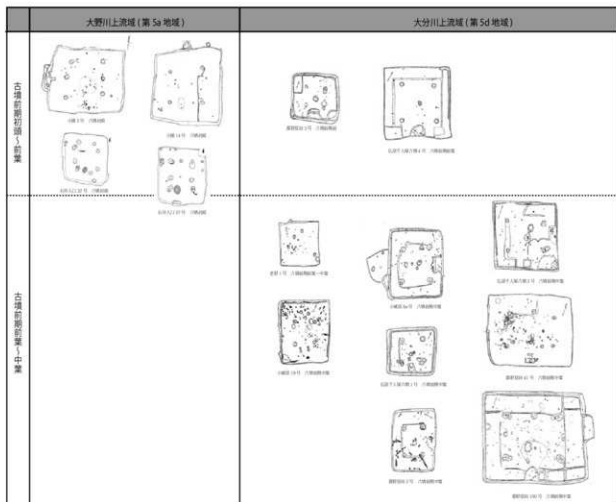
この地域は、東国東から大分市佐賀岡町までとその周辺を含む一帯で、豊予海峡を挟んで愛媛県と対峙する地域である。本遺跡群もこの地域に属する。弥生時代の調査例が年々増加していることもあり、大分市守岡遺跡をはじめ、尾崎遺跡、多武尾遺跡、下部遺跡群、城南遺跡、毛井B遺跡等多数の報告がなされている。それらを総合すると、弥生時代前期には大型の円形住居が主体であり、中には径8mを超えるような大型の円形住居も認められる（第152図）。弥生時代中期に入り円形に混じり方形が認められるようになる。さらに弥生時代後期に入ると瀬戸内無田遺跡・同荒田遺跡にも同様の遺構が認められる。弥生時代後期後半には方形、長方形、多角形、隅丸方形等に混じって円形プランの住居が混在するが、弥生時代後期終末には方形あるいは長方形へと移り変わっていく。円形住居が弥生時代後期の後半まで残っていることがこの地域の特徴である。下部遺跡群では弥生時代前期の遺構は未検出であるものの、弥生時代中期前半から中頃にかけは円形住居跡（第3次調査）が検出されている。また、方形の遺構は第92次・120次・126次調査からも検出されており、他の市内の遺跡も同様の様相を示している。弥生時代後期から終末、さらに古墳時代初期にかけては下部遺跡群の盛行時期であり、広範囲に集落が点在していたと推定される。住居形態は中期と変わらず、円形が混在しておりそれは弥生時代後期終末に入っても認められる。近年調査中の市内羽田遺跡において、先にふれたような事例（円形→方形）が多く検出されており注目されることである。屋内施設にはが跡のほかには南側主柱穴間に土坑を配しているものが大多数を占める。こうした特徴は本遺跡群のみならず、第2地域全体を通じ認められるものである。

第3地域（佐賀岡半島南側から佐伯市までの海岸部）

第3地域は、豊後水道に面した臼杵から佐伯の海岸線をさす。第2地域と同様、豊後水道を挟んで愛媛県と対峙している地域でもある。また、臼杵一八代構造線が走り、海岸部ではあるものの全体として山地が多く、平野部が乏しい地域である。調査事例は乏しいものの、弥生時代中期の遺跡が佐伯市白濁遺跡で検出されており、また弥生時代後期になると臼杵市田篠台遺跡、荒田遺跡、野村台遺跡等の事例が報告されている。中でも荒田遺跡では大型の多角形プランをもつ堅穴住居が同心円弧状に配置されており他地域には見られない様相が認められる。また、田篠台遺跡4号住居は同位置において3度の建替えが行われており、切り合い関係から、最初期の住居は円形を呈し、次に方形、さらにまた円形へと変化しており、プラン内には主柱穴間に土坑も配置される。この後、弥生時代後期終末に入ると荒田遺跡は終息に向かい、臼杵川を挟んで対岸の台地上に環溝をもつ集落（野村台遺跡）が形成される。以上のことから、第3地域は大野川中流域並びに大分平野部の影響を受けたものと推測される。いずれの遺跡も台地上に展開するものであり、低地集落は現段階では発見されていない。今後の調査に期待したい地域である。

第4地域（日田・玖珠地域）

第4地域は、県内でも内陸部に当たる地域であり、北西は福岡県に、南部は一部熊本県に接する山野に囲まれた盆地地帯である。生活環境や気候が他地域とはかなり違う地域でもあり、豊前・肥後地域からの影響を受けやすい地域である。この地域の弥生時代前期後半から後期終末にかけての代表的な遺跡に、日田市の吹上原台地上に位置する吹上遺跡が上げられる。拠点型の大集落遺跡と考えられている。さらに盆地を挟んで1.5km北東には後迫遺跡が所在する。住居プランは円形が主であるが、弥生時代後期に入るとわずかな例を除いて、方形の住居形態が変わっていく。大型の方形ないしは長方形の住居跡も確認されている。古墳時代に入ると、他地域と同様に規模が縮小される。一般的に弥生時代の住居形態は、社会構造の変化に伴い円形から方形基調のプランに変遷する。日田市小迫辻原遺跡では弥生時代後期終末から古墳時代前期前葉にかけて3期にわたり当地域を統治したと考えられる首長居館跡も確認されている。



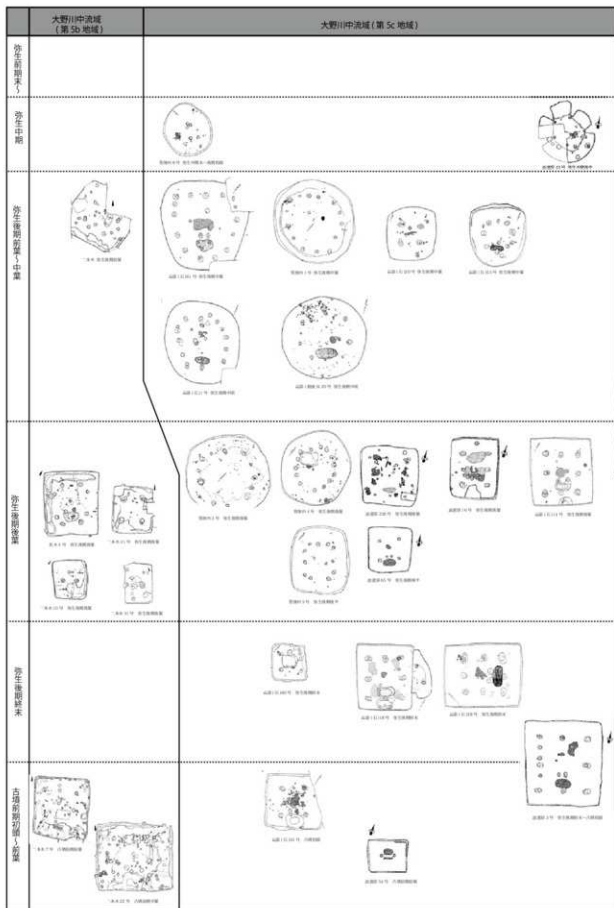
第156図 第5(a・b)地域弥生時代時期別住居跡変遷図②

第5地域(大野川上・中流域 第5a～第5d)

この地域は、近年農業基盤整備事業に伴い発掘調査が頻繁に行なわれ、弥生時代の様相も次第に解明されつつある。大野川中流域と上流域は気候的にも、地形的にも異なる地域である。阿蘇外輪山を侵食する上流域は標高 500～800 m の台地に比高差 100 m 近い V 字谷が連続する地形を呈している。これに対して、中流域では標高 100～200 m の台地が展開し、その間を谷がとりまくその比高差は 50 m ほどである。また大分川上流域は九住連山のふもとにあたり高地性の気候であり、肥後地方の影響を強く受けている地域である。このように第5地域の中でも、地形や環境の違いがあるため、第151図では第5地域をさらに4つのエリアに区分(第5a～5d)している。このように4つに区分された各々の地域について以下に詳述する。

第5a地域とした大野川上流域では、その代表的な遺跡として1992年から2年次に渡って調査が行われた石井入口遺跡があげられる。この遺跡からは弥生時代後期の竪穴住居跡が調査区全体を埋め尽くすかのように検出されており、その件数は200軒あまりにのぼる。弥生時代前期に関しては不明である。この遺跡の住居跡は弥生時代後期に属するものが大半を占める。住居プランは方形基調が主であり、主柱は4本が主体である。100軒からなる集落跡からは6点もの鏡片が出土しており、加えて朝鮮系小銅鏡も出土している。この周辺一帯の拠点集落であった可能性が高い集落である。その他、平井遺跡、小瀬遺跡等においても、弥生時代後期末に入って爆発的な集住化が認められる。

第5b地域とした地域は大野川中流域に属する。県内気候区分では内海型の西端部にあたり、山地型との接点に当たるため降水量が年間を通じ高い地域でもある。この周辺の代表的な遺跡には大野郡大野町(旧)に位置する二



第 157 図 第 5 (c・d) 地域弥生時代時期別住居跡変遷図

本木遺跡、松木遺跡があげられる。いずれも大野川中流域の標高 226 m の舌状に延びる台地上に展開している遺跡である。弥生時代初期の遺跡は現段階では未発見であり、弥生時代後期後葉から終末にかけて大野原全域に集落遺跡の急速な増大が認められる。住居形態については上述のように弥生時代中期以前は明確ではないが、弥生時代後期以降の様相は方形が主体であり、出土土器の様相も大野川上流域と類似する。

第 5c 地域については、第 5b 地域と同様の大野川中流域であるものの、より下流域に近い地域、下流域と接する地域（旧野津町・千歳村・三重町）である。代表的な遺跡には千歳村（現豊後大野市）の火山性台地上に展開する高添遺跡や 2003 年に調査が行われた鹿道原遺跡等がある。いずれの遺跡も特徴のある遺構、遺物が出土している。鹿道原遺跡からは弥生時代中期に花卉型住居を主体とした 6 期の住居跡が検出されている。弥生時代後期には 237 軒の住居跡が検出されているがそのほとんどが方形に近い長方形プランの住居である。また、これに伴う 1 間×1 間の掘立柱建物跡も 221 棟検出されており、非常に稀有な事例として注目を浴びている。花卉型住居跡は主に熊本県や宮崎県日向地方に認められるものであり、この地域との交流状況を示す要素のひとつである。高添遺跡は弥生時代後期前葉から円形、隅丸方形、方形等のプランをもつ住居跡が検出されており、この様相は下流域の様相と類似する。また、大野川の支流に当たる野津川流域に展開する菅無田遺跡では、弥生時代中期末に円形の住居跡が検出されており、弥生時代後期に入っても円形住居が認められる。周辺の遺跡には内河野遺跡、日当遺跡等がある。弥生時代後期から活況を呈し古墳時代前期まで続く遺跡である。出土土器に関しても粗製糞の分布域の東限がこの辺りまでとなっており、この地域一帯が他地域との人的移動を含めた結節点となっていたことが想定できる。

第 5d 地域は、山間地特有の気候を有する久住町周辺である。大分県を代表する二大河川（大野川・大分川）の分水嶺となる小倉峠が存在する。弥生時代前期の遺跡は他地域同様希薄である。弥生時代中期前半の遺跡である上屋敷遺跡では、大型の円形住居跡に付属施設と考えられる小型の方形堅穴が存在する。出土土器は下城式系、肥後系の土器である。弥生時代中期後半では小城原遺跡、脇遺跡が上げられる。その中の中心的な集落では一時期に 5 基前後の住居跡が計画的に配置されていたようである。住居形態は花卉型や方形が主体である。また、その住居跡に主柱を伴わない小型の円形もしくは方形の堅穴が存在するのも特徴的である。出土土器は在地の土器が主体となる。弥生時代後期中頃の遺跡には標高約 570 m の台地上に大規模な遺跡が展開する竹田市都野原田遺跡がある。250 軒ほどの住居跡が検出されているが、そのプランは長方形を基調としており、規模は中規模クラスが大多数を占めている。そのうちの一基からは後漢鏡が出土しており、周辺遺跡の様相からこの地域一帯の中核的集落の性格を持つ遺跡と推定される。以上のように、第 5d 地域は大野川上流域とはまた異なる様相を示している。立地条件も含め当時の交流状況、社会構造のあり方等今後注目される地域である。

以上、概略ではあるが県内各地域の堅穴住居の様相を示してみた。冒頭で触れたように、大分県域の中は、その地勢により、各地域毎に特徴的な様相を示している。こうした中で下郡遺跡群での状況はまさに第 2 地域の典型となりえるものであり、瀬戸内地域と接する地理的条件を反映した西部瀬戸内的な要素を多分に備えている。

参考文献

- 大分県立歴史博物館 2003『特別展図録 二千年の鼓動 弥生土器の世界』
大分市 1987『大分市史』上巻
玉永光洋 1992『第 5 章 まとめ 遺構・集落について』『管生台地とその周辺の遺跡 XV』大分県竹田地区遺跡群発掘調査報告
石井入口遺跡 石井入口北遺跡 竹田市教育委員会
竹田市教育委員会 1985『小園遺跡』『管生台地と周辺の遺跡』大分県竹田市管生地区土地改良事業関係遺跡群発掘調査報告Ⅹ
竹田市教育委員会 2000『平井 B 遺跡』大野川上流農業水利事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
竹田市教育委員会 1992『管生台地とその周辺の遺跡 XV』大分県竹田地区遺跡群発掘調査報告 石井入口遺跡 石井入口北遺跡
久住町教育委員会 1996『石田遺跡』『市第一遺跡・石田遺跡』県営担い手育成基盤整備事業都野西部地区に伴う発掘調査報告書 1
久住町教育委員会 2000『上屋敷遺跡』『小路遺跡 上屋敷遺跡』県営担い手育成園地整備事業都野西部地区に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

- 久住町教育委員会・大分県教育委員会 2001『都野原田道跡』県営担い手育成基盤整備事業久住郡野東部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ
- 久住町教育委員会・大分県教育委員会 2002『仏原千人塚古墳群』県営担い手育成基盤整備事業都野東部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ
- 久住町教育委員会・大分県教育委員会 2002『小城原道跡・中原道跡』県営担い手育成基盤整備事業都野西部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
- 久住町教育委員会 2002『中殿道跡』県営担い手育成基盤整備事業久住郡野東部地区に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅷ
- 久住町教育委員会 2003『脇道跡』県営担い手育成基盤整備事業久住中央地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
- 久住町教育委員会 2003『尾根道跡』尾根道跡 上七里田道跡 大塚道跡 県営担い手育成基盤整備事業都野西部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
- 久住町教育委員会 2004『老野道跡』中山間地域総合整備事業山中地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
- 佐伯市教育委員会 1958『白湯道跡』
- 臼杵市教育委員会 1990『田篠台道跡』一制礼場地区・堂メキ地区発掘調査概報一
- 臼杵市教育委員会 1994『田篠台道跡Ⅱ』一西の原地区発掘調査概報一
- 臼杵市教育委員会 2001『荒田道跡』一東九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一
- 野津町教育委員会 1986『菅無田道跡』野津川流域の道跡Ⅷ 大分県野津地区土地改良事業関係道跡群発掘調査報告書
- 大野町教育委員会 1980『二本木道跡・松木道跡』『大野原の道跡』大分県大野郡大野町所在道跡群発掘調査報告書
- 千歳村教育委員会 1989『高添台地の道跡』大分県大野郡千歳村高添地区所在道跡の調査報告書
- 千歳村教育委員会 2001『鹿道原道跡』発掘調査報告書
- 天瀬町教育委員会 1986『宇土道跡発掘調査報告書』
- 宇佐市教育委員会 1988『台ノ原道跡(Ⅱ)』『宇佐地区道跡群発掘調査概報 小部道跡(Ⅲ)・台ノ原道跡(Ⅱ)・御幡道跡(Ⅲ)・四日市横穴群』
- 宇佐市教育委員会 2002『中原道跡』『山ノ下横穴墓・中原道跡・上居屋敷道跡・神田道跡・別府道跡』一般国道387号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 宇佐市教育委員会 2004『小部道跡』宇佐地区道跡群発掘調査報告書Ⅰ
- 大分県教育委員会 1975『台ノ原道跡』大分県宇佐市四日市所在道跡の調査 大分県文化財調査報告第33輯
- 大分市教育委員会 1979『守岡道跡』昭和50・51年度発掘調査概報
- 大分市教育委員会 1982『多武尾道跡調査概報』
- 大分市教育委員会 1984『尾崎道跡』一一分市立明治小学校建設に伴う発掘調査概報一
- 大分市教育委員会 1992『賀来中学校道跡』大分市賀来中学校プール移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 大分市教育委員会 1993『上野道跡群』大分市立美術館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 大分市教育委員会 1993『城南道跡』大分県大分市大字永興所在道跡の発掘調査報告書
- 大分市教育委員会 2000『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.12 2000年度
- 大分市教育委員会 2002『下部道跡群Ⅰ』大分市下部地区土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
- 大分市教育委員会 2006『若宮八幡宮道跡』第1次発掘調査一上野ヶ丘中学校の校舎建替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一
- 大分市教育委員会 2008『下部道跡群Ⅵ』大分市下部地区土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ
- 大分市教育委員会 2009『下部道跡群Ⅶ』大分市下部地区土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ
- 大分市教育委員会 2009『下部道跡群Ⅷ』大分市下部地区土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ
- 大分県教育委員会 1987『雄城台』第8次発掘調査の概要
- 大分県教育委員会 2002『毛井道跡B地区』国道197号大分南バイパス工事に伴う発掘調査報告書
- 大分県教育委員会 2002『後迫道跡』九州横断自動車道間接埋蔵文化財発掘調査報告書(18)
- 大分県教育委員会 2002『利光道跡』一般国道10号(戸次・犬飼拡幅)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 大分県教育委員会 2002『尾崎道跡』『尾崎道跡・清水道跡・新田道跡・川野道跡・久木小野道跡・平岩道跡』東九州自動車道間接埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

第 56 表 地域別(住居跡一覽表①)

宇佐・中津地区(第 1 地域)

遺跡名	時期	SH 番号	プラン	規模 (m)	主柱の径	坪数	塀溝	ベットの状況	土坑	その他
台ノ原遺跡	弥生中期	001	長方形	3.25 × 2.1	2					
台ノ原遺跡	弥生前期末～中期前半	4 号	長方形	5.6 × 4.6	20x4					
台ノ原遺跡	弥生前期末～中期前半	5 号	円形	径 6.4	8				中央に土坑あり	
小部遺跡	弥生前期末～古墳期	010	方形	5.5 × 5.0	4 中央				南西の隅に小土坑 掘り入り口	掘り入り口、堀の板を立てていた痕跡・ 掘り入り口
中津遺跡	古墳前期	004	長方形	5.4 × 3.5	2 中央				掘り入り口あり	
中津遺跡	弥生前期末	004	円形	径 6.4	9 中央					
中津遺跡	弥生前期末	007	円形	径 5.0	5					

宮崎県(第 2 地域)

遺跡名	時期	SH 番号	プラン	規模 (m)	主柱の径	坪数	塀溝	ベットの状況	土坑	その他
尾崎遺跡(明治北小)	弥生前期後葉	007	隅丸方形	5.5 × 5.6	4 中央					
尾崎遺跡	弥生前期後葉	008	円形	7.6 × 8.0	6 中央 1 6 中央 2				掘り入り口あり(高 さ 10 cm)	
尾崎遺跡	弥生前期中葉	010	円形	6.7 × 7.1	6 中央 2 6 中央 1					掘り入り口
尾崎遺跡	弥生前期後葉	021	円形	7.4 × 7.3	8 中央					掘り入り口
尾崎遺跡(弥生南小遺跡・後平 遺跡)	弥生中期前半～後半	3 号	円形	径 6.0	10 (あまり前 端ではない)					掘り入り口
尾崎遺跡	弥生中期前半～後半	5 号	円形	7.5 × 6.5	10					掘り入り口
尾崎遺跡	弥生前期末	001	隅丸方形	6.2 × 4.5	4					掘り入り口
尾崎遺跡	弥生前期末	003	円形	径 7.0	7 中央					掘り入り口
尾崎遺跡	弥生前期末	10 号	円形	8.3 × 7.08	6 中央 2					掘り入り口
尾崎遺跡	弥生中期	17 A 号	円形	径 7.7	12 中央に礎石					掘り入り口
尾崎遺跡	弥生前期末～古墳期	19 号	長方形	5.6 × 4.5	2 中央					掘り入り口
尾崎遺跡	弥生前期末	首区 16 号	長方形	7.2 × 4.7	6 中央より西 2 2 中央より西 1					掘り入り口
尾崎遺跡	弥生前期末～古墳期	首区 3 号	長方形	4.27 × 3.8	2 中央より					掘り入り口
尾崎遺跡	弥生前期末～古墳期	008	隅丸方形	7.35 × 6.0	7					掘り入り口
尾崎遺跡	弥生前期後葉	001	隅丸方形	4.0 × 4.21	4 中央					掘り入り口
尾崎遺跡	弥生前期後葉	001	円形	6.5 × 6.3	6 (補助 2)					掘り入り口
尾崎遺跡	弥生中期前半～末	009	円形	径 6.3	4 中央に礎石					掘り入り口

第57表 地域別住居跡一覧表②

遺跡名	時期	SI番号	プラン	規模(m)	主柱穴数	母体	母体	母体	土坑	その他
利光遺跡(堀ノ井地区)	弥生前期後半～古墳前期	2号	方形	一边5.8(推定)	4中央	中央	全面	土坑～外側に1字状(長さ10cm)	南側・土柱穴遺	
	弥生前期後半	1号	方形	一边8.4	17上	中央やや東より遺	南側約3m辺にあり	無	南側	甲冑は壁から0.1～0.7m離れた所にある
	弥生前期後半～古墳前期	2号	長方形	6.5×5.2	4中央(出土)	中央	無	無	南側	
利光遺跡(堀ノ井地区)	弥生前期後半～古墳前期	5号	方形	一边6.0	4中央やや東より遺	中央	無	無	南側・土柱穴遺(炭化物・灰層・遺物あり)	東西部の土柱穴は柱を囲むように(建物・土坑・灰層・遺物あり)
	古墳前期前半	25号	長方形	3.7～3.0×2.8～2.9	2	中央	無	無	無	
	古墳前期後半	58号	長方形	4.5×4.4+a	4中央	中央やや東より遺	無	無	無	
若宮八幡宮遺跡(第130)	弥生中期	125	円形	径4.8	4	中央	全面	無	北西の土柱穴間にあり	南側の外側に沿うように柱穴あり
	古墳前期前半	105	方形	4.7×5.63	4中央に地蔵石	中央	全面	無	無	
	弥生中期前半～中葉	002	円形	径7.0+a						石造り土上
下郡遺跡第3次	弥生中期後半	004	多角円形	5.0+a	4(6か?)				南側柱穴間に1.6m×0.8mの土坑	
	弥生中期(後半～後期前半)	060	方形	4.94×4.6+a	4					
	弥生中期(後半～後期前半)	155	方形	3.2×4.9	4					
下郡遺跡第126次調査	弥生中期	050	長方形	4.5×3.5	4					
	弥生前期後半	108	円形～多角円形	7.0×6+a	5～6本	中央に地蔵石	無0.48深さ0.1	無	・南側柱穴の外側に1.8×1.36、深さ0.16の土坑 ・北側に1.53×1.0深さ0.2の隅切部遺構	・北側に30～40cmの河原石3個の遺構とされていた
	弥生前期後半	111	円形	径6.9	7～8本		無0.2深さ0.1	無	・南側柱穴間に1.46×0.5、深さ0.1の土坑	・焼灰付
下郡遺跡第13次	弥生前期後半	103	方形	5.1×5.3	4本		なし	無		
	弥生前期後半	106	方形	4.7×4.7	4本		無0.4深さ0.24	無		・西側より土坑遺構、深さ0.4m ・南側柱穴間に1.6×0.64、深さ0.16の土坑
	弥生前期後半	107	方形	4.95×4.8	4本		無0.4深さ0.1	無	・南側土柱穴間に2.4×0.8、深さ0.16の土坑	・床面までの深さ0.24 ・住居北東部分を中心に焼土・灰化材付

第 58 表 地域別(住居跡)一覧表③

遺跡名	時 期	SI 番号	プラン	規模 (m)	主柱の径	基礎	壁溝	ベットの遺構	土坑	その他
下郡遺跡部群 13 次	弥生後期後葉～終末	102	方形	5.8 × 5.2	4 本 (径 0.4)		幅 0.35 深さ 0.13	無	・南よりの主柱の間に 1.6 × 0.8、深さ 0.2 の土 坑 ・自然成りか、壁溝 自然成りか、なるま ろになってゐる	・検出面から表面までの深さ 0.5 ・中央付近に土柱分布
	古墳前期前葉	105	方形	5.1 × 4.8	4 本		幅 0.35 深さ 0.2	無	・南側の主柱の間に土坑遺 構 (1.4 × 0.8、深さ 0.2)	・地表面 ・炭化した柱頭跡
	古墳前期前葉	125	方形	5.0 × 5.4	4 本		幅 0.2 深さ 0.1	無		・複数の溝の跡 ・南側の主柱の間に土坑 (1.4 × 0.6、深さ 0.1)
	弥生後期前葉～後葉	069	方形	5.45 × 5.5	2 本		0.25	無	・北側	・住居中央に土柱
下郡遺跡部群 90 次	弥生終末～古墳初葉	020	方形	5.85 × 5.75	4 本	・地底炉(灰皿中央) の穴あり	幅 0.5 深さ 0.1 (コ の穴あり)	無	・南側に 2 本の土坑 (1.55 × 0.65、深さ 0.1) (1.8 × 0.9、深さ 0.2)	・SH069、SX005 と明り合いの遺構 ・土器大塚に埋蔵
	弥生後期後葉	140	長方形	4 × 2.6	2 本			無	・北側	
下郡遺跡部群 29 次	弥生後期終末～古墳初 葉	004	方形	6.5 × 6.5	4 本	・住居中央に土柱	幅 0.4 ～ 0.8 深さ 0.2	無	・南側の主柱の間に土坑上 坑 (1.2 × 0.8、深さ 0.13)	・住居中央に土柱あり ・灰層土柱・木柱土坑 ・南側の主柱の間に土坑上 坑 (1.2 × 0.8、深さ 0.13)
下郡遺跡部群 120 次	古墳初葉	050	方形	7.0 × 6.7	4 本		幅 0.1 ～ 0.2 深さ 0.1	無	・南側に 2 本の土坑 (1.0 × 0.7、深さ 0.45)	・092SH400 と同一遺構 ・住居跡に併存する土坑遺構 (SX1080) あり (1.0 × 0.7、深さ 0.2) ・壁高 0.5 ・造成後穿孔の遺 1 個体埋蔵
	古墳初葉	270	方形	6.4 × 6.65	4 本		幅 0.3 ～ 0.6 深さ 0.3	無	・北、南側にそれぞれ 0.8 × 0.4 の土坑あり、その 間に 1.1 × 0.1 程度の のベットの土坑遺構 (上の 積み上げ)	・土、南側にそれぞれ 0.8 × 0.4 の土坑あり、その 間に 1.1 × 0.1 程度の のベットの土坑遺構 (上の 積み上げ) ・東側面に、0.78 × 0.75、深さ 0.15 の 居間跡 or 住居への入り口に関係する 施設と考える
下郡遺跡部群 92 次	古墳前期	385	長方形	5.5 × 5.05	4 本			無	・北側の中央に柱 1.4、深 さ 0.15 の木柱跡土 柱あり ・取り返	・SH385 は SX380、SH365 と南側面を 有する遺構 ・壁高 0.2 ・主柱径 (0.2 ～ 0.13、深さ 0.3) ・堀入土居 (壁跡に炭化材、炭柱に分布、 堀入土居跡にあり)
下郡遺跡部群 29 次	古墳前期後半	001	方形	4.4 × 3.9	2 本	・壁跡なし	無	無		・現存壁高 0.26 ・N - 38° - E (北偏)
下郡遺跡部群 19 次	古墳前期前葉～後葉	005	長方形	3.6 × 4.92	2 本	・壁跡なし	無	無		

第59表 地域別住居跡一覧表①

白村・佐伯地域 (第3地域)

遺跡名	時期	SH番号	プラン	規模 (m)	主柱穴数	母形	礎石	土坑	その他
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生後期中層～後遺	3号	円形	直径6.0	3 (現存)	無	全周	南側土柱穴遺	
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	古墳初遺	2号	長方形	2.5 × 3.5	なし	中央	全周	無	溝り痕
山田台遺跡 (朝比奈地区)	弥生後期中層～後遺	4号	ほぼ正方形	7.5 × 8.0	6	無	無	無	
山田台遺跡 (朝比奈地区)	弥生後期中層	1号	やや歪な円形	9.5 × 9.5	8中央	無	無	無	部分的に取り戻
山田台遺跡	弥生後期中層～後遺	001	多角形	直径7.4	5 (補助3)	中央	無	柱穴と土柱痕の間に	
山田台遺跡	弥生後期中層～後遺	009	楕円形	6.25 × 5.5	6	無	無	南側土柱穴遺	東側～南側に於いて 50 cm程度の段差あり
山田台遺跡	弥生後期中層～後遺	005	4角田形? 不規則多角形	直径10.2	8	他は中央か?	無	無	北側～南側に於いて 50 cm程度の段差あり
山田台遺跡	弥生中期中層～後遺	001	楕円形	7.2 × 5.15	4	中央やや偏より	無	無	

白田・玖波地域 (第4地域)

遺跡名	時期	SH番号	プラン	規模 (m)	主柱穴数	母形	礎石	土坑	その他
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生後期中層～後遺	4号	長方形	5.95 × 4.25	2中央	無	無	無	溝り痕
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生後期中層～後遺	15号	長方形	5.3 × 4.25	2中央	無	無	礎石に→テ所	
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生後期中層	17号	やや歪な円形	7.68 × 7.36	4中央	無	無	無	
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生後期中層	20号	長方形	7.51 × 5.8 ~ 6.1	4中央	深さ5cm(部分)	西側向隅高さ10cm	礎石に→テ所	
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生後期中層～中遺	55号	やや歪な円形	6.2 × 7.1	4中央やや偏より	無	無	無	
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生後期中層～中遺	60号	方形	3.4 × 3.4	1 (補助2本)	全周深さ5cm	無	無	溝り痕
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生中期中層	73号	円形	9.3 × 8.8	8中央	無	無	無	溝り痕
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生後期終末	61号	長方形	5.9 × 4.5	2	無	南西隅	無	
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生中期中層	82号	円形	径6.9 × 7.3	6中央	全周	無	無	
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生後期中層	78号	長方形	6.7 × 6.1	4中央	全周	東西両壁 (高さ5 ~ 10 cm)	溝り付面に2つの柱穴を併いあり	
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生中期中層	1号	円形	7.2 × 4.0 ~ a	6中央	東側壁	無	無	
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生後期中層	5号	方形	6.85 × 6.1	4 (推定)	無	西から北し字状	無	
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	古墳前期初遺	19号	方形	3.8 × 3.3	2中央	無	無	無	東側壁2面柱穴・人口施設
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生後期終末	11号	方形				北側高さ10cm	無	溝り痕
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	弥生後期中層	15号	円形	直径6.4	4・5 (補助1か)			中央に楕円形の溝り込み	
山田台遺跡Ⅱ (西の原地区)	古墳前期	11号	方形	3.6 × 3.6	2中央	無	無	無	

第 60 表 地域別(住居跡)一覧表⑤

大野川上流域 (第 5a 地域)

遺跡名	時期	SI 番号	プラン	規模 (m)	主柱穴数	母層	切溝	ベット状遺構	土坑	その他
平井 B 遺跡	弥生後期中層	001	長方形	6.1 × 5.2	8	中央西より	無	無	無	無
	弥生後期中層	015	方形	6.2 × 5.6	4	無	無	無	無	弥生住居
	弥生後期後葉	020	方形	5.9 × 4.7	4	無	無	無	無	無
	弥生後期後葉	009	方形	8.8 × 7.3	8	無	無	無	無	無
	弥生後期後葉	019	方形	6.5 × 6.3	7	無	無	無	無	無
小畑遺跡 (A 地区)	弥生後期後葉	005	方形	7.8 × 6.2	6	無	無	無	無	無
	古墳初葉	014	方形	7.0 × 7.1	4	無	無	東壁 1/3	無	無
小畑遺跡 (B 地区)	弥生後期後葉	102	長方形	6.6 × 5.2	5	南側にいくぼみ	無	無	無	無
	弥生中層上～後期初葉	63 号	方形	6.1 × 7.3	12	中央	無	四方にあり (幅 0.8 ～ 1.8 m、高さ 0.1 m)	無	無
弥生後期初葉	弥生後期初葉	65 号	方形	8.3 × 8.2	12 本 + a	中央南より	無	四方にあり (幅 1.6 m 高さ 0.1 m)	無	無
	弥生後期後葉	72 号	長方形	5.8 × 6.2	6	中央南側主柱穴側	無	無	中央南側	弥生後期後葉
	弥生後期後葉	93 号	長方形	7.9 × 6.2	8	中央南より	無	無	南壁正い	増広に柱穴残す
	弥生後期後葉～古墳初葉	88 号	方形	6.7 × 7.0	4	中央南側主柱穴側	無 0.2 m、 深さ 0.1 m	無	無	無
古墳初葉	古墳初葉	32 号	方形	6.4 × 6.3	8	中央南側主柱穴側	無	無	無	無
	古墳 7	57 号	方形	6.0 × 7.1	7	中央南側主柱穴側	無	無	無	無
	古墳 7									床面近くに土坑あり

大野川中流域 (第 5b 地域)

遺跡名	時期	SI 番号	プラン	規模 (m)	主柱穴数	母層	切溝	ベット状遺構	土坑	その他
二本木遺跡	弥生後期中層	6 号	長方形	6.5 × 6.0	4	無	無	無	中央西より	無
	弥生後期後葉	31 号	長方形	2.8 × 3.8	1	中央西より	無	無	無	無
	弥生後期後葉	41 号	長方形	4.0 × 4.7	4	無	無	無	無	無
	古墳初葉	7 号	長方形	6.0 × 5.6	9 (10 号穴状)	中央	無	無	東壁側	無
	古墳初葉中層	22 号	長方形	7.8 × 6.7	7 (23 号穴状)	無	無	無	南側に 2 基	無
松木遺跡	弥生後期後葉	4 号	長方形	6.25 × 5.3	11	中央南側	無	無	無	西～正側に土坑の遺あり
	弥生後期後葉	10 号	長方形	3.25 × 3.96	2	中央南側	無	無	無	無

大野川中流域 (第 5c 地域)

遺跡名	時期	SI 番号	プラン	規模 (m)	主柱穴数	母層	切溝	ベット状遺構	土坑	その他
後遺田遺跡	弥生中層後半	043	長方形	5.0 × 4.7	5	無	無	無	無	無

第 61 表 地域別住居跡一覧表⑥

遺 跡 名	時 期	SH 番号	プラン	規模 (m)	主要穴数	母跡	切溝	ベット状遺構	土坑	その他
後遺跡遺跡	弥生前期後半	065	略方形	4.0 × 4.4	4 (補助 2)	地坑跡	無	無	南側土柱穴遺	
	弥生前期後半	134	長方形	7.7 × 7.2	9 (補助 2)	地坑跡	無	無	南側中央にあり	
	弥生前期後半	016	長方形	6.0 × 4.8	7 (補助 2)	地坑跡	土溝・溝・ 南側まで	無	南側中央にあり	
	弥生前期後半	226	略長方形	6.0 × 5.9	9 (補助 2)	9 段化物跡	無	無	南側中央に長方形土坑	
	弥生前期後半・古墳期 遺跡	003	長方形	8.6 × 7.8	8 (補助 2)	地坑跡	無	無	南側中央にあり	
	弥生前期後半・古墳期 遺跡	026	長方形	6.4 × 5.9	6 (補助 2)	地坑跡	南側 2/3 に あり	無		
	古墳前期前半	171	長方形	8.8 × 7.4	10 (補助 2)	地坑跡	全周	無	南側	
	古墳前期前半	054	長方形	3.9 × 3.1	2 段化物跡		無	無	中央土溝より	
	弥生中期前半	K-20 区	円形	9.1 × 8.5	7 (補助 5)	段化物跡	無	無		
	弥生中期前半	019	方形 (竪記) 一部凹形	4.0 × 5.0	4 (竪記)	無	無	無		中央部曲状にくぼむ
高森遺跡 (谷間)	弥生中期前半	001	円形	8.1 × 8.6	12 段化物跡		無	無	中央曲状より	
	弥生中期前半	020	略長方形	5.1 × 5.3	4 母跡		無	無		底面直線・中央が一直線でない
	弥生中期前半	053	半圓円形	5.8 × 5.9	7 地坑跡・段化物跡		無	無		土溝・南側部・10 m ほどの溝あり
	弥生中期前半	061	略長方形	通 19.2・正型付近 3.3・副型付近 5.5	15 (補助 3 ?) 母跡		無	無		
	弥生前期後半	014	方形	6.4 × 6.8	8 母跡・段化物跡		無	無	南側中央にあり	
	弥生前期後半	028	長方形	6.2 × 7.8	8 (補助 2)	母跡・段化物跡	無	無		
	弥生前期後半	018	長方形	5.7 × 6.5	8 段化物跡		無	無	南側中央にあり	南側厚く入口側の柱穴は遺
	弥生前期後半	050	長方形	5.2 × 6.0	5 (補助 2)	地坑跡か ?	無	無		
	弥生前期後半	060	方形	3.5 × 3.5	4 母跡		無	無	中央	
	古墳前期	055	方形	5.8 × 5.2	4 (補助 2)	母跡	無	無	南側中央にあり	
菅刈山遺跡	弥生中期前半	1 号	円形	8.4 × 8.1	14 (大小交互) 地坑跡か ?		無	無		柱穴と壁の間の間が壁の遺状をみる
	弥生前期後半	3 号	略 5 角形状 円形	径 8.6	11 (大小交互)	無	無	無		
	弥生前期後半	4 号	略 5 角形状 円形	径 7.6	14		無	無	北側に方形の堀り込み	
	弥生前期後半	5 号	略長方形	6.6 × 5.7	2 本柱 (補助 7)	無	無	無		
	弥生中期後半・後遺跡	8 号	円形	径 4.7	2 母跡		無	無		

大分川上流域 (第 50 地域)

遺 跡 名	時 期	SH 番号	プラン	規模 (m)	主要穴数	母跡	切溝	ベット状遺構	土坑	その他
菅刈山遺跡	古墳時代前期前半～中 期	1 号	方形	4.0 × 4.0	無	土柱にあり				

第62表 地域別住居跡一覽表①

通 称 名	時 期	SH番号	プラン	規模 (㎡)	主母の数	住 跡	塋 構	ベント基礎構	土 坑	その他
老野遺跡	弥生後期中段	2号	方形	6.8 × 6.0	4					内行花と堀出土 (分割したもので、穿孔あり・ペンダラ等部 9mm)
	弥生中前期後半	3a号	半楕円形	7.0 × 7.4	4中央		無	ほぼ全周		中央二箇堀り
	弥生中前期後半	8号	隅丸長方形	6.7 × 3.6	2中央東より		ほぼ全周	各コーナー		
	弥生後期初段～前段	6号	半楕円形	6.0 × 5.4	4中央		無	南西隅および北側		
上原敷遺跡	弥生後期中段～後段	1号	方形	6.0 × 6.0	4		ほぼ全周	各コーナー	南側主柱穴部に土坑あり	
	弥生中前期前半～中盤	2号	円形	径 8.0	10中央		無	無		
	弥生中期中段～後段	4号	長方形	2.6 × 2.0	2		無	無	中央東より	
	弥生中期中段	10号	方形	2.5 × 2.6	2		無	無	南側中央に土坑	
	弥生中前期後段	5号	方形	7.6 × 7.0	9		全周	4 箇 (長さ 10 ～ 15cm) あり	中央 (土坑の南側に柱穴あり)	
	古墳前期中盤	2号	長方形	4.4 × 5.6	4中央		無	南側段差 3 方向 (長さ 5cm)		
	古墳前期後段	3号	長方形	4.2 ～ 4.4 × 4.6 ～ 4.8	4中央		ほぼ全周	無	南側中央に土坑	
	弥生後期後段	19号	方形	4.8 ～ 5.0 × 4.5 ～ 4.8	4中央		無	無	東側中央に土坑	
	古墳前期中盤	41号	長方形	8.3 × 8.9 × 6.5 ～ 6.8	4中央やや南側		無	北西隅にL字状		
	古墳前期中盤	100号	長方形	10.7 × 8.2	8中央やや南側		全周	四方あり		人口地蔵あり
尾根遺跡	弥生中前期前半～中盤	266号	楕円形	8.8 × 8.0	15 + 2 (歩跡の東西に)	中央	無	無	南側中央に土坑	
	弥生後期中段～後半	2号	長方形	4.4 × 3.5	2		全周	北側向コーナー	南側中央に土坑	
	弥生後期後段	3号	方形	6.4 × 6.4	4南側柱穴部にあり		全周	無		
	古墳前期中盤	6a号	長方形	6.5 × 5.5	4中央		ほぼ全周	南側を除く 3 方向	東側中央	
小城原遺跡	弥生後期前段	8号	方形	5.5 ～ 5.8 × 5.5 ～ 5.8	4 (補助 4)		北側人口段々全周	無		北側に入口として張り出し扉あり (各隅に柱穴あり)
	弥生中前期後半	14号	菱形長方形	5.6 × 5.0	4中央		南側除く全周	無	南側主柱穴部に土坑あり	
	弥生後期中段	15号	長方形	5.2 ～ 5.4 × 4.3	4中央		ほぼ全周	無	南側主柱穴部に土坑あり	南側中央張り出し出入り口形成
	古墳前期中盤	19号	長方形	5.8 × 5.1	4		南側除く全周	無		南側主柱穴と塚の間に 2 本 1 列の柱穴あり

第 63 表 地域別住居跡一覧表⑧

遺跡名	時期	SH 番号	プラン	範囲 (m)	主柱穴数	伊勢	要所	ベント状遺構	土坑	その他
小城原遺跡	弥生終末～古墳初葉	24 号	方形にちがひ	4.2 × 4.6	4 中央	無	南側部と全周	無	溝壁中央に土坑	
	弥生後期中葉	27 号	方形	5.4 ～ 5.8 × 5.0 ～ 5.4	4		北・東側	東北隅 (長さ 10 m)	南側主柱穴部に土坑あり	
	弥生後期後葉～終末	41 号	方形	6.5 × 6.0 ～ 6.3	4 中央		南・北・東の辺にまで	無		
	弥生中期後半～末	55 号	方形	4.4 × 4.4	4 中央 (南側に柱穴あり)		北・西側	南西隅		
仏部千人塚古墳群遺跡	古墳前期中葉	1 号	長方形	4.8 ～ 5.1 × 4.0 ～ 4.2	4 中央や外縁		全周	外縁	溝壁中央に土坑	
	古墳前期中葉	3 号	長方形	6.6 × 6.4	4 中央		ほぼ全周	外縁、北側の一部	溝壁	
	古墳前期中葉	4 号	ほぼ方形	6.8 × 6.8	4 中央		東側のみ	東・北西隅	溝壁中央に土坑	
石山遺跡	弥生後期中葉	7 号	隅丸長方形	10.0 × 9.34	8		無	無		小型散置跡以上 (四角跡)

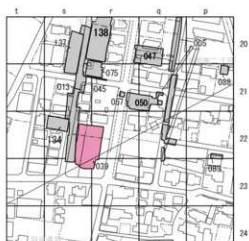
第V章 補遺

第1節 下郡遺跡群第39次調査

(1) はじめに

下郡遺跡群第39次調査地点は下郡遺跡群の南西端部分に相当し、調査対象地の南端は南側に展開する羽田遺跡に接している。調査は区画整理事業に伴う整地工事の事前調査として実施されたものであり、平成元年に区画街路築造の事前調査として実施した下郡遺跡群第13次調査地が西接する。第13次調査地点では弥生時代後期後半から古墳時代前期におよぶ集落跡が確認されており、第39次調査ではこの集落跡の延長が検出されている。

調査の結果、掘立柱建物跡・竪穴住居跡・土坑・壺棺墓・溝状遺構・柱穴などを確認した。

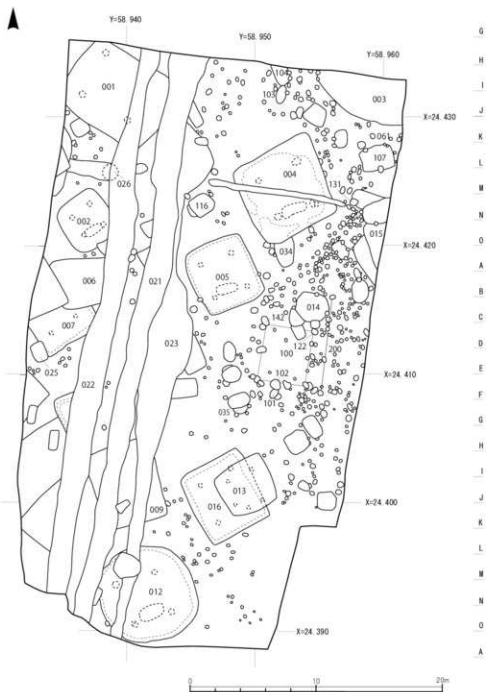


第158図 調査地点位置図

第64表 遺構一覧表

遺構記号	遺物	時期	地区
039SX122	青磁片	15C 後半～16C 前半	D・3
039SX142	青花皿	15C 後半～16C 前半	C・D・1
039SD022		不明	H・N・13・17
039SD023a		中世末～近世	K・A・15・19
039SD023b	平瓦片、土師器環		K・A・15・19
039SH001	弥生土器壺・長頸壺底部・甕口縁部片	弥生時代後期後半～古墳時代初期	H・L・13・16
039SH002	弥生土器壺・甕口縁部片・底部片	弥生時代後期後半～古墳時代初期	M・A・13・15
039SH003	弥生土器台付甕・複合口縁壺・甕・甕・高杯・鉢	弥生時代後期後半～古墳時代初期	I・K・3・6
039SH004	弥生土器	弥生時代後期後半～古墳時代初期	K・O・20・4
039SH005	弥生土器複合口縁壺・甕・甕口縁部片・鉢、石甕	弥生時代後期後半～古墳時代初期	O・C・18・1
039SH006	弥生土器鉢	弥生時代後期後半～古墳時代初期	A・C・13・15
039SH007	弥生土器壺底部片・甕・高杯脚部片、磨石・磨石	弥生時代後期後半～古墳時代初期	C・E・13・14
039SH009	弥生土器甕・甕台・高杯脚部片	弥生時代後期後半～古墳時代初期	H・L・14・17
039SH012	弥生土器	弥生時代	L・O・15～18
039SH013	弥生土器壺・鉢	弥生時代後期後半～古墳時代初期	H・K・19・1
039SH015	弥生土器鉢・ミニチュア土器	弥生時代後期後半～古墳時代初期	N・A・5・6
039SH016	弥生土器複合口縁壺・鉢・高杯	弥生時代後期後半～古墳時代初期	H・L・18・1
039SJ101	弥生土器壺棺脚部	弥生時代後期後半～終末	F・1
039SJ102	弥生土器壺棺脚部	弥生時代後期後半～終末	F・1
039SX014	土師器複合口縁壺・甕口縁部片・甕・鉢・鉢・高杯	弥生時代後期後半～古墳時代初期	B・C・2・3
039SX025	弥生土器ミニチュア土器	弥生時代後期後半～古墳時代初期	B・E・13
039SX026	弥生土器甕	弥生時代後期後半～古墳時代初期	L・M・15
039SX034	弥生土器壺・広口壺・甕口縁部片・高杯	弥生時代後期後半～古墳時代初期	O・A・12
039SX035	弥生土器甕・高杯底部片	弥生時代後期後半～古墳時代初期	G・20
039SX061	土師器底部片	古墳時代～?	K・5
039SX103	弥生土器甕	弥生時代後期後半～古墳時代初期	I・J・1・2
039SX104	弥生土器ミニチュア土器	古墳時代初期	I・1・2
039SX107	弥生土器複合口縁壺・甕口縁部片・鉢	弥生時代後期後半～古墳時代初期	L・M・5・6
039SX116	弥生土器甕	弥生時代後期後半～古墳時代初期	N・18・19
039SX131	弥生土器甕・甕台	弥生時代?	N・4・5

13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6



第159图 第39次遺構配置図 (1/300)



(2) 遺構と遺物

柵列跡 (S A)

039SA200 (第161図)

039SA200は、調査区東壁付近で検出した柵列跡である。検出長は7.0 mを測る。本遺構のすぐ西側には039SB100が検出されており、これに伴う柵列跡と思われるが、遺物等の出土が皆無であり帰属年代は不明である。

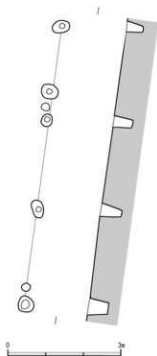
掘立柱建物跡 (S B)

039SB100 (第162図)

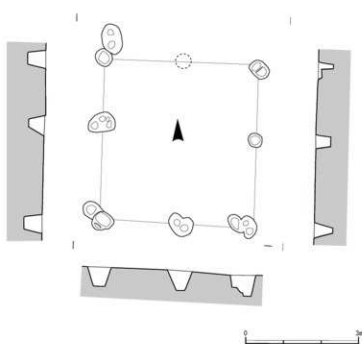
039SB100は調査区のほぼ中央東側部分で検出した掘立柱建物跡である。2間×2間の規模を有しており、梁行4.3 m、桁行4.0 mを測る。柱穴内から中国染付の細片の出土があり、15世紀後半～16世紀代の所産になるものと推定される。

039SX122は建替え等に伴う039SB100の一部を担う柱穴である可能性も想定されるものである。出土遺物には青磁片等がある。

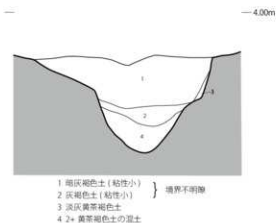
039SX142も039SX122と同様に039SB100の一部を構成する柱穴である可能性が高い土坑である。出土遺物には中国漳州窯青花皿(小野分類C群)が出土しており、16世紀後半頃の年代が想定される。



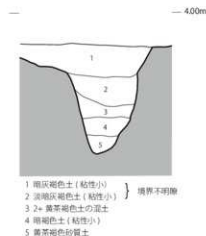
第161図 SA200遺構実測図 (1/100)



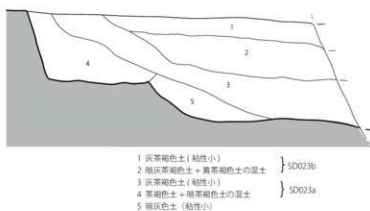
第162図 SB100遺構実測図 (1/100)



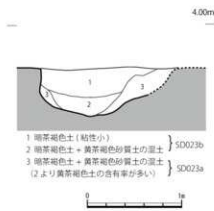
第 163 図 SD021 土層断面模式図 (1/40)



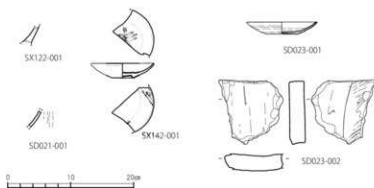
第 164 図 SD022 土層断面模式図 (1/40)
— 4.00m



第 165 図 SD023 (北側) 土層断面模式図 (1/40)



第 166 図 SD023 (南側) 土層断面模式図 (1/40)



第 167 図 SX122・142・SD021・023 出土遺物実測図 (1/6)

溝状遺構 (S D)

今回の調査において、3 条の溝状遺構を検出した。いずれも南北方向に展開するものである。

039SD021 (第 163 図)

039SD021 は調査区内を南北に縦走する溝状遺構である。最上部の出土遺物から最終埋没年代を 18 世紀前半以降と推定することができる。039SD021 からは青磁碗の破片が 1 点出土している。最上部の窪み状の部分に

は近世の陶磁器の出土が認められるが、下部層から近世遺物の出土は認められない。

039SD022 (第164図)

039SD022は調査区の西側で検出した溝状遺構である。南北方向に展開しており、主軸方位はN-13°-Eを示し、031SD021とほぼ平行する。調査区内において42.3mを検出しているが、溝の南北はそれぞれ調査区外に展開する。検出面での幅1～2m、深さ1.15mを測り、V字の断面形状を呈している。埋土内から目立った遺物の出土はなく、所産年代等は不明である。

039SD023 (第165・166図)

039SD023は調査区のほぼ中央で検出した溝状遺構である。溝の主軸方向はN-7°-Eであり、北端は039SD021によって消失する。本溝にも造り替えが認められ、先行して造られていた古い溝を039SD023a、後出する新しい溝を039SD023bと仮称している。039SD023bからは平瓦片、土師器環などが出土している。こうした遺物から中世末から近世にかけての所産になるものと推定される。

竪穴住居跡 (SH)

今回検出した竪穴住居跡の総数は27基にのぼり、そのうち19基について掘り下げを実施した。検出した住居跡には隅丸方形プラン、方形プランをもつものの二種があり、いずれの竪穴住居跡とも遺存状況が良好なものが多い。4本の主柱を有しているものが大半を占め、その中の多くのものには南寄りの主柱穴間に楕円形を呈する土坑を付設している。検出住居跡の時間的な存続幅は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭である。

039SH001 (第168図)

039SH001は調査区の北西角付近で検出した竪穴住居跡である。一部を039SD022によって切られており欠失する。長方形プランを呈し、平面規模は8.0m×6.2mを測る。主柱は4本であり、壁溝などは認められない。現状での検出面から床面までの深さ0.38mを測る。出土遺物には壺、甕などや、小型壺、長頸壺などがあり、これらの遺物から弥生時代後期終末前後の所産年代が想定される。

039SH002 (第169図)

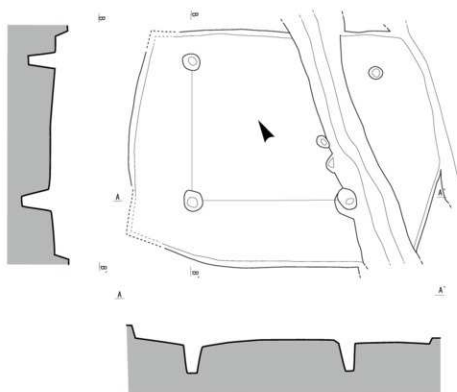
039SH002は調査区の西壁際で検出した竪穴住居跡である。平面プランは隅丸方形を呈しおり、4本の主柱穴が配置され、南側の柱穴間には1.6m×0.7m、深さ0.15mの土坑を付設している。土坑内には灰等の堆積が認められる。住居は4.0m×4.2mの規模を有し、検出面から底面までは0.33mを測る。出土遺物は少なく、図化できたものには甕口縁部片、甕底部片などがある。002の底部の特徴から弥生時代後期中葉から後葉前後の時期のものであると推定される。

039SH003 (第170図)

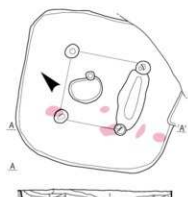
039SH003は調査区の北東角部分で検出した竪穴住居跡であり、大半が調査区外に存している。住居の平面プラン、主柱の配置状況、規模等の詳細は不明である。検出面から床面までの深さ0.2mを測り、埋土中には比較的まとまった土器の出土が認められる。出土土器には台付鉢、鉢、壺、甕、高坏等がある。出土遺物の様相から弥生時代後期後葉から終末期に比定されるものと推定される。

039SH004 (第171図)

039SH004は調査区の中央北寄りの地点で確認した竪穴住居跡であり、今次の調査で検出した竪穴住居跡の中で最も規模の大きい住居である。平面プランは方形を呈し、6.5m×6.5mの規模を有している。主柱は4本

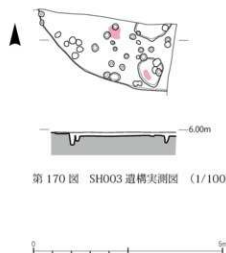


第168図 SH001 遺構実測図 (1/100)



- 1 地黄茶褐色土(粘質なし、比較的キメが細かい)
- 2 黄茶褐色土(1に比べて黄茶褐色土の含有率が高い)
- 3 黄茶褐色土(2+少量の焼土、カーボン粒)
- 4 黄茶褐色土(1+焼土塊、カーボン粒、粘性なし)
- 5 地黄茶褐色土(粘性なし)
- 6 3と同じ
- 7 5と同じ

第169図 SH002 遺構実測図 (1/100)



第170図 SH003 遺構実測図 (1/100)

であり、住居床面中央には地床格として機能したと考えられる焼土の分布が認められる。床面の周囲には幅0.4 m～0.8 mの幅をもつ壁溝が造られている。壁溝の平均的な深さは0.2 mである。検出面から住居床面までの深さは0.48 mを測る。本住居の南側主柱の間には2.1 m×0.8 m、深さ0.15 mの長土坑を配置する。内部には焼土の堆積が認められる。

039SH005 (第172図)

039SH005は調査区中央に位置する方形プランを呈する竪穴住居跡である。5.0 m×5.4 m、検出面からの深

さ0.3 mを測る。住居床面の四周には幅0.2 m、深さ0.1 mの壁溝をもつ。主柱は4本であり、南側に配置される柱穴間には1.7 m×0.7 m、深さ0.1 mの長土坑を配置する。出土遺物には、複合口縁壺、甕口縁部、鉢の他、組掛けをもつ石鍾が1点出土している。出土土器はいずれも弥生時代後期終末前後のものである。

039SH006 (第173図)

039SH006は調査区西壁中央付近で検出した竪穴住居跡である。周囲を他の遺構により切られており、全体様相は不明である。かろうじて北壁と南壁の一部を確認することができる。床面には現状で3本の柱穴を確認することができ、これらの位置関係から本来の主柱は4本であったと推定される。壁溝等は認められない。検出面から床面までの深さは現状で0.48 mを測る。出土遺物には砲弾形を呈する鉢がある。弥生時代後期終末前後の所産と考えられる。

039SH007 (第174図)

039SH007は西壁の中央部付近で検出した竪穴住居跡である。SH006と切り合い関係を有している。遺構の切り合い関係から判明する先後関係は039SH007(古)→039SH006(新)である。住居の南端部分が遺存する。遺存する主柱穴は2基であるが、柱穴の位置関係から本来は4本程度あったことが見込まれる。遺存する2本の柱穴間には1.48 m×1.2 m、深さ0.3 mの不定形土坑が配置されている。南壁周辺には幅0.2 m、深さ0.15 mの壁溝が認められる。地床等とは認められない。出土遺物には壺、甕、高坏片等があり、これらの出土遺物の様相から弥生時代後期後葉前後の所産になるものと推定される。

039SH009 (第175図)

039SH009は調査区の中央南寄りの地点で検出した竪穴住居跡である。大半をSD023で切られている。遺存部分で推定される平面規模は4.8 m×4.0 mである。主柱等の配置状況などは不明である。出土遺物には甕、高坏、器台等の土器片がある。特に002の器台は、外面に赤色塗彩を施し、穿孔を有する器台片であり、こうした出土遺物の特徴から、弥生時代後期終末前後の所産になるものと推定される。

039SH012 (第176図)

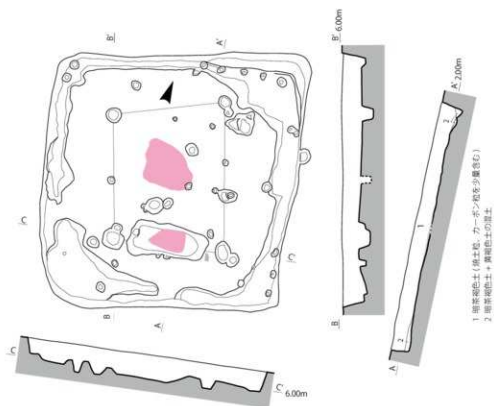
039SH012は調査区南壁際で検出した隅丸方形プランを呈する竪穴住居跡である。平面プランは限りなく円形に近く、その径は7.5 mを測る。壁部分には幅0.4 m、深さ0.1 mの壁溝が全周する。主柱は4本であり、当住居跡も南側の主柱間に2.0 m×1.0 m、深さ0.2 mの楕円形土坑が配置される。

039SH013 (第177図)

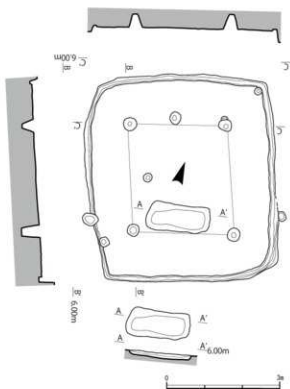
039SH013は調査区中央南側で検出した方形プランの竪穴住居跡である。平面プランは4.7 m×3.8 m、検出面から床面までの深さ0.6 mを測る。床面はフラットに形成されている。主柱は4本であり、南側の柱穴間には焼土の堆積が認められる。出土遺物には壺、鉢などがあり、これらの遺物から弥生時代後期終末前後の時期が想定される。

039SH0016 (第178図)

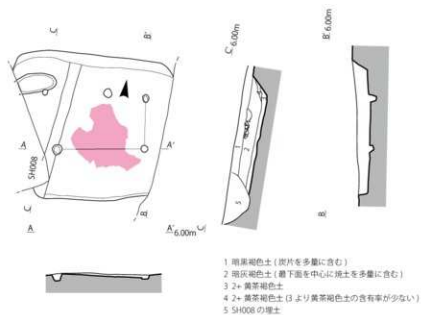
039SH016は039SH013と切り合い関係を有する竪穴住居跡である。方形プランを呈し、平面規模は5.3 m×6.1 mを、現存深度0.62 mを測る。床面には4基の主柱穴を配置し、周囲には幅0.3～0.5 m、深さ0.1 mの壁溝を巡らしている。住居の中央やや北西の部分に地床がと考えられる焼土が認められる。出土遺物には複合口縁壺口縁部、鉢、高坏等がある。出土遺物の諸特徴から弥生時代後期終末前後に比定されたと考えられる。



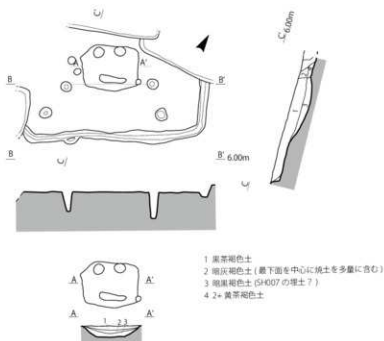
第 171 図 SH004 遺構実測図 (1/100)



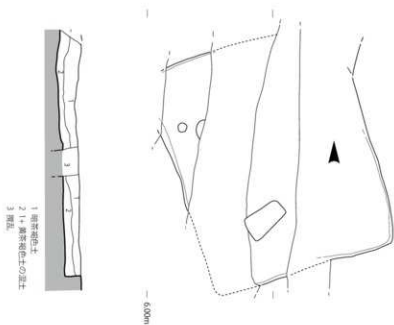
第 172 図 SH005 遺構実測図 (1/100)



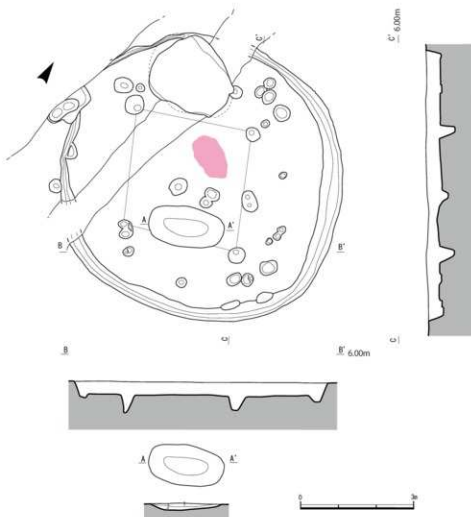
第173図 SH006 遺構実測図 (1/100)



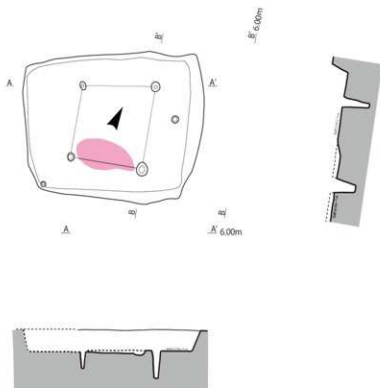
第174図 SH007 遺構実測図 (1/100)



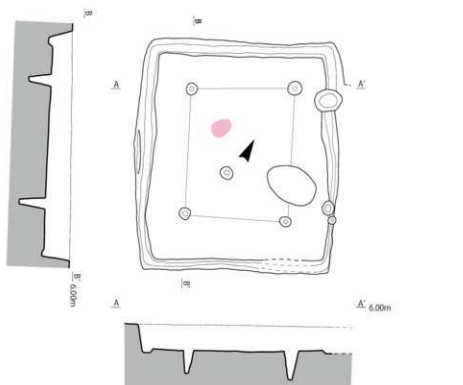
第 175 図 SH009 遺構実測図 (1/100)



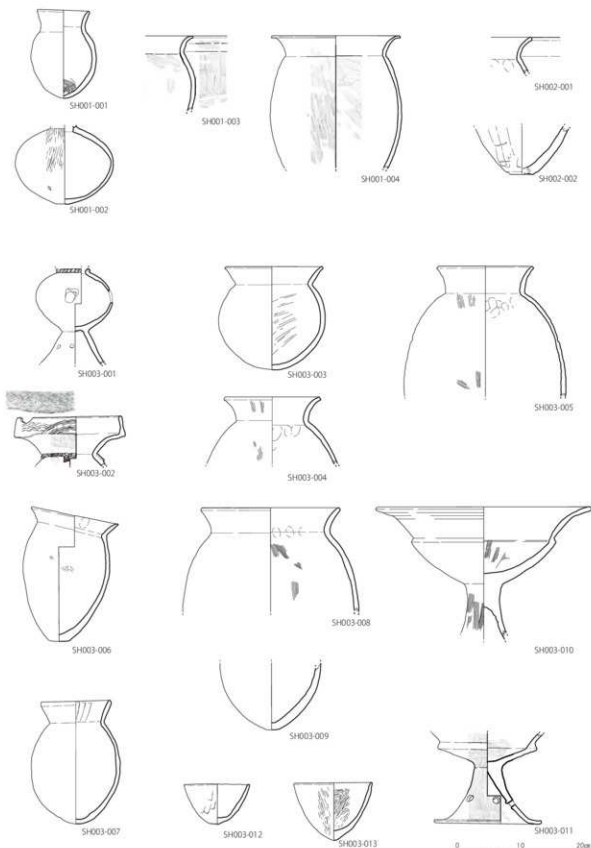
第 176 図 SH012 遺構実測図 (1/100)



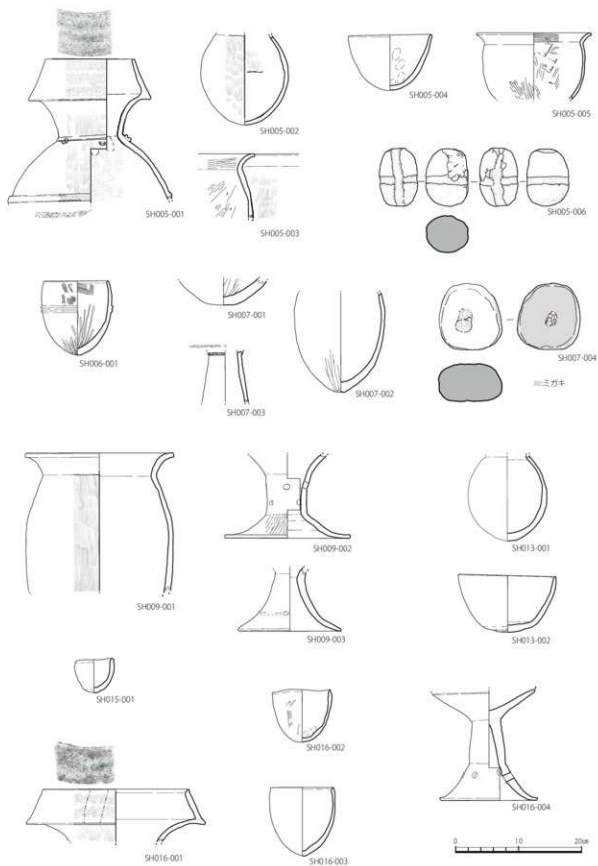
第 177 图 SH013 道槽实测图 (1/100)



第 178 图 SH016 道槽实测图 (1/100)



第179图 SH001・002・003 出土遺物実測図 (1/6)



第180图 SH005・006・007・009・013・015・016 出土遺物実測図 (1/6)

土器棺墓（SJ）

調査区のほぼ中央東寄りの地点において2基の土器棺墓を確認した。いずれも壺が使用されている。両者は切り合っており、先後関係を確認することができる。すなわち切り合い関係から判明する両者の先後関係は039SJ101（古）→039SJ102（新）である。

039SJ101（第181図）

039SJ101の平面プランは隅丸方形である。土坑の規模は0.62 m×0.54 m、深さ0.31 mであり、底面はフラットに成形されており、土器棺はほぼ水平に埋置されている。上下棺とも頸部上部を打ち欠き土器棺として使用している。一方は胴部にいわゆるベルト状突帯を貼付するものであり、他方は装飾のない壺の底部を使用している。内部は空洞となっており、何も残っていなかった。001は淡黄褐色を呈し、器面をハケ目により調整する壺の胴部破片である。胴部最大径25.7 cmを測る。僅かに平底の底部を残し、その径は3.1～3.8 cmである。002は体部に幅広の粘土紐を貼り付け、格子状の刻みを施すベルト状突帯を貼付する壺の体部資料である。淡茶褐色を呈し、器面はハケ目とナデにより仕上げられる。胴部最大径は31.0 cmである。こうした突帯を有する壺は安国寺式タイプの複合口縁壺に多く、本資料も複合口縁壺の胴部である可能性が高い。以上の特徴から弥生時代後期後葉から終末期に比定されると考えられる。

039SJ102（第182図）

039SJ102は039SJ101と切り合い関係を有する壺棺墓である。土坑は0.71 m×0.67 m、深さ0.38 mを測る。当土坑も底面はフラットに成形され、壺棺もほぼ水平に埋置される点が特徴的である。039SJ101と大きく異なる点は、壺の頸部上位を打ち欠き、その口をあらかじめ破砕した壺の破片で塞ぐという点にある。本体の壺胴部はほぼ原形を保っており、他方の壺は口を塞ぐように配置される。しかしながらその場合においても本来の壺の形状を意識し、合せ口風な形となるよう破片の配置をおこなっている。001は黄褐色を呈する壺の体部であり、頸部上位は欠失する。器面はナデにより調整されており、復元後の胴部最大径は31.0 cmを測る。002は本体として使用された壺であり、039SJ101-001と同様に体部に幅広のベルト状突帯が貼付されている、さらに頸部にも刻みを施した1条の貼り付け突帯が認められ、一部に浮文の貼付もみられる。肩部には竹管状の工具による円形の刺突文が2条一単位で7箇所認められる。淡黄褐色を呈し、器面はハケ目とナデにより調整される。039SJ001-001と同じく安国寺式タイプの複合口縁壺の体部と推定される。039SJ102は001・002の土器の特徴から弥生時代後期終末から古墳時代初頭に比定される。

土坑（SX）

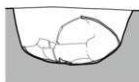
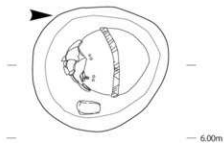
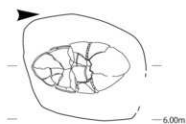
土坑は調査区全域にわたり大小さまざまなものを確認した。時期的には、弥生時代後期後半～古墳時代初頭のものが主体となるが、弥生時代中期・古墳時代前期の所産になるものも若干量認められる。

039SX014（第184図）

039SX014は調査区の中央東寄りの地点で検出した土坑である。平面プランは不整な隅丸方形を呈しており、2.61 m×2.36 m、検出面から底面までの深さ0.79 mを測る。底面はフラットに成形されている。堆積埋土に焼土を大量に含む点が特徴的である。出土遺物には甕、壺、高坏、鉢などがある。006～008のように古い遺物（弥生時代後期前葉）の混入もあるが、主体は005等の布留式系土器によって示される時期である。おおよそ古墳時代前期前葉頃を中心とする時期である。

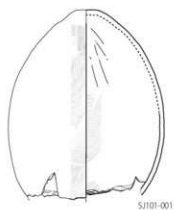
039SX025（第186図）

039SX025は調査区の西壁中央付近で検出した方形の土坑である。方形プランを呈し、現状で1.44 m×

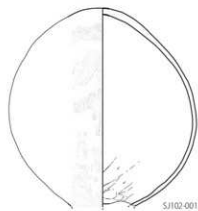


第181図 SJ101 遺構実測図 (1/20)

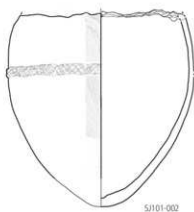
第182図 SJ102 遺構実測図 (1/20)



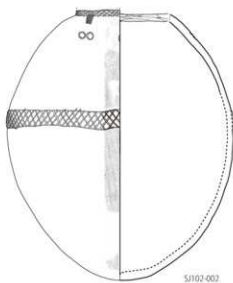
SJ101-001



SJ102-001



SJ101-002



SJ102-002



第183図 SJ101・102 出土遺物実測図 (1/6)

1.07 m、深さ 0.4 m の規模を有している。底面はフラットに成形されている。出土遺物は少なく、鉢状のミニチュア土器が出土しているのみである。弥生時代後期終末前後の所産になるものであろうか。

039SX026 (第 185 図)

039SX026 は調査区の北西隅近くで検出した不整な方形プランを呈する土坑である。現状での規模 1.35 m × 1.29 m、深さ 0.72 m を測る。埋土中に裏が廃棄された状況で検出されている。出土状態から土坑の埋没途中に遺棄されたものと考えられる。出土した裏は橙色～黒褐色を呈し、ハケ目とナデにより器面を調整する資料であり、復元口径 16.4 cm を測る。諸特徴から弥生時代後期後葉から終末期に比定される資料と考えられる。

039SX034 (第 187 図)

039SX034 は調査区の中央付近で検出した土坑である。北端を 039SH004 により切られており、欠失する。現状での遺構規模は 0.8+ a m × 0.61 m、検出面から底面までの深さ 0.08 m を測る。比較的まとまった土器の出土が認められた。出土土器は弥生時代中期後半前後に比定される土器群であり、東北部九州系甕、下城式甕、広口甕などがある。

039SX035 (第 188 図)

039SX035 は調査区のほぼ中央部分で検出した土坑であるが、北半分のほとんどを後出の遺構により切られており欠失する。そのため検出時の平面プランは三日月状となっている。出土土器には甕口縁部、高坏部片などがあり、弥生時代後期終末前後に比定されるものと推定される。

039SX103 (第 189 図)

039SX103 は調査区の北端付近で検出した楕円形を呈する土坑である。1.38 m × 0.72 m、深さ 0.2 m を測る。底面はフラットに成形されている。埋土中からは弥生時代中期後半前後に比定される東北部九州系甕などが出土している。

039SX104 (第 192 図)

039SX104 は調査区の北壁中央付近で検出した楕円形状を呈する土坑である。遺構の北側部分は調査区の外へとさらに延びている。現状での規模 1.16 m × 1.8+ a m、深さ 0.4 m を測る。出土遺物には鉢形のミニチュア土器がある。

039SX107 (第 190 図)

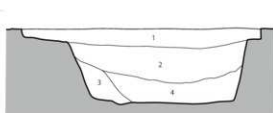
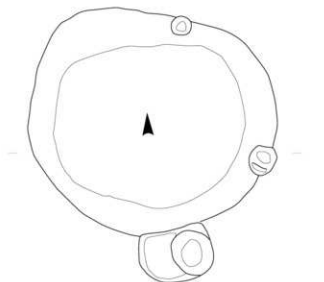
039SX107 は調査区の北東隅付近で検出した長方形プランを呈する土坑である。2.6 m × 2.0 m、検出面から底面までの深さ 0.56 m を測る。底面はフラットに成形されている。出土遺物には安国寺式タイプの複合口縁壺口縁部、張口縁部、鉢等がある。出土遺物の諸特徴から古墳時代前期前葉頃の時期が想定される。

039SX116 (第 193 図)

039SX116 は調査区のほぼ中央北寄りの位置で検出した方形プランを呈する土坑である。1.56 m × 1.68 m、深さ 0.9 m を測る。底面は比較的フラットに成形されている。埋土内からは鉢の出土が認められた。弥生時代後期終末前後の所産になるものである。

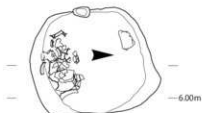
039SX131 (第 191 図)

039SX131 は調査区の北東部分で検出した小土坑であり、小型の蓋形土器が出土している。弥生時代中期に比定されるものと推定される。

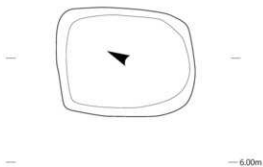


- 1 暗茶褐色土 (粘性弱)
- 2 暗黄茶褐色土 (黄土粒を多量に含む)
- 3 2+ 黄褐色土の混土
- 4 暗褐色土 (部分的に黄土を層状に含む)

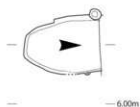
第184図 SX014 遺構実測図 (1/40)



第185図 SX026 遺構実測図 (1/40)



第186図 SX025 遺構実測図 (1/40)



第187図 SX034 遺構実測図 (1/40)

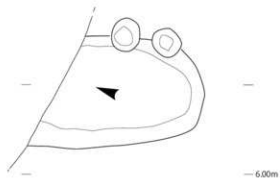


第188図 SX035 遺構実測図 (1/40)

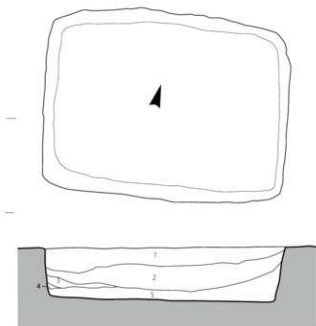




第189図 SX103 遺構実測図 (1/40)

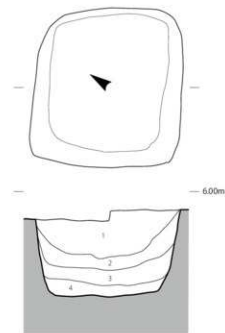


第192図 SX104 遺構実測図 (1/40)



- 1 暗茶褐色土(硬質。カーボン、焼土塊を少量含む)
- 2 茶褐色土(硬質。焼土、カーボン粒を含む)
- 3 カーボン。焼土の混土
- 4 3+2の混土
- 5 茶褐色土(基本的に2と同じ)

第190図 SX107 遺構実測図 (1/40)



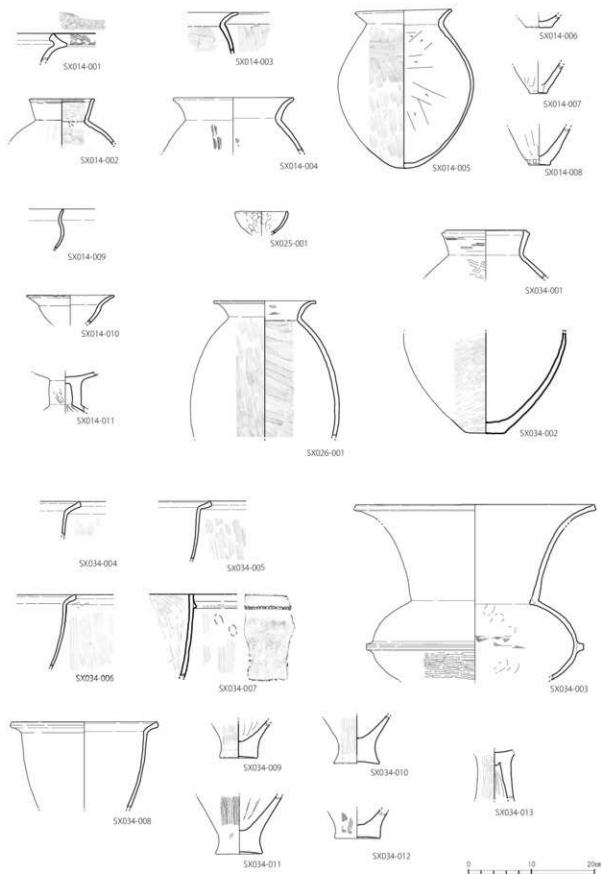
- 1 黄茶褐色粘質土
- 2 暗茶褐色粘質土
- 3 茶褐色粘質土
- 4 3+ 灰茶褐色砂質土の混土

第193図 SX116 遺構実測図 (1/40)

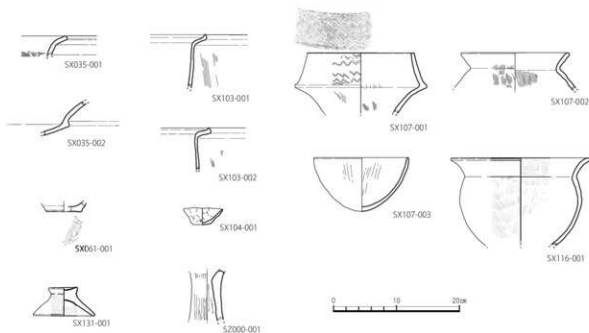


第191図 SX131 遺構実測図 (1/40)





第194圖 SX014・025・026・034出土遺物実測圖 (1/6)



第195図 SX035・061・103・104・107・116・131・表土(SZ000)出土遺物実測図(1/6)

第65表 遺物観察表①

遺物番号	発掘 番号	種類	器種	土質	色 調		断面調整		法		量 (cm)		遺存率	備考
					内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大 胴部	底径		
039SX122-001	167	陶磁器	碗											別表
039SX142-001	167	陶磁器	皿											別表
039SD021-001	167	陶磁器	碗											別表
039SD023-001	167	土師器	杯	石垂 角閃石 白色粒子 砂粒	乳白色	乳白色	回転ナデ	回転ナデ 回転糸切り 磨						口縁部・ 底面片
039SD023-002	167	瓦	平瓦	精良 白色粒子	暗灰褐色	暗灰褐色								(厚さ) 2.4
039SH001-001	179	弥生土器	甕	角閃石 石英 白色粒子	褐色	褐色	ヨコナデ ナデ ハケ目	ナデ	3.3	14.1	10.4	—	完存	ハケ目(内面 7~8本/cm) 外面黒変
039SH001-002	179	弥生土器	長頸甕	長石 白色粒子	褐色	褐色	ナデ	ミガキ			15.6	2.3	体部のみ	外面黒変
039SH001-003	179	弥生土器	甕	角閃石 長石 石英 白色粒子	にぶい褐色	明赤褐色	ハケ目 ナデ	ナデ ハケ目						ハケ目(外面 5~6本・4 ~5本/cm)
039SH001-004	179	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	褐色	褐色	ハケ目 ナデ	ナデ ハケ目	(20.5)		(21.0)	—	全体の 1/4	ハケ目(内面 4~5本/cm 外面7~8本 /cm・4~5 本/cm) 外面黒変
039SH002-001	179	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	褐色	褐色	ヨコナデ ハケ目後指 オサエ	ヨコナデ ナデ						口縁部片
039SH002-002	179	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	褐色	にぶい褐色 ~黒色	ナデ	工具ナデ ヨコナデ ナデ				(3.7)	底面片	内面底部黒変
039SH003-001	179	弥生土器	台付甕	角閃石 長石 白色粒子	浅黄褐色~ 赤色	浅黄褐色~ 赤色	ナデ	ナデ	(15.2)	12.2				穿孔胴部1ヶ 所・脚部7ヶ 所 赤色塗彩
039SH003-002	179	弥生土器	複合口縁甕	角閃石 長石 白色粒子	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ハケ目 ナデ	16.5	(7.9)				ハケ(外面9 ~10本・6~ 7本/cm)
039SH003-003	179	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	赤色	赤色~ 浅黄褐色	ナデ	ナデ	(15.6)	16.4	16.9			完形 口縁部 2/3欠損 赤色塗彩 痕(約断)

第 66 表 遺物観察表②

遺物番号	採掘番号	器 種		胎土	色 調		器底調整		法 量 (cm)				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
039SH003-004	179	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	浅黄褐色	黄褐色	ナデ	ハケ目 ナデ	(15.4)	(10.7)			口縁部～ 胴部	
039SH003-005	179	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	浅黄褐色 ～褐色	褐色	ナデ オサエ	ハケ目	(15.2)				口縁部～ 体部	調整内外面不 明瞭
039SH003-006	179	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	浅黄褐色	黄褐色	指オサエ ナデ	ヨコナデ ハケ目後ナ デ	14.1	21.4	13.7	3.2	完存	
039SH003-007	179	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	黄褐色 ～褐色	黄褐色 ～灰黄褐色	ナデ ヨコナデ	不明 ナデ?	10.9	19.7	14.0		口縁部 1/3 欠損	外面黒変
039SH003-008	179	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	浅黄褐色	黄褐色	指ナデ 指オサエ? ハケ目	不明	(22.2)				口縁部	ハケ目 (内面 7～8 本/cm)
039SH003-009	179	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	浅黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ				2.0	底部	黒変
039SH003-010	179	弥生土器	高坏	角閃石 長石	褐色	褐色	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	(34.0)	(21.3)			坏部 ～胴部	外面赤色塗彩
039SH003-011	179	弥生土器	高坏	角閃石 長石 白色粒子	赤色 ～黄褐色	赤色 ～浅黄褐色	ナデ ミガキ	ナデ ハケ目	(14.3)			(17.0)	口縁部～ 底部	胴部穿孔 5ヶ 所 ハケ目 (外面 6～7 本・7 ～8 本/cm) 外面赤色塗彩
039SH003-012	179	弥生土器	鉢	角閃石 石英 白色粒子	褐色	浅黄褐色	ヨコナデ 指オサエ後 ナデ	ナデ	(10.4)	6.4			口縁 2/3 欠損	
039SH003-013	179	弥生土器	鉢	角閃石 長石 石英 白色粒子	浅黄褐色	浅黄褐色～ 黒色	ミガキ ナデ	ヨコナデ ミガキ ナデ	12.5	9.3			完存	外面黒変
039SH005-001	180	弥生土器	複合口縁部	長石 角閃石 石英 白色粒子	褐色 ～浅黄褐色	褐色	ナデ オサエ ハケ目	ナデ ハケ目	13.5	(23.6)			口縁部～ 体部	ハケ目 (外面 11～12 本 /cm・10～ 11 本/cm)
039SH005-002	180	弥生土器	甕	長石 角閃石 白色粒子	浅黄褐色	浅黄褐色	指オサエ ナデ	ハケ目 ミガキ ナデ	(14.4)	14.0			体部のみ	ハケ目 (外面 10～11 本 /cm) 外面黒変
039SH005-003	180	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	赤褐色	明赤褐色	ミガキ ナデ ケズリ	ナデ ハケ目	(10.2)				口縁部	ハケ目単位不 明
039SH005-004	180	弥生土器	鉢	長石 角閃石 白色粒子	明赤褐色	褐色 ～明赤褐色	指オサエ ナデ	ナデ	13.4	9.0			完形 口縁部一 部欠損	外面一部黒変
039SH005-005	180	弥生土器	鉢	角閃石 長石 白色粒子	黄褐色 ～黒褐色	明褐色 黒色	ミガキ ハケ目 ナデ	ナデ ミガキ	(18.4)	(10.6)			口縁～胴 部	外面黒変
039SH005-006	180	石蒜	石蒜											別表
039SH006-001	180	弥生土器	鉢	角閃石 長石 石英 白色粒子	にぶい、褐色 ～褐色	赤褐色 ～黄褐色	ハケ目 ナデ ミガキ	ハケ目 ナデ ミガキ	10.1	11.8	11.4		完存	ハケ目 (内面 5～6 本/cm 外面 6 本 /cm) 外面赤色塗彩
039SH007-001	180	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	灰黄色	褐色 ～灰黄色 黒色	工具ナデ	ナデ				4.8	底部	外面一部黒変
039SH007-002	180	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	ナデ	ナデ	(15.8)	(14.8)	1.3		全体の 1/3	
039SH007-003	180	弥生土器	高坏	角閃石 長石 黒色粒子	褐色	褐色	ナデ	ナデ			(脚部 上端) (5.6)		脚部	
039SH007-004	180	石蒜	磨石×最石											別表
039SH009-001	180	弥生土器	甕	長石 白色粒子	褐色	黄褐色	ナデ 工具ナデ	ナデ ハケ目	(23.6)		(23.5)		口縁部～ 体部 1/3	ハケ目 (外面 9～10 本 /cm)
039SH009-002	180	弥生土器	器台	角閃石 長石 白色粒子	黄褐色	褐色	ナデ	ミガキ	(13.4)			(20.0)	脚部～底 部	外面赤色塗彩 穿孔 8ヶ所
039SH009-003	180	弥生土器	高坏	角閃石 長石 白色粒子	にぶい、黄褐色	黄褐色 赤色	ナデ	ナデ	(10.1)			16.4	脚部	外面赤色塗彩

第 67 表 遺物調査表③

遺物番号	探検番号	器 種		土質	色 調		器面調整		法 量 (cm)				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
039SH013-001	180	弥生土器	甕	長石 石英 白色粒子	褐色	にぶい黄褐色	ナデ?	ナデ?		(12.4)	12.6		体部のみ	外面黒変
039SH013-002	180	弥生土器	鉢	角閃石 長石 白色粒子	黄褐色 ～浅黄褐色	にぶい黄褐色 ～黒色	ナデ オサエ	ナデ ミガキ	15.1	9.2		8.2	完存	底部黒変
039SH015-001	180	弥生土器	鉢? × ミニ チュア土器	長石 角閃石 白色粒子 褐色粒子	褐色	淡褐色 ～浅黄褐色	工具ナデ	ナデ	5.8	5.5			完存	千づくね
039SH016-001	180	弥生土器	複合口縁甕	長石 白色粒子 黒色粒子	褐色 ～浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ 瓶オサエ	ナデ ハケ目	(23.0)	(8.4)			口縁部 1/2	外面赤色塗彩 ハケ目 (外面 7～8本/cm)
039SH016-002	180	弥生土器	鉢	角閃石 長石	浅黄褐色 ～褐色	浅黄褐色 ～褐色	瓶オサエ ナデ	ヨコナデ ハケ目	9.1	8.4			口縁部 1/3 欠損	外面赤色塗彩
039SH016-003	180	弥生土器	鉢	長石 角閃石 石英 白色粒子	褐色 ～浅黄褐色	褐色～赤色	ナデ	ナデ	9.9	10.9			口縁 1/2 欠損	内外面赤色塗彩 (殆ど剥落)
039SH016-004	180	弥生土器	高環	角閃石 白色粒子	黄褐色	浅黄褐色～ 赤色	ナデ	ナデ	(17.6)			15.6	口縁部欠 損	外面赤色塗彩
039SJ101-001	183	弥生土器	甕	角閃石 長石 石英	淡茶褐色	浅黄褐色 ～赤褐色	ハケ目 工具ナデ	ハケ目			25.7	3.1～ 3.8	胴部のみ	弥生後期終末 口縁～胴上部 打ち欠き ハケ目 (内面 4～5・5～6 本/cm 外面 4～5・10～ 12本/cm)
039SJ101-002	183	弥生土器	甕	角閃石 長石 石英 白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 瓶オサエ	ハケ目 ナデ			31.0		胴部のみ	弥生後期終末 口縁～胴上部 打ち欠き 外面黒変あり
039SJ102-001	183	弥生土器	甕	角閃石 石英 白色粒子	黄褐色	黄褐色	ナデ	ハケナデ			31.0		胴部のみ	弥生後期終末 口縁部～頸部 打ち欠き 黒変あり
039SJ102-002	183	弥生土器	甕	角閃石 長石 石英 金雲母	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ハケ目 ナデ			37.5		胴部のみ	弥生後期終末 口縁～頸部打 ち欠き 外面黒変あり
039SX014-001	194	土師器	複合口縁甕	角閃石 長石	浅黄褐色	灰白色	ナデ ヨコナデ	ナデ					口縁部片	内面赤色塗 彩?
039SX014-002	194	土師器	甕	角閃石 長石 砂粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ目 ミガキ ナデ	ナデ	(10.6)				口縁部片	ハケ目 (内外 面 6～7本 /cm) 赤色塗彩
039SX014-003	194	土師器	甕	角閃石 石英 砂粒子	明黄褐色	黄褐色	ハケ目 ナデ	ナデ ハケ目					口縁部片	ハケ目 (内面 5～6本/cm 外面 6～7 本/cm)
039SX014-004	194	土師器	甕	長石 角閃石	浅黄褐色	明黄褐色	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	(19.0)	(8.7)			口縁部片	
039SX014-005	194	土師器	甕	角閃石 長石 白色粒子 褐色粒子	浅黄褐色 ～暗赤褐色	浅黄褐色 ～灰褐色	ナデ ケズリ	ナデ ハケ目	15.4	25.2	21.6		全体の 3/4 残	ハケ目 (外 面 8～9本 /cm・12～ 13本/cm) 外面スス
039SX014-006	194	土師器	甕	長石 白色粒子	褐灰色	明黄褐色	ナデ	ナデ				(4.5)	底部片	
039SX014-007	194	土師器	甕	角閃石 長石 石英 褐色粒子	にぶい黄褐色	褐色	ナデ	ナデ 工具ナデ				(2.6)	底部片	
039SX014-008	194	土師器	甕	角閃石 白色粒子	黒褐色	黄褐色	ナデ	工具ナデ ナデ	(6.0)			(3.4)	底部片	内面黒変
039SX014-009	194	土師器	鉢	角閃石 砂粒子	浅黄褐色	黄褐色	ナデ?	ナデ?						内外面とも摩 滅顕著。調整 不明
039SX014-010	194	土師器	高環	長石 白色粒子	褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	(14.0)	(4.6)			口縁部片	口縁打ち欠 き?
039SX014-011	194	土師器	高環	角閃石 長石 白色粒子	赤褐色～ 明黄褐色	赤褐色	ナデ	ナデ					胴部片	外面赤色塗彩

第 68 表 遺物観察表④

遺物番号	採掘番号	器 種		胎土	色 調		器面調整		法 量 (cm)				遺存率	備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径			
039SX025-001	194	弥生土器	土器	角閃石 長石 黒色粒子 白色粒子	黒褐色～ 淡黄褐色	黒褐色	胎オサエ ナデ	胎オサエ ナデ	(8.0)	(3.6)			全体 1/2		
039SX026-001	194	弥生土器	甕	角閃石 石英 白色粒子	褐色～ 黒褐色	褐色～ 黒褐色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ	(16.4)	(21.6)	(23.6)	—	全体 1/2 欠損	ハケ目 (内 面) 5～6 本 /cm・6～7 本 /cm 外面 6～7 本 /cm 外面スス	
039SX034-001	194	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	黒褐色 ～灰褐色	明黄褐色～ 黒褐色	ナデ	ヨコナデ ミガキ	(14.0)	(7.4)			口縁部片	内面黒変 外面スス	
039SX034-002	194	弥生土器	甕	長石 角閃石 白色粒子	黒褐色 ～黄灰色	明黄褐色～ 黒色	ナデ	ミガキ ナデ		(16.0)	25.7	6.3	底部・体 部片	外面スス	
039SX034-003	194	弥生土器	広口甕	角閃石 長石 白色粒子 雲母	浅黄褐色	灰白色	ナデ オサエ	ナデ オサエ ミガキ	(38.6)	(28.0)	(34.6)		全体 1/3	同上復元	
039SX034-004	194	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	浅黄褐色	明黄褐色～ 褐色	ナデ	ナデ ハケ目 オサエ					口縁部片	東北部九州系	
039SX034-005	194	弥生土器	甕	角閃石 長石 褐色粒子	浅黄褐色～ 黄褐色	淡黄色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ハケ目					口縁部片	東北部九州系 ハケ目 (外面 5～6 本 /cm)	
039SX034-006	194	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	灰黄色	オリブ黒 灰黄色	ナデ	ヨコナデ ハケ目					口縁部片	東北部九州系 ハケ目 (外面 4 本 /cm)	
039SX034-007	194	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	にふい黄褐色 ～黒褐色	にふい黄褐色	ミガキ	ナデ 胎オサエ ハケ目					口縁部片		
039SX034-008	194	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	黄灰色 ～浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ヨコナデ ナデ (ハケ 目?)	(23.0)	(13.7)			口縁部片	東北部九州系	
039SX034-009	194	弥生土器	甕	角閃石 石英 白色粒子	黒褐色 ～黄褐色	にふい黄褐色	ナデ 工具ナデ オサエ	ハケ目 ヨコナデ				6.1	底部	東北部九州系 ハケ目 (外面 6～7 本 /cm)	
039SX034-010	194	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子 砂粒	浅黄色	黄褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					7.3	底部	東北部九州系 ハケ目 (外面 5 本 /cm)
039SX034-011	194	弥生土器	甕	長石 角閃石 砂粒	暗灰黄色	明黄褐色	工具オサエ ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					7.4	底部片	東北部九州系 ハケ目 (外面 4～5 本 /cm)
039SX034-012	194	弥生土器	甕	長石 3mm～ 5mm 石英 砂粒	灰黄色	褐色	工具オサエ ナデ	ハケ目 ナデ					7.3	底部	
039SX034-013	194	弥生土器	高坏	角閃石 石英 白色粒子	灰黄色	灰黄色 ～暗灰黄色	ナデ	ミガキ						脚柱	
039SX035-001	195	弥生土器	甕	長石 黒色粒子 褐色粒子	明黄褐色	にふい褐色	ヨコナデ ハケ目	ナデ						口縁部	
039SX035-002	195	弥生土器	高坏	角閃石 長石 白色粒子	明赤褐色～ 黒褐色	赤色～ 黄褐色	ナデ	ナデ						坏部片	赤色塗彩
039SX061-001	195	土師器	不明	石英 角閃石 長石 白色粒子 赤色粒子	明褐色	明褐色	回転ナデ	糸切り継後 ナデ 回転ナデ				(5.4)	底部片	全体的に摩滅	
039SX103-001	195	弥生土器	甕	角閃石 石英 白色粒子	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケナデ ナデ	ナデ ハケ目						口縁部片	東北部九州系
039SX103-002	195	弥生土器	甕	長石 白色粒子	淡灰白色	淡灰白色	ナデ ハケナデナデ	ナデ ハケ目後ナ デ						口縁部片	東北部九州系
039SX104-001	195	弥生土器	ミニチュア 土器	角閃石 長石 白色粒子	にふい黄褐色 ～黄褐色	黒褐色～ にふい黄褐色	ナデ	胎オサエ ナデ	(6.2)	2.5			口縁部 2/3 欠損	全面黒変	
039SX107-001	195	弥生土器	複合口縁甕	長石 角閃石 褐色粒子	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケ目後ナ デ ナデ オサエ	ナデ ハケナデ	(17.0)	(9.6)				口縁部	

第 69 表 遺物観察表⑤

遺物番号	押印番号	器 種		土質	色 調		器面調整		法 量 (cm)				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
039SX107-002	194	弥生土器	甕	長石 石英 角閃石 白色粒子	明褐色	灰褐色	ナデ ハケ目	ハケ目後ナデ ハケ目	(17.2)	(6.0)			口縁部欠損	外面一部赤色 塗彩？ ハケ目（内面 5～6本/cm）
039SX107-003	194	弥生土器	鉢	長石 白色粒子	褐色 ～浅黄褐色	褐色 ～浅黄褐色	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	(15.2)	8.0			口縁部 3/4欠損	
039SX116-001	194	弥生土器	甕	長石 角閃石 白色粒子	黒褐色	にぶい黄褐色	ナズリ ミガキ ナデ	ハケ目 ナデ	(22.2)				底部欠損	
039SX131-001	194	弥生土器	蓋×器台	砂粒子 褐色粒子 白色粒子 角閃石	明赤褐色	赤褐色 ～明赤褐色	ナデ ハケ目	ナデ ミガキ	9.5	4.6			体部1/5 欠損	
SZ000-001	194	弥生土器	高杯	角閃石 長石 褐色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ミガキ					脚柱	

第 70 表 陶磁器観察表

遺物番号	押印番号	器 種		装 飾		法 量 (cm)			産地	備考
		種類	器種	絵付け釉薬	文様	口径	器高	底径		
039SX122-001	167	磁器	碗	青磁 明灰緑色の平透明		—		—	中国	
039SX142-001	167	磁器	皿	青花 明緑灰の透明釉	(内) 花卉文		2.3			湯州窯系 株司皿
039SD021-001	167	磁器	碗	青磁 灰緑色の透明釉	(外) しのぎ蓮弁	—		—		買入

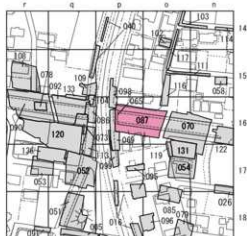
第 71 表 石器観察表

遺物番号	押印番号	器 種		石材	法 量 (cm)				備考
		種類	器種		長さ	幅	厚さ	重さ (g)	
039SH005-006	180	石鎌		安山岩	9.4	6.0	6.5	500.0	
039SH007-004	180	磨石×磨石		安山岩	10.5	10.0	6.0	1100.0	断面の全面・表裏面中央に敲打痕跡あり

第2節 下部遺跡群第87次調査

(1) はじめに

下部遺跡群第87次調査は区画街路・庄の原佐野線の築造に伴う事前調査として実施した。総調査面積は1,596.6㎡である。調査の結果、縄文時代後期から近世の遺構・遺物を検出した。検出遺構の主体は弥生時代中期であり、古代、中世がこれに続く。縄文時代に関しては縄文時代後期に編年される土器破片数点が弥生土器と混在する状況で出土している。この時期に帰属する遺構の確認はなされていないが、当地点の周辺調査区では縄文土器の出土が数点単位で確認されており、付近に当該期の遺構が存在している可能性を指摘できる。弥生時代の遺構に関しては、竪穴住居跡、土坑等がある。中世のものには3基の井戸跡があり、これらの井戸跡は構築時期が近接している。



第196図 調査地点位置図

(2) 遺構と遺物

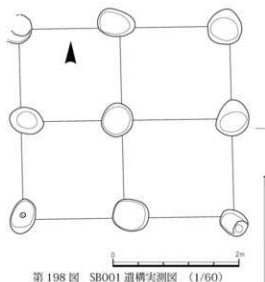
掘立柱建物跡 (SB)

087SB001 (第198図)

087SB001は087SH833の上部において検出された2間×2間(3.4m×3.0m)の掘立柱建物跡である。主軸方位はN-65°Eを示す。柱穴内からの出土遺物は皆無であり、帰属時期等は不明である。弥生時代中期の遺構と重複していることから、弥生時代中期以降のものと判断される。

第72表 遺構一覧表

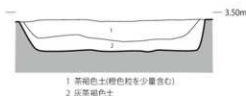
遺構記号	遺物	時期	地区
087SB001		弥生時代中期以降	L~M-12
087SD100	土師器環口縁部片、白磁碗	8世紀後半~末	K~C-11
087SD177		中世以降	K~C-13
087SD244	土師器環口縁部片、白磁碗、青磁碗・皿	11世紀末~12世紀前半	K~C-16
087SE074	土師器皿・碗、瓦器鉢・皿、土師器環口縁部片、白磁碗	12世紀前半	O~I0
087SE360	土師器碗、土師器鉢、白磁碗、砥石	12世紀前半	B-10
087SE670	土師器小皿・碗	12世紀前半	L~M-19
087SH478	カマド支柱石	6世紀後半	L~L-13
087SH559	弥生土器壺・甕・鉢口縁部片・底部片・高杯、磨製石鏝	弥生時代中期末~後期初頭	L~M-19
087SX007	弥生土器甕、下城式土器片	弥生時代中期末	O~8
087SX025	弥生土器環口縁部片・鉢・甕口縁部片	弥生時代中期末~末	L~M-8
087SX106	弥生土器片	弥生時代中期末	O-12
087SX200	弥生土器片	弥生時代	N-13
087SX215	弥生土器壺底部・甕	弥生時代中期末	B-13
087SX254	弥生土器壺底部・甕口縁部片・鉢・甕口縁部片・高杯	弥生時代中期末~後半	M-12
087SX429	弥生土器壺口縁部片・鉢口縁部片・甕・甕口縁部片・底部、磨石・砥石	弥生時代中期末後半	N-14
087SX556	磨製石鏝	弥生時代	N-14
087SX608	弥生土器壺・甕口縁部片・底部、磨石	弥生時代	L-12
087SX741	弥生土器甕口縁部片・底部、鉢口縁部片・台付鉢	弥生時代	L-19



第198図 SB001 遺構実測図 (1/60)

溝状遺構 (SD)

南北方向に走る溝状遺構3条を検出した。



第199図 SD100 土層断面実測図 (1/20)



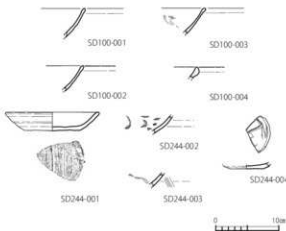
第200図 SD177 土層断面実測図 (1/20)



第201図 SD244 土層断面実測図 (1/20)

087SD100 (第199図)

087SD100は調査区の中央西側に位置しており、検出面での幅約1.0mを測り、溝底面幅約0.85m、深さ0.3mを測る。南北端は調査区外に展開しており、調査区内の約29mについて検出し、調査を実施した。溝の断面形状は逆台形を呈し、N-5°-Eの方向に展開する。出土遺物には8世紀後半から末に比定される土師器蓋や碗の底部片が多くみられる。しかしながら、数は少ないものの、埋土中から白色研磨土師器片や白磁碗IV類等が出土していることから、12世紀後半前後の所産になるものと推定される。



第202図 SD100・244 出土遺物実測図 (1/6)

087SD177 (第200図)

087SD177は調査区のほぼ中央に位置する南北溝である。検出面での幅0.3～0.4mを測り、深さ約0.3～0.4mを測る。本溝も南北端が調査区外に展開しており約27mについて検出し完掘した。溝の断面形状はU字形を呈しており、N-15°-Eの方向に展開する。出土遺物には双孔棒状土錘の他、白磁の小破片等がみられることから中世以降の所産と考えられる。

087SD244 (第202図)

087SD244は087SD177の東側に位置する溝状遺構である。南北方向に延びており、調査区内に存する約29mについて調査を実施した。溝の展開方位はN-10°-Eを示す。調査区の北側部分での溝幅約1.0m、南側では0.6mを測る。深さについては北側で0.5～0.6m、南側で0.4mを測る。溝の断面形状は北側ではV字状を呈し、南側では次第に鈍くなりU字形に近くなる。出土遺物に底部に回転系切り離し痕を残す土師器環、白磁碗IV類、緑釉陶器片がみられる。12世紀前半前後の所産と考えられる。

井戸跡 (SE)

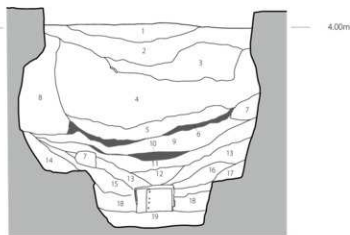
井戸跡には素掘りのもの1基 (087SE670)、基底部に曲物を有するもの2基 (087SE074・087SE360)を確認した。いずれの井戸跡からも瓦器椀、土師器小皿、白磁碗Ⅳ類、白色研磨土師器片などが出土し、12世紀前半代の所産年代を推定できる。



087SE074 (第203図)

調査区西側の中央付近で検出した井戸跡である。円形プランを呈しており、検出面から1.82 m下位の位置に高さ0.28 m、径0.4 mの曲物を埋置し、水溜部を形成している。上部には大きな挟りが認められることから、井戸側などは存在せず、機能時から素掘りであったと推定される。

出土遺物には、土師器小皿、白色研磨土師器椀、瓦器椀、瓦器小皿、土師器鍋、土師器碗Ⅳ類などがあり、これらの遺物様相から12世紀前半前後の所産になるものと推定される。



087SE360 (第204図)

087SE360は調査区西側の南壁近くで検出した井戸跡である。掘り方は円形プランを呈し、径3.34 mを測る。検出面から2.24 m下位の底面をフラットに成形し、ほぼ中央にあたる位置に径0.6 m、現存高さ0.36 mの曲物を埋置し、水溜部を形成する。本井戸も上部に挟りが認められる点から、機能時に上位は素掘りであったと考えられる。

出土遺物には、土師器椀、黒色土器B類椀、土師器鉢、須恵器鉢片、白磁碗Ⅳ類、砥石片等が出土している。002は黒色土器B類椀であり、復元口径13.2 cm、器高5.7 cm、底径7.0 cmを測る。こうした遺物から11世紀末から12世紀前半前後の所産になるものと推定される。

- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| 1 黄茶褐色土層 硬質(しまっている)少量の焼土含む | 11 暗灰褐色シルト質土層 |
| 2 淡茶褐色土層 硬質(きめが細かい) | 12 暗灰褐色シルト質土層 |
| 3 暗茶褐色砂質土層(部分的に黄茶褐色土含む) | 13 淡灰褐色粘質土層(粘性は弱い) |
| 4 暗茶褐色土層(若干粘性) | 14 淡灰褐色砂質土層+淡灰白色シルト質土層(基盤土層) |
| 5 黄茶褐色粘質土層 | 15 明灰褐色粘質土層(粘性は強い) |
| 6 黒色灰層 | 16 暗黄白色シルト質土層 |
| 7 黄白色粘土ブロック | 17 淡灰褐色シルト質土層 |
| 8 黄白色粘土ブロックを含むシルト質土層 | 18 灰褐色砂質土層(基盤土層) |
| 9 暗灰褐色粘質土層 | 19 灰褐色砂 |
| 10 黒色灰層 | |

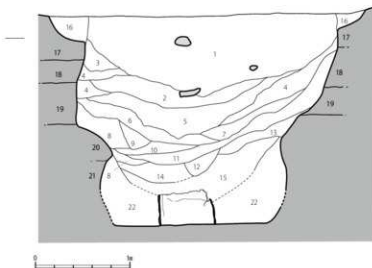
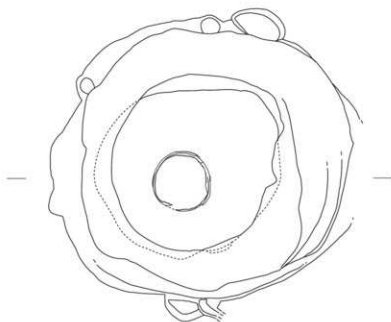
第203図 SE074 遺構実測図 (1/40)



087SE670 (第207図)

087SE670は調査区北東隅付近で検出した井戸跡である。掘り方は円形プランを呈しており、径2.5 mを測る。検出面から1.5 mまで掘り下げたが、井戸底にはいたっていない。下位に砂礫混じりの裏込めと考えられる粘質土が存在することから、機能時には井戸側が存在していた可能性が高い。上部土層はおそらく井戸側等の抜き取り時に堆積した土層であろうと推定される。

出土遺物は少ないが、底部に回転系切り離し痕をもつ土師器小皿や白色研磨土師器の底部片などが出土しており、11世紀代前後の年代が想定される。



5.0m

- 1 暗灰茶褐色土(比較的しまっている)
- 2 淡灰茶褐色粘質土(少々粘性帯びる)
- 3 灰茶褐色土(粘性小)
- 4 灰茶褐色土+黄茶褐色土の混土
- 5 暗灰茶褐色土(粘性小)
- 6 黄茶褐色土ブロック+暗灰茶褐色土の混土(前者の割合が圧倒的に多い)
- 7 灰茶褐色土+黄茶褐色土の混土(前者の割合大)
- 8 灰色細砂+黄茶褐色土
- 9 灰黄褐色土+黄茶褐色土の混土(前者の割合大)
- 10 暗灰茶褐色土+黄茶褐色土+灰色細砂の混土
- 11 黄茶褐色土+暗灰茶褐色土の混土(前者の割合大)
- 12 暗茶褐色土
- 13 暗灰茶褐色土+灰色細砂のシルト質土
- 14 暗茶褐色土+黄茶褐色土+灰色細砂の混土
- 15 灰色細砂を基調とするシルト質土
- 16 暗茶褐色硬質土
- 17 黄茶褐色土
- 18 黄茶褐色土(厚5~6程度の白色粒子を含む)
- 19 灰色細砂を基調とするシルト質土
- 20 白灰硬質土
- 21 灰黒色細砂
- 22 灰色細砂

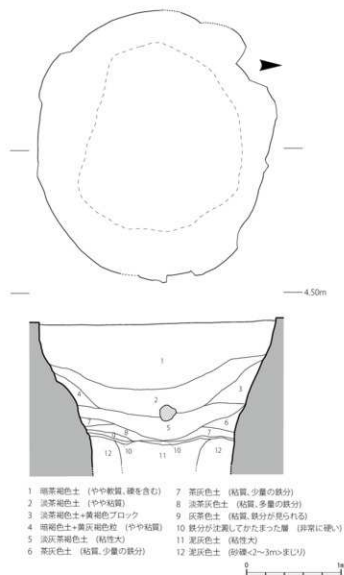
第204図 SE360 遺構実測図 (1/40)



第205図 SE360 井筒検出状況



第206図 SE360 井筒拡大



第 207 図 SE670 遺構実測図 (1/40)



第 208 図 SE670 土層断面



第 209 図 SE670 完掘状況



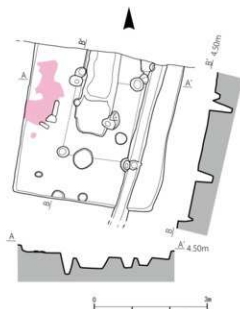
第 210 図 SE074・360・670 出土遺物実測図 (1/6)

竪穴住居跡 (SH)

今次の調査で検出した竪穴住居跡の平面プランには円形基調のものと方形基調のものの2種がある。

087SH478 (第 211 図)

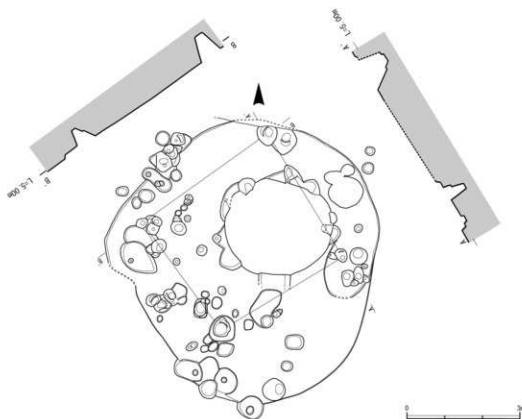
087SH478 は調査区北壁の中央付近で検出した方形プランを呈する竪穴住居跡である。主柱は4本であり、住居跡の北側部分が調査区外にあたるため、全体規模は不明であるが、現状で $3.8 \text{ m} \times 3.9 + \alpha \text{ m}$ の規模を有する。住居内の西壁中央にはカマドが付設されているが、住居廃絶時に破壊されており、焼土塊やカマド支柱石が散在する。カマド祭祀等を具体的に示す状況は確認できない。遺構の遺存状況が良好でないこともあり、出土遺物は少なく、図化可能な遺物は少ないが、住居構造等から6世紀後半頃の年代が想定される。



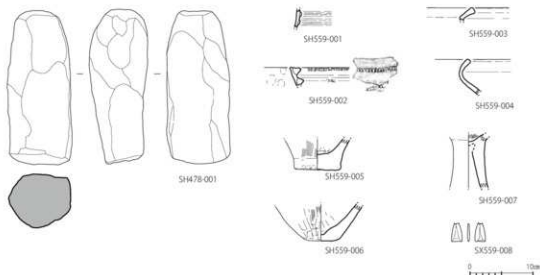
第211図 SH478 遺構実測図 (1/100)

087SH559 (第212図)

087SH559は調査区北東端において確認した径約7mを測る円形竪穴住居跡である。ほぼ中央を井戸跡(087SE670)によって大きく削平されている。また、上部の削平も著しく、検出段階ですでに床面が露呈している部分もある。主柱は4本であり、住居床面には明確に炉と認識できるような施設を確認することはできなかった。住居プランの北東隅部分に青白色粘土塊が認められている。出土遺物には東北部九州系甕の口縁部や壺、高坏にくわえ、先端の欠損した緑色結晶片岩製の磨製石鏃の出土も確認されている。出土土器の様相から、弥生時代中期末から後期前葉に比定されと考えられる。



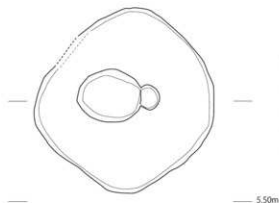
第212図 SH559 遺構実測図 (1/100)



第 213 図 SH478・559 出土遺物実測図 (1/6)

土 坑 (SX)

土坑は調査区の中央から西側にかけて比較的多く分布する。土坑の平面形状には、方形・不整形円形・長楕円形のものがある。これらは今回の調査区内において一定の規則性を見出すことができる。具体的には調査区の西側に分布するものは長軸方向が北から西に振れるのが多いのに対し、東側のものは逆に北から東側に振れる土坑が多く存在するという傾向にある。



087SX007 (第 214 図)

087SX007 は調査区の西側で検出した土坑である。検出面において長軸 1.8 m、短軸 1.7 m を測る隅丸方形プランを呈している。現存深度 0.2 m を測り、長軸方位 N-45° -W を示す。底面中央には長軸 0.7 m、短軸 0.55 m、深さ 0.2 m の掘り込み (センタービット) を有している。出土遺物は少量であるが、頸部突帯をもつ弥生時代中期の甕形土器や下城式甕形土器などの破片が出土している。

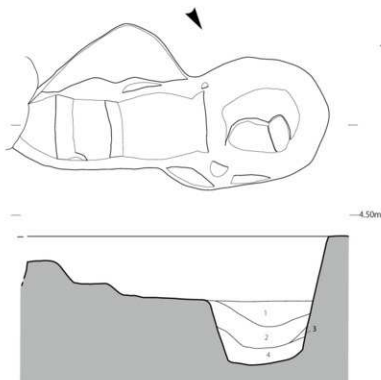


1 雨茶褐色土層
(橙色ブロックと白色ブロック・カーボンを少量含む)

第 214 図 SX007 遺構実測図 (1/40)

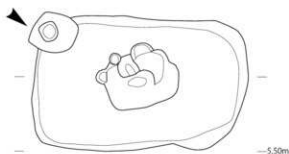
087SX025 (第 215 図)

087SX025 は調査区の西側部分に位置し、長軸 3.2+ α m、短軸 1.1 m を測り、長軸の方位 N-42° -W を示す。土坑の南東部は階段状になっており、それに伴う段部は 3 段を確認できる。最下段は 0.9 m × 0.7 m の比較的広いフラット面を形成し、他の段と比較すると 2 倍強のスペースを有している。遺構の北西部分は最終段から約 0.75 m の段差を有する円筒状の掘り込み部となっており、この部分の平面プランは径 1.3 m の円形を呈している。階段状の部分と円筒状の部分は平面精査段階において切り合い関係を確認することができなかった点や埋土に両



- 1 灰褐色土(リサ/サしている炭粒状の白黄土微量混入)
- 2 褐色土(リサ/サしている)
- 3 砂粒質灰褐色土
- 4 暗褐色土(粘り気あり)

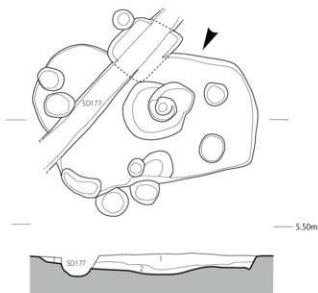
第215図 SX025 遺構実測図 (1/40)



- 1 茶褐色土(硬質, 2mmほどの赤茶色粒混入)
- 2 淡灰褐色土(やや軟質)
- 3 明灰褐色土(やや硬質, 黄白色ブロック混入)
- 4 明茶褐色土(硬質)
- 5 灰茶褐色土(やや硬質, 0.5mmほどの赤茶色粒混入)
- 6 暗褐色土(やや軟質, 1mmほどの赤茶色粒・黄白色粒混入)
- 7 黄白色土(やや軟質, 2~5mmの黄白色粒)混入

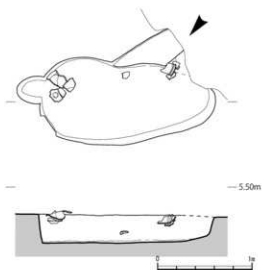


第216図 SX106 遺構実測図 (1/40)



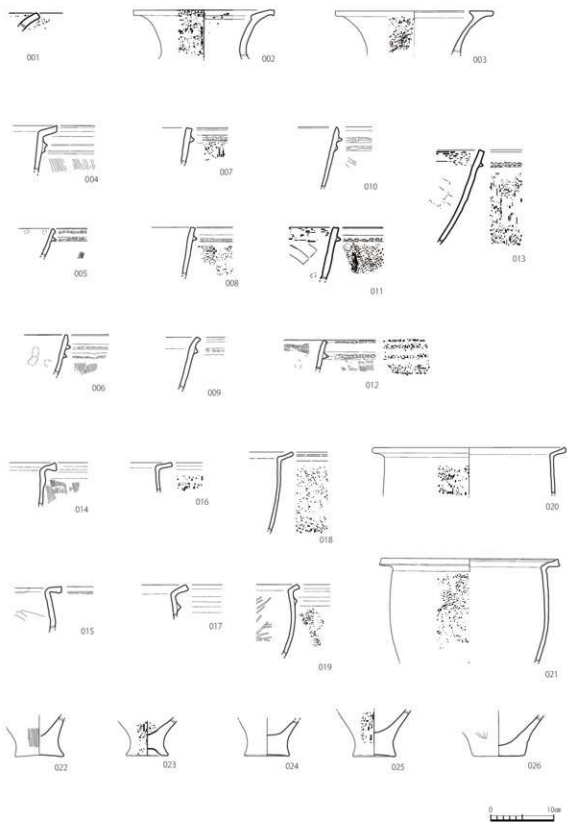
- 1 暗茶褐色土(硬質, 細かい褐色粒・黄白色粒混入)
- 2 茶褐色土と黄灰褐色土の混土層(やや硬質)

第217図 SX200 遺構実測図 (1/40)

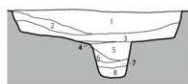
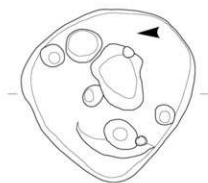


第218図 SX215 遺構実測図 (1/40)

プランを通じて連続的にまとまった状況で土器が出土している点などを考慮するとこの両者は一連の遺構である可能性が高いと考えられる。出土遺物には壺、下城式甕、東北部九州系甕などが出土している。出土土器は、弥生時代中期後半を中心とする資料である。

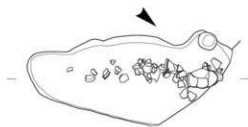


第219图 SX025出土遗物实测图 (1/6)



- 1 淡茶褐色土
- 2 淡茶灰褐色土(陶片の土層片混入)
- 3 暗灰色土(炭・焼土混入)
- 4 灰褐色土
- 5 茶褐色粘質土(炭粒子混入)
- 6 茶褐色土
- 7 暗黄色砂質土
- 8 暗黄褐色粘質土

第220図 SX254 遺構実測図 (1/40)



第221図 SX429 遺構実測図 (1/40)

087SX106 (第216図)

087SX106は長軸2.3 m、短軸1.4 mの隅丸長方形プランを呈している。現存深度約0.25 mを測り、長軸方位はN-30°-Wを示す。底面中央にセンターピットを伴う。埋土中には廃棄されたような状況で弥生時代中期中頃の土器が出土する。

087SX200 (第217図)

087SX200は調査区のほぼ中央に位置しており、087SD177により遺構の東側を一部削平されている。検出面で長軸2.3 m、短軸1.4 mを測り、不整楕円形プランを呈する。現状での深さ0.15 mを測り、長軸方位はN-60°-Eを示す。底面のほぼ中央に段落ち状の掘り込みとそこから掘り込まれる柱穴が認められる。柱穴径は約0.25～0.3 mを測り、0.25 mの深さを有する。遺物は埋土上層からまともに出土し、下層からの遺物の出土はほとんど認められない。

087SX215 (第218図)

087SX215は東側の一部を087SD177により削られている。長軸1.85 m、短軸0.9 mを測る不整楕円形プランを呈している。0.3 mの深さを有しており、長軸の方位はN-45°-Eを示す。出土遺物は概して少ない。

087SX254 (第220図)

087SX254は087SB001などによって一部削平を受けている。検出面での規模は長軸長1.85 m、短軸長1.8 mを測り、不整形を呈している。現存深度0.3 mを測り、長軸方位はN-40°-Wを示している。底面中央には深さ0.4 mのセンターピットをもつ。遺構の南側部分で丹塗りの甕形土器をはじめとして遺物の出土が認められる。また、これらの遺物とともに焼土の出土がみられた。

出土遺物には丹塗られた壺底部片、東北部九州系甕などが出土している。弥生時代中期後半に編年されるものである。

087SX429 (第221図)

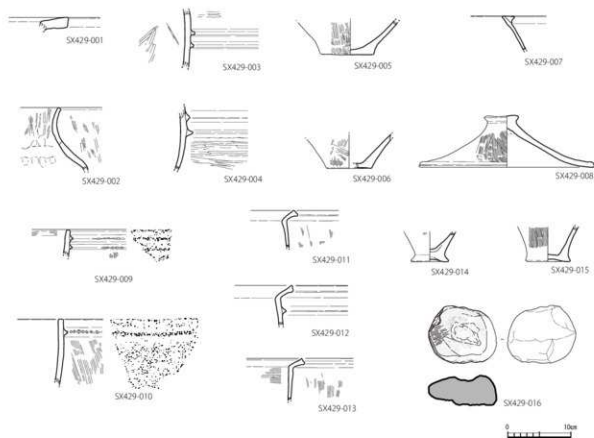
087SX429は087SD244により東側を一部削平されている。このため本来の平面プランは不明であるが、現状で長軸2.0 m、短軸1.5 mを測る不整楕円形を呈している。087SX429は089SD244の東側に位置し南西部



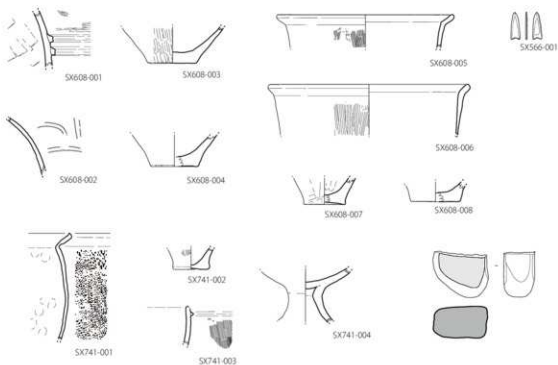
第222図 SX215・254 出土遺物実測図 (1/6)

をO87SD244により削平されている。長軸2.0+αm、軸方位N-50°-Eを示す。

出土遺物には蓋、壺、甕、鉢などがあり、これらの遺物は弥生時代中期中頃から後半を中心とするものである。



第 223 图 SX429 出土遗物实测图 (1/6)



第 224 图 SX566・608・741 出土遗物实测图 (1/6)

第73表 遺物観察表①

遺物番号	探検番号	器 種		土 質	色 調		器面調整		法 量 (cm)				遺存率	備 考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大断面	底径		
SD100-001	202	土師器	坏	石灰白色粒子	淡黄白色	淡黄白色	ナデ	ナデ					口縁部片	白色硬質土師器
SD100-002	202	土師器	坏	白色粒子 褐色粒子 石灰	淡黄白色	淡黄白色	ナデ	ナデ					口縁部片	白色硬質土師器
SD100-003	202	土師器	坏	白色粒子 褐色粒子	淡黄白色	淡黄白色	ミガキ ナデ	ナデ					口縁部片	白色硬質土師器
SD100-004	202	陶磁器	碗											別表
SD244-001	202	土師器	坏	角閃石 白色粒子 赤色粒子	淡褐色	淡褐色	ナデ 指オサエ後ナ デ	ナデ 工具ナデ 回転糸切磨し	(14.8)	2.9		(8.8)	全体 1/3	
SD244-002	202	陶磁器	碗											別表
SD244-003	202	陶磁器	碗											別表
SD244-004	202	陶磁器	皿											別表
SE074-001	210	土師器	皿	白色粒子 褐色粒子 石灰 白色粒子	暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ 回転糸切磨し	(9.0)	1.5		(6.6)	全体 1/4	
SE074-002	210	土師器	皿	褐色粒子 石灰 白色粒子	明茶褐色	明茶褐色	ナデ	ナデ 回転糸切磨し	(8.4)	1.2		(6.6)	全体 1/2	
SE074-003	210	土師器	皿	褐色粒子 白色粒子	淡灰褐色	明茶褐色 淡灰褐色	回転ナデ	ナデ 回転糸切磨し	(8.8)	1.4		(6.6)	全体 1/2	スズ付着
SE074-004	210	土師器	皿	白色粒子 雲母	明褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ 工具ナデ 回転糸切磨し	9.7	1.4		7.4	全体 4/5	
SE074-005	210	土師器	皿	白色粒子 角閃石 雲母	淡褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ 回転糸切磨し	8.8	1.4		6.8	完存	
SE074-006	210	土師器	碗	白色粒子 褐色粒子	淡黒褐色	淡灰褐色	ミガキ	ナデ ミガキ 回転糸切磨し 後ナデ				(7.6)	底部片	
SE074-007	210	土師器	碗	褐色粒子 白色粒子	淡褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	白色硬質土師器
SE074-008	210	土師器	碗	白色粒子 石灰	明灰褐色	明黄白色	ミガキ ナデ	ナデ	(15.4)				口縁部片	白色硬質土師器
SE074-009	210	土師器	碗	白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ミガキ	ナデ	(15.2)				口縁部片	白色硬質土師器
SE074-010	210	土師器	碗	石灰 褐色粒子	淡黄白色	淡黄白色	ミガキ	ナデ 回転糸切磨し 後ナデ				6.7	底部	白色硬質土師器
SE074-011	210	瓦器	碗	白色粒子	明灰白色	淡灰白色	ナデ後ミガキ	ナデ					口縁部片	
SE074-012	210	瓦器	皿	白色粒子 褐色粒子	明灰白色	暗灰白色	ミガキ ナデ	ナデ 回転糸切磨し 後ナデ	(5.6)	2.4		4.0	全体 1/2	
SE074-013	210	土師器	甕	白色粒子 角閃石	淡褐色	淡褐色	ナデ ハケ目後ナデ	ナデ					口縁部片	ハケ目単位不明
SE074-014	210	土師器	甕	石灰 白色粒子 角閃石	暗灰褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ後ナ デ	ナデ					口縁部片	
SE074-015	210	陶磁器	碗											別表
SE360-001	210	土師器	碗	長石 石灰	淡黄白色	淡黄白色	ナデ ミガキ	ナデ					口縁部片	糖質土
SE360-002	210	土師器	碗	白色粒子 褐色粒子 長石	黒色	褐色	ナデ ミガキ	ナデ	(13.2)	5.7		7.0	口縁部 1/2 ～底部 1/4	黒色土器 8 類
SE360-003	210	土師器	甕	白色粒子 長石	褐色	褐色	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目					口縁部片	念珠型 ハケ目 (内 5～6 本 外 4 本 / cm)
SE360-004	210	土師器	甕	石灰 白色粒子 褐色粒子 長石	淡茶褐色	褐色	ナデ ハケナデ	ナデ 指オサエ					口縁部片	
SE360-005	210	土師器	甕	角閃石 長石 褐色粒子	淡灰褐色 ～ 淡茶褐色		ナデ あて具板	カキ目 タタキ					胴部片	曹後大分形
SE360-006	210	陶磁器	碗											別表
SE360-007	210	石製品	砥石											別表
SE670-001	210	土師器	小皿	白色粒子 石灰	明茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ 回転糸切磨し	8.2	2.4		4.7	完存	スズ付着

第 74 表 遺物観察表②

遺物番号	検出番号	器 種		胎土	色 調		断面調整		法		量 (cm)		透存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
SE670-002	210	土師器	椀	白色粒子 石英	明黄褐色	明黄褐色	ミガキ	ナデ 工具ナデ ミガキ				(6.4)	底部 2/5	白色研磨土師器
SH478-001	213	石製品	カマド支柱石											別表
SH559-001	213	弥生土器	甕	白色粒子 長石	淡灰色	淡赤褐色	ナデ	ナデ					胴部片	外面赤色塗彩
SH559-002	213	弥生土器	甕×鉢	角閃石 長石 褐色粒子	黒褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ナデ					口縁部片	
SH559-003	213	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子 石英	暗茶褐色 淡褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	東北部九州系 外面赤色?
SH559-004	213	弥生土器	甕	長石 角閃石 白色粒子	淡褐色 明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	外面赤色塗彩
SH559-005	213	弥生土器	甕	角閃石 長石 石英 白色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	工具ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ 指オサエ				7.4	底部片	ハケ目 (6 本/cm)
SH559-006	213	弥生土器	甕	白色粒子 角閃石 長石 石粒	暗褐色	暗褐色	ナデ	ナデ 工具ナデ				5.8	底部片	
SH559-007	213	弥生土器	高坏	角閃石 長石 石英 白色粒子	暗褐色	暗褐色	ハケ目 工具ナデ	ナデ					胴部	ハケ目 (7 本/cm)
SH559-008	213	石製品	磨製石鏡											別表
SX025-001	219	弥生土器	甕	石英 長石 角閃石 白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目後ミガキ	ハケ目後ミガキ					口縁部片	ミガキの単位不明
SX025-002	219	弥生土器	甕	角閃石 長石 石英	淡黄白色	淡黄褐色	ナデ ミガキ (不明瞭)	ナデ後ミガキ ハケ目後ミガキ	(22.4)				口縁部 1/3	外面スス付着 ハケ目 (11 ~ 12 本/cm)
SX025-003	219	弥生土器	甕	長石 石英 白色粒子	淡黒褐色～ 淡白黄色	淡黄褐色 淡白黄色	ナデ後ミガキ (不明瞭)	ナデ後ミガキ	(25.2)				口縁部 1/5	内面スス付着
SX025-004	219	弥生土器	鉢	角閃石 石英	淡黄白色	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 工具ナデ ハケ目					口縁部片	ハケ目 (3 本/cm)
SX025-005	219	弥生土器	甕	長石 角閃石 石英 白色粒子	淡黄褐色	淡茶褐色	ヨコナデ 指オサエ	ナデ					口縁部片	下城式
SX025-006	219	弥生土器	甕	石英・雲母 長石 角閃石 白色粒子	淡茶褐色	淡黄褐色	ヨコナデ ナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケ目					口縁部片	下城式 ハケ目単位不明瞭
SX025-007	219	弥生土器	甕	長石 角閃石 石英	淡黄褐色	淡茶褐色	ハケ目 ナデ	ナデ ハケ目					口縁部 1/8	下城式 ハケ目 (5 ~ 6 本/cm)
SX025-008	219	弥生土器	甕	長石 角閃石 石英 白色粒子	淡黄白色	淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ハケ目					口縁部片	下城式 ハケ目 (5 ~ 6 本/cm)
SX025-009	219	弥生土器	甕	長石 角閃石 石英 褐色粒子	淡黄褐色	淡茶褐色	不明瞭	不明瞭					口縁部 1/6	下城式
SX025-010	219	弥生土器	甕	角閃石 長石 石英	淡茶褐色	淡黄褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ					口縁部 1/6	下城式 ハケ目の単位不明瞭
SX025-011	219	弥生土器	甕	角閃石 長石 石英	淡黄褐色	淡茶褐色	ハケ目 工具ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目 (内 5 ~ 6 本 外 5 ~ 6 本/cm)
SX025-012	219	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	淡褐色	明黄褐色	ナデ ハケ目 指オサエ	ナデ					口縁部片	下城式 ハケ目 (内 6 本/cm 外 単位不明)
SX025-013	219	弥生土器	甕	角閃石 石英 長石	淡白黄色	淡茶褐色	ハケ目 ナデ 工具ナデ	ナデ ハケ目					口縁部片	下城式 ハケ目 (内 6 ~ 7 本 外 6 ~ 7 本/cm)

第75表 遺物観察表③

遺物番号	採掘番号	源 種		粘土	色 調		断面調整		法 量 (cm)			遺存率	備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大断面			底径
SX025-014	219	弥生土層	甕	角閃石 長石 石英	淡白黄色	淡白茶色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ後ハケ目					口縁部 1/6	東北部九州系ハケ目 (5～6本/cm)
SX025-015	219	弥生土層	甕	白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 上段ナデ	ナデ					口縁部 1/8	東北部九州系
SX025-016	219	弥生土層	甕	石英 角閃石	淡白黄色	淡白黄色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ハケ目					口縁部片	東北部九州系 ハケ目 (10～11本/cm)
SX025-017	219	弥生土層	甕	長石 角閃石 石英 褐色粒子	淡白黄色	淡白茶色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ					口縁部 1/6	東北部九州系 内面スス付着
SX025-018	219	弥生土層	甕	石英 長石 角閃石	淡黄白色	淡黒褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目					口縁部片	東北部九州系 ハケ目 (6～7本/cm)
SX025-019	219	弥生土層	甕	長石 角閃石 石英	淡黄褐色	淡茶褐色	ヨコナデ ナデ ミガキ	ナデ ヨコナデ ハケ目					口縁部 1/8	東北部九州系 ハケ目 (9～10本/cm)
SX025-020	219	弥生土層	甕	石英 角閃石	淡白黄色	淡白黄色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ハケ目	(30.6)				口縁部 1/5	東北部九州系 ハケ目 (10～11本/cm)
SX025-021	219	弥生土層	甕	長石 角閃石 石英 褐色粒子	淡黄白色	淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ハケ目	(27.6)				口縁部 1/4	東北部九州系 ハケ目 (7～8本/cm)
SX025-022	219	弥生土層	甕	角閃石 白色粒子	淡茶色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目 ナデ				7.6	底部のみ	下城式 ハケ目 (6～7本/cm)
SX025-023	219	弥生土層	甕	角閃石 金雲母 石英	淡白黄色	淡白黄色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ハケ目後ミガキ				6.4 ～6.7	底部のみ	東北部九州系
SX025-024	219	弥生土層	甕	石英 長石 角閃石 白色粒子	淡黒褐色	淡黄白色	ナデ	ヨコナデ				7.0	底部のみ	東北部九州系
SX025-025	219	弥生土層	甕	石英 長石 角閃石 白色粒子	淡黄白色	淡黄白色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ				(6.6)	底部のみ	東北部九州系 ハケ目 (7本/cm)
SX025-026	219	弥生土層	甕	長石 角閃石 石英 褐色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ミガキ				8.2	底部のみ	
SX215-001	222	弥生土層	甕	白色粒子 石英 長石 角閃石	淡灰白色	淡黄褐色 ～暗黄褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ				7.2	底部のみ	ハケ目単位不明 外面赤色塗彩
SX215-002	222	弥生土層	甕	長石 角閃石 石英	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ ハケ目	(37.2)				口縁部～胴部片	ハケ目 (6～7本/cm)
SX215-003	222	弥生土層	甕	角閃石 長石 褐色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ハケ目 ナデ	(30.8)				口縁部～胴部片	ハケ目 (8本/cm)
SX254-001	222	弥生土層	甕	石英 角閃石 白色粒子 褐色粒子 石粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ後ミガキ ナデ 指オサエ	ナデ?				10.0	底部のみ	
SX254-002	222	弥生土層	甕	角閃石 長石 白色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ ハケ目					口縁部片	東北部九州系 ハケ目 (7～8本/cm)
SX254-003	222	弥生土層	甕	白色粒子 褐色粒子 角閃石	明黄褐色	暗茶褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	下城式
SX254-004	222	弥生土層	甕	角閃石 長石 褐色粒子	淡黄褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ ハケ目後ナデ					口縁部片	下城式
SX254-005	222	弥生土層	甕	白色粒子 石英 角閃石	暗灰褐色	暗灰褐色	ハケ目後指オサエ ナデ	ナデ ハケ目後ナデ					口縁部片	下城式 ハケ目 (内単位不明 外7～8本/cm)
SX254-006	222	弥生土層	甕	石英 褐色粒子 白色粒子	淡黄褐色	黄褐色	指オサエ後ミガキ ナデ後ミガキ	指オサエ後ナデ ナデ ハケ目後ナデ					口縁部片	下城式
SX254-007	222	弥生土層	甕	白色粒子 角閃石 石英	暗茶褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ナデ ハケ目後ナデ					口縁部片	下城式

第76表 遺物観察表④

遺物番号	図録 番号	種類	器種	土質	色 調		断面調整		法 則 (cm)		最大 口径	底径	遺存率	備考
					内面	外面	内面	外面	口径	断面				
SX254-008	222	弥生土器	甕	角閃石 白色砂子 石炭	淡黄褐色	淡灰褐色	ナデ	後ミガキ ナデ	(28.0)				口縁部 1/4	ド城式 ハケ目 (7本? / cm) 内面赤色塗布 (部分) 東北部九州系 戸塚在焼技法 ハケ目 (6~8本/cm) 外面一部黒塗
SX254-009	222	弥生土器	甕	赤色砂子 長石 角閃石	淡灰白色	淡灰白色	ナデ	ナデ ハケ目				6.9	底部のみ	
SX254-010	222	弥生土器	甕	角閃石 白色砂子 石炭	淡灰褐色	暗赤褐色	ナデ	ハケ目後ナデ ナデ				6.9	底部のみ	東北部九州系 ハケ目 (7本 / cm)
SX254-011	222	弥生土器	甕	金雲母 角閃石 白色砂子	淡黄褐色	淡黄褐色	工具ナデ	ハケ目				7.1	底部のみ	ハケ目単位不明瞭
SX254-012	222	弥生土器	甕	白色砂子 角閃石 石炭 長石	淡暗茶褐色	淡茶褐色	ナデ ミガキ 指オサエ	ハケ目後ナデ 指オサエ				6.1	底部のみ	ハケ目 (5本 / cm)
SX254-013	222	弥生土器	甕	白色砂子 石炭 角閃石	淡黄褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ				7.3	底部のみ	内外面黒塗
SX254-014	222	弥生土器	甕	白色砂子 褐色砂子 角閃石	淡灰褐色~ 黒褐色	暗黒褐色	ミガキ	ハケ目後ナデ 指オサエ ナデ				7.0	底部のみ	ハケ目 (5~6本/cm) 内外面黒塗
SX254-015	222	弥生土器	台付鉢	白色砂子 角閃石 褐色砂子	淡褐色	明褐色	ナデ 指オサエ 指オサエ後ナ デ 工具ナデ	ハケ目後ミガ キ 工具ナデ ナデ?					接合部のみ	ハケ目 (8本 / cm) 穿孔 (現存2ヶ所)
SX254-016	222	弥生土器	甕×鉢	角閃石 白色砂子	白黄褐色	褐色	ヨコナデ ミガキ	ナデ					口縁部片	
SX254-017	222	弥生土器	蓋	角閃石 長石 白色砂子	暗茶褐色	黄白色	ハケナデ	ハケ目 ナデ					口縁部片	ハケ目 (内6~8本 外5~7本 / cm)
SX254-018	222	弥生土器	高坏	角閃石 長石 白色砂子	淡白黄色	淡白黄色	ナデ	ナデ					胴部 1/3	
SX429-001	223	弥生土器	甕	石炭 白色砂子 角閃石	淡橙黄色	淡黄褐色	ナデ	ナデ 指オサエ					口縁部片	
SX429-002	223	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色砂子	明黄褐色~ 黒褐色	暗黄褐色	ナデ後ミガキ 指オサエ後ナ デ	ナデ ナデ後ミガキ					口縁部片	内外面黒塗
SX429-003	223	弥生土器	甕	褐色砂子 角閃石 石炭	淡黄褐色	淡黄褐色	ハケ目後ナデ	ナデ ミガキ					胴部片	
SX429-004	223	弥生土器	甕	角閃石 白色砂子 石炭	淡灰褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ ミガキ					胴部片	
SX429-005	223	弥生土器	甕	角閃石 長石 褐色砂子	淡黄灰白色	淡黄灰白 色	ナデ	ハケ目後ナデ ミガキ				8.4	底部のみ	
SX429-006	223	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色砂子	淡黄褐色 ~ 黒褐色	灰白色	ナデ	ナデ ミガキ				(7.2)	底部 1/2	
SX429-007	223	弥生土器	鉢	角閃石 長石 褐色砂子	淡橙白色	淡黄灰色	ナデ	ナデ					口縁部片	
SX429-008	223	弥生土器	蓋	角閃石 白色砂子	淡灰白色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目					全体 1/4	胴部径 5.4 内面口縁部黒塗
SX429-009	223	弥生土器	甕	石炭 角閃石 白色砂子	淡黄白色	淡黄白色	ナデ ハケ目後ナデ	ナデ ハケ目					口縁部片	ド城式 ハケ目 (7本 / cm)
SX429-010	223	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色砂子	淡黄褐色 ~ 淡灰白色	淡黄褐色 ~ 淡灰白色	ナデ	ハケ目後ナデ					口縁部片	ド城式 ハケ目 (4本 / cm)
SX429-011	223	弥生土器	甕	褐色砂子 角閃石 白色砂子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ナデズリ後ミガ キ	ナデ ナデ後ミガキ ハケ目後ミガ キ					口縁部片	東北部九州系 ハケ目 (7本? / cm)
SX429-012	223	弥生土器	甕	角閃石 白色砂子 褐色砂子	淡白褐色	淡黄白色	ナデ	ナデ					口縁部片	東北部九州系
SX429-013	223	弥生土器	甕	白色砂子 角閃石 石炭	淡黄灰色	淡黄灰色	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目					口縁部片	東北部九州系

第 77 表 遺物観察表⑤

遺物番号	採掘番号	器 種		土 質	色 調		器面調整		法 量 (cm)			遺存率	備 考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大断面 底径		
SX429-014	223	弥生土器	甕	角閃石 赤色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ			3.0	底部 2/3	東北部九州系 ハケ目 (4 本 / cm) 門板充填技法
SX429-015	223	弥生土器	甕	角閃石 白色粒子 赤色粒子	淡粉白色	淡黄白色	ナデ	ハケ目 ナデ			7.1	底部のみ	ハケ目 (9 本 / cm) 底部スス付着
SX429-016	223	石製品	磨石×砥石										別表
SX566-001	224	石製品	磨製石鏝										別表
SX608-001	224	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	淡粉白色	淡黄褐色	工具ナデ	ナデ ミガキ				断片	
SX608-002	224	弥生土器	甕	角閃石 長石 石英 砂粒 2 ~ 5 mm	黒灰色	淡褐色 ~ 淡茶褐色	ナデ	ナデ (ミガキ?)				断片	下城式
SX608-003	224	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	淡白黄色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ミガキ 工具ナデ ナデ			7.8	底部	全体 1/2 スス付着
SX608-004	224	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子 石英	淡茶褐色	淡黄褐色	指オサエ ナデ	ナデ 工具オサエ			(7.8)	底部 1/2	
SX608-005	224	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	淡灰褐色	褐色	ナデ	ナデ ハケ目	(28.2)			口縁部片	東北部九州系 ハケ目 (9 本 / cm)
SX608-006	224	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	淡黄白色 淡黄褐色	淡黄白色 淡黄褐色	ナデ?	ナデ ハケ目	(32.0)			口縁部片	ハケ目 (4 本 / cm)
SX608-007	224	弥生土器	甕	長石 石英 白色粒子 褐色粒子	淡褐色	淡褐色	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ 指オサエ			(6.6)	底部片	
SX608-008	224	弥生土器	甕	長石 石英 白色粒子 石粒 2 ~ 3 mm	黒褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ 指オサエ			(7.8)	底部 1/2	
SX608-009	224	石製品	磨石										別表
SX741-001	224	弥生土器	甕	長石 石英 白色粒子 砂粒 褐色粒子	淡褐色	淡粉褐色	指オサエ ナデ	ナデ ハケ目				口縁部片	ハケ目 (6 本・4 ~ 5 本 / cm)
SX741-002	224	弥生土器	甕	白色粒子 角閃石 石英 褐色粒子 長石	淡黄褐色	淡粉褐色	ナデ	ハケ目 ナデ			5.9	底部	ハケ目単位不明
SX741-003	224	弥生土器	鉢	角閃石 長石	淡黄褐色	淡褐色	ナデ	ナデ ハケ目				口縁部片	ハケ目 (9 本 / cm)
SX741-004	224	弥生土器	鉢付鉢	角閃石 長石 白色粒子	淡黄褐色 淡黄褐色	淡粉褐色	ナデ	ナデ				接合部	

第 78 表 陶磁器観察表

遺物番号	採掘番号	器 種		装 飾	法 量 (cm)			産 地	備 考
		種類	器種		口径	器高	底径		
SD100-004	202	磁器	碗	白磁				中国産	大宰府陶磁器分類ⅤⅥ類
SD244-002	202	磁器	碗	白磁	華目文			中国産	大宰府陶磁器分類ⅤⅥ類
SD244-003	202	磁器	碗	青磁	華目文			中国産	大宰府陶磁器分類ⅤⅥ類
SD244-004	202	磁器	皿	青磁	華目文			中国産	大宰府陶磁器分類ⅤⅥ類 阿波窯?
SE074-015	210	磁器	碗	白磁				中国産	大宰府陶磁器分類ⅤⅥ類
SE360-006	210	磁器	碗	白磁				中国産	大宰府陶磁器分類ⅤⅥ類

第 79 表 石製品観察表

遺物番号	発掘 番号	彫刻 種類		石材	法 量 (mm)				備考
					長さ	幅	厚さ	重さ (g)	
SE360-007	210	石製品	砥石		(6.8)	(3.9)	(4.2)		
SH478-001	213	石製品	カマド支柱石	凝灰岩	(24.5 + a)	(10.0)	(9.4)	1600	
SH559-008	213	石製品	磨製石鏝	流紋岩	(2.9 + a)	(1.7)	(0.3)	1.6	
SX429-016	223	石製品	磨石×砥石	玄武岩	(9.0)	(10.9)	(4.5)	650	
SX566-001	224	石製品	磨製石鏝	結晶片岩	(4.3)	(1.5)	(0.2)	2.1	
SX008-009	224	石製品	砥石	磨石	(7.5 + a)	(8.5)	(5.0)	600	

報告書抄録

ふりがな	しもごおりいせきぐん
書名	下部遺跡群 Ⅷ
副書名	大分市下部地区土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7
巻次	—
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第100集
編集者名	神田智美、佐藤良子、坪根伸也、小島愛
編集機関	大分市教育委員会
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL(097) 537-5629
発行年月日	西暦2010年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下部遺跡群第39次調査地点	大分市下部	44201	322137	33°13'07"	131°37'57"	199308 199402～9403	1200	公共事業
下部遺跡群第87次調査地点	大分市下部	44201	322137	33°13'17"	131°38'05"	19960810～ 19961005	1435	公共事業
下部遺跡群第1次～第143次	大分市下部	44201	322137	33°13'20"	131°38'05"	198707～ 20040423	89245.5	公共事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下部遺跡群第39次調査地点	集落跡	弥生時代	溝状遺構、竪穴住居跡 土器類	弥生土器	
下部遺跡群第87次調査地点	集落跡	弥生時代	溝状遺構、竪穴住居跡 井戸状遺構	弥生土器	
下部遺跡群	集落跡	縄文時代～近代	—	—	

要約	下部遺跡群は、大分川の河口近くの右岸地域に所在する。遺跡の発掘は、同地区の土地地区画整理事業に伴う調査として実施され、1987年に始まった。遺跡は標高5～7mの自然堤防上に立地している。 十数年におよぶ発掘調査は143地点におよび、縄文時代から現代まで連続と続く複合遺跡であることが明らかとなっている。特に弥生時代と奈良時代、平安時代初期に遺跡の両側が認められる。弥生時代中期には自然堤防上に長大な溝が掘削され、広範な地域に集落跡を確認できる。弥生時代後期には環濠集落が出現し、当該時期の竪穴住居跡が多数発見されている。奈良時代から平安時代初期には大型の掘立柱建物跡や井戸跡、道路跡などが確認されている。これらは高い規格性をもって配置されており、出土遺物に礎や黒書土器など官衙遺跡に一般的な資料が認められることから、本遺跡が地域の中核をなす官的な施設群であったことを示している。中世末期には館跡が各所で確認されており、同時期に大分川の対岸にある戦国大名大友氏の拠点「豊後府内」との関連が注目される。
----	---

Summary

The Simogori Ruins are located in the right bank region of in the vicinity of the mouth of Oita River. There are situated in Simogori, Oita city, Oita Prefecture, Japan. The excavation of the ruins was conducted as the investigation as a result of the land readjustment project in the said district, which started in 1987. The ruins are located on the embankment formed by Oita River 5m to 7m above sea level. The investigation extended to 143 points and it has been discovered that the ruins are continuous compound ruins from the Jomon period to the present age.

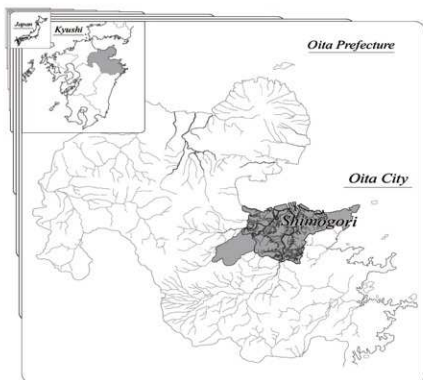
Especially, it is observed that the scale of the ruins became larger in the Yayoi period, the Nara period and the early Heian period, which suggests they functioned as a base of this region.

Around the middle of the Yayoi period, a long and large ditch was dug on the embankment and there was a community in the area sandwiched between the ditch and the swamp on the east side. Toward the end of the Yayoi period, a ring moat village appeared, where a gigantic ditch enclosed the village. Inside the ring moat, defense facilities made of agger were built. The excavation research discovered numerous dugout ruins. In addition, the excavated earthenware show the strong influence of the Setouchi area and the northern part of Kyushu area, which clearly indicates the characteristics of this area located in the middle of both areas.

What have been discovered as the ruins from the Nara period to the early Heian period include the relics of a large-scale dog standing pillar building, wells and roads. These are arranged with high degree of standardization and the excavated relics contain inkstones, writings in India ink and earthenware, which suggest that the ruins were the central public facilities in the area.

The relics of pavilions at the end of the Middle Age 400 years ago have been found in various spots. In the same period, on the opposite bank of Oita River, "Funai" , a base of feudal lord Ōtomo was prospering. The relation between the two is noteworthy.

The relics excavated from each investigation spot indicate that The Simogori Ruins were the base ruins in each period and had uninterrupted exchanges with the surrounding areas. It is necessary to conduct continuous analysis and investigation in the future.



昭和 62 年にはじまった区画整理事業に伴う下郡遺跡の発掘調査も 18 年の歳月を経て平成 16 年に終了しました。あわせて平成 13 年から正式報告書刊行事業を開始し、本書をもって終了いたします。実に 23 年というおおよね四半世紀におよぶ大事業となりました。この間、発掘調査、調査報告書の刊行等、数多くの人々の尽力に支えられここまでできました。感謝の念に堪えません。なかでも長期にわたり遺物の整理業務を率先してやっていただいた I 口さん、無理難題にも怯むことなく編集業務をこなしていただいた H 田さんをはじめとする整理スタッフの方々には大変お世話になりました。最後の報告書をここに刊行し、無事に幕を閉じるにあたり、改めて関係者の皆様方へ心より感謝申し上げます。(S T)

下郡遺跡群 VIII

—大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7—

2010 年 3 月 31 日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町 2-31